

那覇市文化財調査報告書第42集

# 天 界 寺 跡

—首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告—

1999年3月

那覇市教育委員会



上：基壇跡（西側より望む）  
下：えー3西壁

## 序

この報告書は、那覇市建設部の首里城線街路事業に伴う埋蔵文化財「天界寺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

天界寺跡は円覚寺・天王寺とともに琉球王府時代の三大巨刹に挙げられている著名な臨済宗の寺院であります。寺院の創建については、尚泰王によって15世紀の中頃に建立され、第1尚氏から第2尚氏へ受け継がれていきます。その後、火災により焼失しますが、17世紀中頃に復旧され、明治末までの約400年間の長きに亘り存在したことが知られています。このように、天界寺跡は幾多の変遷が窺えられるが詳細については不明な点が数多く見られます。

天界寺跡の発掘調査はこの様な歴史的背景を踏まえ、1995年～1996年の2カ年に亘り調査を行いました。遺跡の上面は戦後の住宅建設や造成工事などで、部分的に破壊されていましたが、それでも数多くの成果が得られました。

特に天界寺跡の本堂跡と考えられる基壇跡が確認されたことは、画期的なことだと考えられます。さらに、出土遺物として天界寺に葺かれた瓦等が多量に得られ、往時の寺院を彷彿させるものでありました。その他にも天界寺で用いられた仏具・青磁・白磁・青花・タイ産の陶器・備前陶器などの貴重な資料が数多く発見されました。

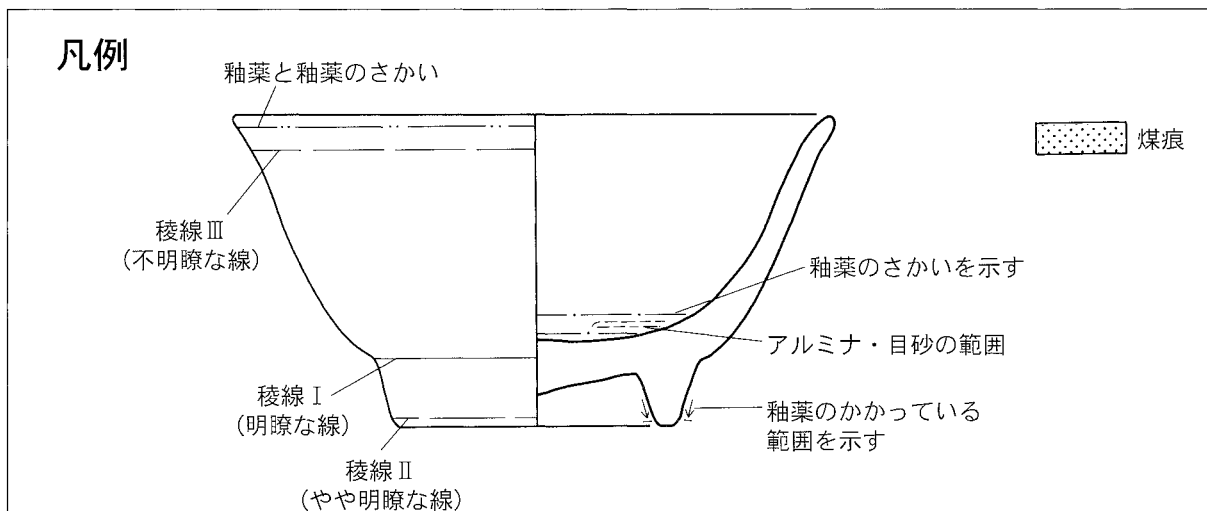
これらの成果より、この報告書が「天界寺跡」の一端を理解する資料を提供したものとされます。また、この報告書によって、広く埋蔵文化財の理解と認識を深める資料として活用されんことを願います。

末尾になりましたが、発掘調査及び資料整理にあたり、多大なる協力を頂いた関係各位のみなさまに対して深く感謝申し上げます。

那覇市教育委員会  
教育長 渡久地 政吉

## 例 言

1. 本報告書は平成6・7年度に実施した「天界寺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は「首里城線街路整備事業」に伴うもので、那覇市建設部の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査・資料整理に際し、下記の方々に指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。  
高宮 廣衛（沖縄国際大学）  
森本 朝子（福岡市教育委員会）  
森村 健一（堺市教育委員会）  
神谷 厚昭（沖縄県立博物館）  
島袋 洋（沖縄県教育委員会）
4. 本書の執筆と編集は下記のとおりである。  
編集 島 弘  
執筆 内間 靖 第Ⅵ章18・19  
仲宗根 啓 第Ⅵ章15・16・17  
當間 麻子 第Ⅵ章13  
城間千栄子 第Ⅵ章9  
渡久地政嗣 第Ⅱ章  
島 弘 第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章、第Ⅵ章1～8、10～12・14、第Ⅶ章
5. 本書に掲載した空中写真および地形図・国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。
6. 出土した資料については、すべて那覇市教育委員会文化財課で保管している。



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	てんかいじあと							
書名	天界寺跡							
副書名	首里城線街路工事に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	島 弘・内間 靖・仲宗根 啓・當間麻子・城間千栄子・渡久地政嗣							
編集機関	那覇市教育委員会文化財課							
所在地	〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8				TEL 098-853-5775			
発行年月日	西暦 1999年 3月 29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんかいじ 天界寺跡	おきなわけん なほし 沖縄県那覇市 しゅりきんじょうちやう 首里金城町	47201		26度 12分 53秒	127度 43分 02秒	19950117 ～ 19950930	910	首里城線 街路工事に伴う 緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天界寺跡	宗教遺跡	グスク時代 琉球王府時代	本堂跡 溝 土壇 ピット群など		土器 石器 瓦 白磁 青磁 青花 天目 褐釉陶器 等		18世紀の本堂跡 が確認された。	

# 目 次

序

例言

報告書抄録

第 I 章 調査に至るまでの経緯	1
第 1 節 調査に至るまでの経緯	1
第 2 節 調査体制および成果の記録	1
第 II 章 位置と環境	3
第 III 章 調査経過	4
第 IV 章 層序	6
第 V 章 遺構	8
第 VI 章 出土遺物	31
1. 白磁	31
2. 青磁	39
3. 青花	50
4. 黒釉陶器	57
5. 瑠璃釉	57
6. 褐釉陶器	58
7. タイ・ベトナム産陶磁器	62
8. 備前陶器	64
9. 瓦質土器	66
10. 瓦	69
11. 埴	77
12. 錢貨	82
13. 青銅製品	89
14. 鉄製品	95
15. ガラス製玉類	97
16. 土製小玉	97
17. 骨鏃	97
18. 石製品	101
19. 蓮華・小瓶・人形	102
第 VII 章 まとめ	105

## 挿図目次

第1図	那覇市の位置	第37図	備前陶器：播鉢・徳利…………… 65
第2図	15世紀代に建立された宗教関係の位置図	第38図	瓦質土器：植木鉢・鉢・播鉢・袋物…… 68
第3図	グリッド設定図…………… 5	第39図	高麗系瓦：平瓦、大和系瓦：軒丸瓦・丸瓦… 73
第4図	層序断面図…………… 7	第40図	明朝系瓦：軒丸瓦…………… 74
第5図	主な遺構配置図…………… 9	第41図	明朝系瓦：軒平瓦…………… 75
第6図	本堂跡（基壇）…………… 10	第42図	明朝系瓦の分布図…………… 76
第7図	I地区建物跡…………… 11	第43図	埽：I類・II類・III類・類不明…… 80
第8図	I地区溝状遺構…………… 12	第44図	埽の分布図…………… 81
第9図	I地区ピット群…………… 13	第45図	銭貨…………… 87
第10図	II地区ピット群（本堂跡の完掘）… 14	第46図	銭貨…………… 88
第11図	III地区ピット群…………… 15	第47図	青銅製品：八双金具・座・鋌・留具・装飾金具 毛抜き・分銅・釣針・釘…………… 93
第12図	II地区ピット（No1・2・3）出土遺物…………… 18	第48図	青銅製品：簪・花生け・用途不明金具… 94
第13図	II地区ピット（No5）出土遺物…………… 19	第49図	鉄製品：釘・鋸・刀子…………… 96
第14図	II地区ピット（No7・13・16）出土遺物…………… 20	第50図	ガラス製玉類：勾玉・管玉・小玉、 土製小玉、骨鏃……………100
第15図	II地区ピット（No20・21・30）出土遺物…………… 21	第51図	石製品：基石・硯……………103
第16図	II地区ピット（No31・36・38・39・45）出土遺物… 22	第52図	石製品：砥石・印章 陶磁器：蓮華・小瓶・人形……………104
第17図	III地区ピット（No2・8・75）出土遺物 …… 23		
第18図	III地区ピット（No115・116・129・134・150）出土遺物… 24		
第19図	III地区ピット（No179・183・206・218・228）出土遺物… 25		
第20図	III地区ピット（No198）出土遺物…………… 26		
第21図	III地区ピット（No232・263・285・291・298）出土遺物… 27		
第22図	III地区ピット（No292）出土遺物…………… 28		
第23図	I地区ピット（No6・7・8・23）出土遺物 …… 29		
第24図	白磁：碗・小皿・灯明皿…………… 37	第1表	ピット内出土遺物観察一覧…………… 16
第25図	白磁：皿・杯・壺・袋物・蓋・香炉… 38	第2表	遺物出土一覧…………… 30
第26図	青磁：碗…………… 45	第3表	白磁観察一覧…………… 33
第27図	青磁：碗…………… 46	第4表	青磁観察一覧…………… 41
第28図	青磁：皿…………… 47	第5表	青花観察一覧…………… 51
第29図	青磁：盤…………… 48	第6表	黒釉陶器観察一覧…………… 57
第30図	青磁：水滴・合子・壺・香炉・角形… 49	第7表	瑠璃釉観察一覧…………… 58
第31図	青花：碗…………… 54	第8表	褐釉陶器観察一覧…………… 59
第32図	青花：小皿・皿・鉢…………… 55	第9表	タイ・ベトナム産陶器等観察一覧… 62
第33図	青花：瓶・袋物・高足杯…………… 56	第10表	備前陶器観察一覧…………… 64
第34図	黒釉陶器：碗、瑠璃釉：杯・瓶…………… 60	第11表	瓦質土器観察一覧…………… 67
第35図	褐釉陶器：壺・播鉢、白釉陶器：壺… 61	第12表	高麗系瓦観察一覧…………… 69
第36図	タイ産陶磁器、ベトナム産陶磁器、産地不明… 63	第13表	高麗系平瓦出土一覧…………… 70
		第14表	軒丸瓦出土一覧…………… 71

## 表目次

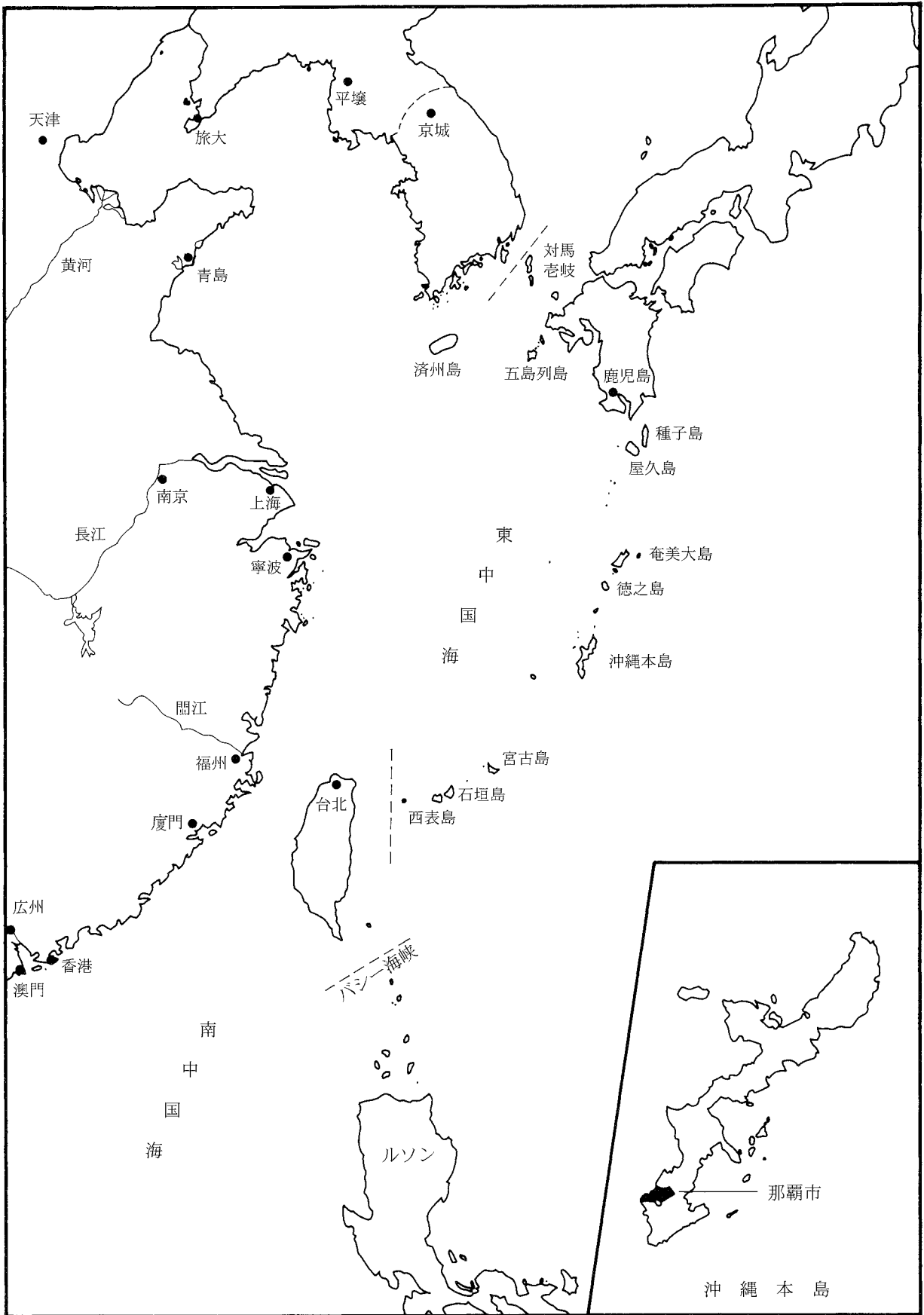
第15表	軒平瓦出土一覽……………	71
第16表	明朝系瓦（軒丸）觀察一覽……………	72
第17表	明朝系瓦（軒平）觀察一覽……………	72
第18表	埴出土一覽……………	78
第19表	埴觀察一覽……………	79
第20表	錢貨出土一覽……………	83
第21表	錢貨計測一覽……………	84
第22表	青銅製品觀察一覽……………	92
第23表	鉄製品出土一覽……………	95
第24表	鉄製品計測一覽……………	95
第25表	ガラス製玉類觀察一覽……………	98
第26表	土製小玉觀察一覽……………	99
第27表	基石出土集計一覽……………	101
第28表	基石觀察一覽……………	101
第29表	硯觀察一覽……………	101
第30表	砥石觀察一覽……………	102
第31表	蓮華・小瓶・人形觀察一覽……………	102

図版20	白磁：碗・小皿・灯明皿
図版21	白磁：皿・杯・壺・袋物・蓋・香炉
図版22	青磁：碗
図版23	青磁：碗
図版24	青磁：皿
図版25	青磁：盤
図版26	青磁：水滴・合子・壺・香炉・角形
図版27	青花：碗
図版28	青花：小皿・皿・鉢
図版29	青花：瓶・袋物・高足杯
図版30	黒釉陶器：碗、瑠璃釉：杯・瓶
図版31	褐釉陶器：壺・播鉢・白釉陶器・壺
図版32	タイ産陶磁器、ベトナム産陶磁器、産地不明
図版33	備前陶器：播鉢・徳利
図版34	瓦質土器：植木鉢・鉢・播鉢・袋物
図版35	高麗系瓦：平瓦、大和系瓦：軒丸瓦・丸瓦
図版36	明朝系瓦：軒丸瓦
図版37	明朝系瓦：軒平瓦
図版38	埴：Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類・類不明
図版39	錢貨
図版40	錢貨
図版41	青銅製品：八双金具・座・鋳・留具 装飾金具・毛抜き・分銅・ 釣針・釘
図版42	青銅製品：簪・花生け・用途不明金具
図版43	鉄製品：釘・鏃・刀子
図版44	ガラス製玉類：勾玉・管玉・小玉、 土製小玉、骨鏃
図版45	石製品：基石・硯
図版46	石製品：砥石・印章 陶磁器：蓮華・小瓶・人形

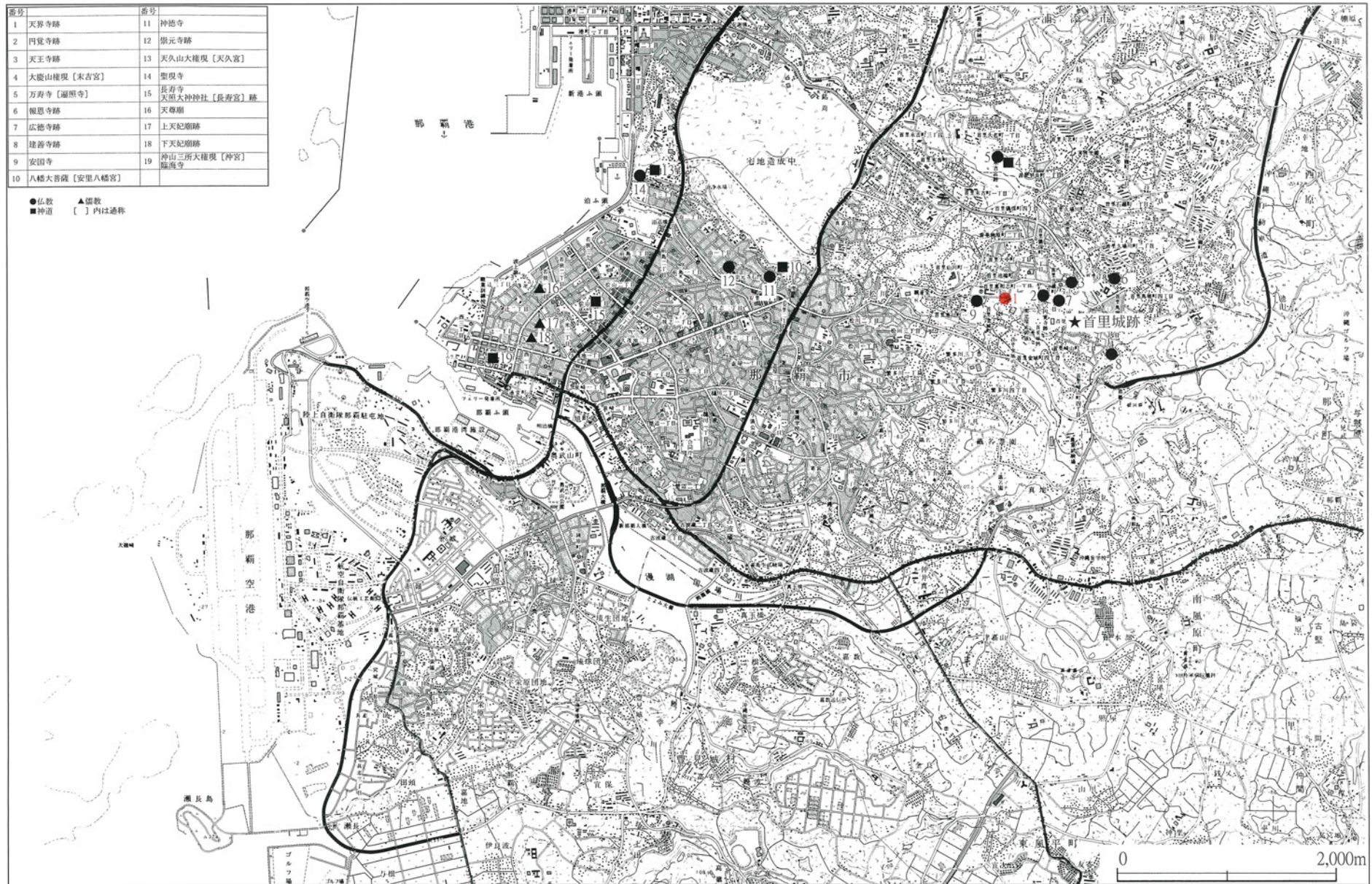
## 図版目次

図版 1	調査地区全景
図版 2	発掘調査風景
図版 3	層 序
図版 4	Ⅰ地区の遺構
図版 5	Ⅰ・Ⅱ地区の遺構
図版 6	Ⅲ地区の遺構
図版 7	主なピット
図版 8	完掘状況
図版 9	Ⅱ地区ピット (No1・2・3) 出土遺物
図版10	Ⅱ地区ピット (No5) 出土遺物
図版11	Ⅱ地区ピット (No7・13・16・20・21・30) 出土遺物
図版12	Ⅱ地区ピット (No31・36・38・39・45) 出土遺物
図版13	Ⅲ地区ピット (No2・8・75) 出土遺物
図版14	Ⅲ地区ピット (No115・116・129・134・150) 出土遺物
図版15	Ⅲ地区ピット (No179・183・206・218・228) 出土遺物
図版16	Ⅲ地区ピット (No198) 出土遺物
図版17	Ⅲ地区ピット (No232・263・285・291・298) 出土遺物
図版18	Ⅲ地区ピット (No292) 出土遺物
図版19	Ⅰ地区ピット (No6・7・8・23) 出土遺物





第1図 那覇市の位置



第2図 15世紀代に建立された宗教関係の位置図

# 第 I 章 調査に至るまでの経緯

## 第 1 節 調査に至るまでの経緯

那覇市建設部では、華やかな琉球王朝を偲ぶことができる歴史的地区である首里一帯の高台において歴史的環境の保全と生活環境の改善との調和を計るために「歴史的地区環境整備街路事業」を策定し事業を押し進めてきた。その事業のひとつで地区幹線に位置づけられている首里城線について、同計画の段階で、那覇市金城町の街路工事地内における埋蔵文化財の有無について問い合わせがなされた。当教育委員会では当該地域については、景泰年間（1450年頃）に尚泰久王によって創建された天界寺の寺院跡が所在しており、沖縄の仏教史を知るためには重要な遺跡であるとの回答をした。天界寺は琉球王国時代、円覚寺・天王寺とともに三大巨刹に挙げられる著名な寺院でもある。

当教育委員会はその歴史的背景等を踏まえて、那覇市建設部と埋蔵文化財「天界寺跡」について、速やかに協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

その後、那覇市建設部は平成6年10月28日付けで文化庁長官に文化財保護法第57条の3の規定に基づき「埋蔵文化財発掘通知」を提出した。

これについて当教育委員会は文化庁の指導により、同年11月21日付けで「工事着手前に発掘調査を実施」するように送付通知した。

その結果、調査に要する経費は那覇市建設部が負担し、調査を当教育委員会が補助執行により実施することとなった。

調査は平成7年1月17日より開始された。

## 第 2 節 調査体制及び成果の記録

### (1) 調査体制

発掘調査及び報告書作成は次の体制により実施した。

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	嘉手納是敏
	〃	〃	渡久地政吉
事業所管	〃	文化課 課長	高江洲 隆（平成5～7年度）
	〃	〃 〃	金武 正紀（平成 8年度）
調査総括	〃	〃 主幹	金武 正紀（平成5～7年度）
事業事務	〃	〃 主幹兼係長	古塚 達朗（平成 8年度）
〃	〃	〃 係長	佐久川 馨（平成7・8年度）
〃	〃	〃 主任主事	我那覇生男（平成6～8年度）
調査員	〃	〃 主査	島 弘
〃	〃	〃 主任主事	内間 靖
調査補助員	〃	〃 臨時職員	山城 直子
〃	〃	〃 臨時職員	渡久地政嗣

(2) 発掘調査作業員

安里セツ子・阿波根栄子・石嶺米子・伊禮ヒロ子・太田吉光  
大宜見より子・大城敏子・嘉味田千枝子・勝連 誠・金城郁恵  
小橋川徳子・呉屋盛三・呉屋 球・島袋節子・新里準子・謝花和子  
謝敷時子・端慶覧長祐・端慶覧繁美・棚原ノリ子・竹中利佳  
玉城史子・知花まさ子・津波古充政・津波古よし子・渡慶次和子  
桃原佐恵美・長堂涼子・仲村トヨ子・中村フサ子・比嘉貞雄  
細川道子・真栄城千枝子・宮城悦子・宮城澄子・宮城新一  
諸見里豊子・屋比久和子・与那城好子

(3) 成果の記録（資料整理及び協力者）

洗浄・注記・接合：浦崎順子・上原由美子・島袋明子・仲地和美・東江なおみ・神谷直美  
端慶覧綾・喜屋武朋子

実 測 ：宮良文子・慶田秀美・西銘定子・端慶覧綾・神谷直美・金城まゆみ

復 元 ：島袋利恵子・国吉真由美・島袋明子・新地麻香

拓本・トレース等：宮良文子・慶田秀美・西銘定子・端慶覧綾・宮城かの子・金城礼子

撮影・現象・焼付：栗山初美・赤嶺知子・富山維佐子・知念美智子・国吉美奈子

大城真由美・具志みどり・早川ルリ子・比嘉君子・上原章子・砂川貴子

## 第Ⅱ章 位置と環境

天界寺跡は沖縄県那覇市首里に所在する。那覇市は東中国海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村と隣接する県内人口の約1/4（301,890人）を擁する沖縄の政治、経済の中心都市である。

本市はほぼ略三角形を呈し、東南に約11km、南北に8kmを測り、総面積37.89km<sup>2</sup>を占める。地形的には、東中国海側の標高2～10mの沖積平野を琉球石灰岩の台地が取り巻き、大きく低地と石灰岩台地に分けられる。台地は東中国海に流れ込む安謝川、久茂地川、国場川によって分断され、北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地、小禄台地の各丘陵を形成する。これにより、市内は首里地区、那覇地区、真和志地区、小禄地区に大きく分けられる。

首里地区は首里台地一帯に展開する地域である。標高70m～135m程の通称：ハンタン山の頂上には琉球王府時代の王城、首里城があり、復元整備された深紅の王宮と琉球石灰岩の城壁が南国の青空に映えている。また、城周辺には多くの琉球王府時代の史跡があり、首里の史跡散策は琉球王朝を偲ぶ魅力的な観光コースとなっている。ところで、首里城を中心とする王府の史跡分布は大きく2方向を示しており、ひとつは城壁北側に接して、円覚寺、弁財天堂、龍潭を中心とする地域であり、ひとつは首里城から那覇市街へ続く琉球王国第一の道、綾道大道に添って展開する玉陵、安国寺、守礼門などのある地域である。本遺跡はその綾道大道の道筋にあり、首里城と玉陵との間に位置する。ここは、首里城の表玄関口にあたり、まさに王府祭祀の中核をになう位置にある。

天界寺は景泰年間（1450～56）創建と伝えられる琉球三大寺の一つであり、第一尚氏の菩提寺であった。広大な寺域には、七堂伽藍が整備され、琉球国由来記に「その巧美精尽す」とたたえられている。ところが、この県下最大規模の仏寺も廃藩置県に伴う棒禄撤廃の憂き目にあい、明治末期には廃寺となったようである。その後、尚家の果樹園が経営され、西側敷地には首里城内の三御獄を統合、替地した三殿内が建てられ、戦前までノロの居宅も兼ねて使用された。戦後は、首里地区の戦災者の仮収容地となり、その後は宅地化が進み、現在に至る。寺跡の面影を残す史跡としては「天界寺の井戸」と伝えられる石造掘り抜き井戸があるのみである。

### 参考文献

1. 『第37回那覇市統計書』 那覇市1998年3月
2. 『沖縄大百科辞典』 沖縄タイムス社 1983年

# 第Ⅲ章 調査経過

調査は第1次調査を1995年1月17～1995年3月24日、第2次調査が1995年6月12日～1995年9月30日にわたって行われた。調査は街路事業地内に係るのみのため、グリッドも長方形の変則的なグリッド設定が余儀なくされた。設定は地内のセンター杭を用いて、No1とNo3を繋ぐ線を基準線とし、No2より南北に4m、東西に3.5mの長方形のグリッドを設定した。グリッドの配置は第3図に示したとおり、北から南にかけて「1・2…」、西から東にかけて「あ・い…」と付した。グリッド読みは南西杭を読み「かー1」と呼称した。

さらに、調査地区が南北に細長いために、南側の土留め石積みよりⅠ地区（13以南～）、Ⅱ地区（7以南～）、Ⅲ地区（1以南～）に大きく地区割りを行った。以下、調査経過を述べる。

## 第1次発掘調査（1995年1月17日～1995年3月24日）

第1次調査は主に用地・物件補償の済んでいるセンター杭No2（かー10）以南のⅠ・Ⅱ地区の調査を実施した。調査は伐採及び周辺に残る瓦礫等の除去作業より行い、併せてグリッド設定を実施した。

グリッドを設定後、おー12、か・きー11、12、13のグリッドより調査開始する。表土層を約20cmほど落とすと最近まで建っていた民家の基礎などが露出し始めた。それに伴う形で現代の赤瓦・ビンなどの出土が見られた。

表土層を除去後、天界寺跡の遺構群が本格的に露出し始めた。きー11グリッドで灰色瓦を中心とした瓦溜りが検出され、それに併せて、お・か・きー11グリッドより人頭大の琉球石灰岩の石列が徐々に確認され始めた。この石列は調査が進み次第、天界寺の中心施設である本堂の基壇跡であることが判明した。Ⅱ地区はこの遺構面で押さえ、引き続きⅠ地区に取り掛かった。Ⅰ地区では南端部に露頭している琉球石灰岩に沿って階段遺構とその下位より溝状遺構が確認された。

第1次調査は本堂跡の基壇跡、瓦溜まり、溝施設などの遺構を確認し調査を終了した。

## 第2次調査（1995年6月12日～1995年9月30日）

第2次調査は補償の住んでいるⅢ地区をメインに調査を押し進めた。さらに、前回の遺構面の精査を併せて行い天界寺跡の全体像を掴むために慎重に調査を進めた。

調査は基壇跡の全体を追う形で北側のⅢ地区へ徐々にグリッドを広げていった。Ⅲ地区は調査が進むに連れて当該期の造成土（赤土）が確認され、Ⅲ地区において大規模な平場造成が行われていることが明らかになった。その造成土を発掘後、その下位よりプライマリーな遺物包含層（第Ⅴ層）が検出された。本層より多種多様な出土遺物が見られた。その後、第Ⅴ層を掘り上げるたびに、地山面に大小のピット群が多数検出された。そのピット内からも多くの遺物が出土した。

それら遺構などの写真撮影・図面書きなどを繰り返し行い9月30日に調査は終了した。



第3図 グリッド設定図

## 第Ⅳ章 層 序

遺跡一帯は、天界寺の廃絶以後、明治時代末期頃までは往時の状況は残っていたらしいが、大正時代～戦前にかけて記念運動場や植物園・三殿内などの施設が見られ、大正時代に一帯の改変の状況が聞き取り調査や首里市史などで窺えられた。また、一帯には沖縄軍司令部（首里城跡）が近接しており米軍より相当の砲撃を受けた地域でもある。戦後はいち早く木造家屋などが建てられ遺跡の上面はかなり攪乱を受けているものと思われた。

さて、確認された層序は基本的に第Ⅰ層（攪乱土層）・第Ⅱ層（混砂利土層）・第Ⅲ層（混砂利土層）・第Ⅳ層（造成土）・第Ⅴ層（黒褐色土層）である。当該期の遺物を含む土層は、第Ⅱ～Ⅴ層である。以下、個々の土層の特徴について記述する。基壇内の層序については、遺構の項で述べる。土層の側壁図は南北の「おーライン」と東西「お～くー5ライン・え～かー9ライン・お～きー10ライン」を掲載した。

第Ⅰ層：本層は戦後の攪乱層で近・現代の遺物が得られた。Ⅰ地区では造成のための灰褐色土層（方言クチャ）の客土層が厚く見られた。Ⅱ・Ⅲ地区では、茶褐色を呈しⅡ地区では薄くⅢ地区へは暫時厚く成る。部分的に地山まで攪乱が及ぶ場所も見られた。特に、Ⅲ地区では地山まで攪乱を受けているところが顕著に見られた。

第Ⅱ層：暗茶褐色を呈し、細かい砂利の混入が見られた。本層は調査地区全体を覆う形で見られ、部分的に第Ⅰ層で寸断される箇所も見られた。遺物は当該期のものと近世のものが混在する形で得られた。

第Ⅲ層：本層は第Ⅱ層と類似しているが、層厚が厚く安定し細かい砂利を多量に含むところが異なる。調査地区全体に広がり淡い茶褐色を呈する。

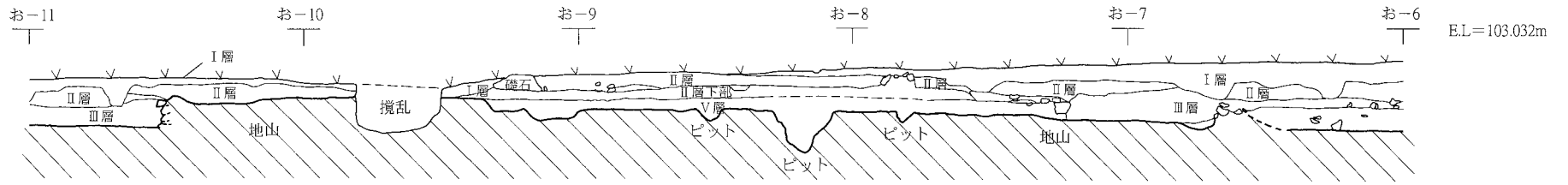
第Ⅳ層：赤褐色土（方言名でマージ）の造成土である。Ⅰ地区では見られなかったが、Ⅲ地区では顕著に確認された。本層は全体の状況からするとⅢ地区の平場造成を行うために、Ⅰ・Ⅱ地区の地山の赤土を切土したものと思われた。

第Ⅴ層：黒褐色の土層でⅠ・Ⅲ地区で顕著に確認された。Ⅱ地区では基壇内において見られた。第Ⅳ層が安定にのるように、上面は水平に削平されている。出土遺物は最も安定しており当該期の遺物が多量に得られた。

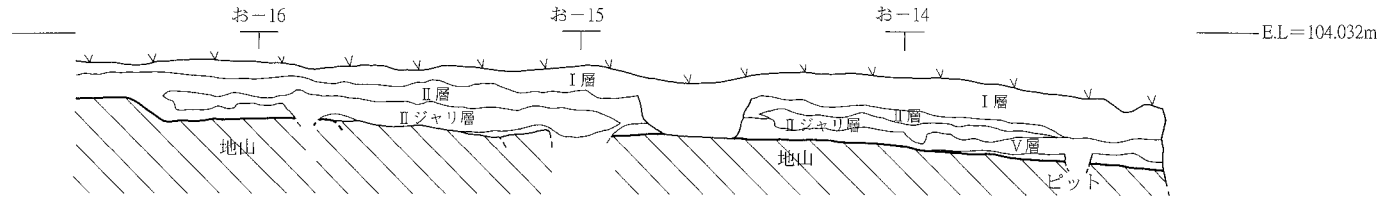
第Ⅵ層：地山の赤褐色土層で無遺物層である。本層の上面にピットが多量に確認された。



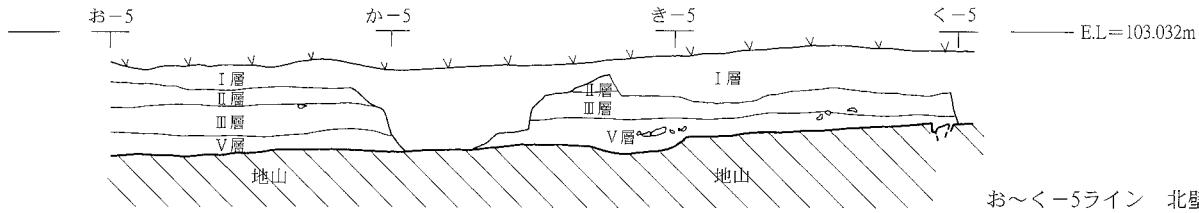
第4図 層序断面図



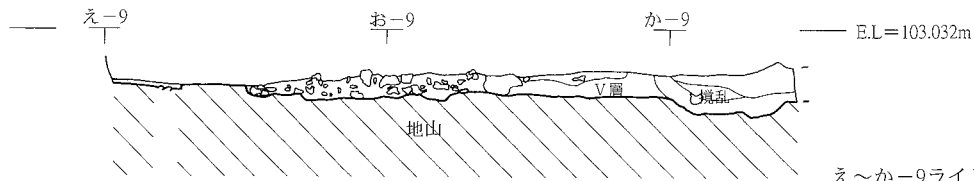
お-7～11ライン 東壁



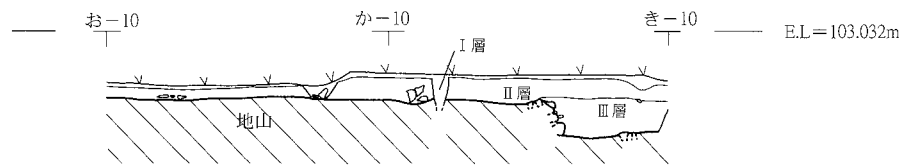
お-14～16ライン 東壁



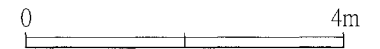
お-5～<-5ライン 北壁



え-9～か-9ライン 北壁



お-10～き-10ライン 北壁



## 第V章 遺 構

第1次調査・第2次調査において本堂跡・溝・土坑・ピット等の遺構が数多く検出された。それらの遺構は15世紀後半～のものと17世紀後半～のものに大きく分けられる。今回は代表的な本堂跡・溝・ピット等について報告したい。その他の遺構については、後日改めて報告する。以下、17世紀後半～のものより記述する。

### (1) 17世紀後半～

17世紀後半～に属するものとして、本堂跡・溝・土坑等である。

#### 本堂跡

調査地区のほぼ中央の「お・か・きー8～11」グリッドにかけて本堂の基壇跡の一部が検出された。全体にラケット状を呈し周辺に石灰岩を積み上げ基壇を構築している。石灰岩はやや人頭大で雑に積み上げて構築されている状況であった。主軸は概ね西方向へ開口している。基壇上には根固めの石と微粒砂岩の礎石がそれぞれ確認された。

基壇の背面は凸状に削平し周辺に石灰岩を配し、境内の奥へ繋ぐと思われる渡り廊下状のものが検出された。

さらに、周辺には本堂跡を取り囲む石列が確認された。これらの本堂跡は層状の観察より地山を凸状に切り取り造営されたものと思われる。

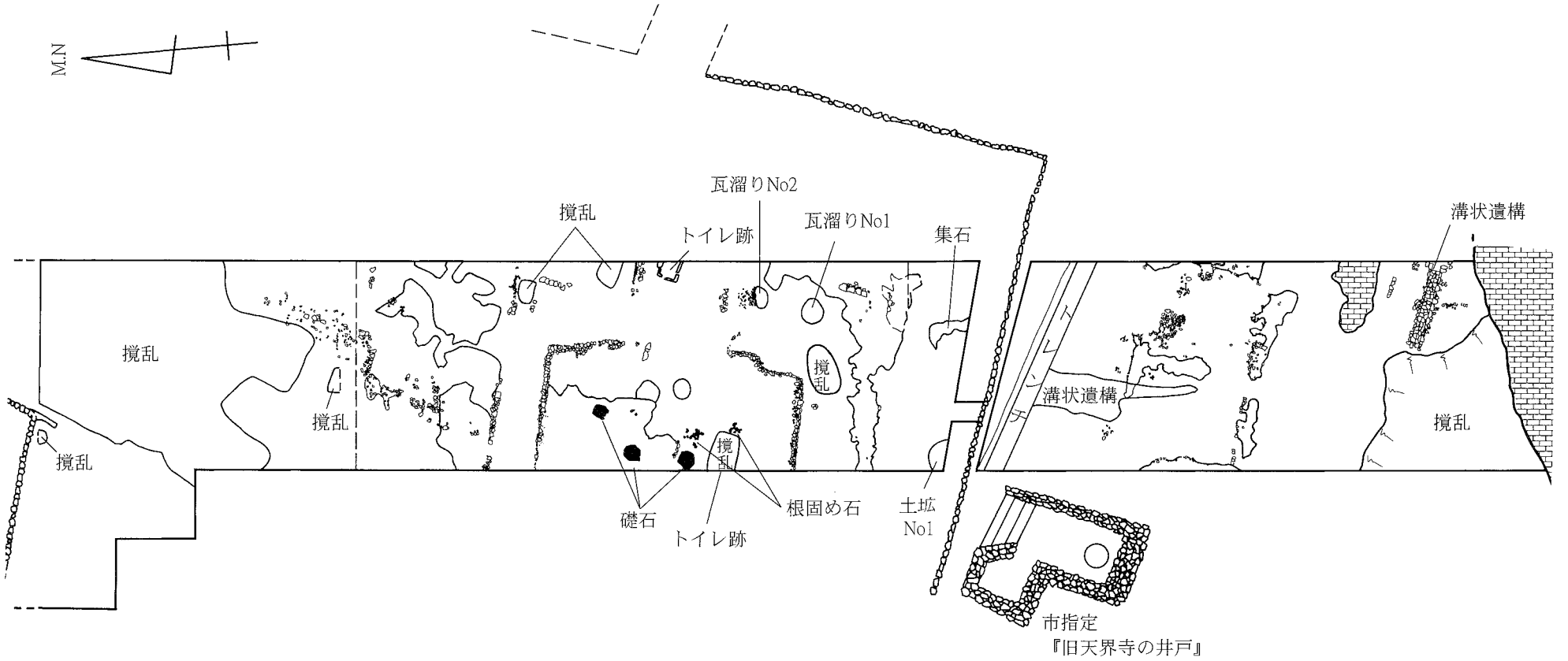
#### 建物跡

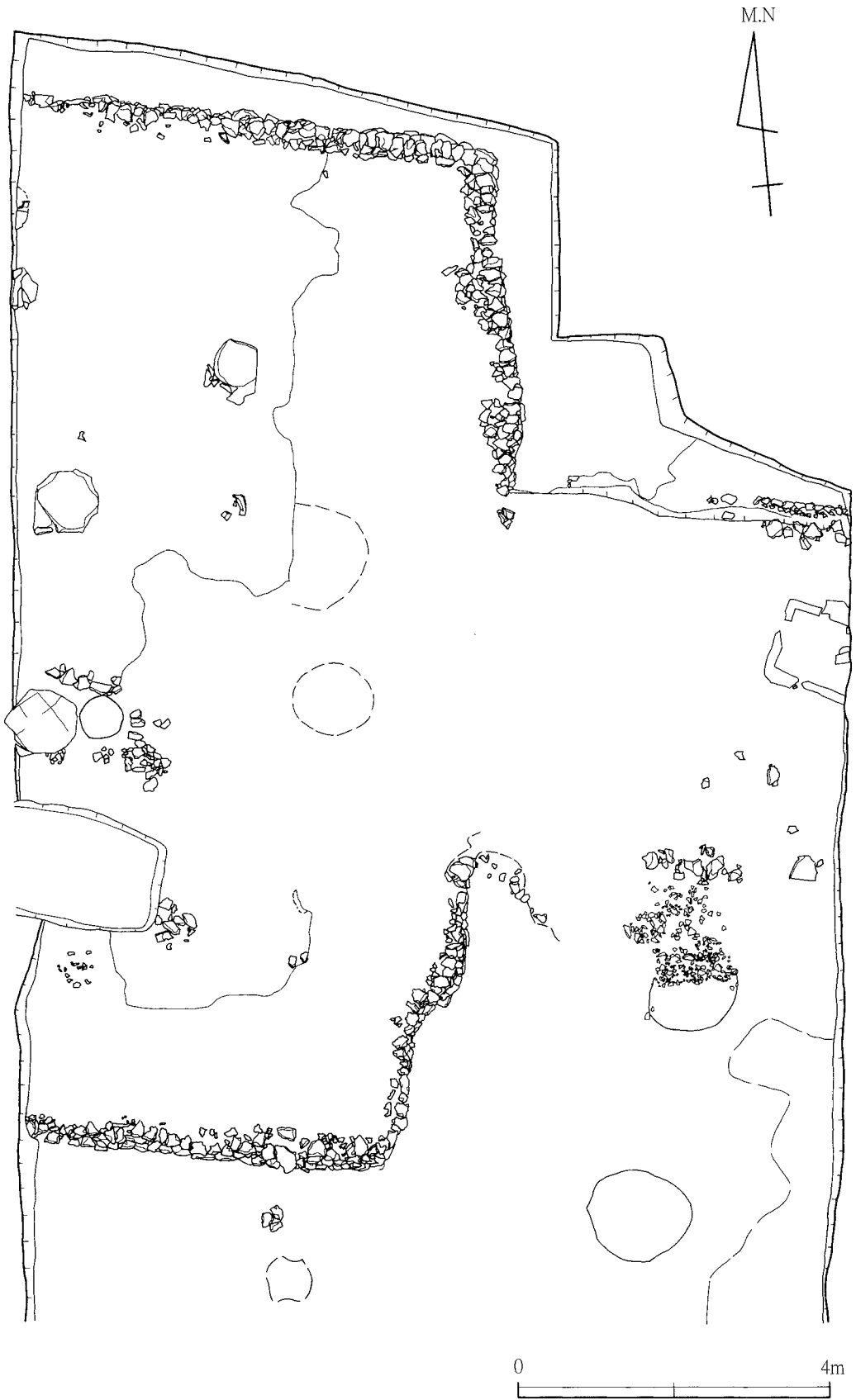
I地区の「き・くー14」グリッドにおいて長軸4.5×短軸2.2mのややほそ長い建物跡が確認された。礎石は検出されなかったが、礎石を支える小礫群が確認された。本遺構は瓦葺きの建物が想定された。

#### 溝状遺構

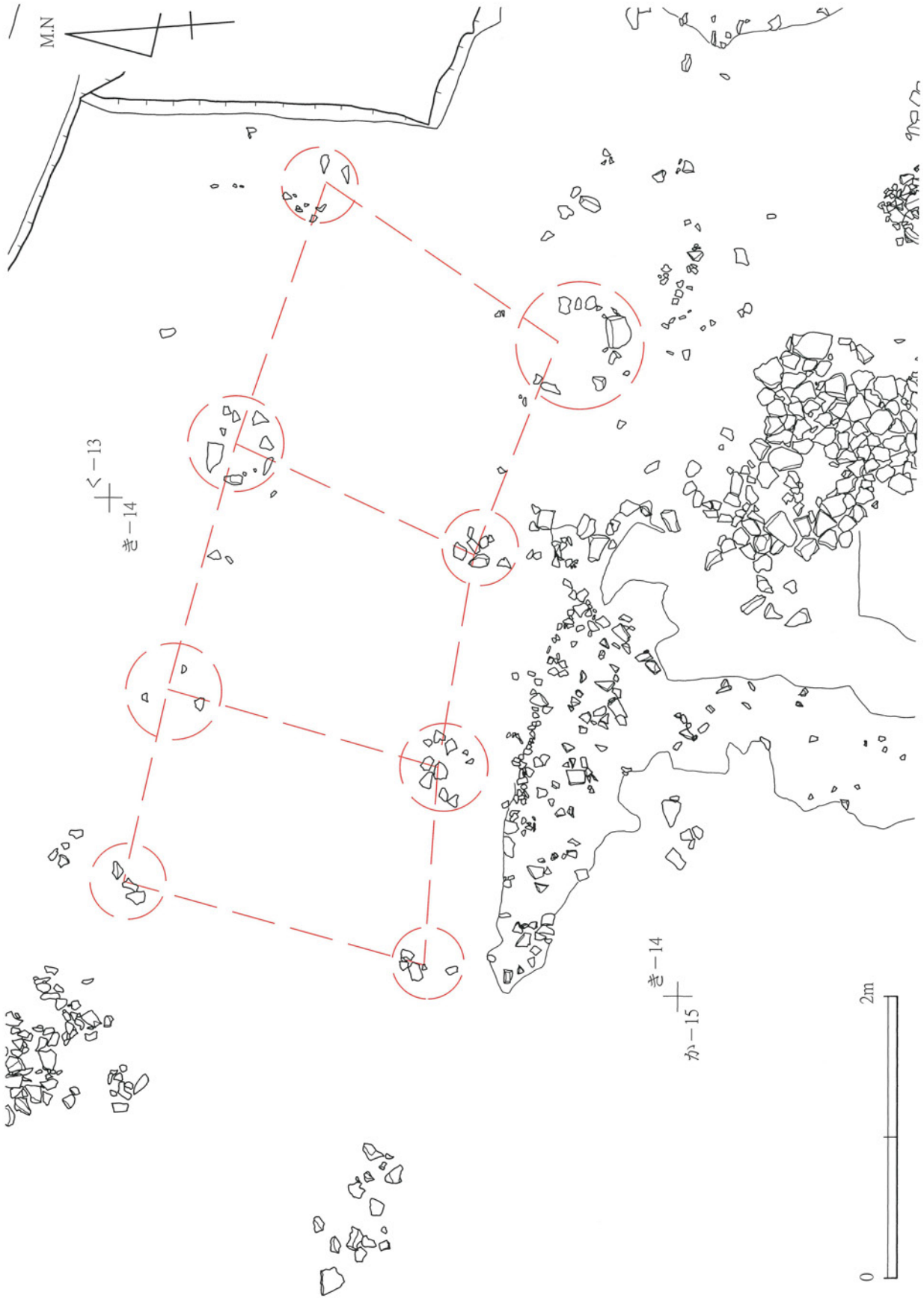
調査地区の最南端の「か・きー19」グリッドの石灰岩盤の側において長さ450cm×幅45cmで検出された。主軸は東西を示し、東側より西側に傾斜する。両面・底面ともに石灰岩で断面「凹」状に構築されている。また、底面において1箇所は塼を用いた箇所も見られた。本遺構は本堂跡との関係は明確ではないが、灰色の塼を用いられる点や埋土より17世紀後半の肥前系角皿等が得られたことにより取りあえず当該時期のものと解した。

第5図 主な遺構配置図

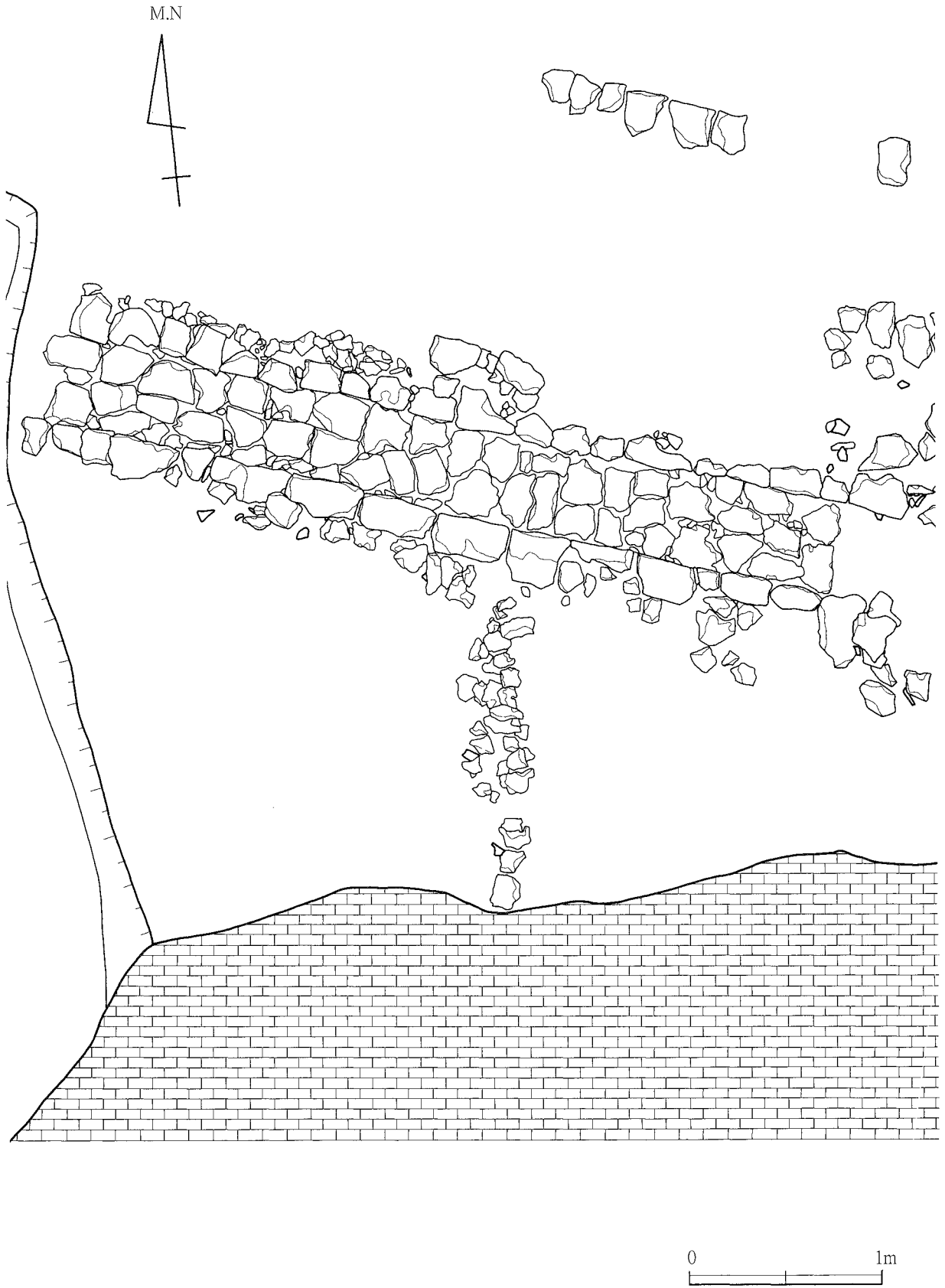




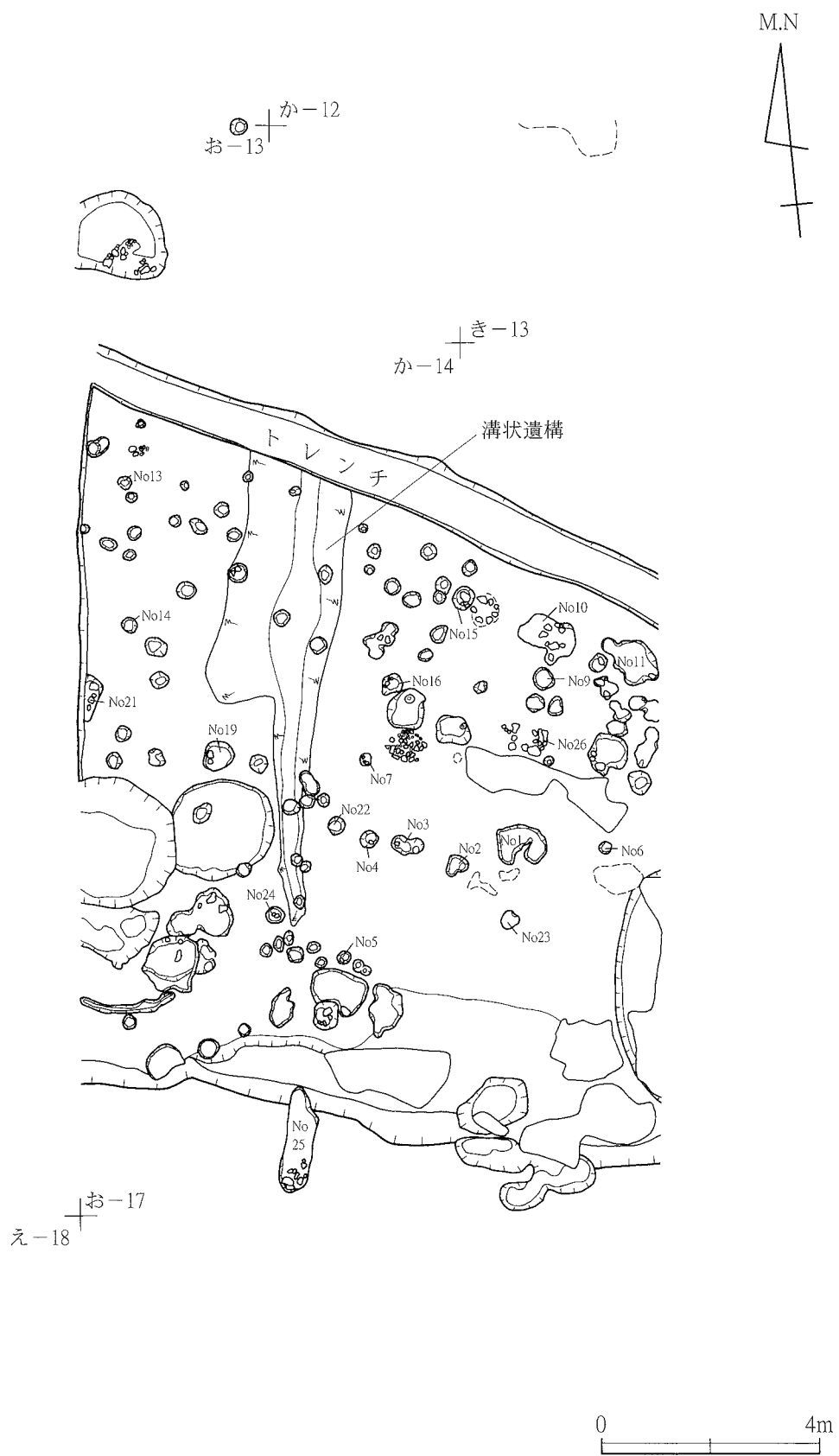
第6図 本堂跡（基壇）



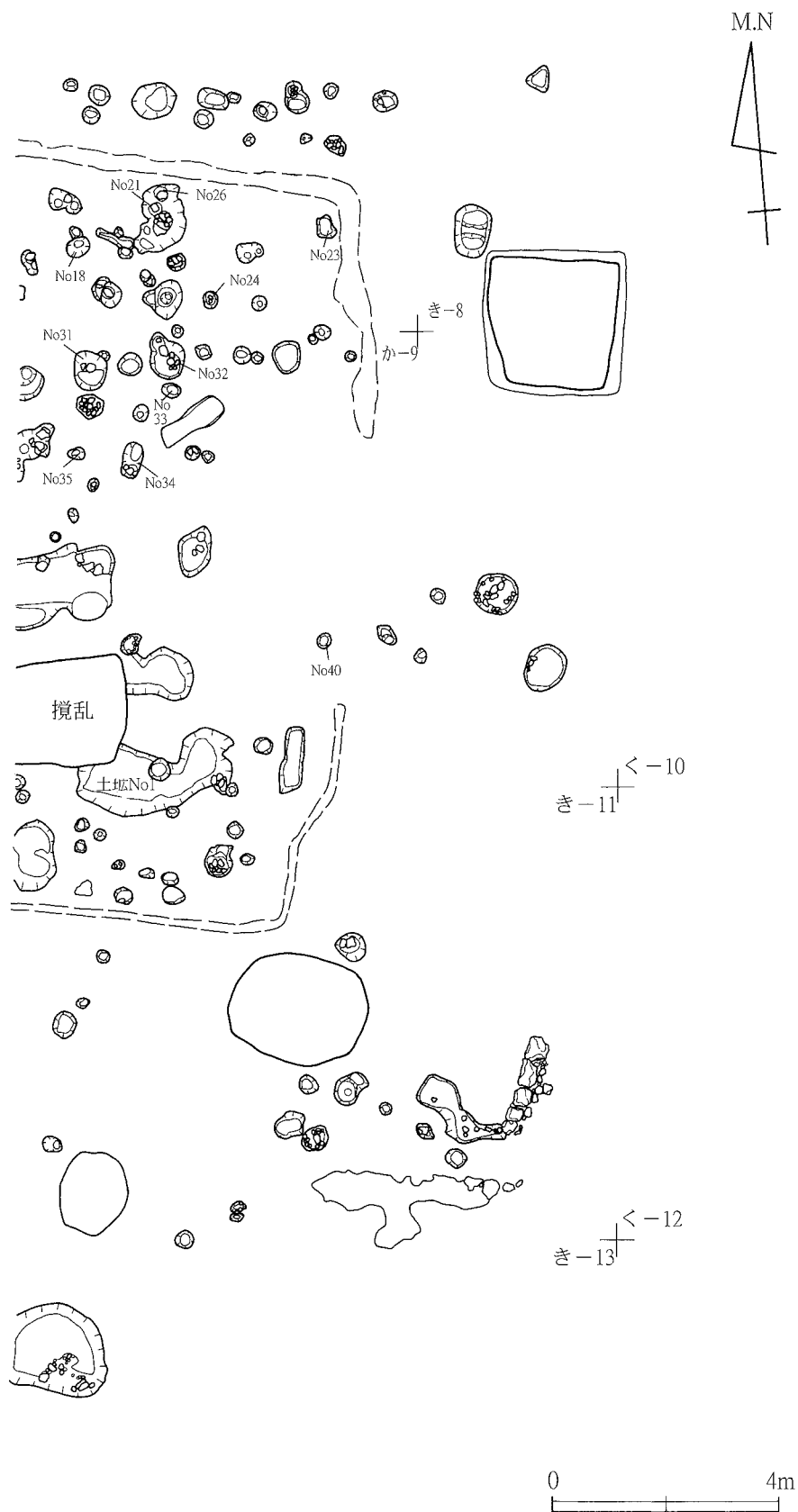
第7図 I地区建物跡



第8図 I地区溝状遺構

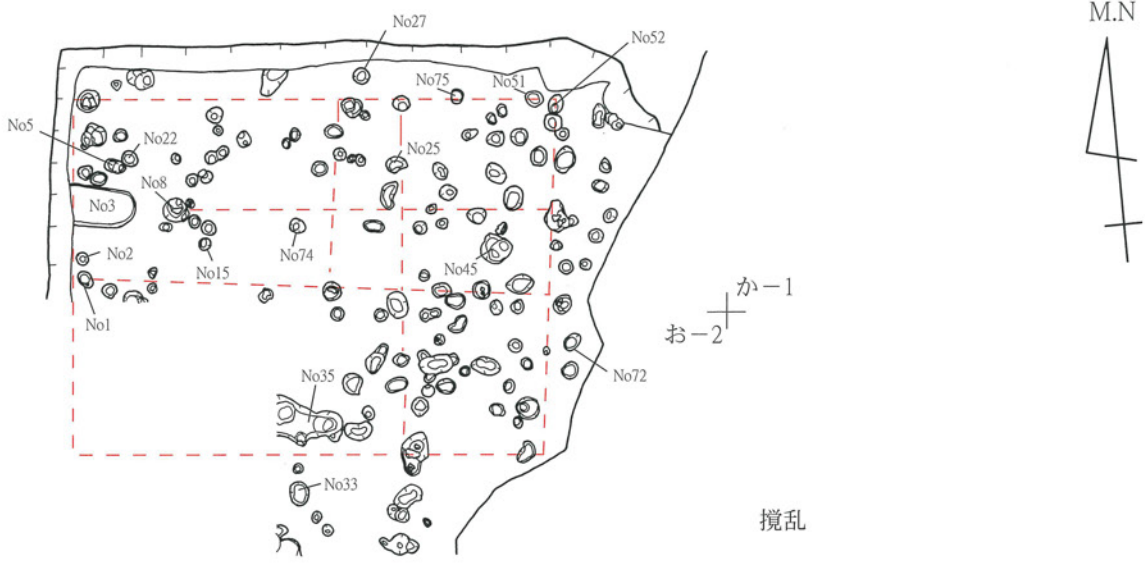


第9図 I地区ピット群



第10図 II地区ピット群（本堂跡の完掘）





第11図 III地区ピット群

## (2) 15世紀後半～

## ピット群

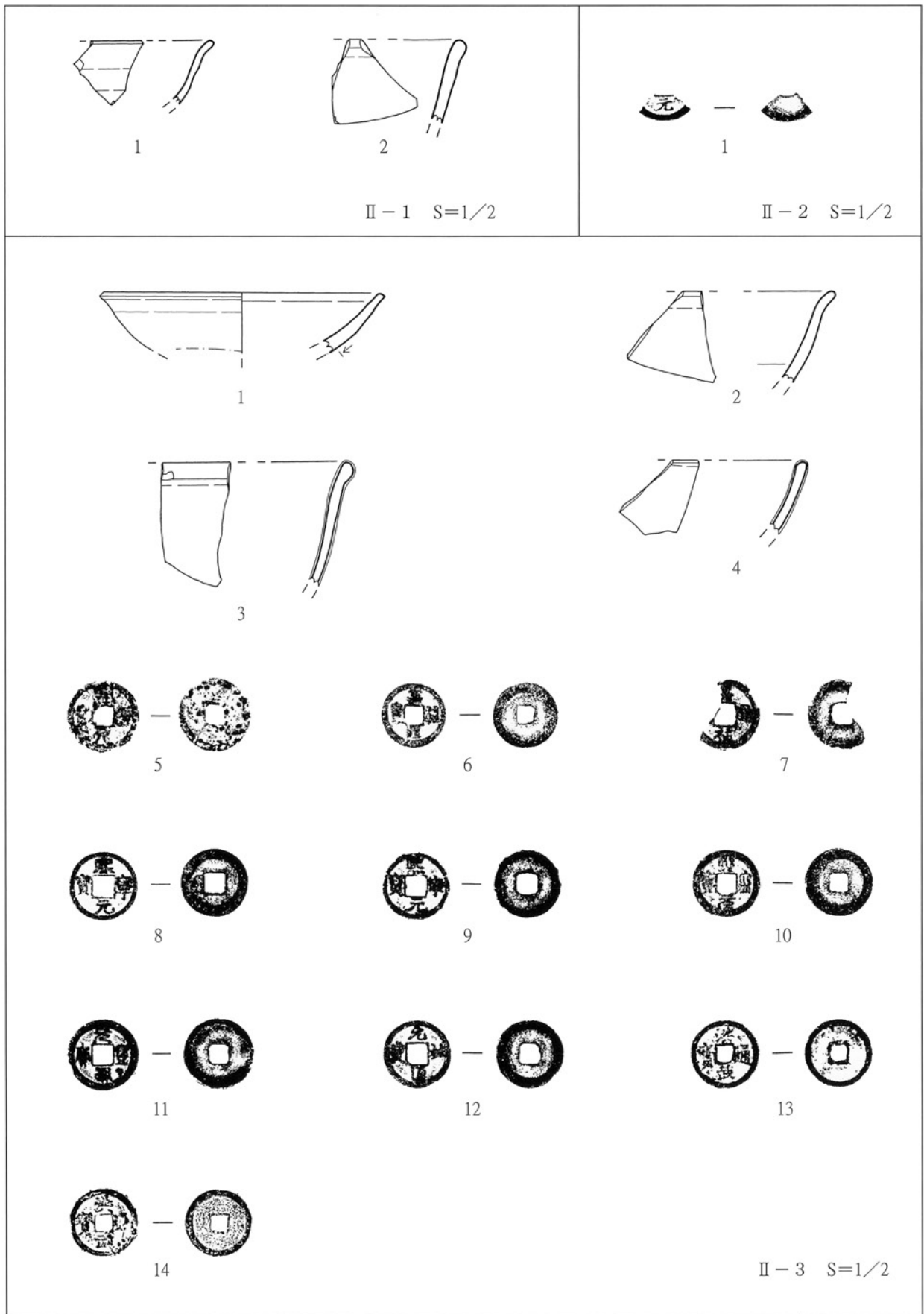
ピットは第9～11図に示したとおり大小合わせて470近く検出された。I地区で116箇、基壇内で45箇、その他にII・III地区でも303箇も確認された。

ピット群の殆どは、掘立て柱の建物跡と思われるが、中には、径が大きく掘り込みの深いピットも確認された。プラン等の検討については、時間の都合上今回は割愛した。後日、改めて報告したい。以下、ピット内より得られた遺物の観察表を示した。

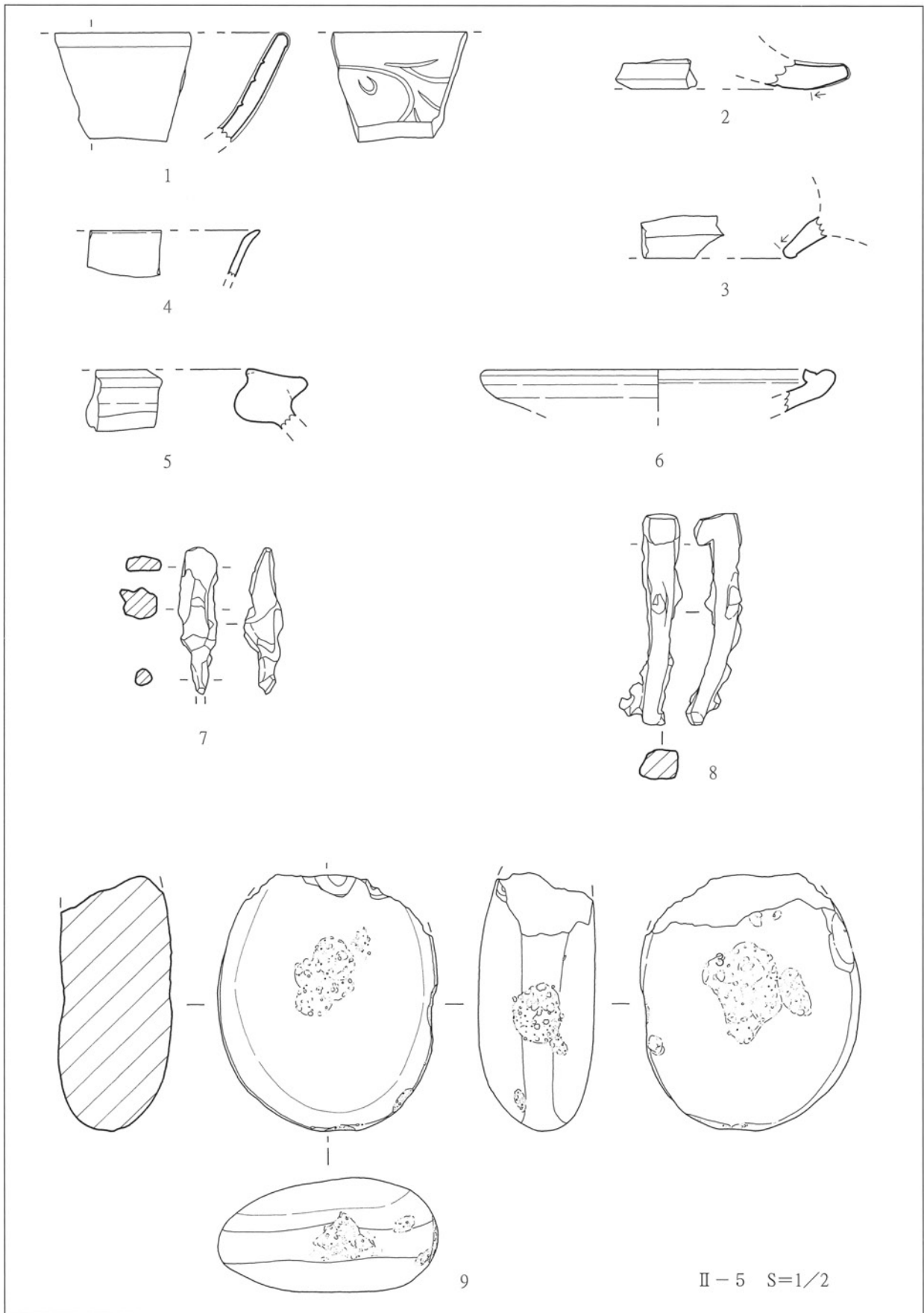
第1表 ピット内出土遺物観察一覧

遺物番号	種別	計測値 (cm, g)			特徴
		口径	器高	底径	
II地区 pit 1-1	白磁	—	—	—	外反の小杯。素地は白色で微粒子。
” pit 1-2	青磁	—	—	—	玉縁無文外反碗、素地は灰白色で粗粒子。断面にスス痕が付着。
” pit 2-1	銭貨	径：—	穿：—	重：0.8	〇〇元〇：不明
” pit 3-1	白磁	10.2	—	—	直口皿。高台脇から露胎。素地は黄白色で粗粒子。2次焼成を受け釉薬が失透。断面にスス痕が付着。
” pit 3-2	青磁	—	—	—	無文外反碗。素地は灰色で粗粒子。見込みに圈線が見られる。
” pit 3-3	”	—	—	—	玉縁無文外反碗。素地は淡灰白色で粗粒子。釉薬はやや厚手。
” pit 3-4	青磁	—	—	—	直口碗。素地は灰白色で微粒子。口唇部の釉薬は薄い。
” pit 3-5	銭貨	径：2.570	穿：0.660	重：3.1	開元通宝：唐-621
” pit 3-6	”	径：2.320	穿：0.540	重：2.9	嘉祐通宝？：北宋-1056？
” pit 3-7	”	径：2.510	穿：0.725	重：1.5	嘉祐通〇：北宋-1056
” pit 3-8	”	径：2.425	穿：0.720	重：3.0	熙寧元宝：宗-1068
” pit 3-9	”	径：2.425	穿：0.710	重：2.6	熙寧元宝：宗-1068
” pit 3-10	”	径：2.410	穿：0.630	重：3.0	熙寧元宝：宗-1068
” pit 3-11	”	径：2.555	穿：0.640	重：3.2	元豐通宝：北宋-1078
” pit 3-12	”	径：2.440	穿：0.700	重：2.3	元祐通宝：北宋-1086
” pit 3-13	”	径：2.435	穿：0.545	重：3.7	洪武通宝：明-1368
” pit 3-14	”	径：2.380	穿：0.540	重：2.7	洪武通宝：明-1368
” pit 5-1	青磁	—	—	—	直口盤。素地は灰白色で微粒子。内面に草花文を窺影。
” pit 5-2	”	—	—	—	酒会壺の蓋。素地は灰白色で微粒子。
” pit 5-3	”	—	—	—	”
” pit 5-4	白磁	—	—	—	外反の小杯。素地は白色で微粒子。
” pit 5-5	褐釉陶器	—	—	—	2次焼成受け、釉薬が失透。
” pit 5-6	土器	12.6	—	—	タイ産の土器の蓋。返し作りが丁寧。全体に赤みが強い。
” pit 5-7	鉄製品	長：7.5	厚：1.0	重：20.2	両刃の鉄族。断面は刃部が方形で基部は円形を呈する。
” pit 5-8	鉄製品	長：5.2	重：10.8	—	逆「L」字の鉄釘。
” pit 5-9	石器	長：9.1	厚：4.1	重：450	円形の叩き石。
” pit 7-1	青磁	12.9	—	—	腰折れ皿。素地は淡い灰白色で粗粒子。内外面に窺影の草花文を描く。
” pit 13-1	青磁	—	—	4.5	直口碗の底部。素地は灰白色で粗粒子。外面に叉状による連弁文を描く。畳付けは露胎。
” pit 13-2	瓦	長：5.9	幅：5.1	厚：4.8	羽状叩き文の平瓦の縁部。内面・端部とも窺による調整。色調は赤色。
” pit 16-1	土製品	—	—	—	土壁？。2次焼成のためか全体に赤色を呈する。表面は平坦に形成されているが、裏面は凸凹である。
” pit 20-1	青磁	—	—	6.8	玉縁無文外反碗。内底面は露胎。見込みに印花文。釉薬は未発色。
” pit 21-1	青磁	16.6	—	—	”。素地は灰色の微粒子。
” pit 30-1	瓦	長：16.2	幅：10.6	厚：2.0	灰色の平瓦。内外面に糸切り痕と白色の粒子の付着が観察される。
” pit 31-1	青磁	18.0	8.0	7.3	無文外反碗。素地は灰白色の粗粒子。内面に圈線が見られる。
” pit 31-2	青銅製品	長：4.4	厚：1.1	長：31.8	腐食が著しく不明。実測図右端部と上部は丁寧に成形。
” pit 36-1	円盤状製品	径：4.1	厚：1.2	重：17.0	白磁の直口皿の底部を打割。素地は黄白色の粗粒子。高台は露胎。
” pit 38-1	瓦	長：11.2	幅：6.2	厚：1.9	高麗系の平瓦。外面に羽状叩き文、内面は窺調整と布目圧痕と糸切り痕が観察される。
” pit 39-1	鉄製品	長：3.3	幅：1.0	重：2.9	鉄釘。
” pit 45-1	青磁	13.9	—	—	無文外反皿。素地は淡灰白色で粗粒子。
III地区 pit 2-1	瓦	長：14.2	幅：8.6	厚：1.7	赤色の丸瓦。表面に漆喰の付着が観察される。
” pit 8-1	青磁	17.0	—	—	玉縁無文外反碗。素地は淡橙褐色で粗粒子。2次焼成品？。縁部付近に他の器物の溶着痕が見られる。
” pit 8-2	”	17.2	—	—	玉縁無文外反碗。素地は灰白色の粗粒子。
” pit 8-3	”	—	—	6.4	底部。素地は灰白色の粗粒子。内底面は露胎。見込みに圈線

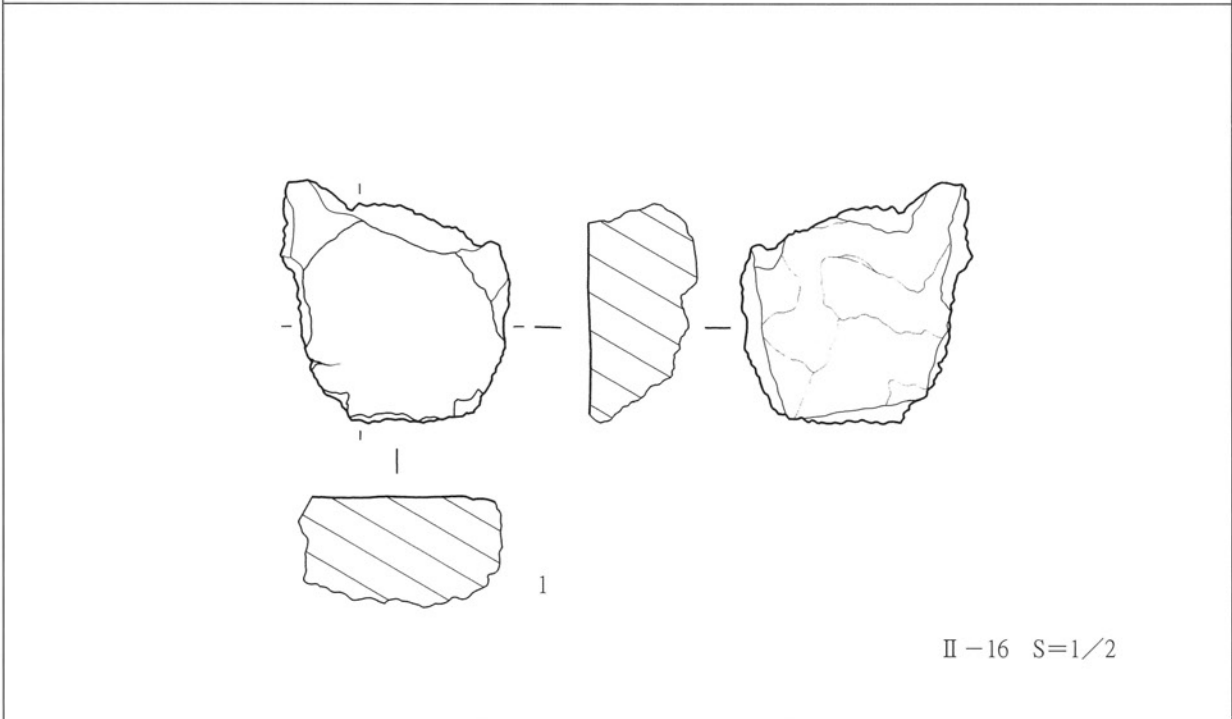
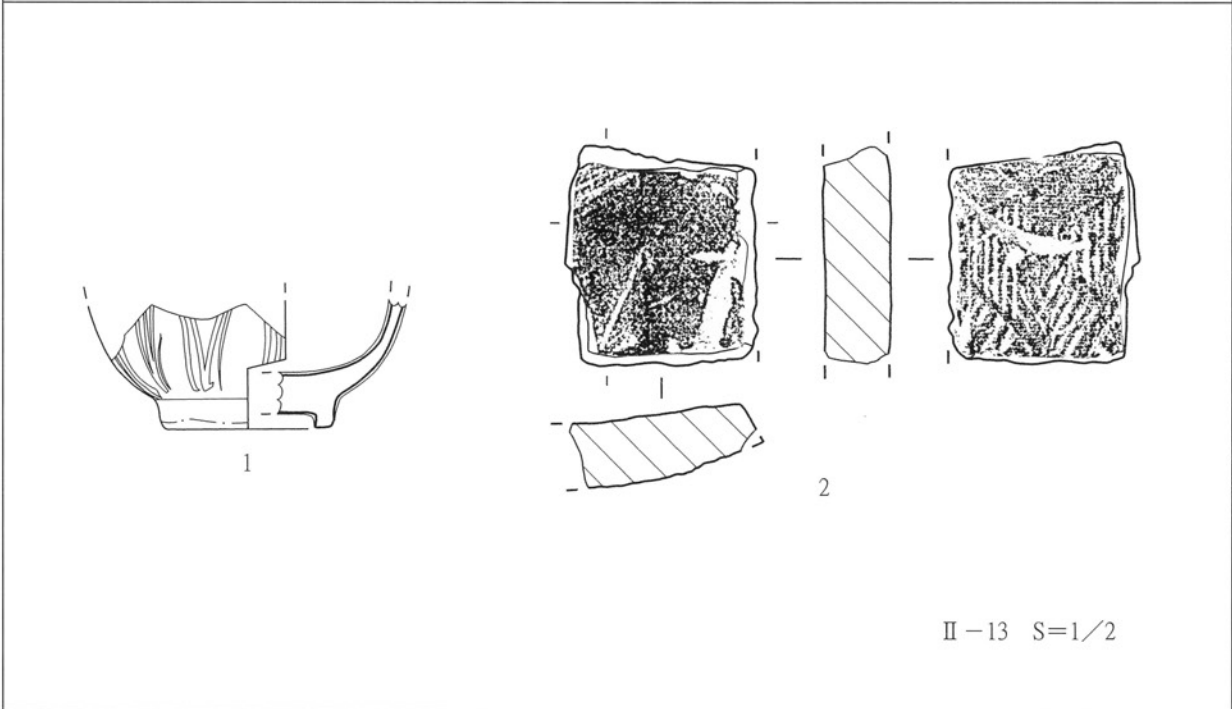
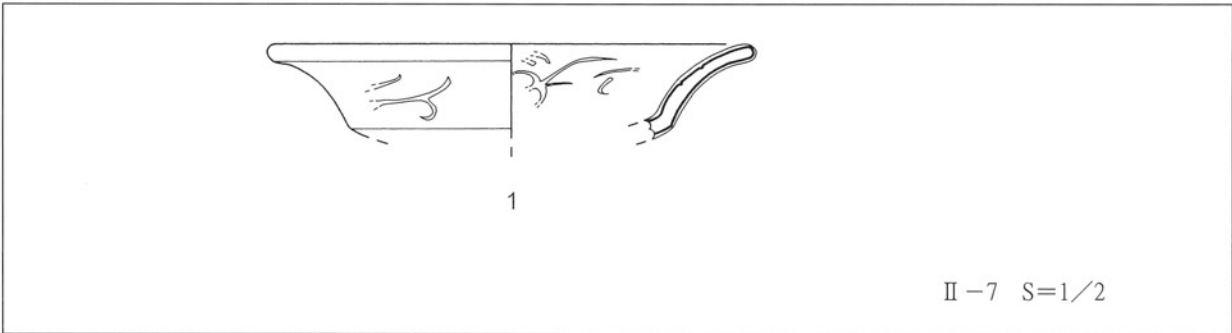
遺物番号	種別	計測値 (cm, g)			特徴
		口径	器高	底径	
Ⅲ地区 pit75-1	青磁	13.4	—	—	薄手の無文外反碗。素地は灰色で粗粒子。
〃 pit75-2	鉄製品	長：3.35	幅：0.8	重：2.1	小さい鉄釘。
〃 pit75-3	土器	10.0	—	—	手づくね碗形在土器。焼成良好で堅致。黒色・ガラス質の鋳物を混入。
〃 pit115-1	白磁	15.2	—	—	薄手無文外反碗。腰部は露胎。灰白色で微粒子。
〃 pit116-1	青磁	24.7	5.5	9.0	丸縁の盤。内面櫛描き文。
〃 pit116-2	〃	24.7	5.2	8.8	〃。見込みに印花文。
〃 pit116-3	〃	24.0	5.2	8.7	〃
〃 pit129-1	黒釉陶器	12.1	5.8	4.4	黒釉の天目茶碗。縁部より外反させるもので釉薬を厚く施釉。
〃 pit134-1	埴	長：14.8	幅：7.8	厚：4.4	形状が方形になるもので、灰色を呈する。
〃 pit150-1	青磁	—	—	6.4	連弁文碗。内面草花文を描く。淡い灰白色で粗粒子。内底面は露胎。
〃 pit179-1	無釉陶器	—	—	—	沖繩産の掃り鉢。縁部付近かに屈曲部が観察される。櫛目は10本一組で掃り上げ、櫛目間は空白が見られる。素地は暗茶褐色を呈し、赤色粒や白色粒子が混入。
〃 pit179-2	瓦	長：10.6	幅：10.6	厚：2.0	高麗系平瓦。羽状叩き文と糸切り痕・布目圧痕が観察される。
〃 pit183-1	鉄製品	長：5.5	頭幅：1.4	重：12.0	鉄釘。
〃 pit198-1	青磁	15.8	—	—	無文外反碗。灰白色で微粒子。
〃 pit198-2	〃	—	—	—	〃
〃 pit198-3	〃	5.6	5.9	5.3	ほぼ完形品。口唇部と畳付けは露胎。釉薬はやや厚手。素地は赤褐色で微粒子。
〃 pit198-4	〃	24.4	5.5	8.8	丸縁の盤。内面櫛描き文と見込みに印花文。素地は灰白色で微粒子。
〃 pit198-5	瓦	長：9.2	幅：13.2	厚：1.8	高麗系の丸瓦。羽状叩き文と糸切り痕が観察される。
〃 pit198-6	〃	長：10.5	幅：19.5	厚：1.5	高麗系の平瓦。羽状叩き文と糸切り痕が観察される。表面端部は丁寧に鏡調整。
〃 pit206-1	ヤコウガイのフタ	長：6.0	幅：5.4	厚：75.3	螺蓋製敲打具。中心部の右側に敲打痕が見られる。
〃 pit218-1	銭貨	径：—	穿：—	重：1.1	残1/2：不明
〃 pit228-1	〃	径：2.310	穿：0.480	重：3.2	洪武通宝：明-1368
〃 pit232-1	青磁	12.7	—	—	直口皿。淡い灰白色で粗粒子。
〃 pit232-2	円盤状製品	半径：2.3	厚：1.4	重：10.1	白磁皿の底部を利用した2次製品。素地は黄白色で粗粒子。高台は露胎。
〃 pit263-1	円盤状製品	径：2.5	厚：0.6	重：4.5	青磁の胴部を利用した2次製品。素地は灰白色で粗粒子。
〃 pit285-1	銭貨	径：3.360	穿：0.770	重：10.1	洪武通宝：明-1368
〃 pit285-2	鉄製品	径：3.35	幅：0.65	重：2.2	鉄釘。表面に縦位の筋状痕が観察されるが、木片かどうか判然としない。
〃 pit285-3	青銅製品	幅：0.25	重：0.4	—	薄い扁平な製品である。用途は不明。
〃 pit291-1	青磁	—	—	—	外反碗。裏面にラマ式連弁文らしきものが見られる。素地は灰色で粗粒子。
〃 pit291-2	褐釉陶器	12.5	—	—	玉縁の小型壺。褐釉を内外面に施釉。素地は赤褐色を呈する。
〃 pit292-1	白磁	16.0	6.4	4.9	無文外反碗。見込みに草花の印花文。腰部より露胎。素地は灰白色で微粒子。
〃 pit292-2	青磁	15.6	—	—	無文外反碗。灰白色で粗粒子。
〃 pit292-3	銭貨	径：2.400	穿：1.040	重：2.8	紹聖元宝？：北宋-1094
〃 pit292-4	瓦	長：18.7	幅：14.1	厚：1.8	高麗系の平瓦。布目圧痕・糸切り痕、裏面に羽状叩き文。僅かに下端部で文字が観察される。
〃 pit298-1	無釉陶器	—	—	推定8.5	掃り鉢の底部。色調は灰褐色を呈し、素土に微砂粒やガラス質鋳物を混入。底面は貼付によって厚く成形されている。沖繩産？
〃 pit298-2	瓦	長：8.7	幅：3.9	厚：1.6	高麗系の丸瓦。断面端部に鏡切りと割痕が見られる。内面に糸切りと布目痕が観察される。
〃 pit298-3	〃	長：9.5	幅：9.9	厚：1.3	高麗系の丸瓦。外面に羽状の叩き文、内面に糸切りと布目痕が観察される。
I地区 pit6-1	瓦	長：8.4	幅：7.2	厚：2.3	明朝系の軒平瓦。僅かに葉文の凸面が観察される。
〃 pit7-1	青花	13.8	—	—	直口碗。内外面に鼻須による文様を描く。灰白色で粗粒子。口唇部で釉薬の剝離が観察される。使用痕など判然としない。
〃 pit7-2	陶器	10.8	2.1	5.9	菊花皿。桃褐色の素地に白化粧土を施し、濃い緑釉を施釉。高台内は鉄釉を施す。型成形品と思われる。産地不明。
〃 pit7-3	瓦	長：9.2	幅：7.1	厚：2.0	明朝系の丸瓦。色調は淡い燈褐色を呈するが、芯部は灰褐色。
〃 pit8-1	白磁	—	—	5.5	碗の底部。高台が低平で見込みは僅かに盛り上がる。高台と見込みは露胎。素地は黄褐色の粗粒子。高台内全面に薄く墨痕が観察される。
〃 pit23-1	磁器	—	—	—	角皿？内外面に緑釉を施し、底面には薄く透明釉を施釉。白色で微粒子。
〃 pit23-2	瓦	長：13.9	幅：8.7	厚：1.8	明朝系の平瓦。内面に漆喰が残る。外面は布目痕が観察される。
〃 pit23-3	埴	長：4.0	幅：6.2	厚：4.5	表面に○に「大」のスタンプが見られる。2次焼成痕が観察される。



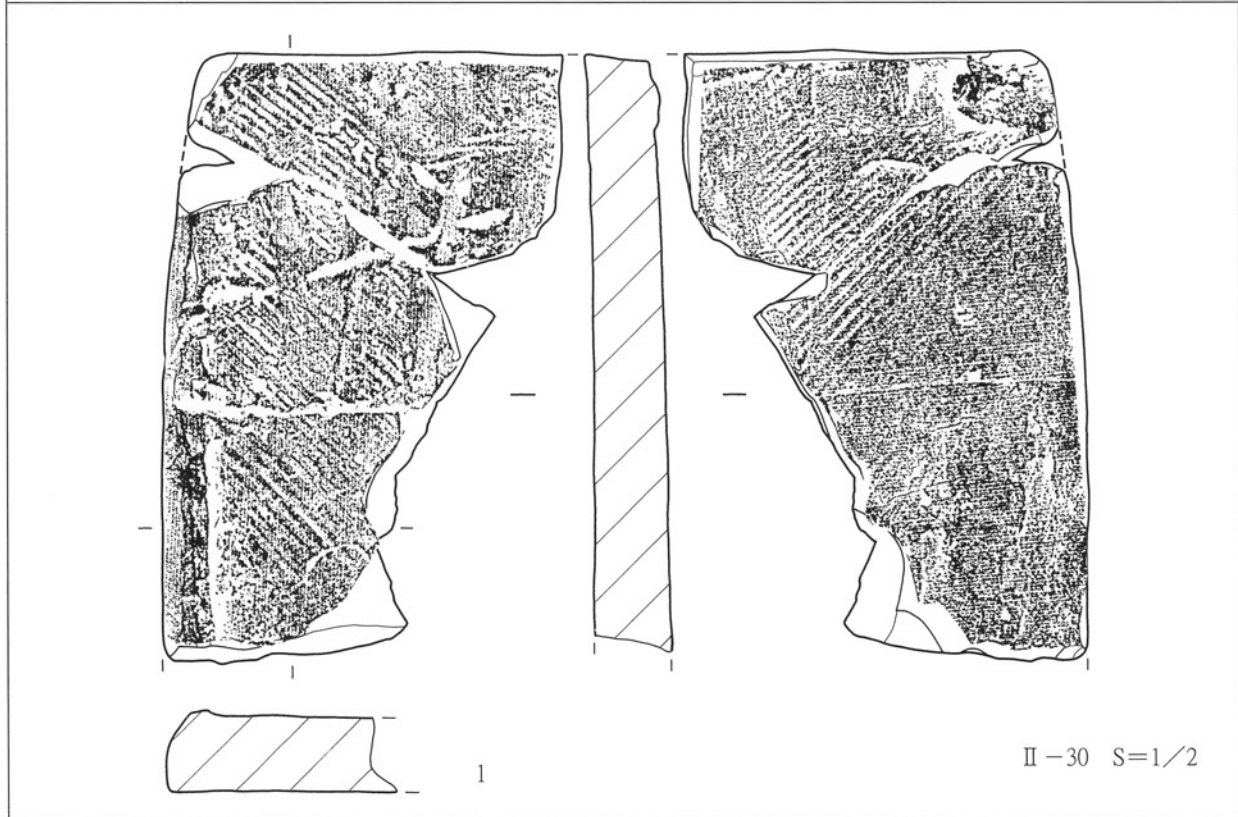
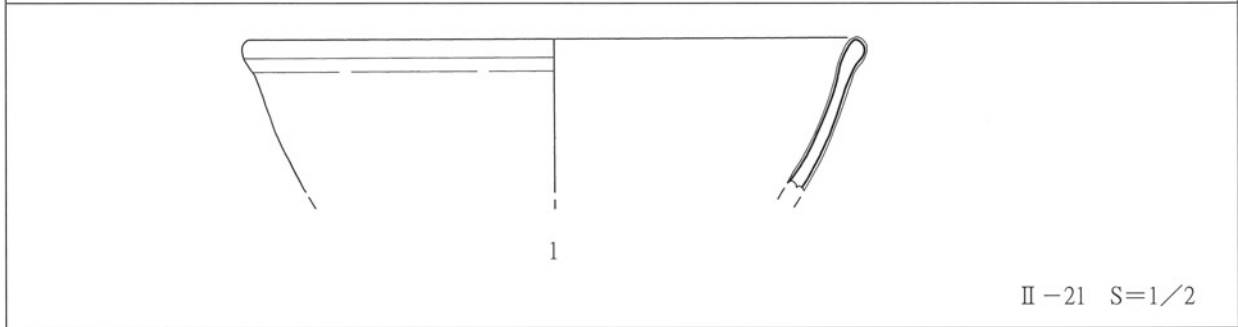
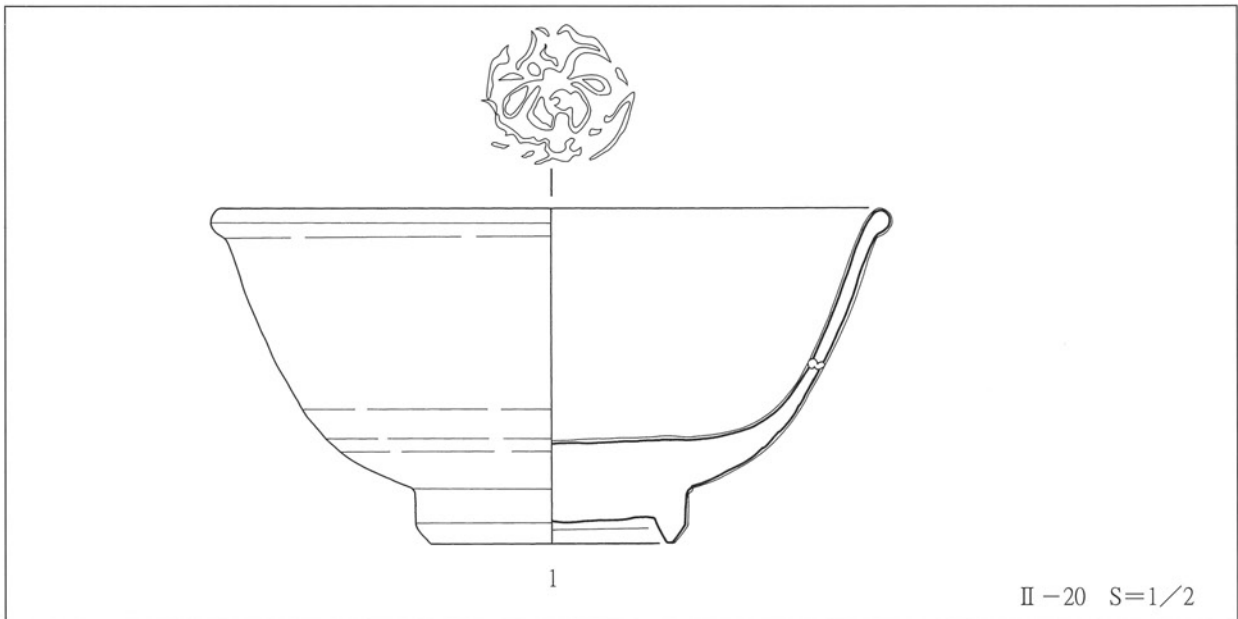
第12図 (図版9) II地区ピット (No.1・2・3) 出土遺物



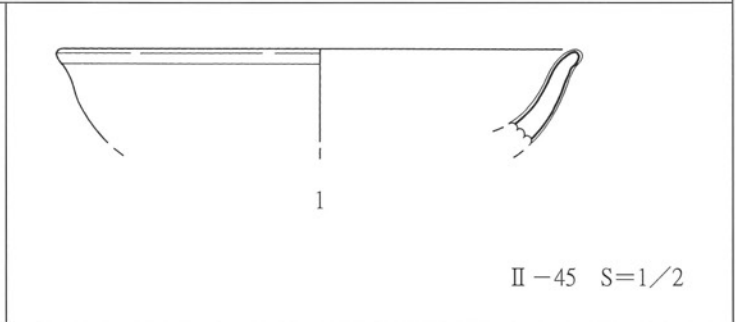
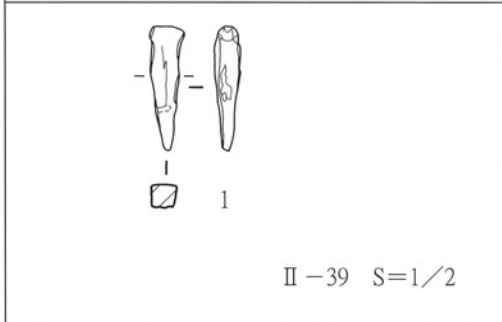
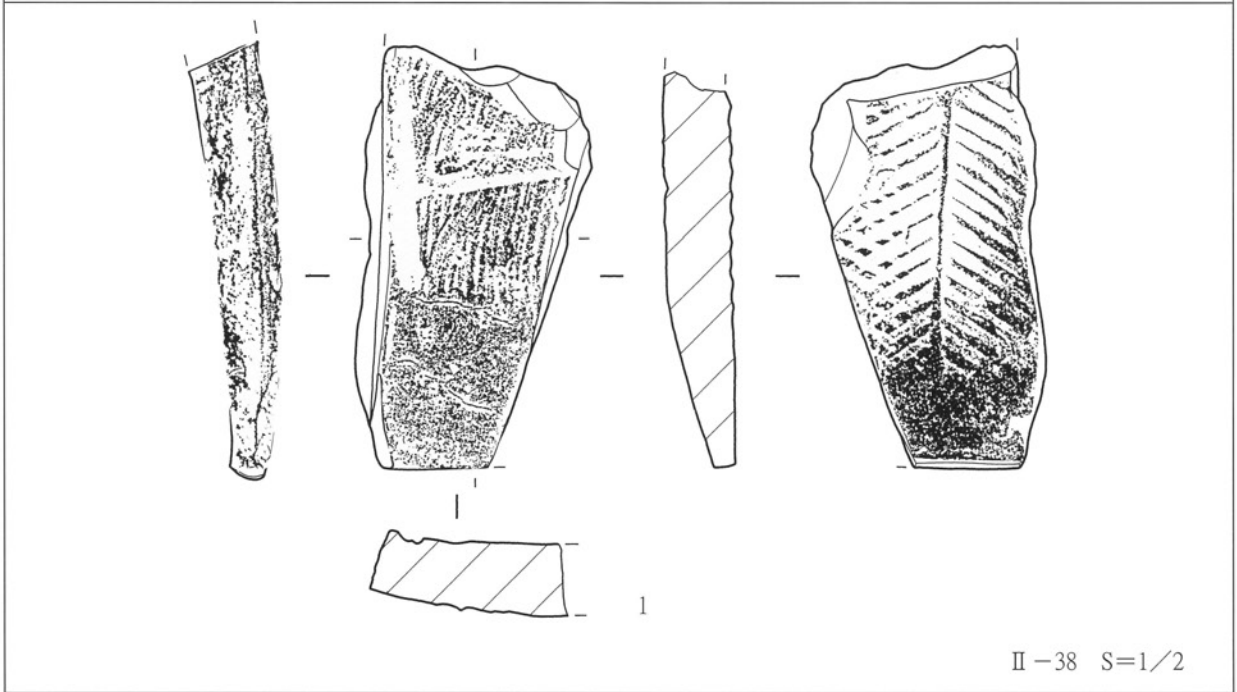
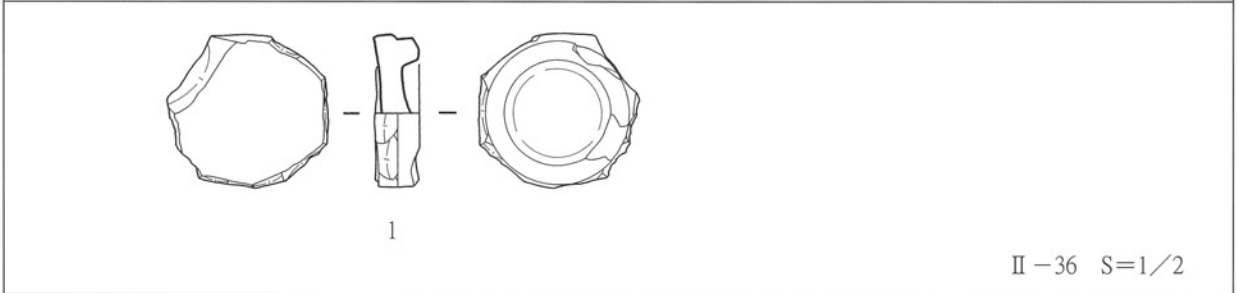
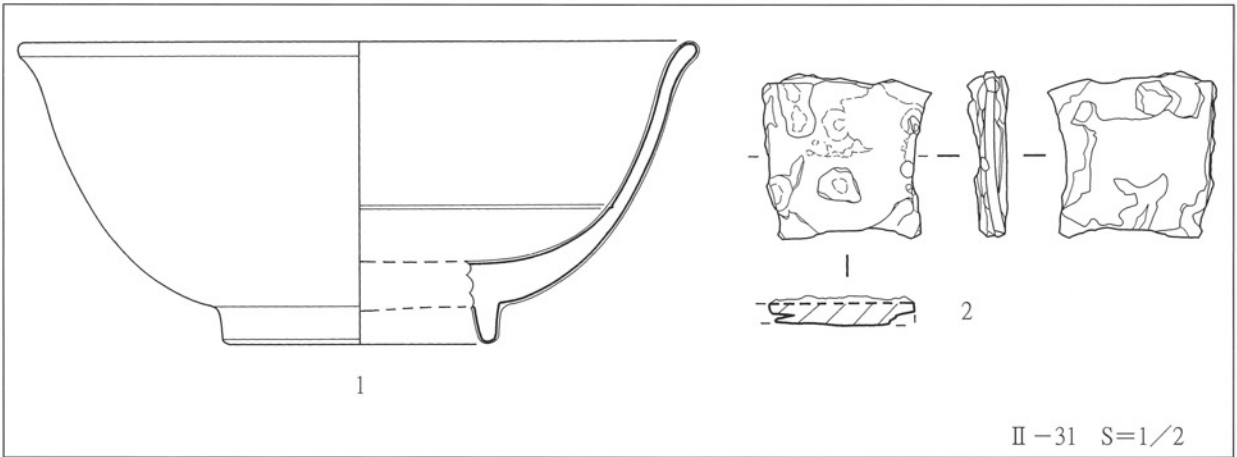
第13図 (図版10) II地区ピット (No. 5) 出土遺物



第14図 (図版11) II地区ピット (No. 7・13・16) 出土遺物

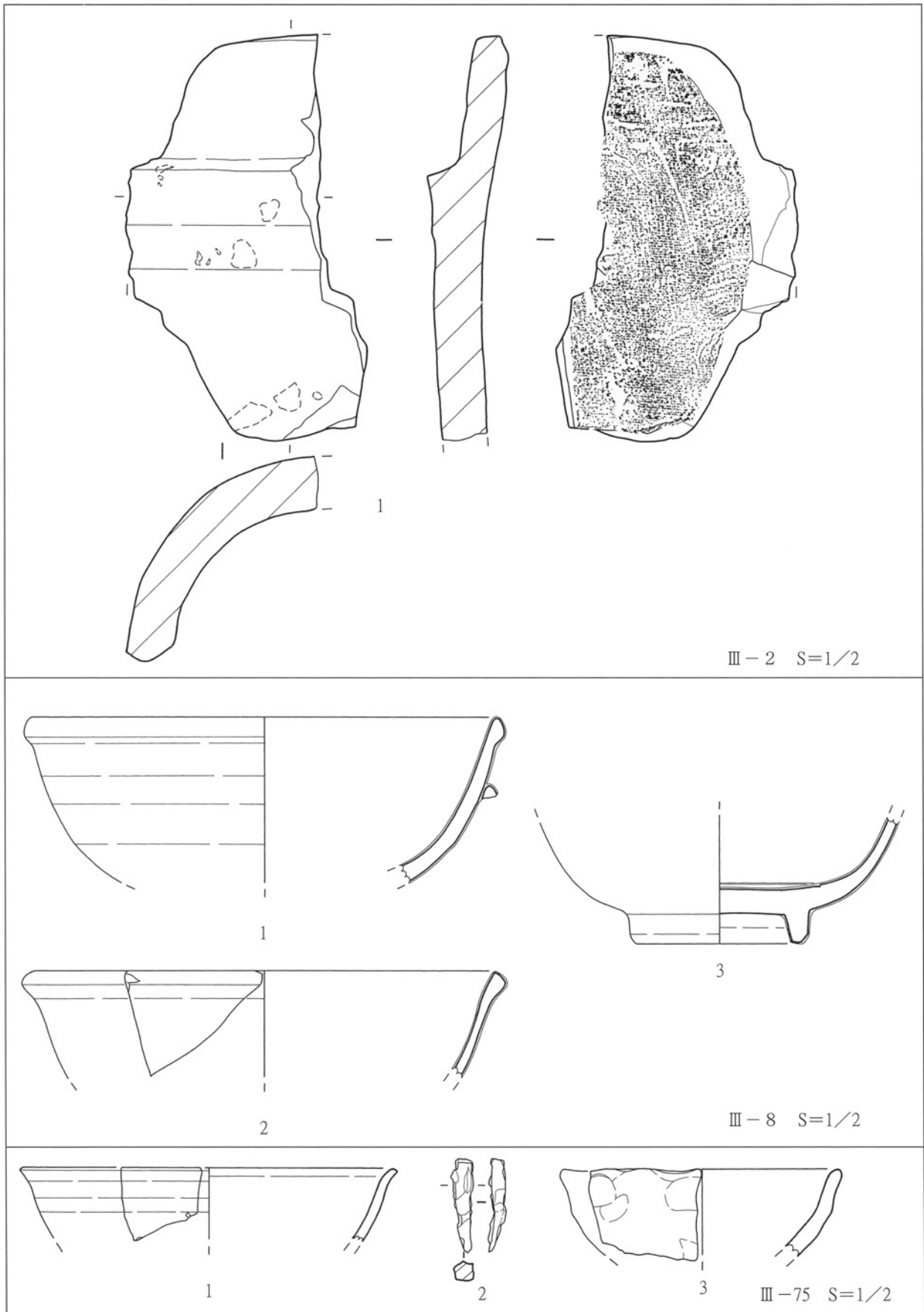


第15図 (図版11) II地区ピット (No.20・21・30) 出土遺物

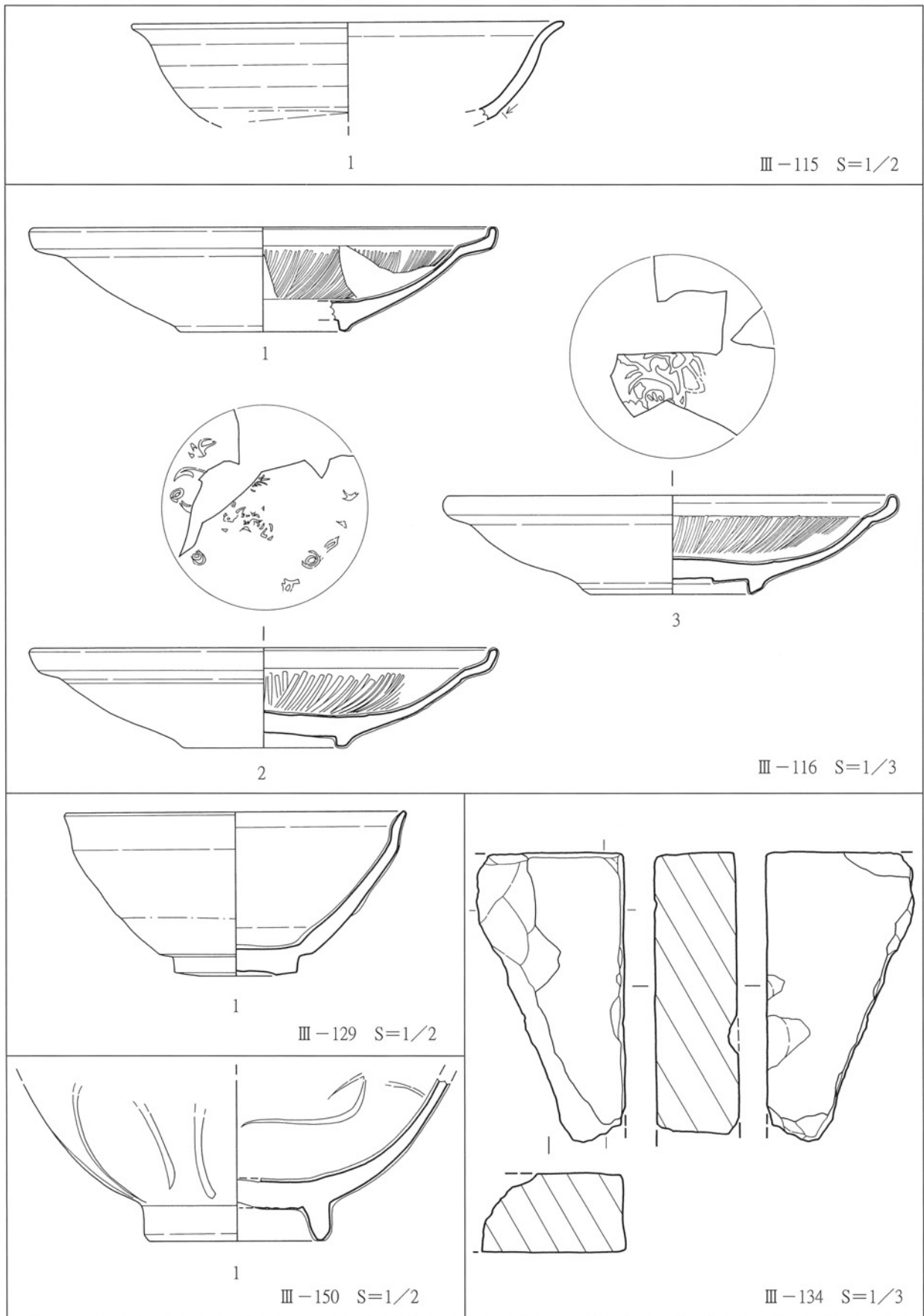


第16図 (図版12) II地区ピット (No.31・36・38・39・45) 出土遺物

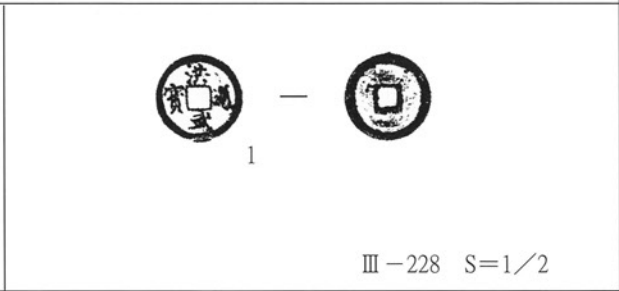
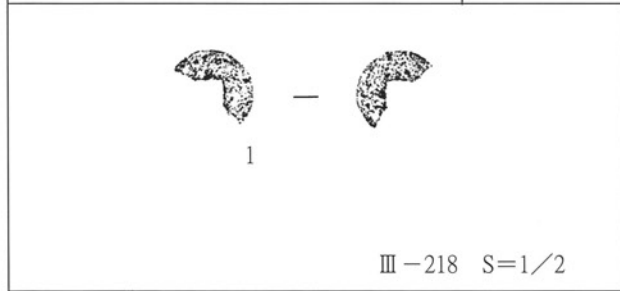
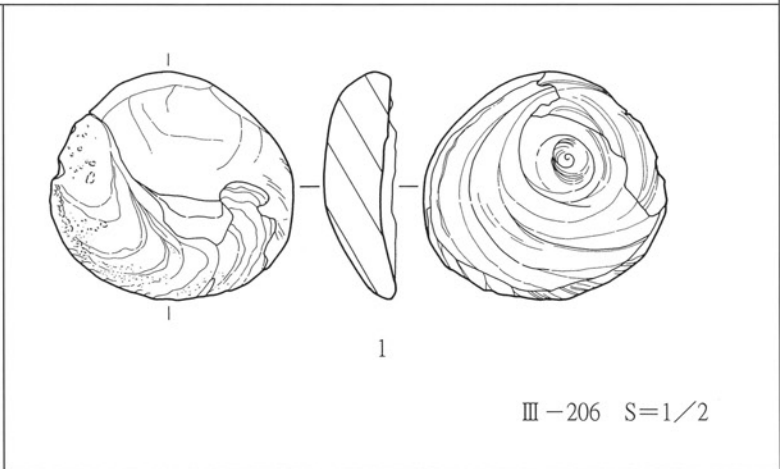
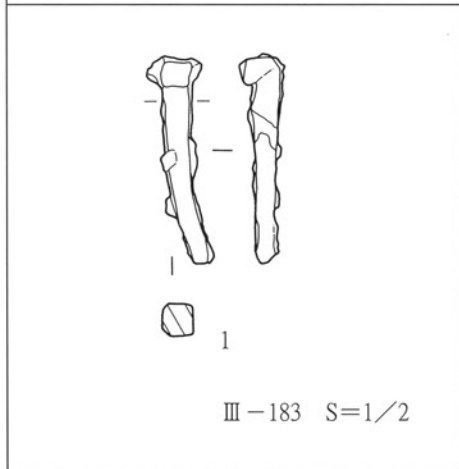
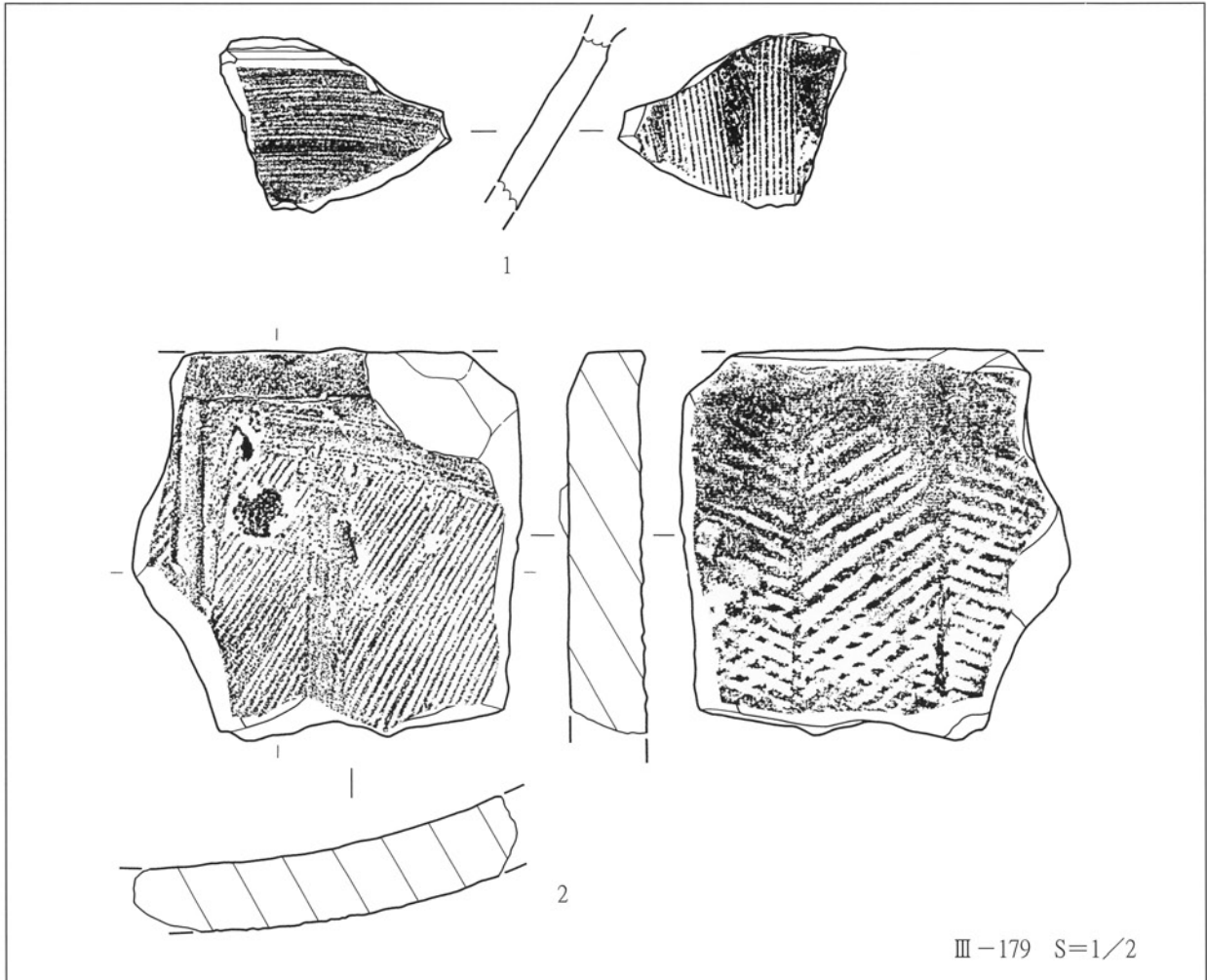




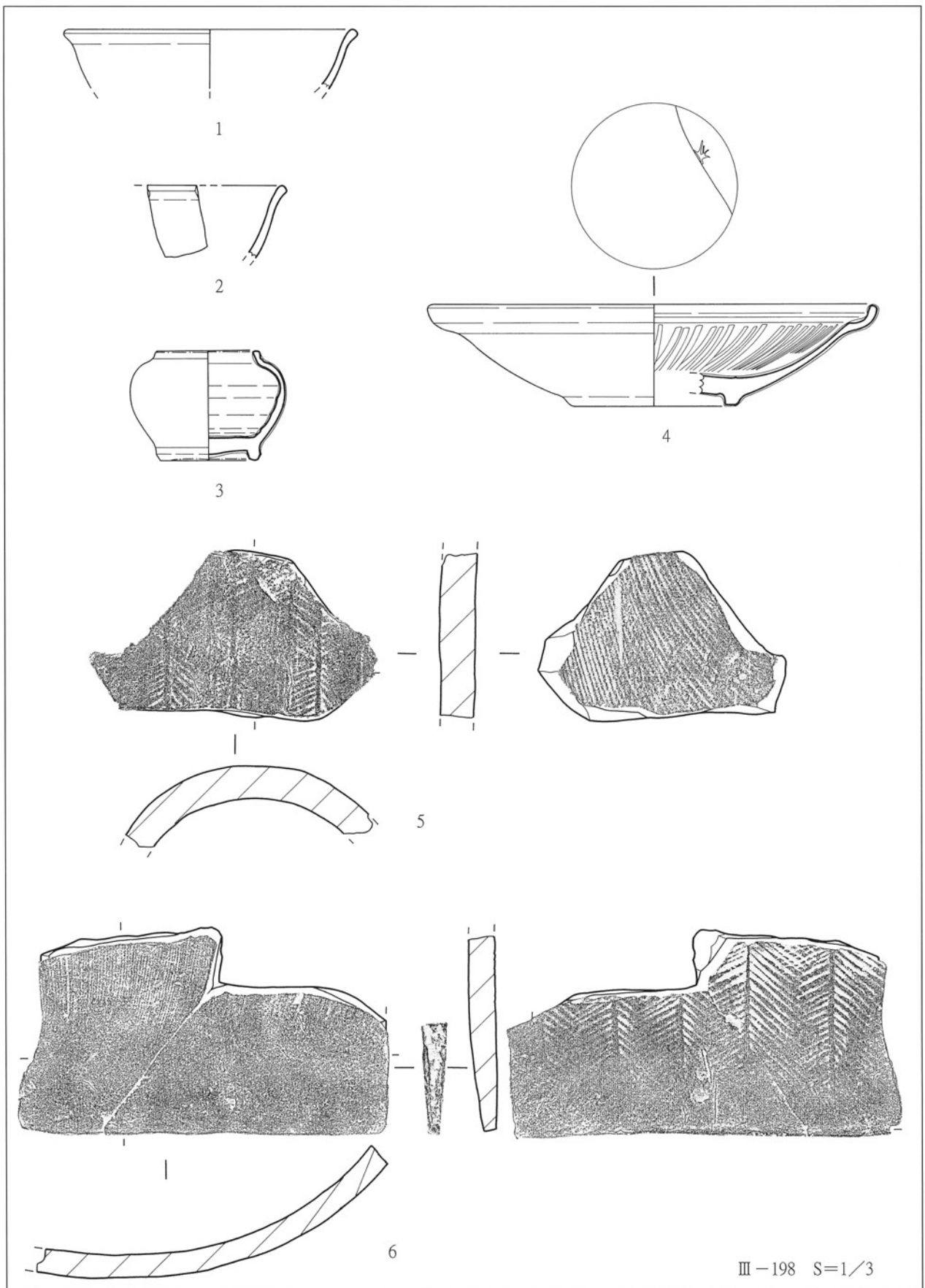
第17図 (図版13) Ⅲ地区ピット (No.2・8・75) 出土遺物



第18図 (図版14) III地区ピット (No.115・116・129・134・150) 出土遺物

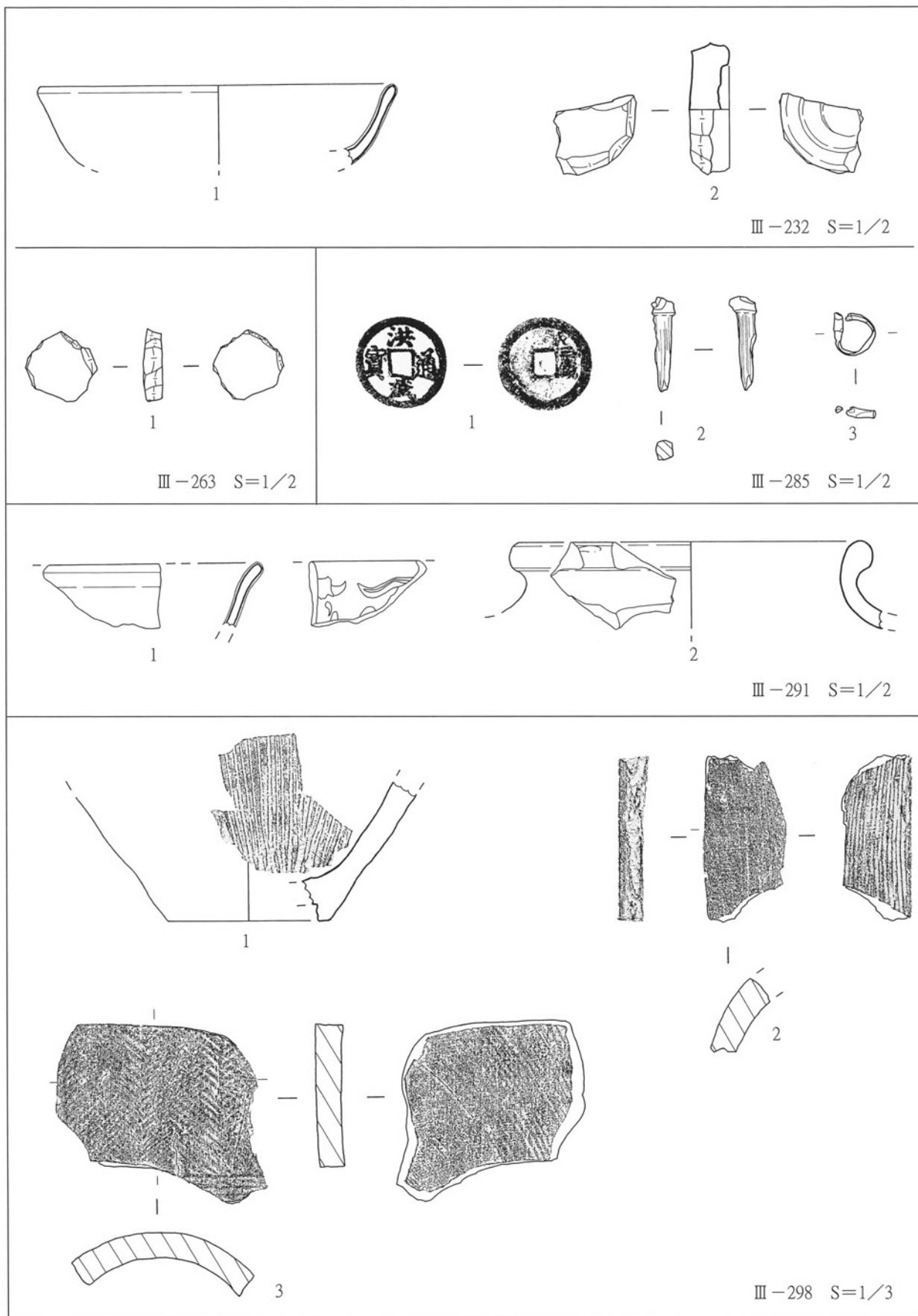


第19図 (図版15) III地区ピット (No.179・183・206・218・228) 出土遺物

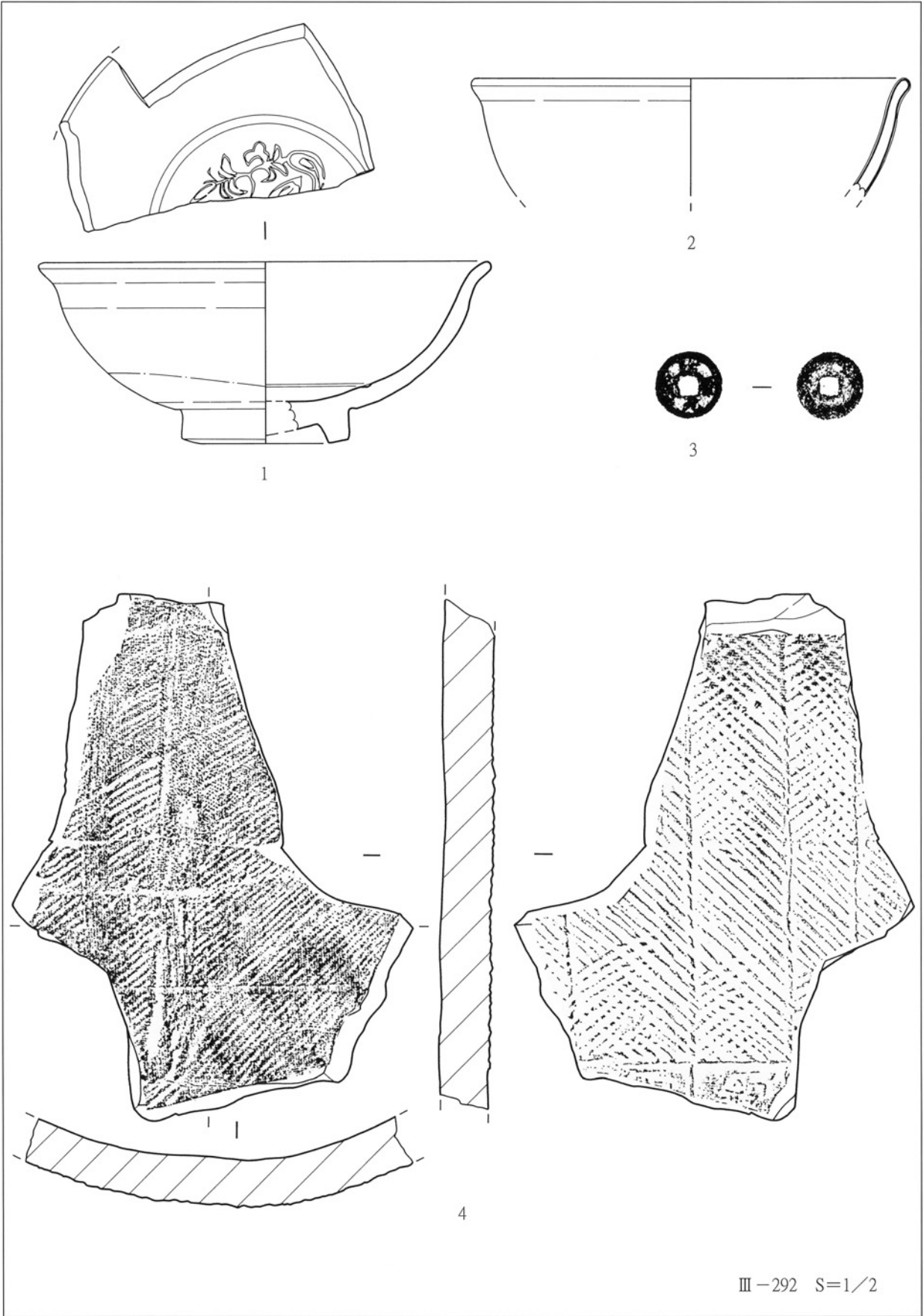


Ⅲ-198 S=1/3

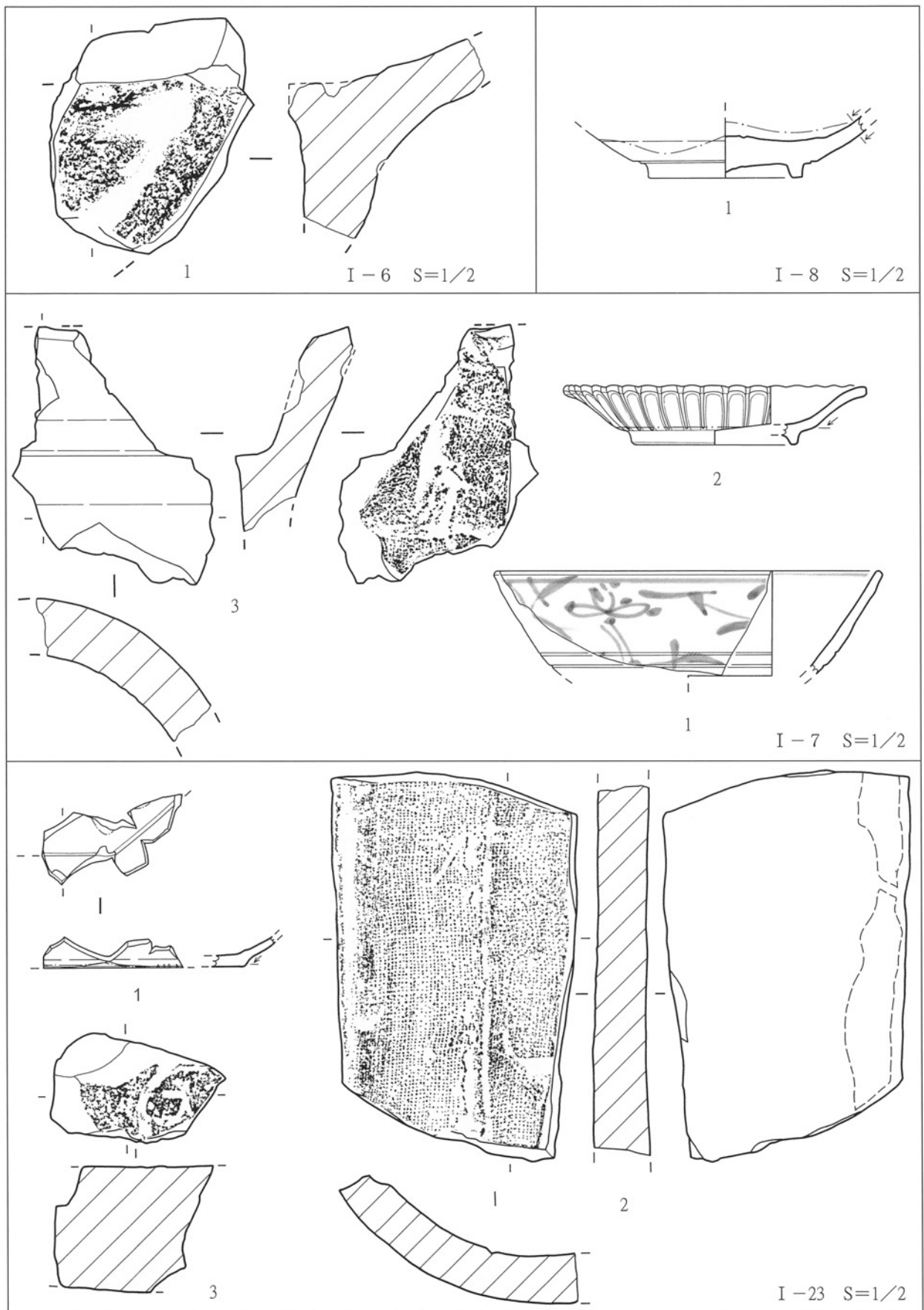
第20図 (図版16) Ⅲ地区ピット (No.198) 出土遺物



第21図 (図版17) III地区ピット (No.232・263・285・291・298) 出土遺物



第22図 (図版18) III地区ピット (No.292) 出土遺物



第23図 (図版19) I地区ピット (No.6・7・8・23) 出土遺物

第2表 遺物出土一覧

種類 層序	白磁	青磁	青花	天目	瑠璃釉	三彩	五彩	緑釉	翡翠釉	単色釉 (紅)	単色釉 (黄)	ベトナム産 陶器	タイ産 陶器	タイ産 半練土器	褐釉陶器	須恵器	備前焼	瓦質土器	高麗瓦	瓦当	埴	煙管	羽口	合計
I層	196	444	343	9	13	12	6	1	2			3	2	4	26			4	2	19	10	7		1,103
II層	537	849	819	11	21	18	8		7	1	2	1	6	14	84			20	10	39	44	13	1	2,505
III層	364	776	372	20	5	16	2	2	10				1	12	64		4	30	23	33	45	4		1,783
IV層	138	381	116	2	4	3	6						3	7	32	1	1	16	14	20	6	1		751
V層	263	1,492	92	43	2	4	2		3				2	26	88	4	2	11	62	24	22	2		2,144
基壇II層	5	7	1												1							1		15
基壇V層	67	154	1	1			1											3	7					243
基壇内レキ敷き																					1			1
瓦溜りNo1	2	11	1			1									3			1		20	7			46
土坑No.1基壇		3																	1					4
土坑No1		14																						14
土坑No.2基壇		3																						3
土坑No2	1	13	1																2					17
土坑No.3基壇		5																						5
土坑No.4基壇		2																						2
土坑No5			1																					1
土坑No6	13	18	11	1			1								1		1				3			49
土坑No7	1	9	6					1													10	1		28
土坑No8			2															1		2	1			6
土坑No11		5													1									6
土坑No12		1																						1
土坑No14																					1			1
土坑内	4	10	3												2			3		2				24
溝	13	26	23	4	1	1		1											1	3		2		75
溝ウラボメ		4	12												2									18
基壇溝1		5																						5
集石						1															2			3
トレンチ	19	17	31			1									1									69
攪乱	51	208	63	1	2		1		1					5	14	2		2		4	66	2		422
不明	13	53	7				2							1	2			2	2		2			84
合計	1,687	4,510	1,905	92	48	57	29	5	23	1	2	4	14	73	326	7	8	93	124	166	220	33	1	9,428



## 第Ⅵ章 出土遺物

### 中国産陶磁器

中国産陶磁器は白磁・青磁・三彩・天目等が得られた。中でも青磁が数多く確認された。時期的には、14世紀～17世紀代の幅広い年代で見られた。

以下、種類別に記述する。

#### 1. 白磁

器種としては、碗・皿・杯・壺・香炉等の5器種が得られた。特に、皿類が数多く見られ注目を引いた。以下、分類概念を記す。個々の記述は観察表に示した。参考されたし。

#### 碗

##### I. 直口碗

- II. 外反碗
- 1種：灰白色で厚手の外反碗である。
  - 2種：白色で薄手の外反碗である。

#### 皿

- I. 直口皿
- 1種（抉り） — a：高台脇から外底まで露胎のもの。  
b：器体全面に総釉のもの。
  - 2種（抉り無し）
  - 3種（平底） — a：薄手で素地が灰白色で微粒子のもの。  
b：厚手で素地が淡黄灰色で粉粒子のもの。

- II. 外反皿
- 1種：薄手の皿
  - 2種：薄手の菊花皿
  - 3種：端反りの薄手皿

#### 杯

##### 外反杯

口縁部で外反するものである。素地が黄白色の粉粒子で、釉薬は高台脇から外底以外に総がけする。全体の器形より2種に分けた。

- 1種：腰部から緩やかに外反するもの。
- 2種：口縁部で外反し、肩部に稜を持つもの。

#### 内湾杯

腰部より丸みを帯びながら立ち上がり口縁部で内湾するものである。素地によって2種に細分した。

1種：外反杯と素地・釉薬・成形等が同様の特徴を持つもの。

2種：素地が灰白色で微粒子、灰白色に発色するもの。高台脇を丁寧に削り稜が見られるもの。

#### 面取り杯

外面に面取りを施すもので、上面観は八角形を呈する。素地によって2種に細分される。

1種：外反杯と素地などが同じ特徴を持つもの。

2種：内湾杯の2種と素地などが同様な特徴を持つもの。

#### 端反り杯

底面より端反りに立ち上がる薄手の杯で、高台は厚く碁笥底状に形成する。畳付けは露胎にする。

素地は灰白色で微粒子で、灰白色に発色する。

#### 壺

##### 短頸壺

胴部を膨らませ口縁部で外反させるものである。素地は灰白色で薄い透明釉を内外面に施す。底部は不明。

#### 袋物

袋物の底部と考えられるものである。内面見込みには薄い釉薬を施す。高台脇からは露胎。

#### 蓋物

壺・水注等の蓋と思われるものである。

#### 香炉

高台より緩やかに膨らみ肩部で一端屈曲し口部で外反するものである。釉薬は口縁部内面より高台際まで施す。高台は露胎。

第3表 白磁観察一覧(碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 台 径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第24図1 図版20の1	無文 直口 碗		16.6 — —	淡黄色白で 微粒子	内外面に薄い 透明釉を施す	なし	淡灰 白色	細かい 貫入 あり	お-15 Ⅲ
” 2 ” 2	”		19.0 — —	白色で微粒子	”	”	灰緑 白	”	お-15 Ⅲ
” 3 ” 3	無文 外反 碗	1	16.8 — —	淡灰色で微粒 子	内外面に薄い 透明釉を施す	なし	淡灰 白色	なし	え-3 V
” 4 ” 4	”	2	16.0 — —	白色で微粒子	”	”	白 色	なし	か-10 Ⅱ
” 5 ” 5	”	1	16.2 — —	”	”	”	”	”	か-7 V
” 6 ” 6	”	1	— — 5.7	”	”	見込みに 印花文	淡灰 白色	”	え-2 Vb
” 7 ” 7	”	1	— — 5.7	”	”	見込みに 圏線	”	見込 みに 荒い 貫入	お-9 Ⅱジャリ

(Ⅲ)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 器 高 台 径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第24図8 図版20の8	直 口 皿	1a	10.1 2.7 4.5	淡黄白色で 粉粒子	” 高台脇から 外底は露胎	なし	淡黄 白色	見込 みに 細か い貫 入	か-9 基壇Ⅱb 口唇部にス ス痕が見 られる
” 9 ” 9	”	1b	7.7 1.5 4.0	”	全面施釉 見込みと 畳付け 釉ハギ 痕が残 る	”	”	全体に 細か い貫 入	か-12 Ⅱ
” 10 ” 10	”	”	9.4 2.2 4.6	”	”	”	”	”	き-12 Ⅱ
” 11 ” 11	”	”	8.9 2.1 4.0	淡灰白色で 微粒子	”	”	淡灰 白色	なし	お-12 Ⅱb
” 12 ” 12	”	”	8.4 2.0 4.3	淡黄白色で 粉粒子	”	”	未発 色	”	き-17 V
” 13 ” 13	”	”	— — 4.4	”	”	なし	淡黄 色	”	お-16 V 土坑No.6 スス痕らし きもの が見ら れる
” 14 ” 14	”	”	— — 4.4	”	”	”	”	”	き-16 V

## (Ⅲ)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉色	貫入	出土地点
第 24 図15 図版20の15	直 口 皿	1b	7.8 1.4 4.4	淡灰白色 微粒子	全面施釉 見込みと畳付 けに釉ハギ痕 が残る	〃	淡 灰 白 色	細かい 貫入あ り	き-6 V
〃 16 〃 16	〃	2	7.9 1.7 3.8	淡灰白色 粉粒子	見込みと高台 脇外底は露胎	〃	未 発 色	なし	き-9 Ⅲ
〃 17 〃 17	〃	〃	— — 3.0	淡灰白色 微粒子	見込みに蛇ノ 目釉ハギ。高 台脇から外底 は露胎	〃	淡 灰 白 色	〃	お-15 IV
〃 18 〃 18	〃	3a	8.6 — —	〃	内面のみ口唇 部から外底は 露胎	〃	〃	〃	か-14 Ⅱ
〃 19 〃 19	〃	〃	8.2 1.8 3.8	〃	〃	〃	〃	細かい 貫入が 見られ る	か-16 V
〃 20 〃 20	〃	3b	8.4 1.8 5.0	淡黄灰色で 粉粒子	〃	〃	淡 灰 白 色	〃	き-16 Ⅱ
〃 21 〃 21	〃	〃	8.8 2.5 4.0	〃	〃 内面に2次焼成	〃	〃	〃	か-17 Ⅲ 底面にスス 痕が残る
〃 22 〃 22	〃	〃	9.2 2.4 4.0	〃	〃	〃	未 発 色	なし	く-16 IV
第 25 図1 図版21の1	外 反 皿	1	13.4 3.1 7.6	淡白灰色 微粒子	平担の畳付け 露胎 砂粒が残る	〃	淡 灰 白 色	なし	お-16 Ⅲ
〃 2 〃 2	〃	〃	14.1 3.5 7.8	〃	三角状の畳付 け露胎	〃	〃	〃	お-17 Ⅲ
〃 3 〃 3	〃	〃	19.6 — —	〃	〃	〃	〃	〃	お-16 Ⅲ
〃 4 〃 4	〃	2	16.2 3.5 9.2	〃	三角状の畳付 け露胎	菊花	〃	細かい 貫入	お-16 Ⅲ
〃 5 〃 5	〃	3	11.2 2.8 6.2	淡灰白色 微粒子	三角状の畳付 け露胎	なし	〃	なし	か-13 Ⅱ

## (杯)

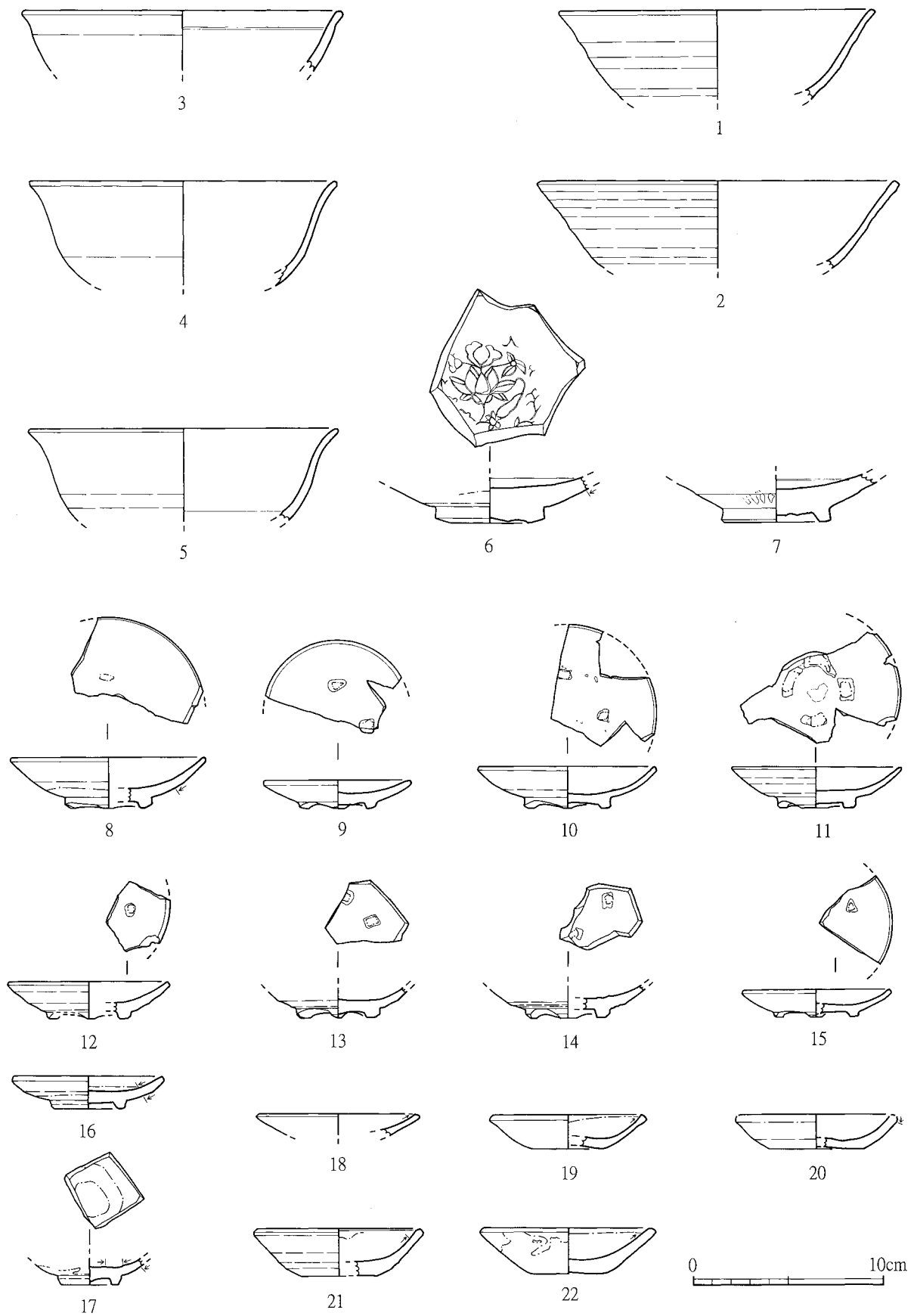
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 25 図6 図版21の6	外 反 杯	1	9.2 4.1 3.7	淡黄白色 粉粒子	高台脇から外 底露胎	なし	淡 黄 白 色	細かい 貫入が 見られ る	き-4 V
" 7 " 7	"	"	9.4 — —	"	"	"	"	"	お-10 基壇V
" 8 " 8	"	"	9.0 — —	"	"	"	"	"	お-10 II
" 9 " 9	"	2	8.5 — —	"	"	"	"	"	か-10 II
" 10 " 10	内 湾 杯	1	7.4 3.0 3.5	"	"	"	"	"	き-6 V
" 11 " 11	"	2	7.6 — —	淡灰白色 微粒子	"	"	淡 灰 白 色	なし	か-6 V
" 12 " 12	面 取 り 杯	1	— — —	淡黄白色 粉粒子	"	"	淡 黄 白 色	細かい 貫入が 見られ る	お-7 II
" 13 " 13	"	2	8.2 3.1 4.1	淡灰白色 微粒子	"	"	淡 灰 白 色	"	か-9 基壇内レキ敷き
" 14 " 14	端 反 り 杯		— — 2.8	"	三角状畳付け 露胎	"	"	荒めの 貫入が 見られ る	か-18 III

## (袋物)

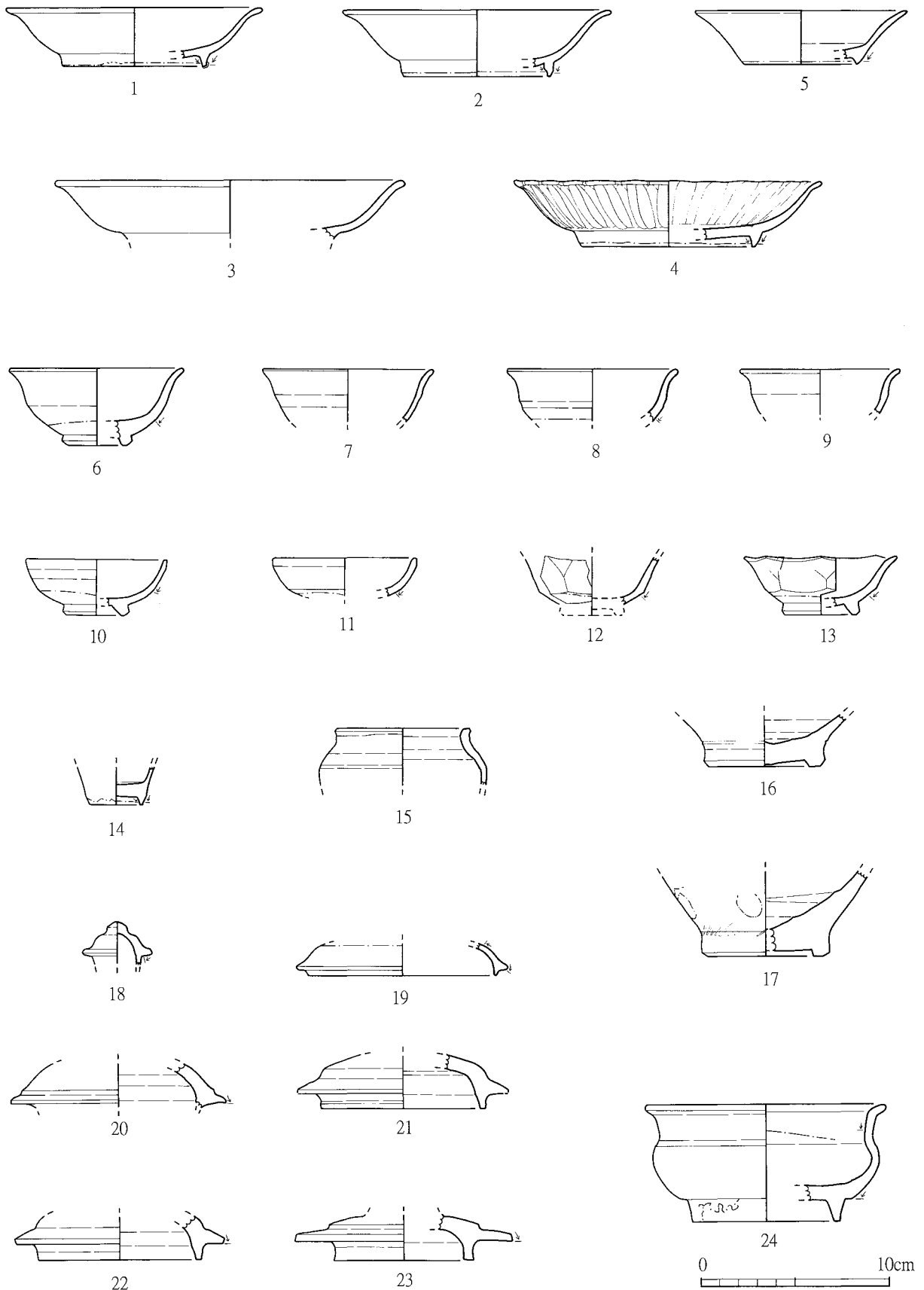
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 25 図15 図版21の15	短 頸 壺		7.1 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉 胴下半部不明	なし	淡 灰 白 色	なし	き-6 IV
" 16 " 16	袋 物		— — 6.0	淡黄白色 粉粒子	内面施釉 高台脇から外 底面は露胎	不明	淡 黄 白 色	細かい 貫入が 見られ る	石段
" 17 " 17	"		— — 6.7	淡灰白色 微粒子	高台脇から外 底面は露胎	"	淡 灰 白 色	"	お-16 V b 土

## (蓋)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 25 図18 図版21の18	水注の蓋?		3.7 — —	淡灰白色 微粒子	かかりから 内面は露胎	なし	淡 灰 白 色	なし	お-14 Ⅲ
” 19 ” 19	合子の蓋?		11.1 — 10.0	”	ひさし部内面 より露胎	”	淡 水 色	細かい 貫入が 見られ る	お-13 Ⅱ
” 20 ” 20	蓋		— — —	淡白灰色 微粒子	”	”	淡 白 灰 色	”	く-16 Ⅳ
” 21 ” 21	”		— — 8.6	”	”	”	”	”	お-3 Ⅴ
” 22 ” 22	”		— — 10.4	”	”	”	”	”	か-6 カクラン
” 23 ” 23	”		— — 11.6	”	”	”	”	”	か-9 基壇内レキ敷き
” 24 ” 24	香 炉		12.7 6.2 7.8	”	口縁部内面よ り高台際まで 施釉	”	”	なし	か-14 Ⅱ



第24図 (図版20) 白磁：碗 (1~7)・小皿 (8~17)・灯明皿 (18~22)



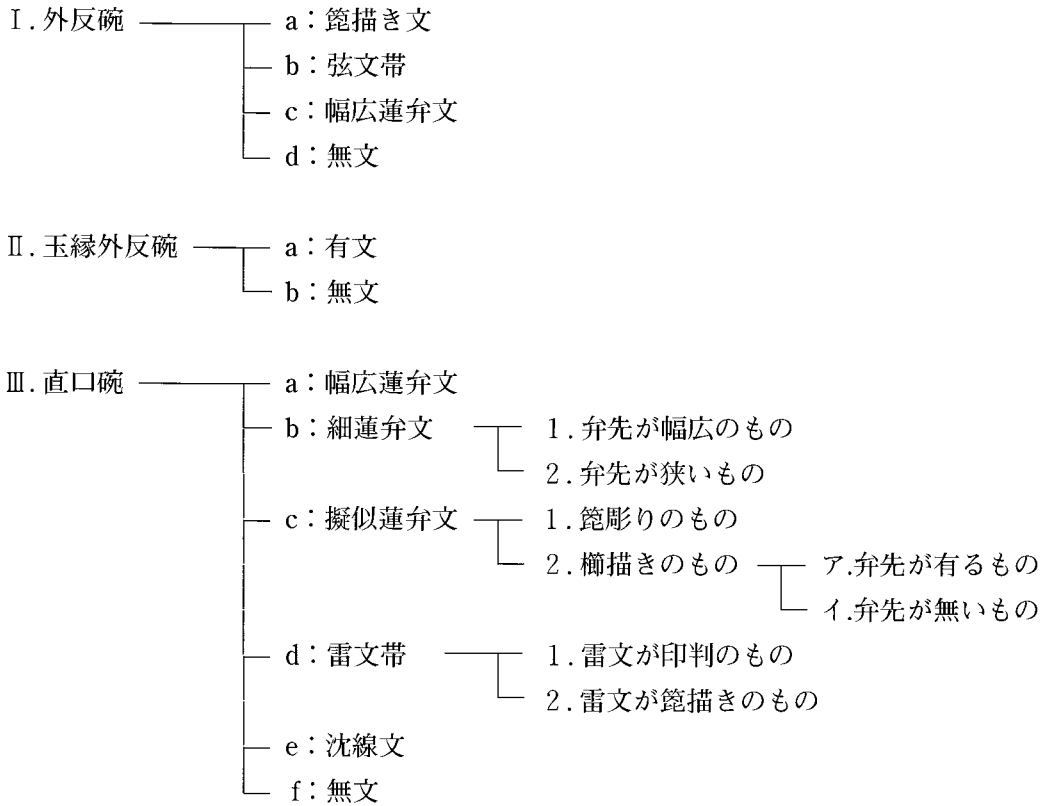
第25図 (図版21) 白磁：皿 (1~5)・杯 (6~14)・壺 (15)・袋物 (16・17)・蓋 (18~23)・香炉 (24)



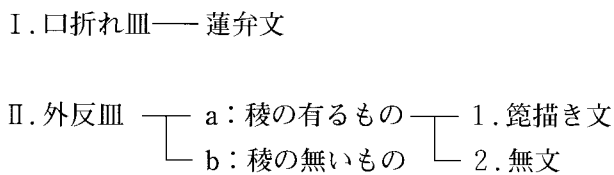
## 2. 青磁

器種としては、碗・皿・盤：杯・壺・瓶：香炉等の7器種が確認された。その他にも、器種のよく解らないものがいくつか確認された。その中で、最も多く得られたものは、碗類である。以下、分類概念を記す。個々の記述は観察表に示した。

### 碗



### 皿



### III. 稜花皿

### IV. 無文外反皿

### V. 直口皿

## 盤

口縁部の形状によって下記のとおり分けた。

I. 顎縁 ——— a: 幅広の単筥のもの  
                  └ b: 櫛描きのもの

II. 丸顎縁 ——— a: 櫛描きのもの  
                  └ b: 筥描きのもの

III. 逆L字状 ——— a: 櫛描きのもの  
                  └ b: 筥描きのもの

IV. 玉縁 ——— a: 櫛描きのもの  
                  └ b: 単筥のもの

V. 直口 ——— a: 単筥のもの

## 水滴

第30図1に示したもので、水滴上部の破損品である。頂部に帯状のものを張り付け、側に孔が見られる。何か植物の実を模したものである。胴部の破損面には下部との接着痕が観察される。薄い透明釉を表面に施し、内面は露胎である。素地は灰白色で微粒子である。お-15、第IV層より出土。

## 合子

第30図2に示したものである。瓜形合子の下部である。縁部は受け口状に成形しやや肩を張りながら底部へ至る器形を呈する。底面は上げ底である。薄い透明釉を内外面に施す。縁部と底面は露胎で茶褐色の釉薬が塗布されている。素地は淡い灰白色で微粒子。お-12、第II層より出土。

## 瓶

第30図3に示したものは、瓶の蓋と思われる物である。口部を八角形に成形し、外面に葉文を浮き彫りさせたものである。縁部内面には「L」状に懸かりを設けている。釉薬は内外面に全面に施しているが、2次焼成を受けており手触りはザラザラする。素地は灰白色で微粒子。お-2・3、基壇V層より出土。

同図4に示したもので、推定復元を試みたものである。輪花口の双耳瓶である。口縁部に芭蕉文、胴部には花卉の中に「福」の文字が見られる。その周辺に草花文(?)が見られる。内外面に淡い緑褐色を施す。素地は灰白色で微粒子。推定で口径が7.2cm、器高18.1cmである。き-10、第III層より出土。

## 香炉

第30図5・6に香炉の脚部を示した。5は獣形、6が円柱状のものである。

## 角形品

第30図7～9に示した。7・8は同一個体と思われ、表面に卍文が浮き彫りされている。9は7・8の標品より大振りなもので、釉薬も厚く内外面に施されている。底面には弦状に幅広く溶着痕が見られる。

第4表 青磁観察一覧(碗)

(cm)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 26 図1 図版22の1	I	a	16.4	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 厚く施す	篋による 草花文	緑色	なし	き-4 V
” 2 ” 2	”	”	15.0	”	”	”	”	なし	え-2 V
” 3 ” 3	”	”	16.2	”	”	”	”	やや 荒目 あり	え-3 V
” 4 ” 4	”	”	14.2	灰白色 粗粒子	”	草花文?	淡 緑 色	”	き-6 V
” 5 ” 5	I	b	16.3	灰白色 微粒子	”	沈線を2条 を巡らす	”	なし	か-10 Ⅲ
” 6 ” 6	”	”	17.2	淡黄褐色 粗粒子	”	沈文	淡 緑 色	細かい	き-5 V
” 7 ” 7	I	d	15.2	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 薄く施す	なし	”	なし	き-5 V
” 8 ” 8	”	”	13.5	灰褐色 粗粒子	内外面に施す	”	”	”	か-6 V
” 9 ” 9	”	”	17.8	” ”	内外面に薄く 施す	”	”	細かい	え-2 V
” 10 ” 10	”	”	16.4	” ”	” 未発色	”	灰 緑 色	なし	え-3 V
” 11 ” 11	”	”	16.2	灰白色 微粒子	内外面に薄く 施す	”	淡 緑 色	なし	き-5 V
” 12 ” 12	”	”	18.8	”	内外面に薄く 施す	”	緑 色	なし	き-6 V
” 13 ” 13	”	”	17.2	”	”	”	淡 緑 色	細かい	か-6 V
” 14 ” 14	”	”	12.8	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 厚く施す	”	”	なし	き-7 V
” 15 ” 15	Ⅱ	b	18.3	茶褐色 粗粒子	内外面に施す 未発色	”	不 明	なし	お-7 V
” 16 ” 16	”	a	17.8	灰褐色 粗粒子	内外面に施す	内面にラマ 式の型押	淡 緑 色	なし	お-10 V

## (碗)

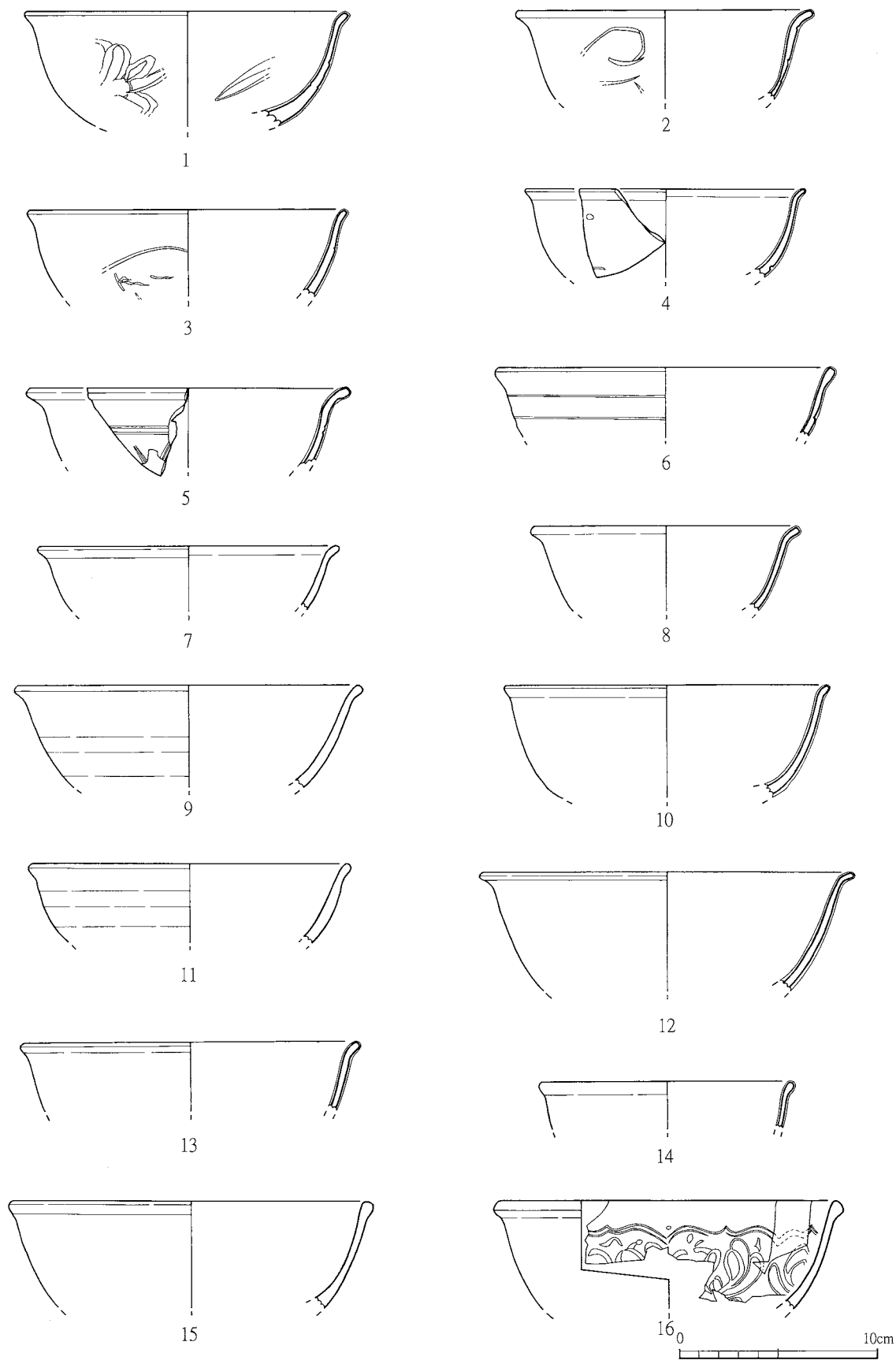
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 27 図1 図版23の1	Ⅲ	a	16.1	灰白色 微粒子	内外面に厚く 施す	幅広の蓮弁文	緑 色	なし	き-5 V
” 2 ” 2	”	b1	15.5	”	内外面にやや 厚く施す	幅広の蓮弁文 草花文	”	”	き-5 V
” 3 ” 3	”	b2	15.6	黄白色 粗粒子	”	蓮花文	黄 銅 色	”	え-2 IV
” 4 ” 4	”	”	13.2	淡灰白色 粗粒子	”	蓮弁文 見込みに捻り 文?	緑 色	あり	か-12 II
” 5 ” 5	”	”		”	”	蓮弁文	淡 緑 色	”	き-17 V
” 6 ” 6	”	”	11.5	”	内外面に厚く 施す	蓮弁文 雷文	”	なし	う-3 II
” 7 ” 7	”	”	12.2	”	”	”	”	”	か-10 III
” 8 ” 8	”	c1ア	17.6	灰白色 粗粒子	”	沈文・刻み文 印花文	”	”	お-6 攪乱
” 9 ” 9	”	c2ア	14.8	灰色 微粒子	内外面に薄く 施す	櫛描き文 孤文	灰色	あり	お-15 IV
” 10 ” 10	”	c2イ	14.0	”	” 未発色	櫛描き文	”	”	お-15 IV
” 11 ” 11	”	d1	20.0	淡白色 粗粒子	内外面に薄く 施す	雷文 草花文	淡 緑 色	あり	か-6 III
” 12 ” 12	”	”	16.0	”	”	”	”	なし	お-15 III
” 13 ” 13	”	d2	15.1 6.8 6.0	灰白色 粗粒子	” 高台内は露胎	” 圏線 印花文	”	”	か-7 V
” 14 ” 14	”	e	15.0	淡白色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す	沈線文	緑 色	あり	お-2 IV
” 15 ” 15	”	f	18.2	灰白色 粗粒子	内外面に薄く 施す やや未発色	なし	淡 灰 緑 色	不明	え-3 III
” 16 ” 16	”	”	14.2	淡白色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す	”	淡 緑 色	あり	お-2 IV

## (Ⅲ)

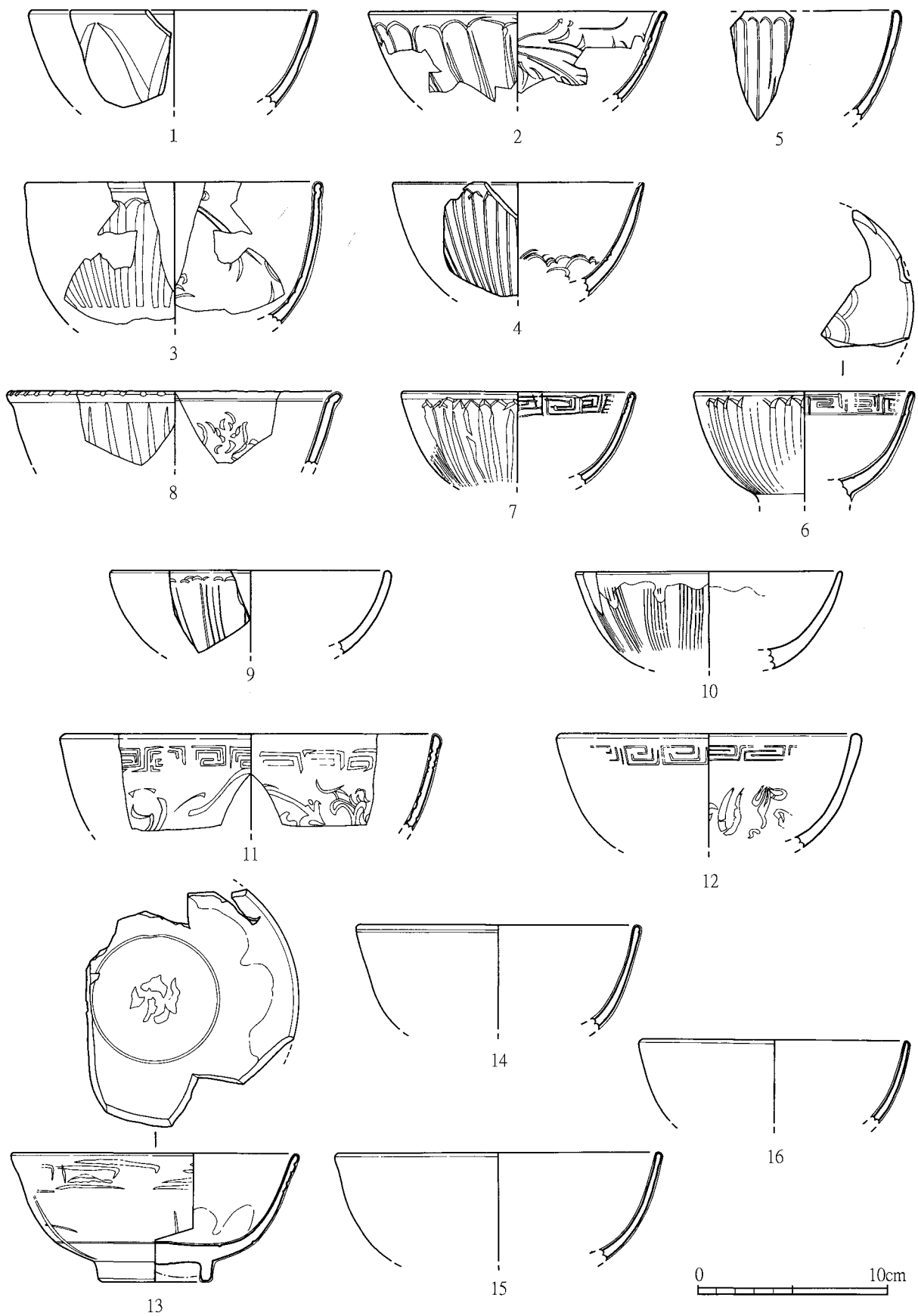
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉色	貫入	出土地点
第 28 図1 図版24の1	I		11.2 2.8 4.9	淡灰白色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す 高台内露胎 火熱を受けて いる。	篋による 蓮弁文	緑色	あり	お-6 Ⅲ
” 2 ” 2	Ⅱ	a1	12.4 — —	”	内外面にやや 厚く施す	篋による 草花文	”	”	お-8キ Ⅴ
” 3 ” 3	”	a2	12.4 — —	” 微粒子	” 加熱を受け手 触りがザラザラ	なし	”	”	か-8 Ⅳ
” 4 ” 4	”	b	13.4 4.1 8.4	灰白色 微粒子	” 高台内蛇の目 釉剥ぎ	草花文 印花文	淡 緑 色	”	え-7 Ⅲ
” 5 ” 5	”	b	13.2 — —	”	内外面にやや 厚く施す	内外面に 草花文	”	なし	か-6 Ⅲ
” 6 ” 6	”	b	12.6 — —	灰白色 微粒子	”	”	”	なし	お-5 Ⅰ
” 7 ” 7	”	b	12.9 — —	”	内外面に厚く 施す	なし	”	なし	え-11 Ⅲ
” 8 ” 8	”	”	11.2 3.5 6.2	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 薄く施す 見込み内底面 露胎	なし	”	なし	お-5 Ⅴb
” 9 ” 9	Ⅲ		13.4 — —	淡黄褐色 微粒子	内外面に施す	内外面に ラマ式蓮弁 文と草花文	暗 緑 色	”	き-8 Ⅱ
” 10 ” 10	”		14.8 — —	灰褐色 粗粒子	内外面にやや 厚く施す	外面に捻 じ花状に 篋彫り	淡 緑 色	あり	お-7 b
” 11 ” 11	Ⅳ		12.5 3.5 7.2	” ”	”	”	”	なし	え-3 Ⅴ
” 12 ” 12	”		14.8 4.6 8.3	灰白色 粗粒子	内外面にやや 厚めに施す 内底面は露胎	なし	淡 緑 色	細かい あり	き-5 Ⅴ
” 13 ” 13	Ⅴ		— — 5.6	” 粗粒子	内外面にやや 厚く施す 内底面は蛇の目 釉剥ぎ	見込みに 双魚の 印花文	”	細かい あり	不明 Ⅰ
” 14 ” 14	”		11.2 3.5 5.7	灰白色 微粒子	内外面に薄く 施す 内底面は露胎	内面に篋 彫り	”	なし	く-5 Ⅲ
” 15 ” 15	”		20.0 — —	”	内外面にやや 厚く施す。 2次焼成	内外面に 篋彫り	”	不明	お-8 Ⅰb

## (盤)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	釉 色	貫 入	出土地点
第 29 図1 図版25の1	I	a	27.0 — —	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 薄く施す  火熱を受け	篋描き文	淡 緑 色	あり	え-2 V
” 2 ” 2	II	b	24.5 5.4 8.7	”	” 内底面は釉剥	11本一組 の篋描き	”	”	お-5 V
” 3 ” 3	III	b	23.0 3.5 9.6	灰白色 微粒子	” 高台内蛇の目 釉剥ぎ	蓮弁文 篋彫りで 2つ置き 区画文	”	”	こ-12 V
” 4 ” 4	III	a	22.3 4.0 10.5	”	内外面にやや 厚く施す 内底面露胎	又状工具 による 櫛描き文	”	なし	お-6 V
” 5 ” 5	IV	a	28.3 — —	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 薄く施す	縁部内面 に沈線を 2条巡ら す	”	あり	う・え-2 V

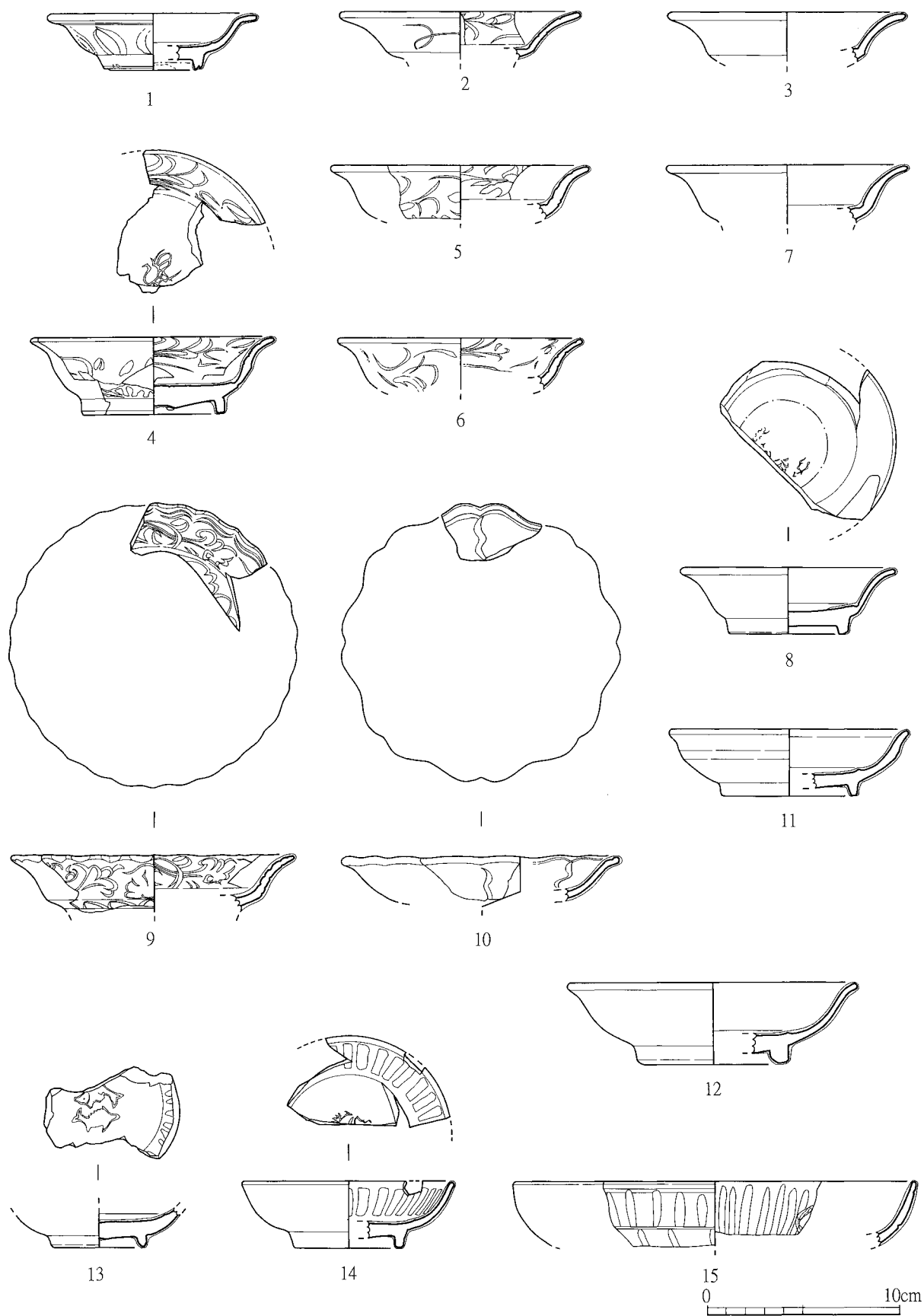


第26图 (图版22) 青磁：碗 (1~16)

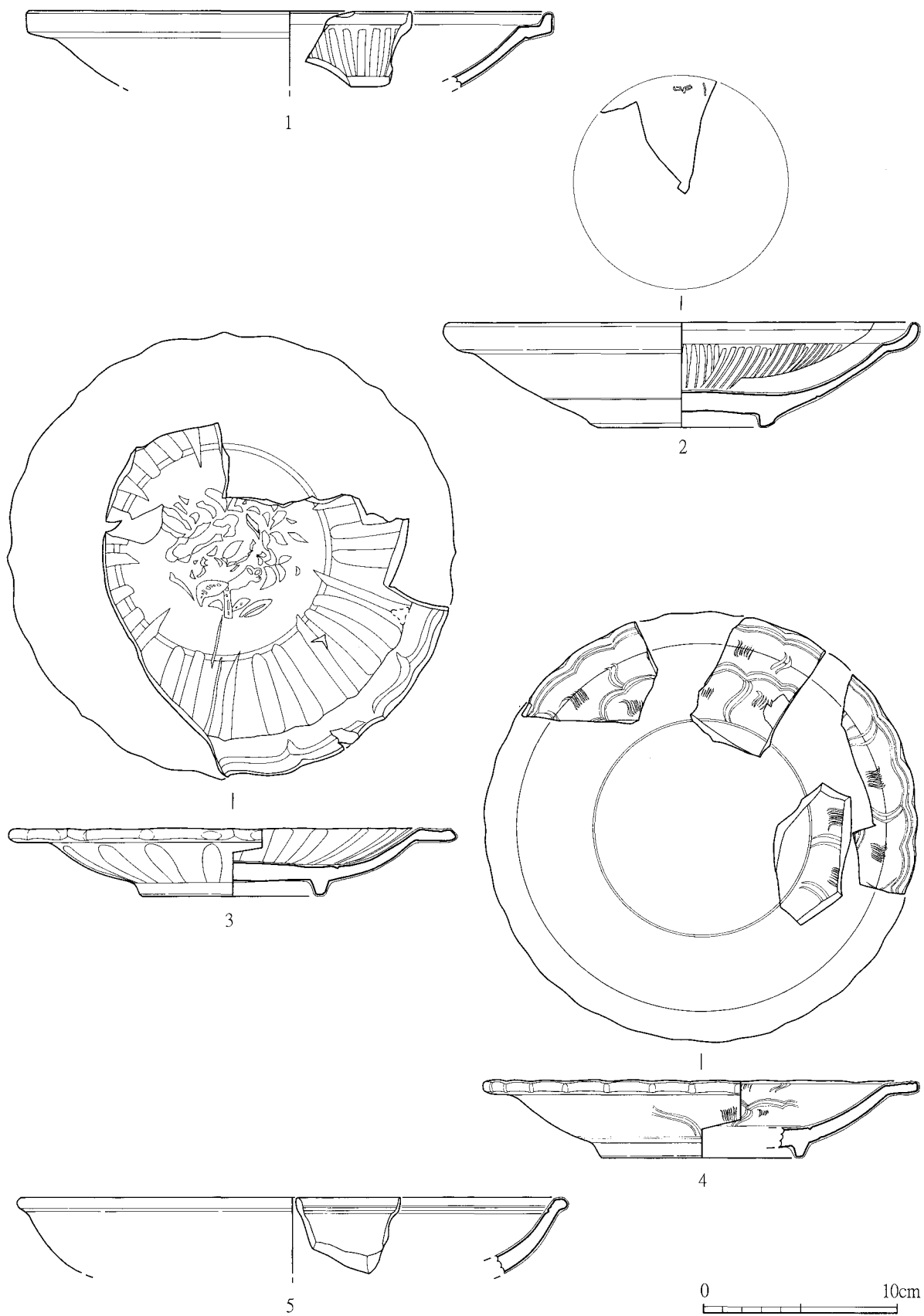


第27图 (图版23) 青磁：碗 (1~16)

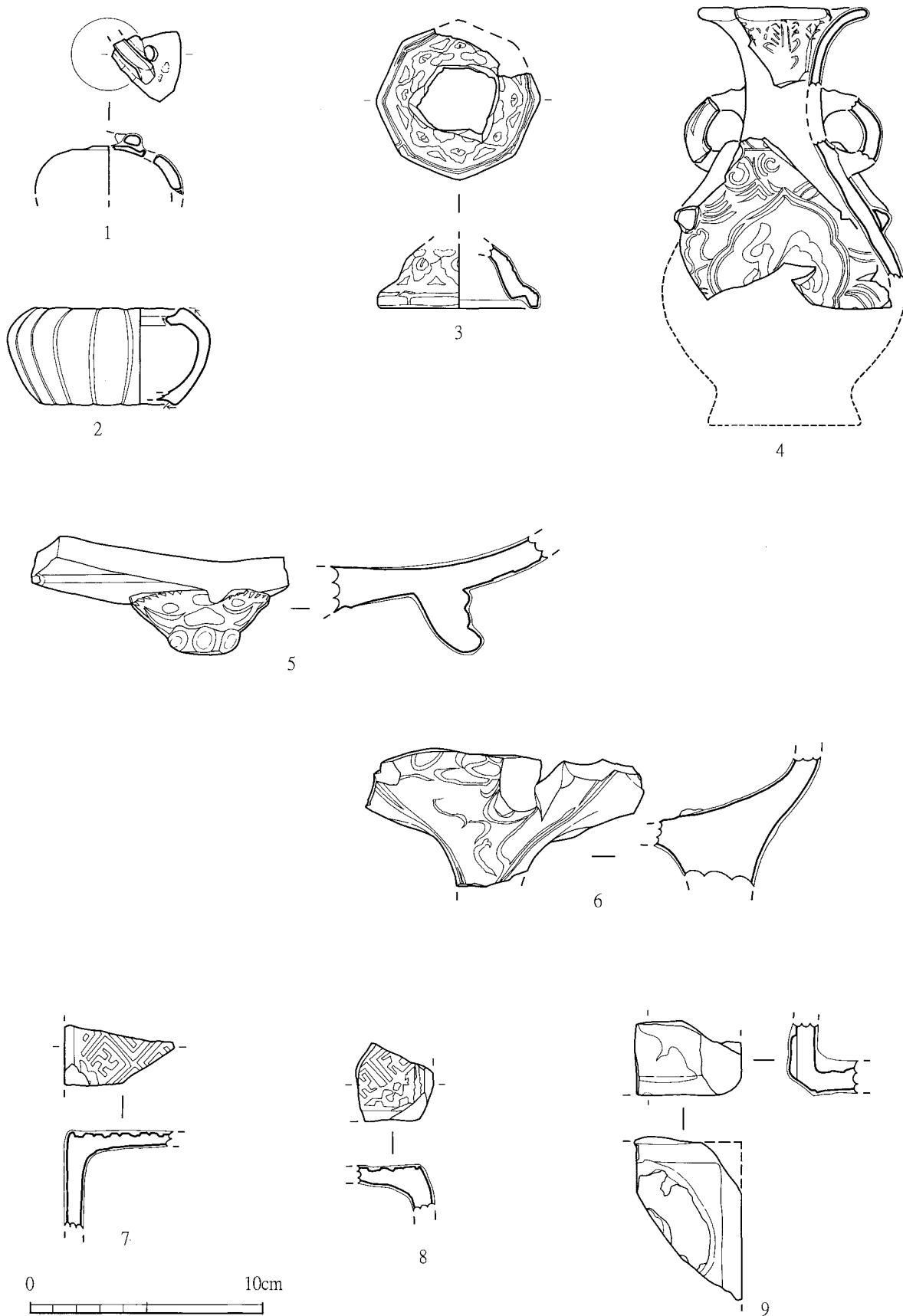




第28图 (图版24) 青磁：皿 (1~15)



第29図 (図版25) 青磁：盤 (1~15)



第30图 (图版26) 青磁：水滴 (1) 合子 (2) · 壺 (3 · 4) · 香炉 (5 · 6) · 角形 (7 ~ 9)

### 3. 青花

第31～33図に示したものである。碗・皿・鉢等が見られた。以下、碗より記述する。

#### 碗

外反碗 a群：外面に唐草文を描く薄手の碗である。

b群：外面に草花文や菊花散らし文等を描く厚手の碗である。

直口碗 a群：外面に草花文等を描く腰折れの碗である。

b群：外面に印判手の腰折れ碗である。

#### 小碗

第31図16・17に示したもので同一個体と考えられる標品である。外面と見込みに寿字文のデザイン化した文様を描くもので、圏線を口縁部内外面と高台際と見込みに巡らす。内底面に定款が見られる。素地は淡い白色の微粒子である。口径10.4cm、底径4.4cmを計る。いずれも、石段よりの出土。

#### 皿

##### I. 内湾皿

小皿：碁笥底の底部から内湾しながら立ち上がるものである。外面に略波濤文と芭蕉文・圏線を描き、内面は見込みに葉文や文字文等を施す。

##### II. 外反皿

小皿a：高台よりやや膨らみながら立ち上がり縁部で外反するものである。外面に花唐草文を描き、内面に圏線を巡らすもの。

b：口縁部を受け口状に成形したものである。

中皿：小皿aよりも外反がきつく、内外面に文様を施す。

#### 大鉢

底部のみを示した。細かい分類は行わず、第5表に観察表を示した。

#### 瓶

第33図1～5に示した。全て破片である。口縁部はラッパ状に開き、胴部は胴下半部で膨らみ、高台を持つものである。外面には草花文を描く。

#### 高足杯

第33図6～8に示した。全て脚部で上位の碗部の形状は不明である。脚部の中心部は中空になり、底面から露胎である。外面には圏線を巡らす。

第5表 青花観察表一覧(碗)

(cm)

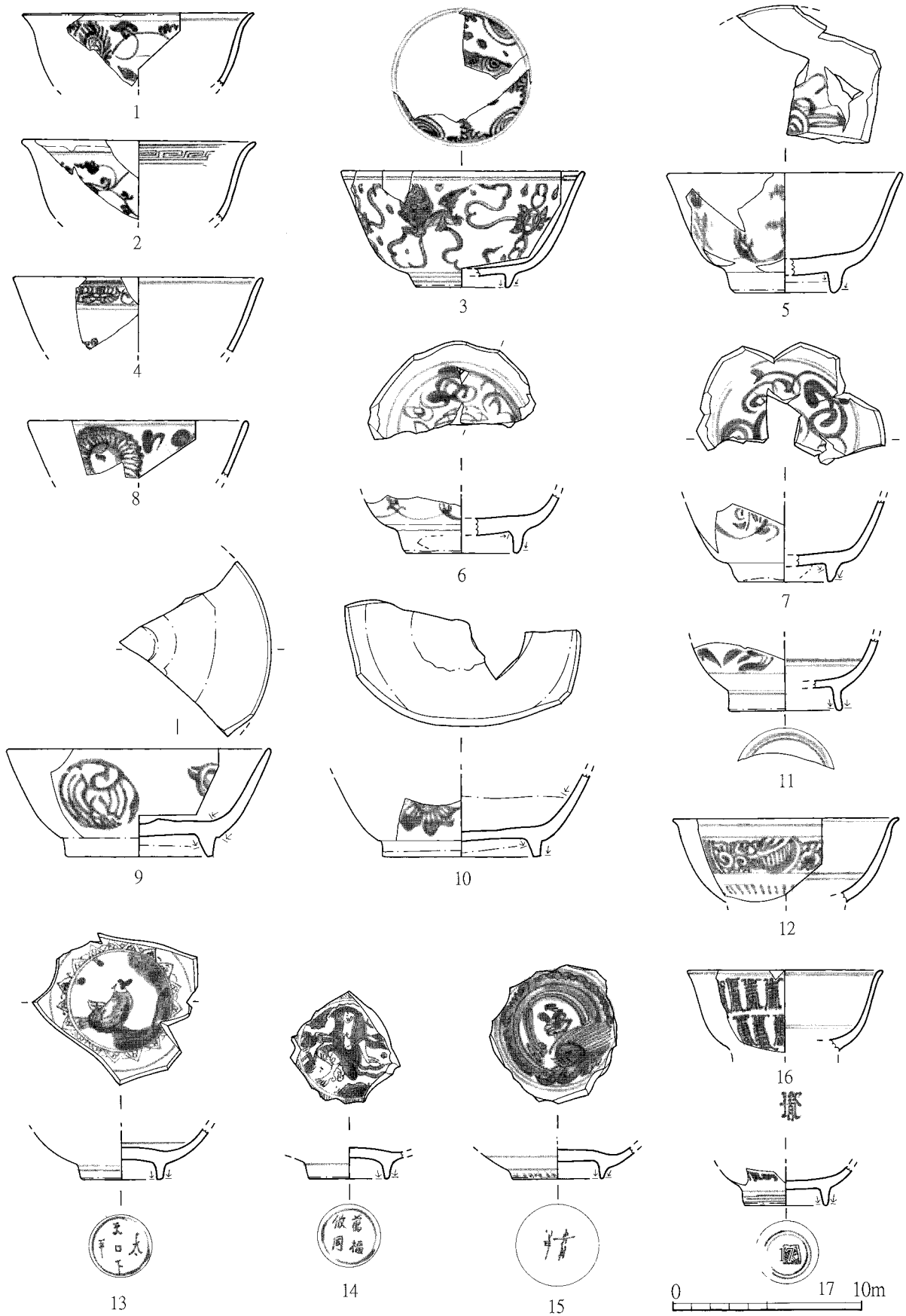
挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	貫入	出土地点
第31図1 図版27の1	外反	a	12.2 — —	淡灰白色 微粒子	内外面にやや 薄く施す 口錆	草花唐草文 口縁部内面 圏縁	なし	か-12 II
” 2 ” 2	”	”	12.3 — —	”	”	草花唐草文 雷文を巡らす	”	う-2 攪乱
” 3 ” 3	直口	a	12.8 6.2 5.1	灰白色 微粒子	” 畳付け露胎	玉取り獅子 魚文	”	お-16 III・IV
” 4 ” 4	”	”	13.2 — —	”	内外面にやや 厚く施す	波濤文帯 圏縁	あり	き-17 V
” 5 ” 5	”	”	12.4 6.3 5.9	”	内外面にやや 厚く施す 畳付け～内底 面露胎	外面の具須が鈍く 発色 見込みに花文	あり	お-16 III
” 6 ” 6	”	”	— — 6.2	” 粗粒子	”	アラベスク文花文	なし	お-16 III
” 7 ” 7	”	”	— — 5.0	灰褐色 粗粒子	灰褐色でやや 薄く施す ”	草花唐草文 花文	あり	お-15 III・IV
” 8 ” 8	”	b	11.6 — —	灰白色 微粒子	薄く施す	印判	なし	さ-12 II
” 9 ” 9	”	”	14.0 5.7 7.8	”	蛇ノ目釉剥ぎ 高台外面～内 面中位まで露 胎	”	細かい 貫入 あり	石段 見込み凹に へこむ
” 10 ” 10	”	”	— — 8.4	黄褐色 粗粒子	” ”	印判	”	石段
” 11 ” 11	外反	b	— — 6.0	灰白色 微粒子	畳付け露胎	草花文 圏縁	なし	お-21
” 12 ” 12	”	”	11.4 — —	灰白色 微粒子	”	抽象的な文様を交 互に配す 菊花散らし文 圏縁	”	き-19 ウラゴメ
” 13 ” 13	”	”	— — 4.4	白色 微粒子	”	人物像 内底面に「天下太 平」銘入り	”	か-16 III
” 14 ” 14	”	”	— — 4.4	”	畳付け露胎	漁師像? 内底面に「萬福悠 同」の銘入り 圏縁	”	お-17 V
” 15 ” 15	”	”	— — 4.8	灰白色 微粒子	畳付けは露胎	抽象的図柄を描く。 圏縁 清の略字か	なし	お-15 III
” 16 ” 16	小碗	”	10.4 — —	白色 微粒子	”	寿字文 圏縁	”	石段
” 17 ” 17	”	”	— — 4.4	” 微粒子	薄く施す	寿字文 内底面に圏縁と銘 款	”	”

## (Ⅲ・鉢)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	貫入	出土地点
第 32 図1 図版28の1	内 湾 皿	I	9.6 — —	淡灰白色で 微粒子	内外面に薄い 透明釉を施す	略波濤文 芭蕉文 圏線 花文	あり	お-15 IV
” 2 ” 2	”	”	10.2 2.9 3.2	”	” 碁笥底の畳付 け露胎	”	なし	お-14 IV
” 3 ” 3	”	”	10.2 3.1 3.0	黄白色 粗粒子	”	”	”	お-16 IV
” 4 ” 4	”	”	10.6 — —	淡灰白色で 微粒子	”	”	”	か-17 IV 口縁部2次焼 成痕が見られる
” 5 ” 5	”	”	— — 3.4	”	”	”	なし	土坑No.6
” 6 ” 6	”	”	— — 3.2	灰白色で 微粒子	”	見込みは寿字文	なし	き-17 Vb く-16 Ⅲ
” 7 ” 7	外 反 皿	Ⅱ a	8.9 1.9 4.6	灰白色 微粒子	” 畳付けは露胎	花唐草文 圏線	なし	か-15 Ⅲ 型成形
” 8 ” 8	”	”	9.5 2.3 5.0	白色で 微粒子	”	” 十字文	”	お-7 Ⅱ
” 9 ” 9	”	Ⅱ b	15.5 — —	淡黄白色で 粗粒子	” 底部は不明	見込みに雷文	あり	ミゾ —見白磁に も見える
” 10 ” 10	”	Ⅱ 中	16.2 3.4 8.7	灰白色で 微粒子	内外面に施釉 畳付け露胎	唐草文 圏線 十字文	なし	あ-16 Ⅲ
” 11 ” 11	”	”	— — 11.4	”	” 畳付けに砂粒 が残る	唐草文 圏線 落款	なし	う-2 攪乱
” 12 ” 12	底 部		— — 5.4	”	内外面に総釉 畳付け露胎	内底面の圏線と 落款 草花文	なし	石段
” 13 ” 13	”		— — 6.3	”	”	”	”	石段
” 14 ” 14	大鉢		— — 13.4	黄白色 粗粒子	畳付け露胎 見込み蛇ノ 目釉剥ぎ	圏線 印花文	あり	石段
” 15 ” 15	”		10.6 —	”	”	印判文 見込みに印判文	あり	石段
” 16 ” 16	”		— — 9.2	”	見込み・高台 露胎	不明	”	か-22 I

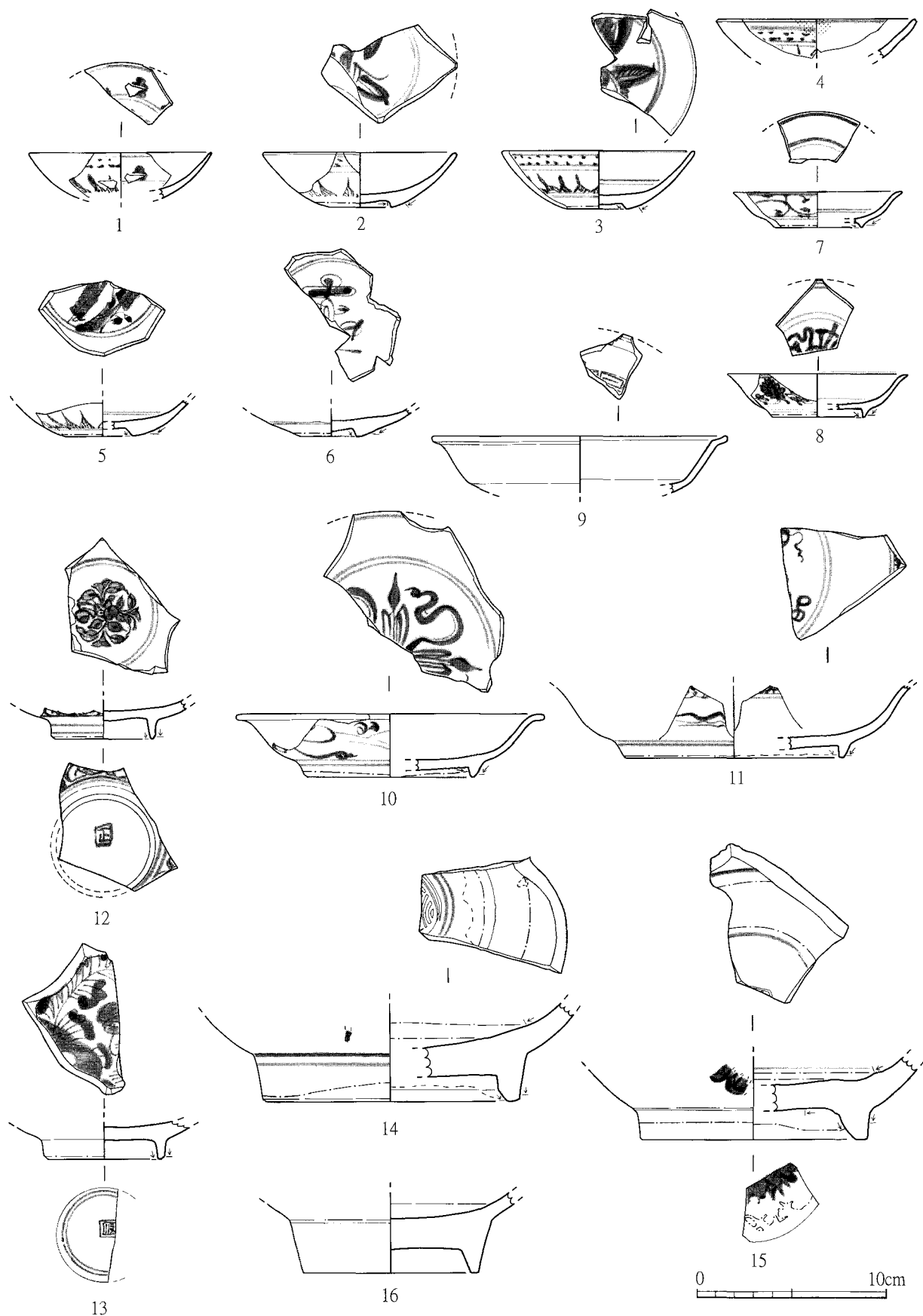
## (瓶・高足杯)

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	貫 入	出土地点
第 33 図1 図版29の1	口縁部		7.0 — —	淡灰白色で 微粒子	内外面に薄 い透明釉を 施す	圏線 花文	なし	か-15 I
” 2 ” 2	”		7.0 — —	淡白色 微粒子	”	圏線 芭蕉文	なし	か-17 III
” 3 ” 3	胴部		— — —	灰白色 微粒子	”	草花文	”	く-8 III a 2次焼成を 受けている
” 4 ” 4	底部		— — 5.3	淡白色 微粒子	” 畳付けは露胎 砂粒が付着	如意文 圏線	”	か-6 III
” 5 ” 5	”		— — 8.5	”	”	”	あり	お-2 I
” 6 ” 6	高 足 杯		— — 3.8	灰白色で 微粒子	” 底面から内 面露胎	圏線	なし	か-22 I
” 7 ” 7	”		— — 3.8	”	”	”	なし	お-15 II
” 8 ” 8	”		— — 3.6	”	”	”	”	き-15 III

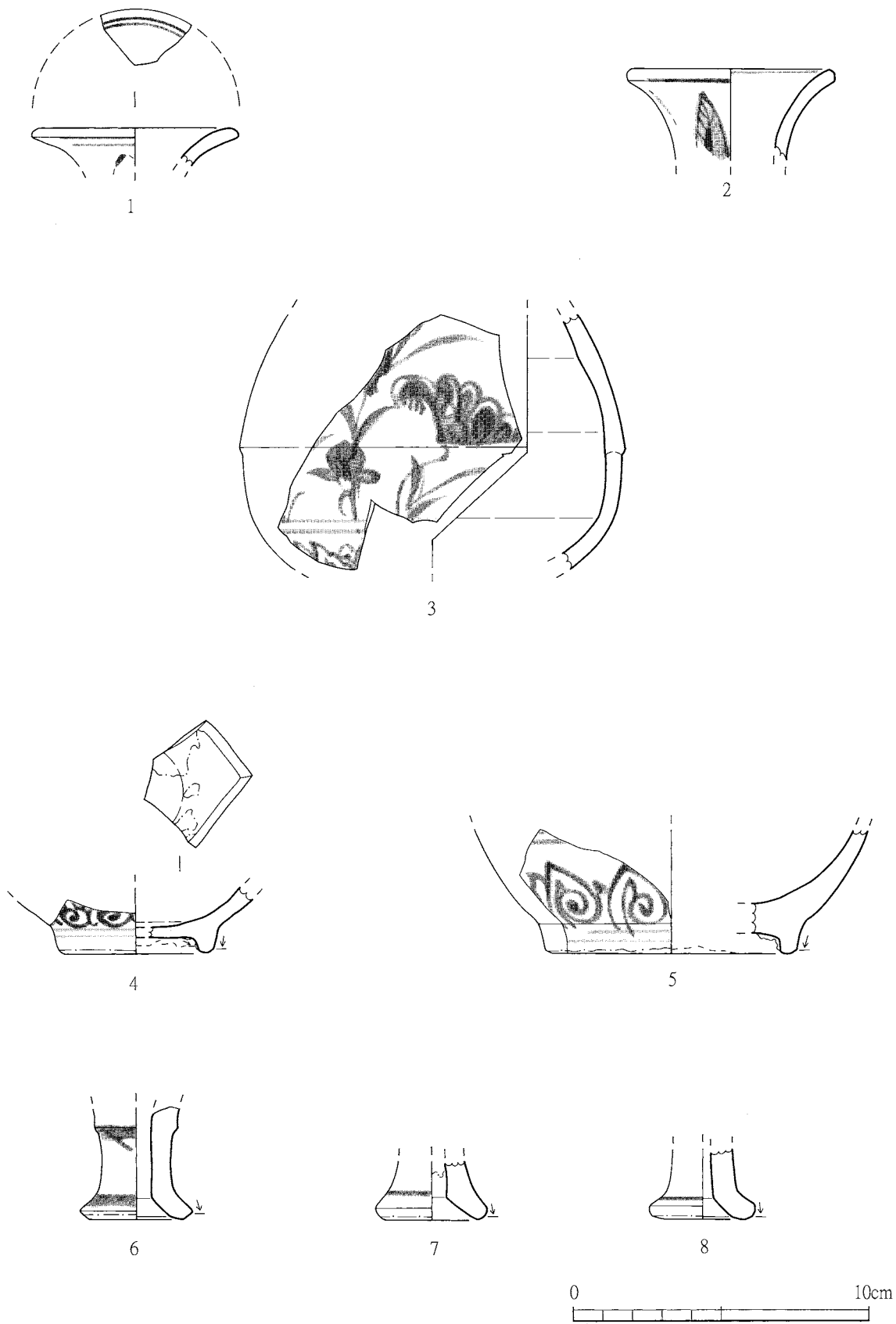


第31图 (图版27) 青花：碗 (1~17)





第32図 (図版28) 青花：小皿 (1~8)・皿 (9~13)・鉢 (14~16)



第33图 (图版29) 青花：瓶 (1·2)·袋物 (3~5)·高足杯 (6~8)

#### 4. 黒釉陶器

第34図1～8に示した。いわゆる天目茶碗である。本遺跡のものは、典型的な黒釉のものは見られず、渋柿釉のものが殆どであった。(第34図1～6)。また、渋柿釉のものとは、釉薬・素地等が異なる一群も見られた。(第34図7～8)

#### 5. 瑠璃釉

第34図9～13に示した。得られた器種は小杯・小碗・瓶の3器種であった。釉薬を外面に瑠璃釉、内面に白色を掛け分ける特徴を持つ。

第6表 黒釉陶器観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	出 土 地 点
第 34 図 1 図版30の 1	碗	11.8 — —	灰白色で 粗粒子 黒色粒子が 見られる	素地に茶褐色釉と 黒釉を2度掛け。 肩部は黒釉が釉だ れ調を呈する。内 面は黒釉 口部は内外とも渋柿	お-2 V
” 2 ” 2	”	11.7 — —	”	”	え・お-2 V
” 3 ” 3	”	11.8 — —	”	全体に渋柿調である。 黒釉の表面に薄く 茶褐色釉をのせて いる。	お-2 V
” 4 ” 4	”	12.0 — —	” 黒色粒子が 多量に混入	” 釉薬の表面に細か い禾目が内外に観 察される。	お-2・7 V
” 5 ” 5	”	— — 4.4	灰黒褐色 粗粒子 白色・黒色の 粒子が混入	外面は露胎。黒釉 色釉が刷毛状に施 され、見込みに貝 状の溶着物が付着 している	お-16 Ⅲ
” 6 ” 6	”	— — 4.2	灰白色で 微粒子 黒色粒子を 混入	” 混入	き-6 V
” 7 ” 7	”	12.0 — —	灰白色 粗粒子 細かい白色 粒子を混入	濃い緑褐色釉を施 す。 外面の施釉範囲も 狭い。	お-16 Ⅲ
” 8 ” 8	”	— — 4.4	灰黄白色 粗粒子 細かい白色 粒子を混入	内外面に茶褐色釉。 釉薬表面がやや鮫 肌。	石段

第7表 瑠璃釉観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口 径 器 高 高台径	素 地	施釉・器形	出 土 地 点
第 34 図 9 図版30の 9	小 杯	3.3 — —	白色で 微粒子	外面に瑠璃 内面は白釉型成形	き-15 Ⅲ
” 10 ” 10	小 杯	— — 2.5	”	” 碁笥底の底面露胎 内底面に「玉」	き-15 Ⅳ
” 11 ” 11	小 碗	6.8 — —	”	”	お-15 Ⅱ
” 12 ” 12	瓶	8.0 — —	” ”	” 外面の瑠璃釉が口 縁部内面までかか る	き-17 Ⅴ
” 13 ” 13	瓶	— — 8.2	”	” 内底面は白釉 畳付けと脇は露胎	か-17 Ⅲ き-17 Ⅴ

## 6. 褐釉陶器

第2表に示したとおり、口縁部・底部片で326点得られた。器種としては、壺と播り鉢の2種が確認された。特に壺形が多く、大きさにバリエーションが見られた。以下、壺形より述べる。

### 小型壺

a：口唇部断面は台形状のもの

### 中型壺

a：口唇部断面は三角状のもの

b：口唇部断面は玉縁状のもの

c：口唇部断面は方形状のもの

### 大型壺

a：口唇部断面が長方形で、口唇部が丸みのあるもの

b：口唇部断面が方形で、口唇部が平坦のもの

### 播り鉢

底部より内湾ぎみに立ち上げ、口唇部を嘴状に成形するものである。釉薬は肩部付近より口唇部内面まで施す。播り目は間隔を設け底面より播り上げる。

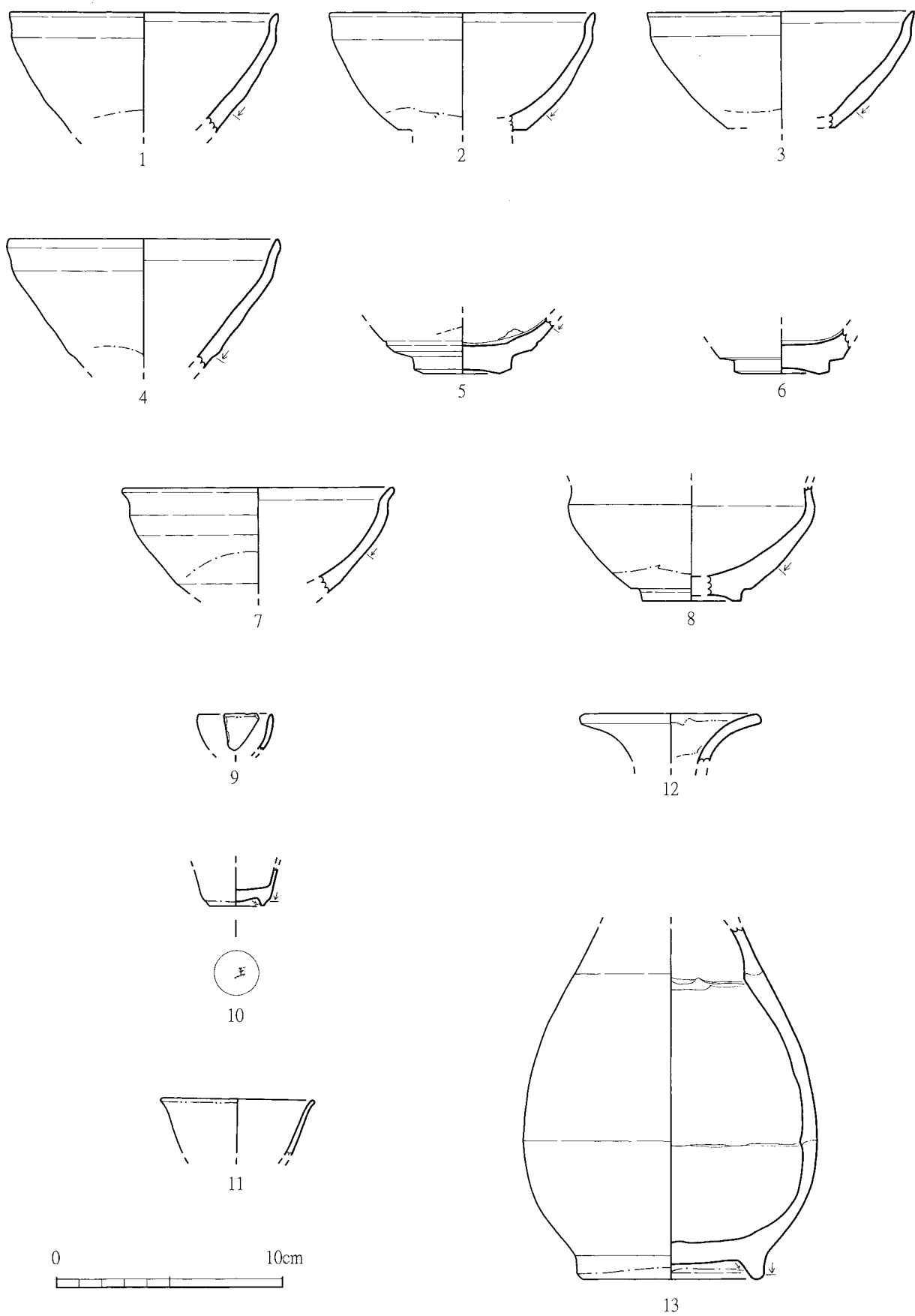
### 白釉陶器

第35図16に示したものである。口唇部を玉縁状に作り、肩の張る器形を呈する。その肩部に縦耳が4つ付くと思われる。外面から縁部内面まで白釉が施されている。縁部内面下位には褐釉を施す。素地はやや荒く桃褐色を呈する。混入物に茶褐色と白色の粒子が散見できる。本品はお-6のⅢ層とⅤ層より出土し接合されたものである。

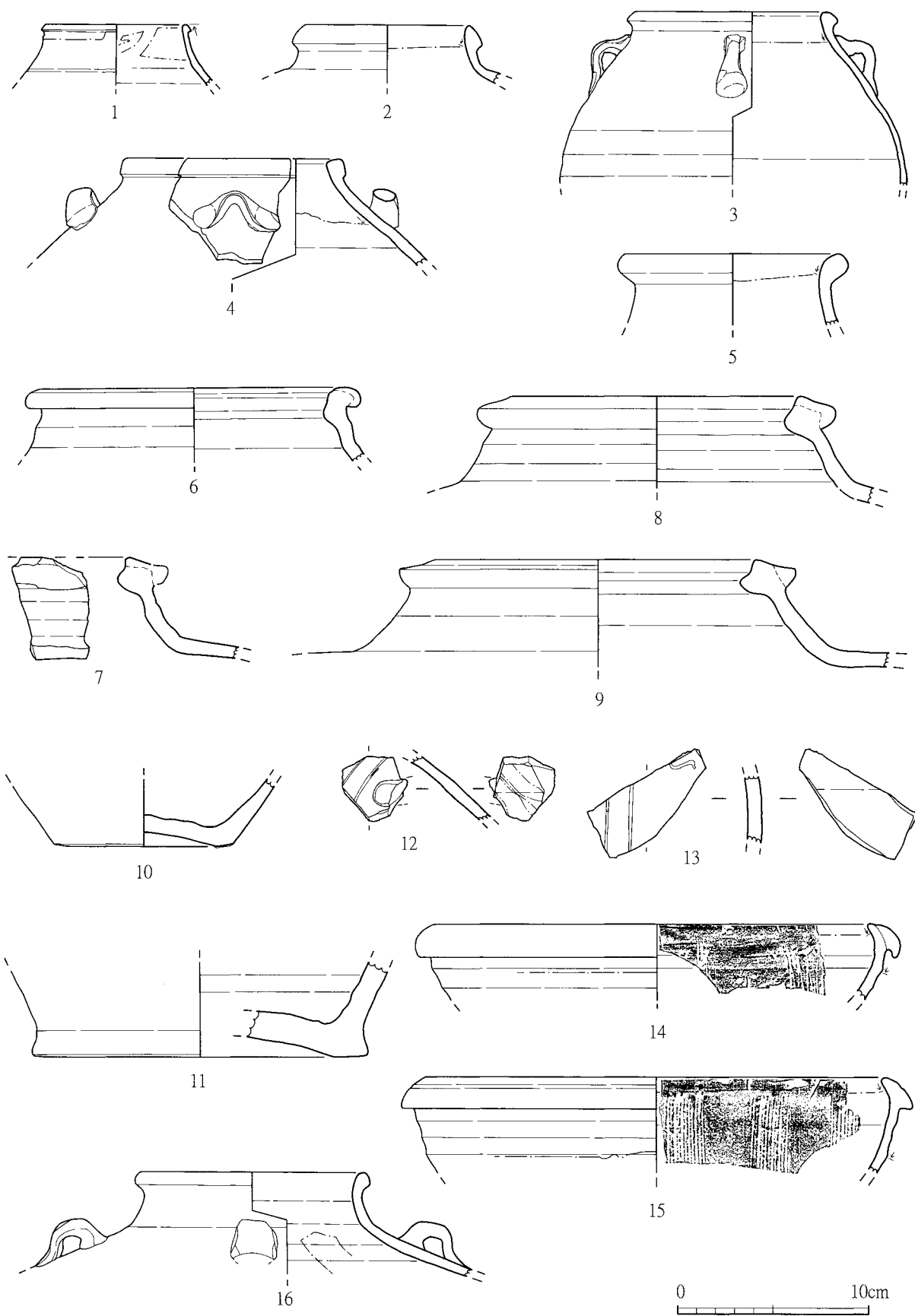
第8表 褐釉陶器観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	分類	口径 器高 高台径	素地	施釉・器形	出土地点
第35図1 図版31の1	小型壺	a	7.8 — —	灰白色で粗粒子 暗茶褐色の粒子 を含む	外面に薄く施す。口部 唇は施釉後に拭き取り 露胎。口唇部直下も露 胎である	おー7 V
” 2 ” 2	中型壺	a	9.9 — —	赤褐色で粗粒子 黒・白・ガラス 質の鉱物を含む	外面に薄く施す。口唇 部内面まで掛かる。 やや黄褐色に発色シテ カリが見られる。	え・おー3 V
” 3 ” 3	”	b	11.1 — —	灰白色で粗粒子 暗茶褐色・茶褐 色の粒子を含む	” やや黒褐色に発色。	おー9 基壇V きー4 V
” 4 ” 4	”	c	11.8 — —	赤褐色で粗粒子 暗茶褐色の粒子 を含む	外面に厚く施釉。口唇 部は施釉後、拭き取り やや露胎。内面は肩部 付近まで薄く施釉。	不明 I
” 5 ” 5	”		12.0 — —	灰白色で粗粒子 黒色粒子が散見 できる	口唇部内面から外面に 施釉。やや黒褐色に発 色。2次焼成を受けて いる。	かー16V きー8IIなど 各層より出土
” 6 ” 6	大型壺	a	17.4 — —	灰白色で粗粒子 暗茶褐色の粒子 が見られる	内外面にやや厚手の釉 葉を施釉。 茶褐色に発色	おー17 II
” 7 ” 7	”	b	— — —	紫灰色で粗粒子 ”	” 濃い緑褐色に発色。	きー8 II
” 8 ” 8	”	b	18.8 — —	” 白色の筋状土が 見られる	” 黄褐色に発色	おー12 III
” 9 ” 9	”	b	20.6 — —	”	”	かー7 II
” 10 ” 10	中型壺 の底部	—	— — 9.4	灰白色で粗粒子	内外面に施釉。上げ底 の内底面は露胎。 畳付けに重ね焼き痕が 2ヶ見られる	かー6 III
” 11 ” 11	大型壺 の底部	—	— — 15.9	紫灰色で素粒子 白色の粒子が見 られる	” 畳付けに溶着痕が見ら れる。	かー8 基壇II
” 12 ” 12	頸 部	—	— — —	灰白色で粗粒子 白・暗茶・茶等 の粒子を含む	内・外面のみに見られ る。黄緑色に発色。 釉葉を掻き取って、二 条の沈線が施されてい る	くー17 II
” 13 ” 13	胴 部	—	— — —	”	黄緑釉は外面のみ。 釉葉を掻き取って、二 条の沈線と曲線が見ら れる	かー9 II
” 14 ” 14	播り鉢		25.3 — —	”	釉葉を薄く施釉。 現況で7本の櫛目が見 られる。	えー2 V
” 15 ” 15	”		26.6 — —	” 白色の粒子が顕 著に観察される	” 6本一組の櫛目によっ て播り目が施されている	えー3 V



第34图 (图版30) 黑釉陶器：碗 (1~8)，琉璃釉：杯 (9~11)·瓶 (12·13)



第35图 (图版31) 褐釉陶器：壺 (1~13)・擂鉢 (14·15), 白釉陶器：壺 (16)

## 7. タイ・ベトナム産陶磁器

タイ産陶器は第36図1～5に示した。碗・袋物・壺等が確認された。特に、同図5の資料は県内で初例のものと思われ、肩部にスタンプによる蟬状のスタンプ文を巡らすものである。素地は灰色を呈し炆器のようである。タイのspanブリのバン・バンブーン窯のものに類似する。

ベトナム産陶器は同図6～9に示した。碗と瓶の2種が確認された。同図7の蜻蛉手の資料は、注目される。

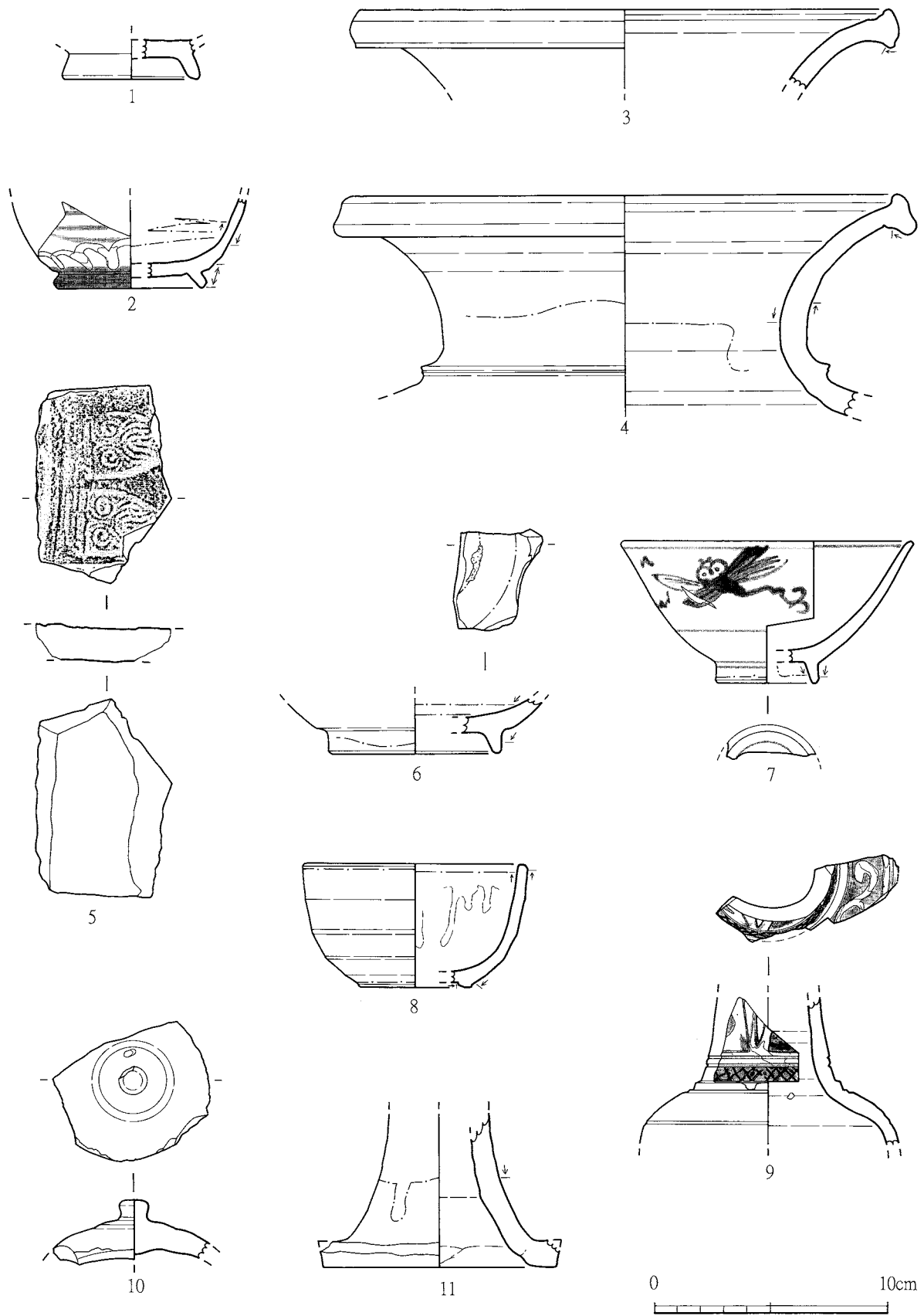
その他に、産地がよく解らないものに、黒釉を施した袋物の蓋と褐釉の脚台がある。後者は底面からの立ち上がり部を意識的に打ち欠いているものである。素地は第36図2と類似しておりタイ産の可能性が高い。

第9表 タイ・ベトナム産陶器等観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	器種	口 径 器 高 高台径	素 地	施 釉	文 様	出 土 地 点
第 36 図 1 図版32の 1	碗	— — 5.8	灰白色 粗粒子 黒粒子は散見 できる。	褐釉を総釉がけ		き-16 II
〃 2 〃 2	袋 物	— — 6.2	〃 黒・茶・灰の 粒子が混入	内外面に灰釉を施釉 内底面露胎	褐釉により横線を 巡らし高台脇・外 面にも施釉	お-6 V
〃 3 〃 3	壺	23.4 — —	紫灰色で粗粒子 茶・白色の粒 子を混入	縁部は露胎。 口唇より内面に褐釉	不明。	き-4 V
〃 4 〃 4	〃	24.9 — —	〃	〃	肩部に凸帯を巡ら す。	き-9 III
〃 5 〃 5	〃		灰白色で粗粒 子。茶・ガラ ス質の鉱物が 散見。	無釉	蟬状のスタンプ文 を肩部に施す。	お-12 II
〃 6 〃 6	碗	— — 7.4	灰白色で微粒 子	緑釉を内外面に施釉 高台外面中より底面 は露胎。見込みは蛇 の目釉剥ぎ	不明。	か-15 I
〃 7 〃 7	碗	12.2 6.1 4.2	乳白色でやや 粉粒子。	透明釉を総釉。畳付 けから高台内面脇は 露胎。 貫入が顕著。	呉須による蜻蛉手 圏線。 黒色に発色。	お-2 I
〃 8 〃 8	筒 形 碗	9.6 5.3 4.8	〃	緑釉を内外面に施釉 口唇部内外面と畳付 け高台露胎。	なし	か-13 I
〃 9 〃 9	瓶		灰白色で粗粒 子。 黒色の粒子を 混入。	透明釉を外面に施釉	褐釉と白釉で格子 文と草文を描く。 全体の構図は不明	く-16 II
〃 10 〃 10	蓋		〃	外面に黒釉を施釉 2次焼成を受けて いる。		お-2 I
〃 11 〃 11	脚 台	— — 10.2	〃 黒・茶・灰の 粒子が混入。	脚台中途まで施釉 その他は露胎。	不明	う-2 V





第36図 (図版32) タイ産陶磁器 (1~5), ベトナム産陶磁器 (6~9), 産地不明 (10・11)

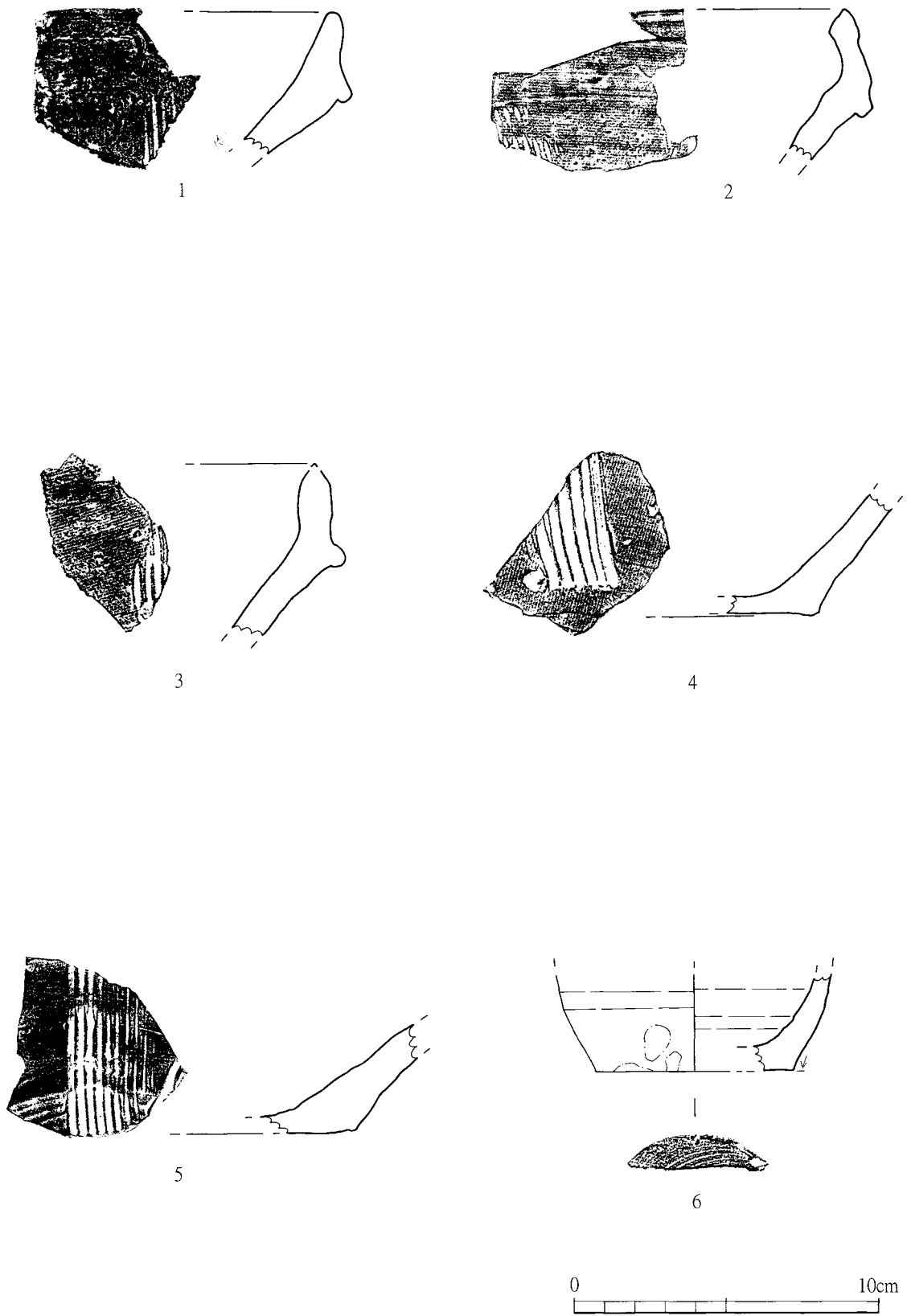
## 8. 備前陶器

播り鉢・徳利・壺等が得られた。その中で、播り鉢と徳利を第37図1～6に示した。播り鉢はいずれも「く」字状に大きく折り曲げるものである。縁部は凸帯状に張り出す。播り目は櫛状のもので底面より播り上げる。

同図6に示したものは徳利の底部である。平底の底部よりやや膨らみながら立ち上がる器形を呈する。外面に薄い灰釉を施し、糸切り痕が残る底面は露胎である。素地は灰褐色で粗粒子。黒・灰・白色の粒子が散見できる。県内においては初例と思われる。底径6.4cmを計る。き-16のIV層より出土。

第10表 備前陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	素地	施釉	文様	出土地点
第37図1 図版33の1	播り鉢	灰白色と橙褐色のサンドウィッチを呈する。白色の小レキを混入。山土。	無釉	なし	え-2 IIb
” 2 ” 2	”	暗茶褐色。白色の小レキと筋状の土が見られる。田土。	口縁部に黄褐色の自然釉が見られる	口縁部に凹線を浅く巡らす。文様かどうか判然しない	か-17 V
” 3 ” 3	”	” わずかに白色の粒子が見られる。田土。	”	口縁部に2条凹線を巡らす	え-2 III
” 4 ” 4	”	”	不明。	不明 播り目は10本一組?	き-16 Vb
” 5 ” 5	”	” やや上記のものより粗い。	”	” 播り目は6本一組。	お-12 III



第37図 (図版33) 備前陶器：播鉢 (1～5)・徳利 (6)

## 9. 瓦質土器

本遺跡出土の瓦質土器は93点で、Ⅲ層からの出土が数多く見られた。量的には『湧田古窯跡』<sup>註1</sup> (Ⅰ)・<sup>註2</sup>(Ⅱ)に次いで出土である。器種は下記の表のとおり鉢・炉・壺・釜の4種類であった。その中で鉢形が特に多く、次いで炉である。その他にも用途不明なものが得られた。以下、器種別に略述する。

### 植木鉢

第38図1～5は植木鉢である。本遺跡で一番多く見られた器種で、1は口径30cmを計る。凸帯は3条施されていて、2条1組のものが口縁に、空間を設けて1条の凸帯を施している。胴部には文様の一部と思われる浮線が見られる。

2は口縁部で、2条1組の凸帯を施している。3も口縁部で菊花文、菊葉文が見られる。菊花文の直径は4cmで、『湧田古窯跡』<sup>註2</sup>(Ⅱ)で報告のタイプと同じ大きさと思われる。

4・5は胴部破片で、2点共に蓮花文と思われる。

### 鉢

6～11は鉢形である。6は口径23.4cmのこね鉢と思われる。

7は口径22.7cmで、口唇部に2本の沈線文がある。8は口径25.8cmの少し深めの鉢である。底部付近の資料である。9・10は、外面の口唇部近くに1条の沈線を施している。10は素地にモミガラ<sup>註2</sup>の混入が見られる。内面に貼り付けの痕跡がある。11は口唇部を幅広平坦に仕上げ、鉢形になると思われる。

### 播鉢

12・13は播鉢の口縁部と底部である。12は9本1組の播目を持ち、13は残存部を見ると4本の播目が見られる。この2点は、播目の本数は異なるが焼成や色調は類似しており、同一個体の可能性がある。

### 袋物

14・15は袋物の底部である。14は外底面に沈線が1本見られる。

瓦質土器出土一覧表

層序	器種	植木鉢	鉢	播鉢	炉	火炉	壺	袋物	釜	蓋	器種不明					合計
											口縁部	高台付	底部	胴部	不明	
I層		1	1								1		1			4
Ⅱ層		5	1	1		1					3	2	2	4	1	20
Ⅲ層		6	3	1	2	1		1	1	1	3	1	1	8	1	30
Ⅳ層		3	3					2		1	2		3	2		16
V層		3	1		2						1		1	3		11
基壇V層			1		1								1			3
土坑No.8														1		1
土坑内		1					1				1					3
瓦溜まり		1														1
攪乱		1													1	2
不明		1												1		2
合計		22	10	2	5	2	1	3	1	2	11	3	9	19	3	93

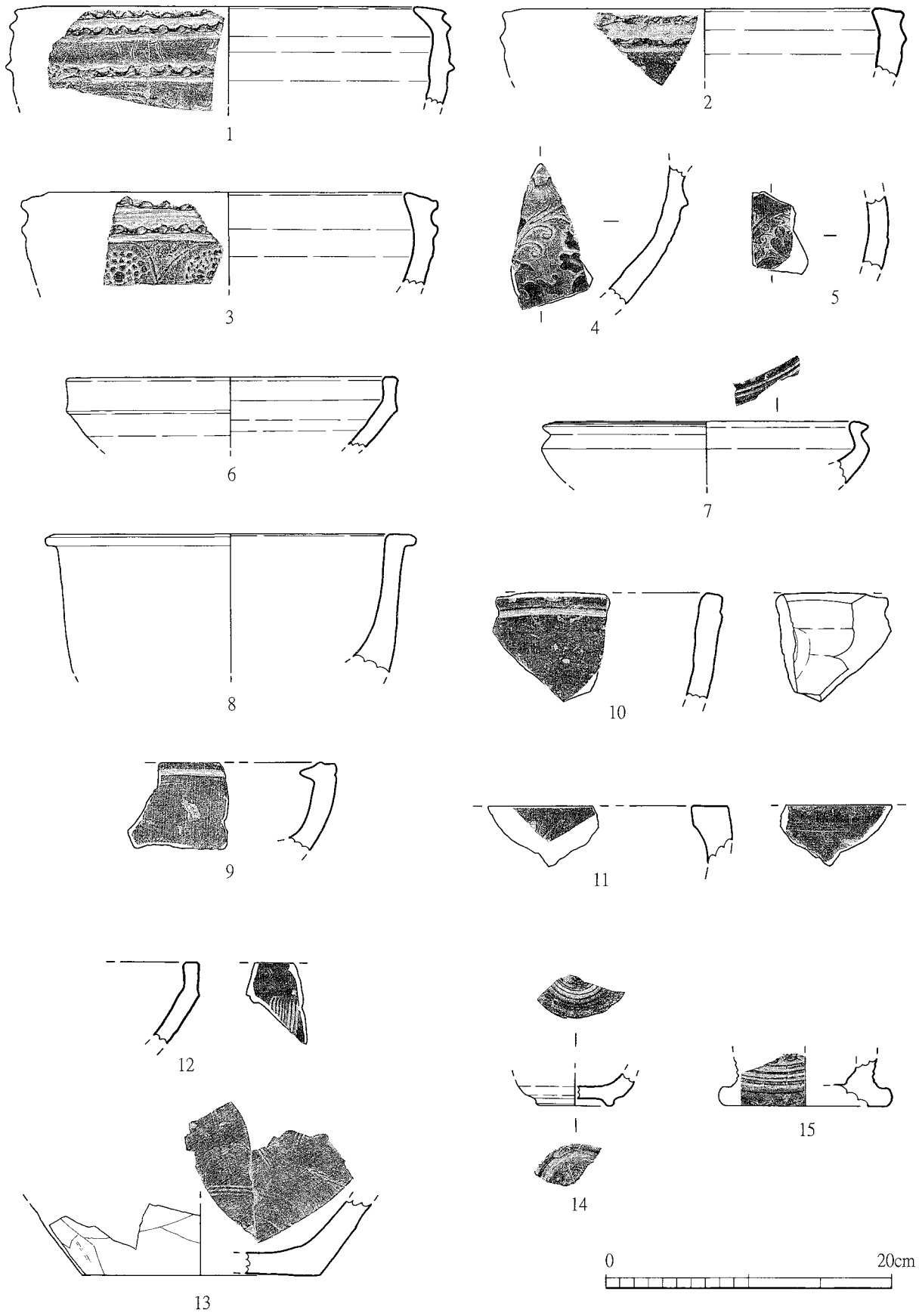
### 〈註〉

1. 大城慧・島袋洋・金城亀信 他『湧田古窯跡(Ⅰ)』 沖縄県教育委員会 1993
2. 島袋洋・金城亀信 他『湧田古窯跡(Ⅱ)』 沖縄県教育委員会 1995

第11表 瓦質土器観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	分類	口径 器高 底径	(内面) 色調 (外面)	文様	備考	出土地点
第 38 図1 図版34の1	植木鉢	30.0 — —	暗灰色 "	波状凸帯 菊葉文?	内・外面共に暗灰色で、 中は灰色	きー16 I層
" 2 " 2	"	約28.0 — —	明灰色 "	波状凸帯	内・外面共に明灰色で、 中は灰色	きー15 IV層
" 3 " 3	"	約29.0 — —	灰褐色 "	波状凸帯 菊花文 菊葉文	全面的に灰褐色	おー6 瓦溜まり
" 4 " 4	"	— — —	明灰色 "	波状凸帯 蓮花文 菊葉文	内・外面共に明灰色で、 中は灰色	おー16 II層
" 5 " 5	"	— — —	明灰色 "	蓮花文 菊葉文	内・外面共に明灰色で、 中は灰色	きー12 IV層
" 6 " 6	鉢	23.4 — —	灰色 "		全体的に灰色	おー15 IV層
" 7 " 7	"	22.7 — —	灰褐色 "	口唇部に 2本の沈 線文	両面共に灰褐色で、中は 灰色	かー17 IV層
" 8 " 8	"	25.8 — —	灰色 "		両面共に灰色	かー10 II層
" 9 " 9	"	— — —	灰色 "	外面に1 条の沈線	両面共に灰色、外面の一 部黒色	おー17 III層
" 10 " 10	"	— — —	灰色 茶色	外面に1 条の沈線	内面に貼り付けの痕	きー13 I層
" 11 " 11	"	— — —	黒褐色 "		全面的に黒褐色で黒光り	かー17 IV層
" 12 " 12	擂鉢	— — —	灰色 "	9本1組 の擂目	全体的に灰色	おー15 II層
" 13 " 13	"	— — 16.4	灰色 "	擂目	全体的に灰色	おー16 III層
" 14 " 14	袋物	— — 5.4	灰色 茶色	外底面に 沈線文が 1本	焼き締まっている	きー15 IV層
" 15 " 15	"	— — 12.0	灰色 茶色	外面に5 条の沈線 文	外面の半分は黒色（火を 受けた）他は橙褐色	きー6 IV層



第38図 (図版34) 瓦質土器：植木鉢 (1～5)・鉢 (6～11)・擂鉢 (12・13)・袋物 (14・15)

## 10. 瓦

高麗系瓦・大和系瓦・明朝系瓦の3種が得られた。量的には圧倒的に明朝系瓦が多く、次いで高麗系瓦が見られた。以下、高麗系瓦より記述する。

### 高麗系瓦

すべて平瓦の破片で、124点が得られた。その中より、特徴的なものを抜き出し図化した。

第39図1～5は凸面に綾杉状の叩き文が見られるもので、2・3には「癸酉年高麗瓦匠造」の銘がある資料である。

第12表 高麗系瓦観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	分類	色調	文様	備考	出土地点
第39図1 図版35の1	平瓦	暗灰色	綾杉状叩き文	焼成良好。広端角部片で断面を広くへら削りが見られる。	お-2V 厚さ約1.8cm
” 2 ” 2	”	”	綾杉状叩き文 銘入り	”。布目痕、糸切り痕が見られる。また、断面より粘土を重ねる箇所が観察される	う-2Ⅲ 厚さ約1.8cm
” 3 ” 3	”	淡い燈褐色	”	細紐圧痕が見られる。	か-7V 厚さ1.8cm
” 4 ” 4	”	” 芯部は灰色	太めの綾杉状 叩き文	布目圧痕。凹面に炭痕が顕著に残る。2次焼成痕。	基壇土坑1 厚さ約1.8cm
” 5 ” 5	”	”	”	布目圧痕と糸切りが見られる端部に2次焼成の炭痕が残る	お-8 基壇V 厚さ1.7cm

### 大和系瓦

丸瓦が2点確認された。その内の1点を第39図7に示した。丸瓦の玉縁の破片で色調は赤色を呈する。凸面に羽状の叩き文、凹面には紐圧痕や糸切り痕が観察される。う-2の攪乱層より出土。

### 明朝系瓦

最も多く得られた瓦群である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の4種が得られた。その中で、軒丸瓦と軒平瓦の特徴的なものを第40・41図に示した。

#### 軒丸瓦

- A：瓦当文が凹状に表現され、花卉が花芯を取り巻くもの。（黄銅色）
- B：瓦当文が凸状に表現され、花芯から花卉が生み出されているもの。（黄銅色・赤色）
- C：瓦当文が凸状に表現され、花芯を幅広の花弁が取り巻くもの。（赤色）
- E：瓦当文が凹状に表現され、花芯が蔓状に巻いているもの。（黄銅色）

#### 軒平瓦

- A：瓦当文が凹状に表現され、花卉が花芯を取り巻くもの。（灰色）
- B：瓦当文が凸状に表現されされたもの。
- C：瓦当文が凸状に表現され、花芯や花びらを格子や線等で描くもの。（灰色・赤色）

量的には第14・15表に見られるように、軒丸・軒平ともにA・B・Cが、それぞれ群をなしていることが理解できる。上原静氏の<sup>註</sup>編年によるとAグループが16世紀中頃、Bグループが17世紀中頃、Cグループが18世紀代にそれぞれ位置づけられている。

註：上原静「首里城跡、西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』No.14 1994.11

第13表 高麗系平瓦出土一覧

層序	色調		色		サンドイッチ状		合計
	角	縁	角	縁	角	縁	
I層				2			2
II層				2	1	6	9
II層ジャリ				1			1
III層	1			6		16	23
IV層	1			4		6	11
IV層レキ				3			3
V層	2			22	1	37	62
基壇V層	1			2		4	7
基壇土坑No.1					1		1
土坑No.2				1		1	2
ミゾ				1			1
不明						2	2
合計	5			44	3	72	124



第14表 軒丸瓦出土一覧

層序	色調 分類	灰 色				赤 色				合計
		A	B	E	不明	A	B	E	不明	
表採							1			1
I層			1		8		1	2		12
II層		3	11	2	10		1	2	2	31
III層		4	2		14		4	3		27
IV層		5	1		5					11
V層		7			3				3	13
V層土止め		2								2
お-6 瓦溜まり		1								1
き-11 瓦溜まり		3	7	1	2					13
土坑No.6					1					1
お-16 土坑		2								2
南斜面ミゾ			3							3
合 計		27	25	3	43	0	7	7	5	117

第15表 軒平瓦出土一覧

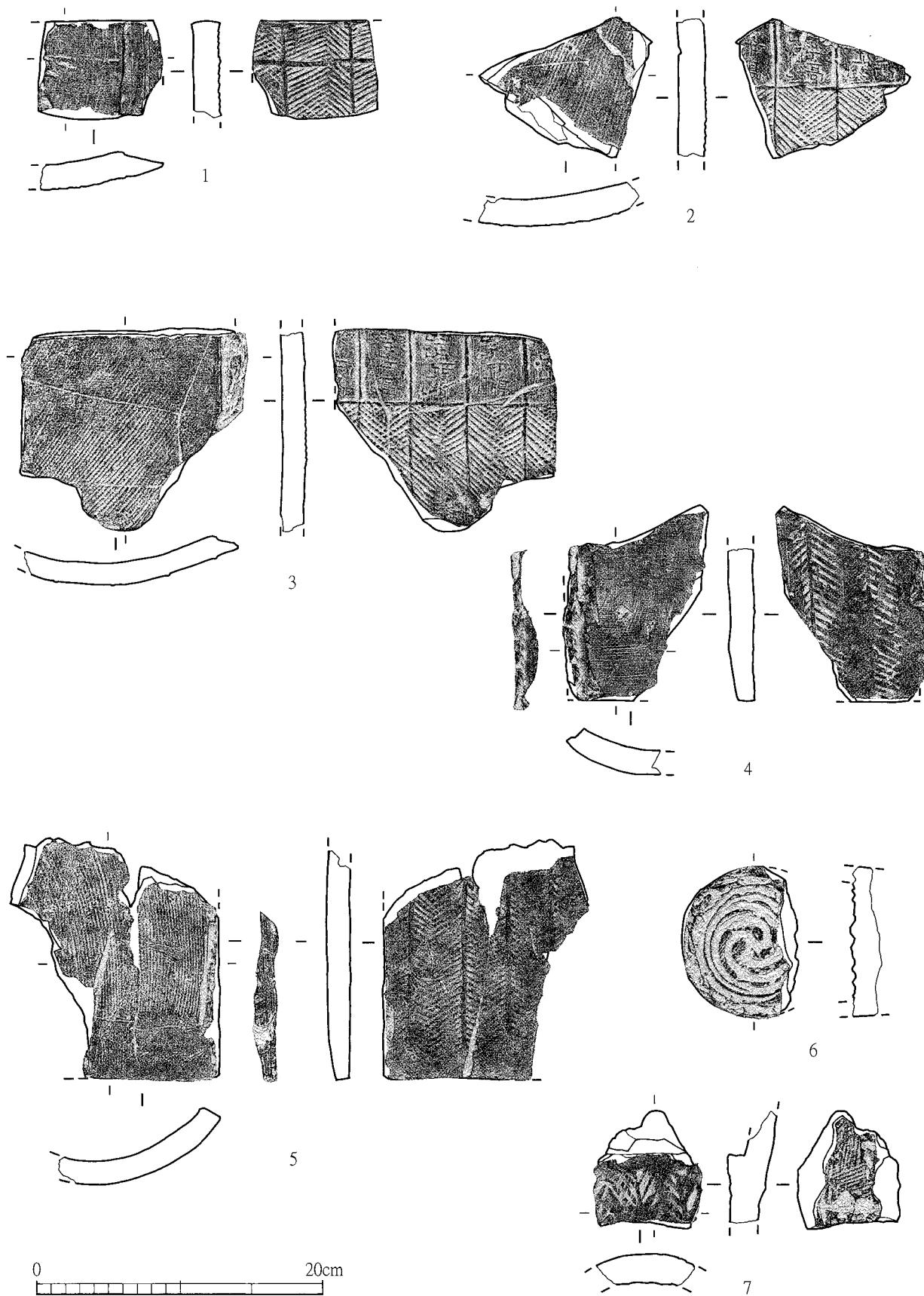
層序	色調 分類	灰 色						赤 色			合計	
		B	C	E	F	G	H	不明・小片	G	J		不明・小片
表採									1			1
I層						1		2	1	1		5
II層ジャリ		1			1	1		4	1			8
III層					1	2		3				6
IV層		2						7				9
V層				1	1		1	6				9
き-11 瓦溜まり			1		4			1				6
お-16 土坑No.6		1										1
石段											1	1
攪乱		1						2	1			4
合 計		5	1	1	7	4	1	25	4	1	1	50

第16表 明朝系瓦（軒丸）観察一覧

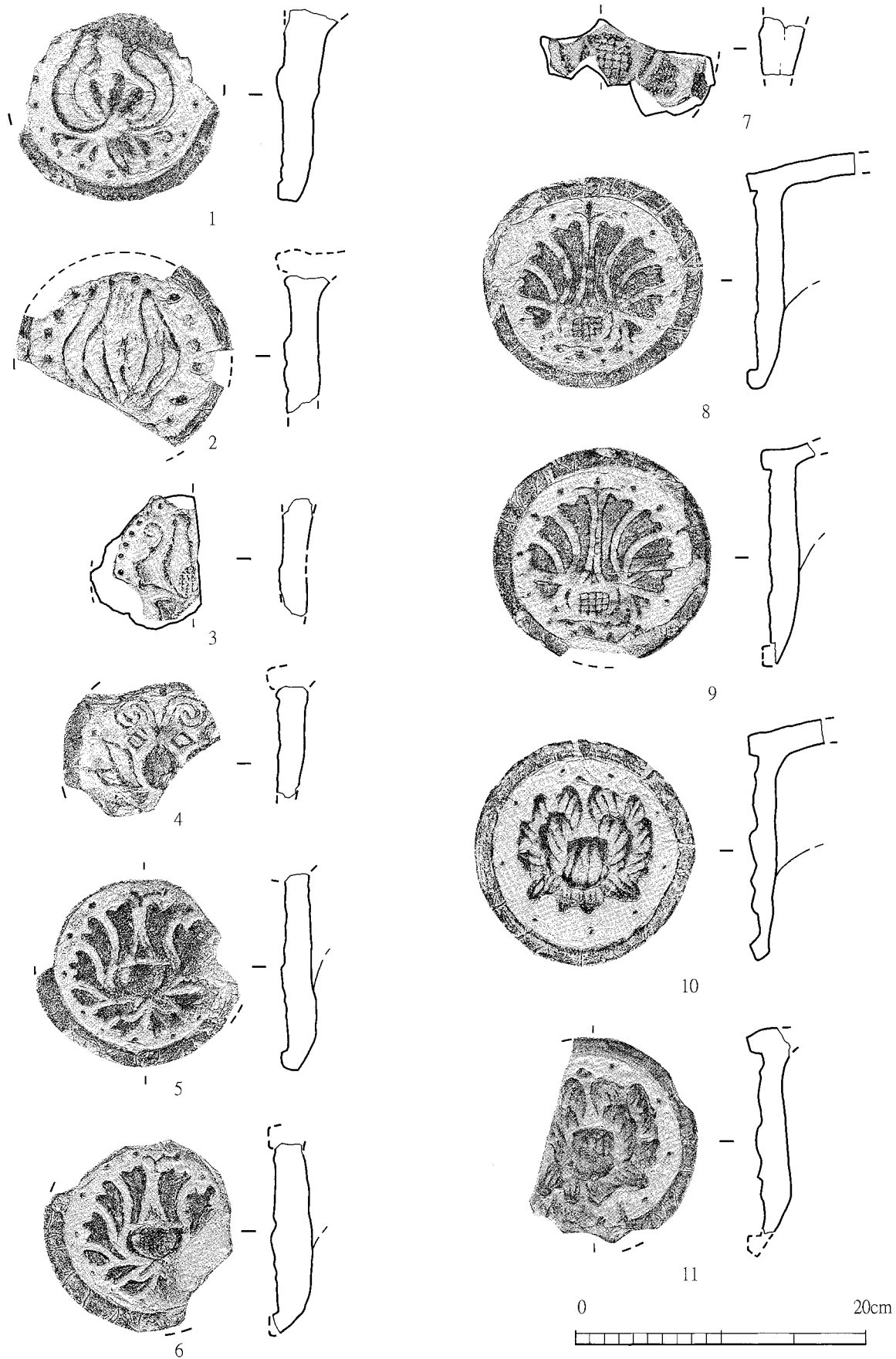
挿図番号 図版番号	器種	分類	素地	色調	特徴	出土地点
第40図1 図版36の1	軒丸	A	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	花卉を丸く成形	か-17 V
〃 2 〃 2	軒丸	A	淡黄銅色、芯部は黒色。〃	淡黄銅色	花卉は細長く成形 珠文は大きい 全体に崩れた文様	き-17 V
〃 3 〃 3	軒丸	A	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	〃 全体に小振りの軒丸瓦	お-16 V 土坑No.6
〃 4 〃 4	軒丸	E	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	花卉を開き、花芯を渦巻き。小振りな軒丸瓦	き-11 瓦溜りNo.1
〃 5 〃 5	軒丸	B	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	花卉を立ち上げ開く。	き-11 瓦溜りNo.1
〃 6 〃 6	軒丸	B	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	上記と文様は同じであるが、やや小振りで明瞭。	き-11 瓦2
〃 7 〃 7	軒丸		淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	花芯に格子文。 全体は不明。	お-15 VI
〃 8 〃 8	軒丸	B	淡黄銅色・ガラス質の鉍物を混入	淡黄銅色	花卉を立ち上げ開き。花卉に沈様を施こし強調。	表採
〃 9 〃 9	軒丸	C	淡黄赤色・ガラス質の鉍物を混入	淡赤銅色	花卉を立ち上げ開く。	表採
〃 10 〃 10	軒丸	C	淡黄赤色・ガラス質の鉍物を混入	淡赤銅色	裏面に布目痕が見られる。	表採
〃 11 〃 11	軒丸	C	淡黄赤色・ガラス質の鉍物を混入	淡赤銅色	上記に比べて文様は不明瞭。	お-14 II

第17表 明朝系瓦（軒平）観察一覧

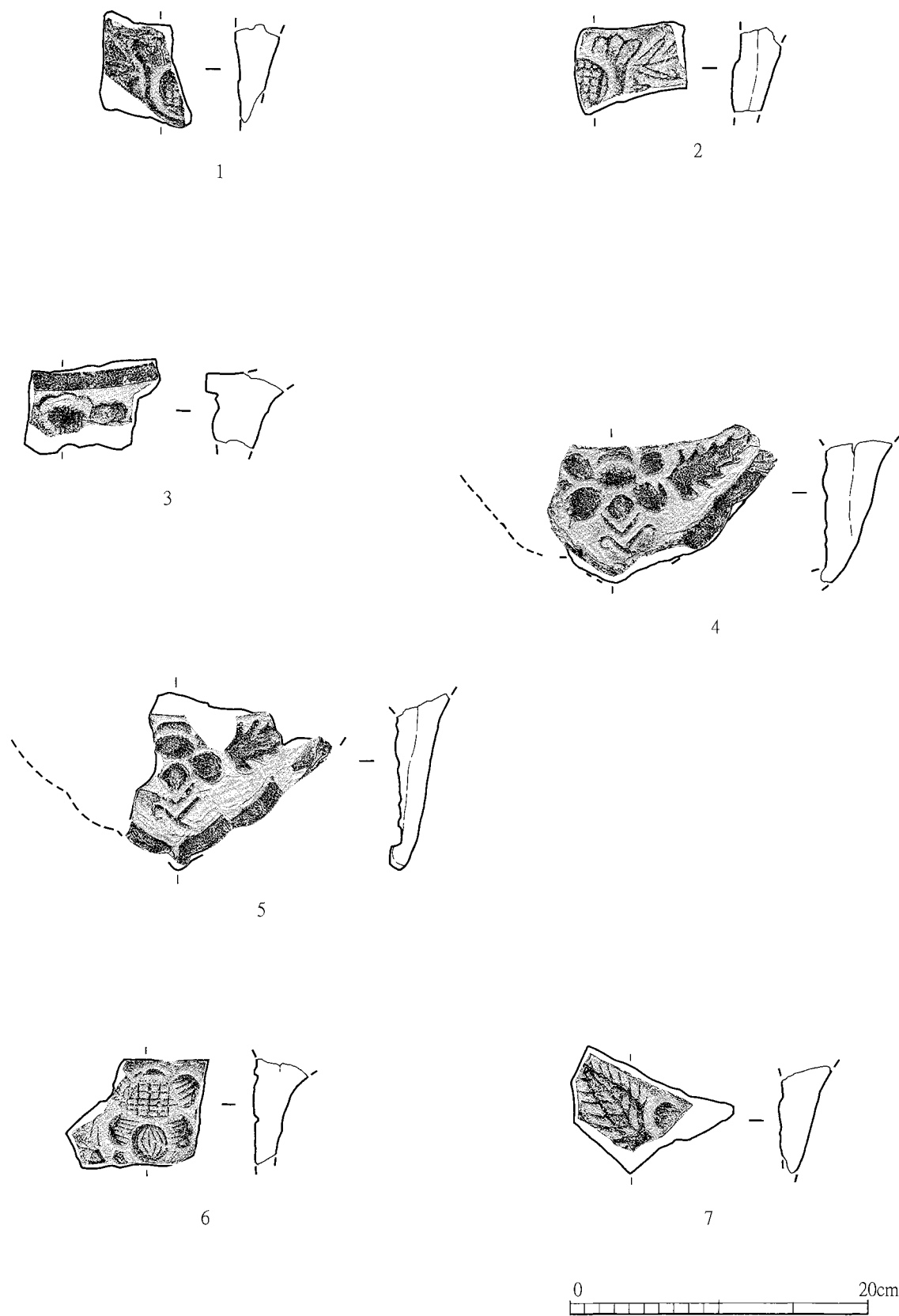
挿図番号 図版番号	器種	分類	素地	色調	特徴	出土地点
第41図1 図版37の1	軒平	A	黄褐色灰黒色のサンドウィッチ白色粒子が散見	灰黒色	格子の花芯を花卉が取り巻く	お-16 III
〃 2 〃 2	軒平	A	淡灰色茶褐色・白色粒が散見	淡灰色	〃 葉文が僅かに見られる。	か-16 III
〃 3 〃 3	軒平	B	淡黄銅色白色粒子・ガラス質の鉍物を混入	黄灰色	花卉が僅かに観察される。	か-16 V
〃 4 〃 4	軒平	B	淡灰黒色茶褐色・ガラス質の鉍物を混入	淡赤褐色	やや茶褐色のガラス質の鉍物混入が目立つ。	き-11 瓦溜りNo.1
〃 5 〃 5	軒平	B	芯部を淡灰白色茶褐色のサンド	淡黄褐色	全体に淡い黄白色を呈する。	お-16 III
〃 6 〃 6	軒平	C	芯部を淡灰白色茶褐色のサンド	淡茶褐色	全体に茶色系葉文細かく成形	お-14 II
〃 7 〃 7	軒平	C	淡赤褐色茶褐色・赤褐色の粒子を混入	淡赤褐色	格子状の花卉赤色の瓦	表採



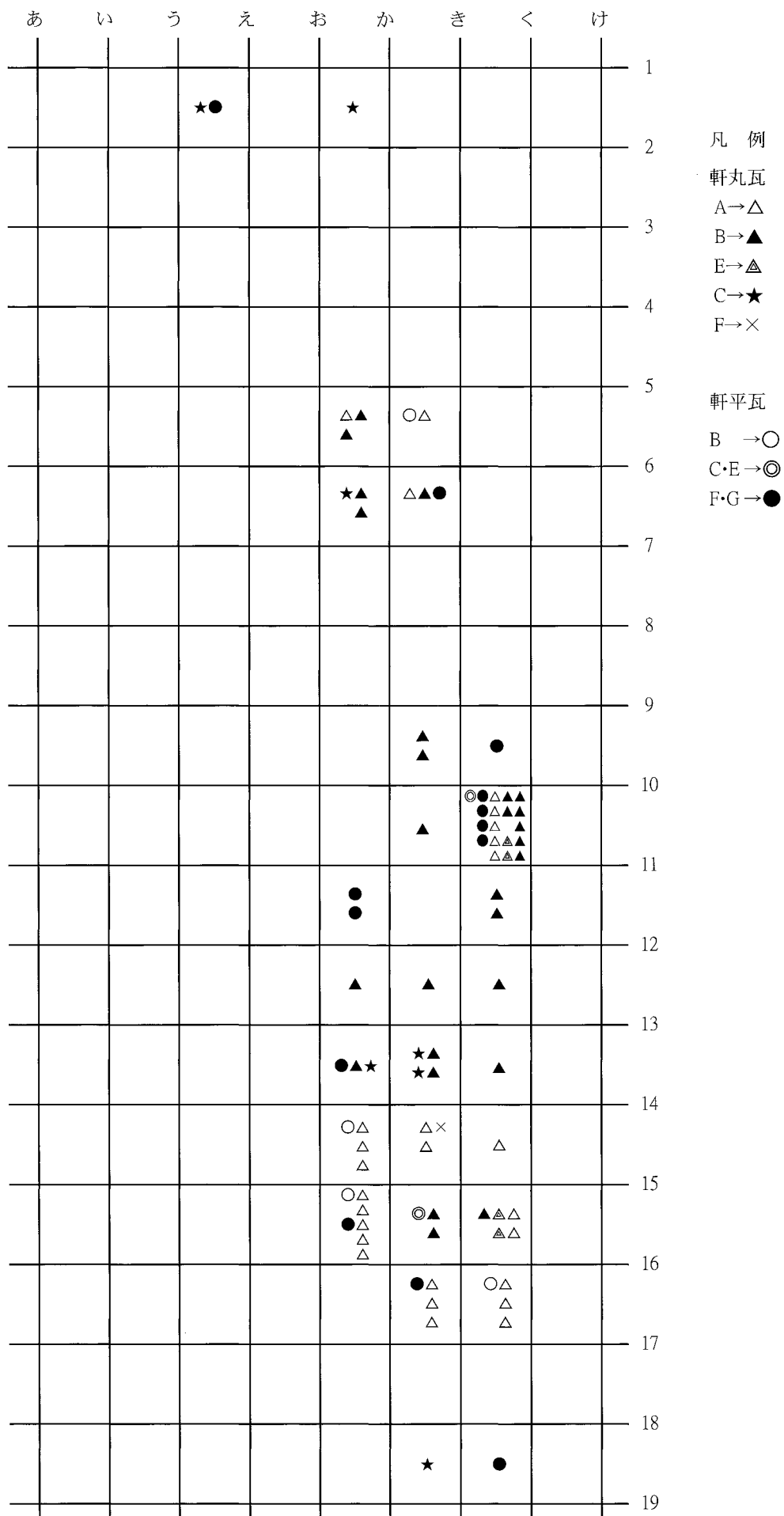
第39図 (図版35) 高麗系瓦：平瓦 (1~5)・大和系瓦：軒丸瓦 (6)・丸瓦 (7)



第40图 (图版36) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~11)



第41图 (图版37) 明朝系瓦：軒平瓦 (1~7)



第42図 明朝系瓦の分布図

## 11. 埴

第2表に示したとおり破片で220点得られている。層別には第Ⅱ層・第Ⅲ層から出土が最も多い。その中で保存状態の良い資料を第43図に示した。分類は形状で大きく分け、成形技法や色調・触感などに着目し下記のとおり分けた。

### 形状

I類：平面形が方形で断面が平坦なもの。

Ⅱ類：平面形が三角形で断面が平坦なもの。

Ⅲ類：平面形が方形で断面端部は階段状に成形し、底面にL字の突起が付くもの。

### 成形技法

A：素地が単独なもの

B：素地に化粧土を施すもの

### 色調

1：灰褐色系、2：白色系、3赤褐色系

### 触感と混入物

a：手触りが滑らかなもの、b：手振りザラザラして緻密なもの、

c：指頭に粉末がつくもの、d：籾殻を含むもの。

第18表に示したとおり、I類Aが圧倒的に多く色調・触感も灰褐色系aタイプに集中して見られた。成形技法ではB：素地に化粧土を施すものは灰褐色系のみに限られ、限定的な使われ方が窺える。

I・Ⅱ類はその形状より平面的な用いられたものと思われ、Ⅲ類は側溝などの蓋に用いられたものと思われる。

また、第44図に埴の分布図を作成したところ、本堂の基壇跡と南側のI地区に集中して見られた。このことにより、天界寺の井戸側にも埴敷きの建物が存在したことが窺える。

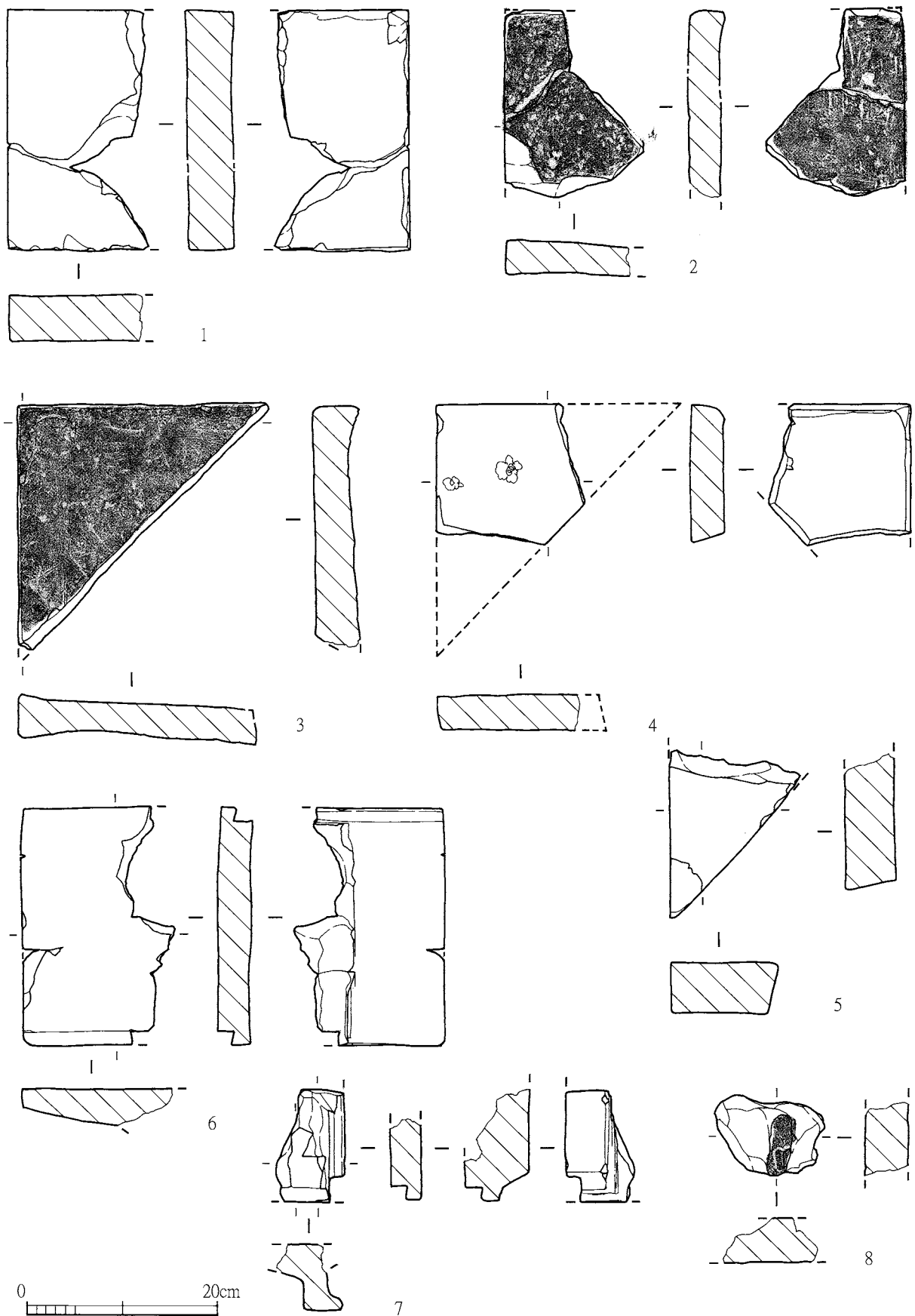
第18表 埴出土一覽

形状 成形技法 色調 胎底・澀入物 層序	I 類												II 類												III 類												類不明												合計
	A						B						A						B						A						B																		
	灰褐色系			白色系			赤褐色系			灰褐色系			灰褐色系			白色系			赤褐色系			灰褐色系			灰褐色系			白色系			赤褐色系			灰褐色系															
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	
第I層	6				2		1		1																																	10							
第II層	17	1			5	4	3		1	3	3												2	1																40									
第IIb層	1				2																																			3									
第II層ドメ	1																																							1									
第III層	13	3			1	1			1	2	1	2													1															44									
第IIIa層	1																																							1									
第IV層	3				1						2																													6									
第V層	7	1			1																	1							1											11									
第Vb層	10										1																													11									
土坑No.6	3																																							3									
土坑No.7	9	1																																						10									
土坑No.8		1																																						1									
土坑No.14									1																															1									
集石	1				1																																			2									
瓦溜まり	5	1																																			1			7									
基内レキ敷											1																													1									
攪乱	8	1			3	3	1			10	3											1				4			1								1		66										
不明	1				1																																			2									
合計	86	9	0	0	0	0	43	3	10	4	0	0	0	3	3	0	14	31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1												
						155					20							31								8			3								2		1		220								

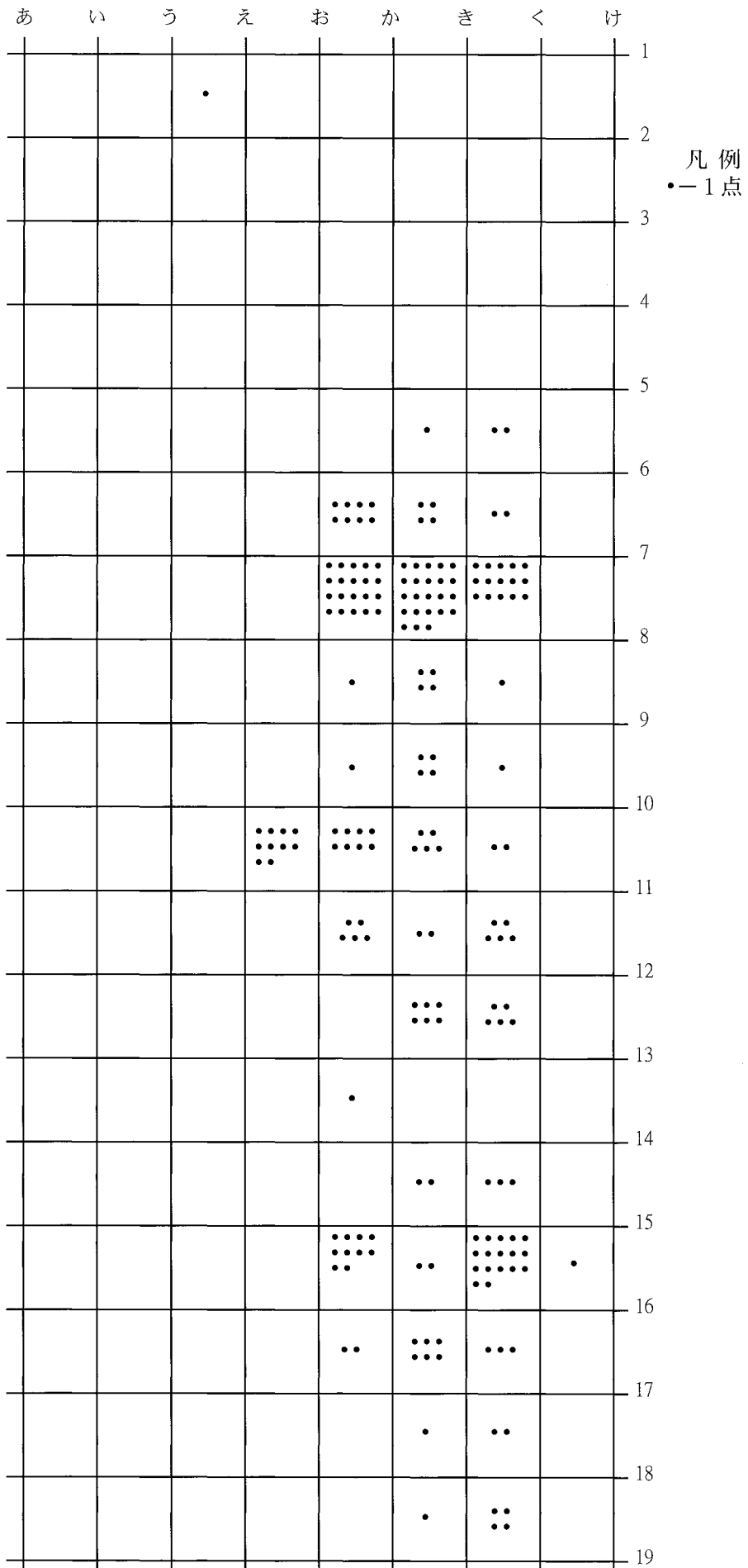


第19表 磚觀察一覽

挿図番号 図版番号	形状	成形 技法	色調	触感混入物	特 徴	出 土 地 点
第 43 図 1 図版38の 1	I	A	灰褐 色系	a	厚手で重厚感が ある。	か-10 攪乱
” 2 ” 2	I	B	”	c・d	裏面は湾曲が著 しい。	え-11 攪乱
” 3 ” 3	II	B	”	d	I類を焼成後に 2分割したもの。	お-16
” 4 ” 4	II	A	赤褐 色系	a	一次焼成。 頂部を縁どりが 見られる。	石段
” 5 ” 5	II	A	灰褐 色系	b	” 表面は微粒砂岩 に似ている	お-7 V
” 6 ” 6	III	A	灰褐 色系	a	濃い灰色を呈す る。	お-7 III
” 7 ” 7	III	A	”	a	”	き-8 III
” 8 ” 8	不明	A	赤褐 色系	a	表面に軍配のス タンプが見られ る。	き-11 瓦1



第43図 (図版38) 埴: I類 (1・2)・II類 (3~5)・III類 (6・7)・類不明 (8)



第44図 博の分布図

## 12. 銭貨

第20表に示したとおり、完成・破片を含めて215点の出土が得られた。最も古いもので貨泉（初鑄年14年）が出土し、新しいものでは、近代のものまで幅広い年代の銭貨が多種多様に得られた。その中で最も多く見られた、「無文銭」で次に洪武通宝や寛永通宝等であった。

ここでは、当該期に属する特徴的な資料を第45・46図に示した。資料の計測等は第21表に示した。それらの資料を年代別に見ると、概ね下記のとおり分けられる。

- A：12世紀代以前の北宋銭（貨泉～宣和通宝）
- B：14世紀後半から15世紀前半の明銭（洪武通宝～永楽通宝）
- C：17世紀前半からの清銭・本邦銭（康熙通宝と寛永通宝）
- D：19世紀代から近代までの本邦銭
- E：中・近世相当期の無文銭

それらの出土量・種類を見るとBとCにおいて、それぞれの偏在していることも窺えられる。もちろん、これらの銭貨は、それぞれの時代をオーバーラップしながら流通するものであるが、ここでは、少なくとも天界寺が銭貨によって2時期に区分が可能かと想われる。

年代別出土状況

層序	分類	貨泉～宣和通宝 A	洪武通宝～永楽通宝 B	康熙通宝～寛永通宝 C	本邦銭 D	無文銭 E	合計
第Ⅰ層		3	2	6	1	11	23
第Ⅱ層		5	1	16		13	35
第Ⅱジャリ層						1	1
第Ⅲ層		7	3	1		17	28
第Ⅳ層		4	5			8	17
第Ⅴ層		6	12			8	26
基壇	Ⅳ層	1					1
	Ⅴ層	1	1			1	3
溝状遺構		3		1			4
敷石内						1	1
石組み						1	1
土坑No.1				1			1
土坑内						1	1
ウラゴメ				1			1
攪乱					1		1
不明							0
ピット	Ⅱ地区No.2						0
	〃 No.3	7	2				9
	Ⅲ地区No.218						0
	〃 No.228		1				1
	〃 No.285		1				1
〃 No.292	1					1	
合計		38	28	26	2	62	156

第20表 錢貨出土一覽

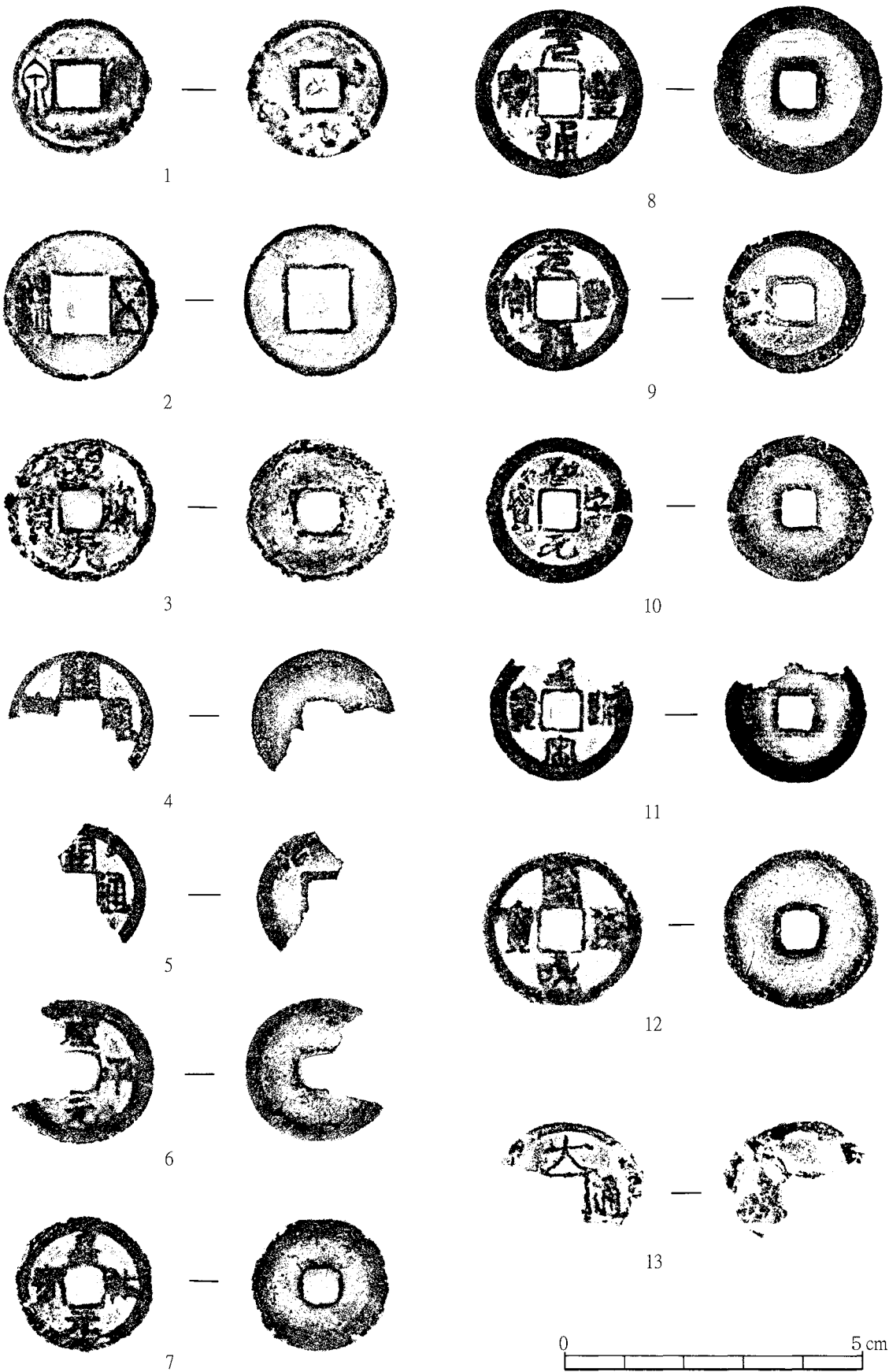
種類 層序	貨泉										無文錢												雁首錢		十錢	合計																										
	貨泉	五銖錢	開元通寶	開元通寶	咸平元	景元	祥元	聖元	宋通寶	宋元	至元	嘉祐元寶	嘉祐通	熙寧元寶	元豐通寶	元豐通	元祐通寶	元祐通	紹聖元寶	聖宋元寶	聖元	大元	觀通	政和通寶			宣和通寶	宣和通	洪武通寶	洪武通	永樂通寶	永樂通	永樂通寶	康熙通寶	天寶元	定元	重元	元寶	元寶	寬永通寶	寬永通	寬永通	寬永通	判讀不能	判讀不能	無文錢	無文錢	無文錢	無文錢	雁首錢	五錢	十錢
第Ⅰ層	1			1				1																														4	1				1	5	3	6	1	1	1	29		
第Ⅱ層		1		1														1																			1	4	12			1	1	8	9	4			46			
第Ⅱジャリ層																																																1			1	
第Ⅲ層				1	1			1								1							1														2			1	5		5	8	9			42				
第Ⅳ層					1	1												1						1						2	1	2								1	1	1	5	6	1	1			25			
第Ⅴ層			1	1				1	1					2													4	3	2	3						1					1	1	4	2	2	3	5			37		
基壇	Ⅳ層																		1																														1			
	Ⅴ層																								1																			1		1				4		
溝状遺構															1			1		1																	1													4		
敷石内																																																		1	1	
石組み																																																		1	1	
土坑1																																																		1	1	
土坑内																																																			1	1
ウラボメ																																								1											1	
攪乱																																																			1	1
不明																																																				3
ピット	Ⅱ地区No.2																																						1										1			
	″ No.3			1																								2															1	1						12		
	Ⅲ地区No.218																																																	1	1	
	″ No.228																											1																							1	1
	″ No.285																												1																						1	1
″ No.292																																																			1	1
合計	1	1	2	4	2	1	1	1	1	2	1	1	1	3	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	9	7	5	7	1	1	1	1	1	1	4	10	15	1	4	12	5	29	31	28	2	1	1	1	215	



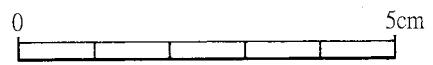
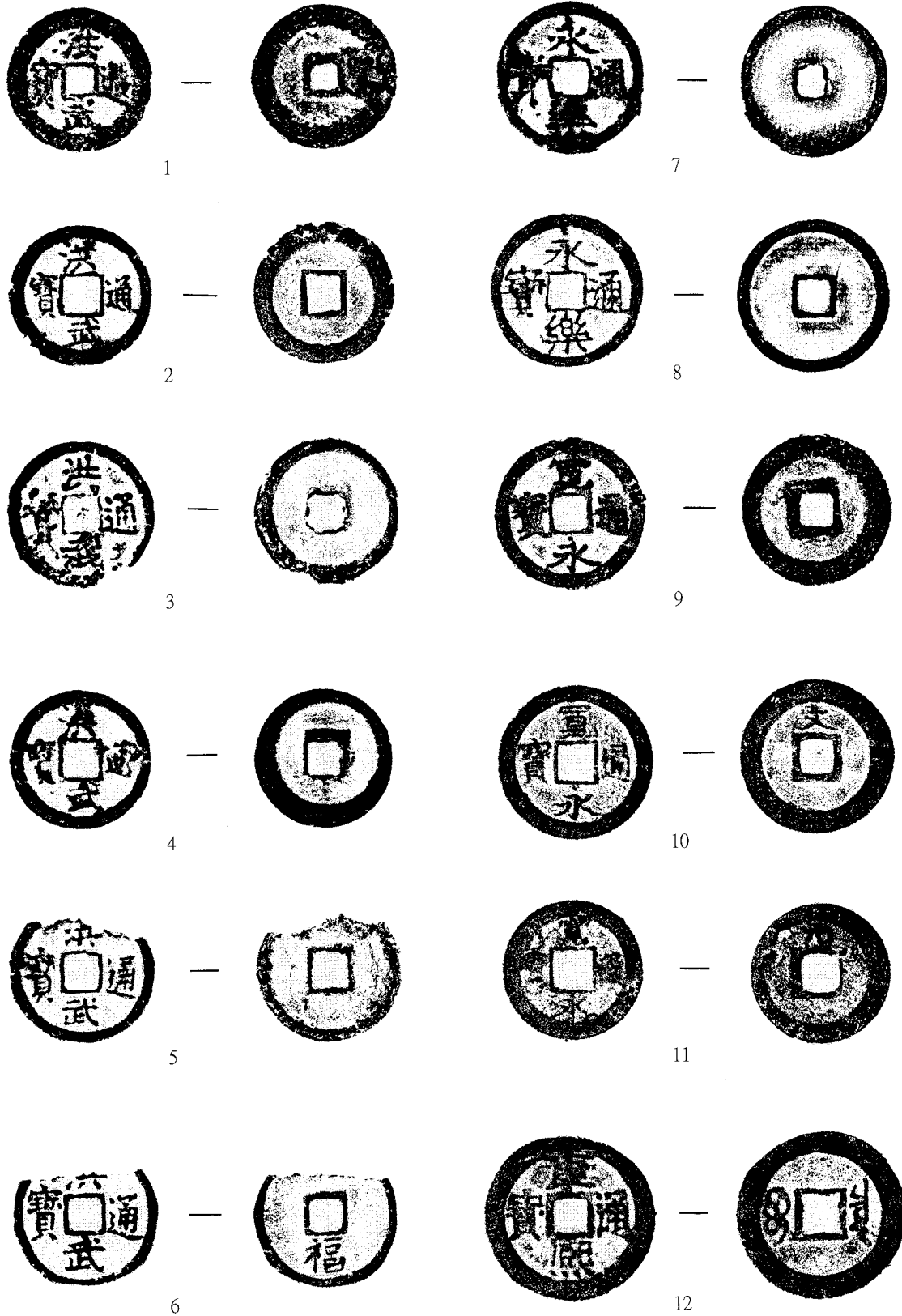








第45図 (図版39) 錢貨



第46圖 (圖版40) 錢貨

### 13. 青銅製品

本遺跡より得られた青銅製品は、147点であった。その大部分は用途不明品であったが、幾つかは用途がわかるものもあった。ここでは用途不明品も含めて報告する。

#### 八双金具（第47図1～4、図版の1～4）

1・2・3・4は八双金具と考えられる。1は全体形はほぼ四角形状であるが、一方の端は裏面の方向に向かって幅約2.0mmで曲げられている。もう一方の端は「く」の字状になっており、縁は波状を呈している。体部には、直径約5.0mmで穿孔されている。表面には草花模様とその周囲に円を連ねた模様がある。また、この表面部には鍍金が明確に残存している。裏面には青錆がみられ、鍍金の痕跡は認められない。

2もほぼ四角形状を呈している。体部には直径約4.0mmで穿孔されている。何らかの力作用を受けたためかやや波打ったような形状を呈しているが、本来は平坦に成形された製品であったと思われる。表面には鍍金の痕跡が確認できる。一方、裏面にはその痕跡は認められない。

3は形状的には1と類似したものである。一方の端は破損のため形状は判然としないが、もう一方の端は丸みを帯びた「く」の字状に抉れている。二又になった一方に直径約2.0mmで穿孔され、この部分は裏面の方向に屈曲しているが、本来の形状であるかは不明である。裏面は黒く煤けている。

4は体部に草花文が透かし彫りされている。片方の端は、幅約8.0mmで裏面方向にほぼ直角に屈曲している。もう一方の端は破損のため判然としないが、残存部から考えると「く」の字状を呈しているのではないと思われる。縁部は幅約1.0mmで裏面方向にほぼ直角に屈曲している。残存状況は「L」字状に屈曲しているが本来は体部は平坦であったと考えられる。鍍金は表面には施されていた可能性があるが、剥落したらしく判然としない。表面は部分的に、裏面はほぼ全面に青錆が認められる。

#### 座（第47図5・6、図版41の5・6）

5は菊花状に成形した製品である。中央部に約3.0mm四方の正方形の孔が穿孔されている。縁部は幅約1.0mmで裏面の方向に屈曲している。表面部には鍍金の痕跡が明確に残っているが、中央部には円形に青錆がみられ、この部分に留具が当たっていたことが想定される。類似の製品が糸数城跡などで得られている。

6は直径約1.6cmの円に、長さ約6.0cm、幅約2.0mmの2つに折り曲げられた板状の製品が掛けられている。この部分が割ピンの役目を果たすのではないかと考えられ、座に含めることとした。

#### 鉾（第47図7、図版41の7）

7は割ピンである。両端が細くなった楕円状の青銅を中央部で折り曲げたものである。ほぼ完形である。

#### 留具（第47図8・9、図版41の8・9）

8は縁が玉縁状になっている。上部には直径約2.0mmの孔が約4.0mm離れて2カ所に穿孔されている。縁部はこの孔の位置に平行に「く」の字形に抉れがある。一面には「特撰精製」の文字が認められる。

9は縁も平坦であり、シンプルな造りである。これにも直径約1.0mmの孔が約6.0mm離れて2カ所に穿孔されている。縁部にもこの孔の位置と平行に「く」の字形に抉れがある。

これらは足袋の留具であると考えられる。

#### 装飾金具（第47図10～12、図版41の10～12）

10は上部に直方体の突起部があり、ここには直径約2.0mmで穿孔されている。そこから下部に向かって円形の凹凸がある。下面は判然としないが、七角形の面を造り出している。これは上部の孔に紐などを通して垂飾品として使用したのではないかと考えられる。

11は瓢箪のような形状の製品である。上部と下部のつなぎの部分に直径約5.5mmの円形の突起がある。下部の球形の部分は半分に分割される。これは破損などによるものではなく、本来の構造を呈しているものと考えられる。一部に鍍金の痕跡が認められる。

12は用途は判然としないが、恐らく装飾的な役割を果たすと考えられるものである。頭部は花の形に作りだしているが、両端部は外側に折り曲がっている。そこから矢印状に延び、先端部は六角形に成形され、中央部に直径約2.0mmで穿孔されている。

#### 毛抜き（第47図13、図版41の13）

13は毛抜きである。板状の青銅を2つに折り曲げ、上部を一度強く内側に曲げた後、先端部も内側に曲げている。この先端部は一方は明確な鋭利面を有しているが、もう一方は潰れており、判然としない。全体的に青錆が認められる。

#### 分銅（第47図14、図版41の14）

分銅が1点得られている。完形で、表面に何らかの文様が刻まれている。重さは10.99gである。

#### 釣針（第47図15、図版41の15）

15は釣り針である。頭部は丸く円を造り出しており、そこに直径約1.0mmで穿孔し、さらに細い針金を捻って2連付けている。本来は可動性があったようであるが、錆化が進んだ為、針金の1つと本体の円形の部分が固着してしまっている。頭部からほぼ均一な太さで先端部まで続き、先端部には返しを有している。部分的に錆膨れが認められるものの、全形が伺える良好な状態の資料である。これは実用的な釣針ではなく、装飾的な役割をもつものではないかと思われる。

#### 釘（第47図16～18、図版41の16～18）

16の頭部は他の2点と比較して、平坦ではなく、斜位に面を有する。やや錆膨れが認められるものの、全形が伺えないほどではない。断面は方形である。17とほぼ同形同大である。

17は断面方形の釘である。頭部は叩打によってやや潰れている。先端部は鋭利ではない。錆膨れなどは無く、本来の形状が明確に確認できる。

18は頭部が「L」字状に屈曲している。しかし、本来は直線的な形状を呈していたのではないかと考えられる。断面は方形である。

#### 簪（第48図19～22、図版42の19～22）

19は本来は長さが約7.0cmの小型の完形の簪である。頭部はスプーン状を呈しており、そこからねじれたように線が刻まれ竿部に至る。竿部は六角形を呈しており、先端部は細く鋭利である。

20は19よりもやや大きめの完形の簪である。頭部はスプーン状を呈し、竿部は六角形である。先端部は細くなっているが、19ほど鋭利ではない。

21は左右対称の製品である。薄い造りの完形品で、先端部が二又に分かれている。

22は偏平な製品である。完形かとも考えられるが上部が摩滅しており、不明である。全面に青錆が認められる。

### 花生け（第48図23、図版42の23）

23は花生けと考えられるものである。口縁部はラッパ状に開き、そこから一段を有した後、円筒形状の胴部へと続いている。胴部両端に象をかたどった取っ手が付けられている。頸部には文様が巡らされ、胴部にも一面には青竜と玄武、もう一面には白虎と朱雀がある。胴下部から底部は欠損している。

### 用途不明金具（第48図24～31、図版42の24～31）

24は両端部をほぼ直角に屈曲させたものである。横からみるとやや凹んだ形状を呈しているが、これが本来の形状かは判然としない。一面には鍍金の痕跡が認められるが、もう一面は判然としない。

25は一方の端を波状に形成しており、もう一方の端は幅約2.0mmで裏側方向に屈曲している。この部分は表面部の方向に反った形状である。横断面をみると、半円形状を呈している。両面ともに青錆が認められ、鍍金の痕跡は確認できない。ほぼ本来の形状を残していると考えられる。

26は「D」の字が縦に細長くなったような形状である。厚さが約3.0mmと他の青銅製品と比較するとやや厚めの感がある。縁部は曲線を描くような形状である。全体的に錆膨れが著しく、鍍金の痕跡は認められない。

27は管状製品である。断面形が一見したところ円形かと思われるが、五角形である。約3分の1が屈曲しているがこれが本来の形状かは不明である。

28は扁平な板状の青銅を縦二つに屈曲させた製品である。表面には鍍金の痕跡が明確に確認される。

29は幅約2.0mmの扁平な板状の製品であるが、中央部に半円形の突出部が認められる。ここは一面には幅約0.5mmの突起があり、もう一方の面には直径約2.0mmの円形の凹みがある。

30は上部が三角形、中央部が六角形、下部が五角形を呈しているものである。上部と中央部は一面を共有している。全体的に青錆が認められる。

31は円形の製品である。表面に凸に膨らんだ形状である。座ではないかと考え裏面に鋸の痕跡を探したが、判然としなかった。

### 小結

青銅製品は147点得られているが、その内の用途不明品も含めて31点を報告することとした。しかし、自身の勉強不足に負う部分が多いかと思われるが、大部分が用途不明品であった。用途が伺われる資料としては花生けなどがあり、これは仏具に関する資料であると考えられる。その他、八双金具などの装飾品や毛抜き・分胴・釘・簪といった日用雑貨など多種多様な資料が得られている。出土状況はⅠ層から28点（青銅製品全体の19%を占める。以下同じ）・Ⅱ層39点（27%）・Ⅲ層18点（12%）・Ⅳ層6点（4%）・Ⅴ層40点（27%）、遺構からは土坑No.1で1点（1%）・番号不明の土坑4点（3%）・溝状遺構1点（1%）、また、攪乱層から8点（5%）・出土地点不明2点（1%）であった。以上のことからⅡ層とⅤ層より併せて約5割の青銅製品が得られていることがわかる。

### 参考文献

- |                                   |        |           |
|-----------------------------------|--------|-----------|
| 『勝連城跡』－昭和56年度本丸南側城壁修復に伴う遺構発掘調査報告－ | 1983.3 | 勝連町教育委員会  |
| 『稲福遺跡発掘調査報告書』（上御願地区）              | 1983.3 | 沖縄県教育委員会  |
| 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』                    | 1983.3 | 今帰仁村教育委員会 |
| 『浦添城跡発掘調査報告書』                     | 1985.3 | 浦添市教育委員会  |

『勝連城跡』－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査（１）－

1990.3 沖縄県・勝連町教育委員会

『糸数城跡』

1991.3 沖縄県・玉城村教育委員会

『御細工所跡』－城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告－

1991.3 那覇市教育委員会

『宇茂佐古島遺跡』－宇茂佐第二地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

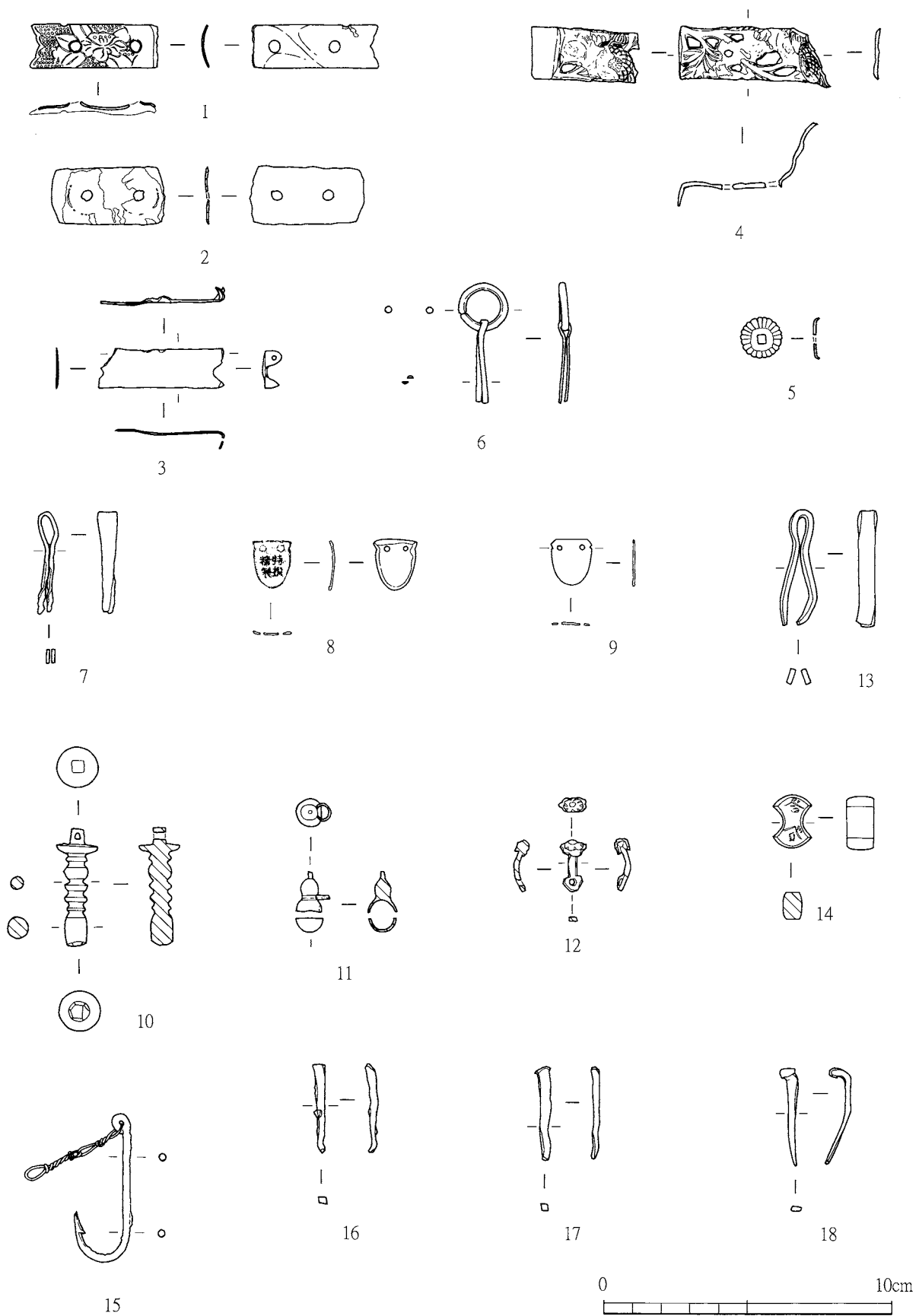
1992.3 名護市教育委員会

『旧中城御殿』－石牆工事地域にかかる第一次発掘調査－1993.3 沖縄県立博物館

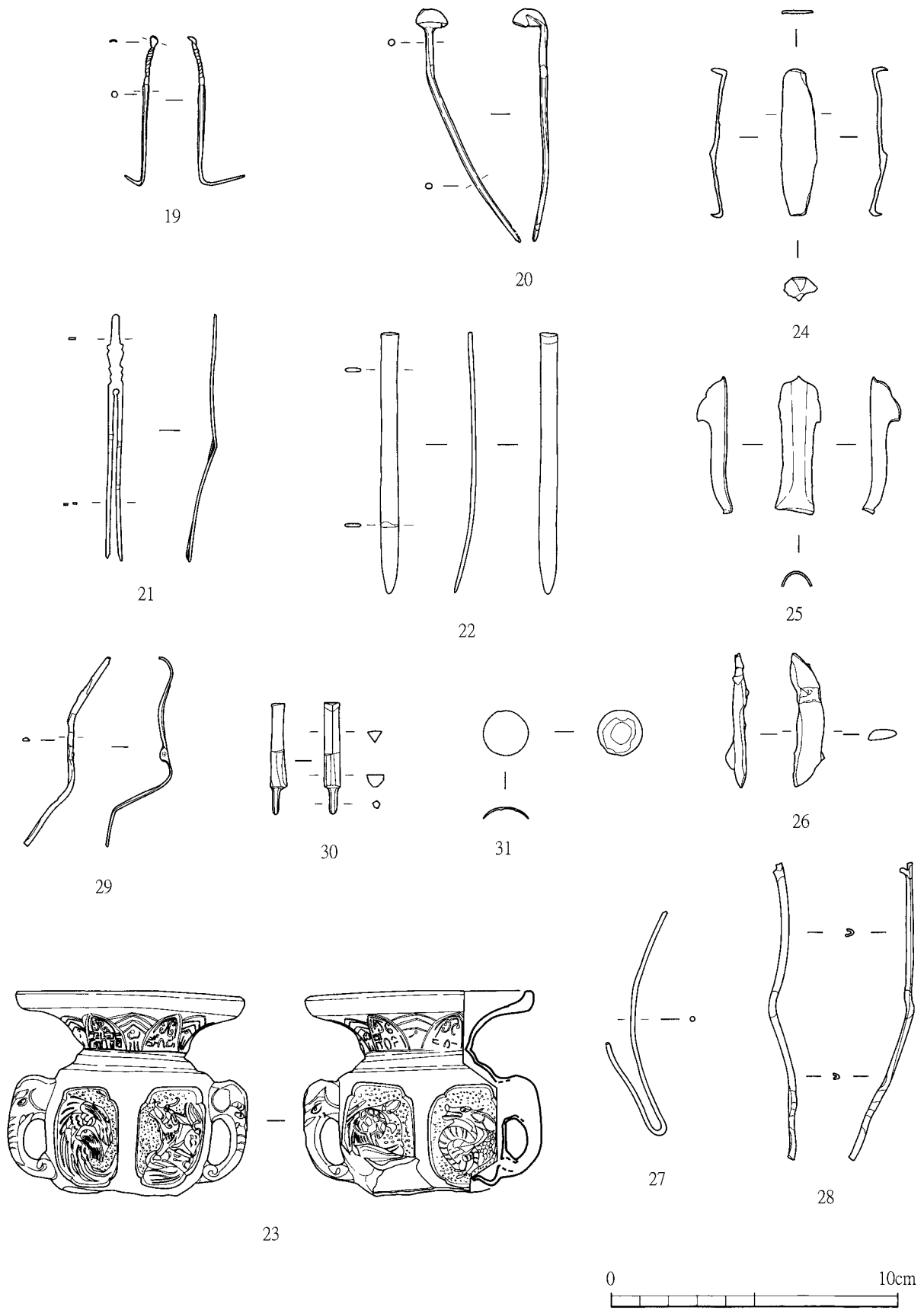
第22表 青銅製品観察一覧

挿図番号 図版番号	種 類	法 量				出 土 地 点	備 考
		最大長	最大幅	厚さ	重量		
第 47 図 1 図版 41 の 1	八双金具	4.34	1.50	0.13	4.09	お－6・V層	
” 2	”	3.86	1.95	0.11	3.86	き－6・V層	
” 3	”	4.35	1.40	0.05	2.42	き－17	
” 4	”	6.64	1.70	0.21	9.84	お－6・Ⅲ層	
” 5	座	1.40	1.40	0.19	0.89	お－6・V層	
” 6	”	4.15	1.67	0.24	1.91	お－8・I層	
” 7	鋌	3.52	0.62	0.10	1.52	お－7・Ⅲ層	
” 8	留具	1.73	1.40	0.09	0.51	く－15・Ⅱ層	
” 9	”	1.58	1.38	0.04	0.36	か－16・Ⅱ層	
” 10	装飾金具	4.08	1.36	1.37	11.21	か－12・I層	
” 11	”	1.82	1.16	0.94	1.03	き－15・V層	
” 12	”	1.80	0.90	0.15	0.82	え－3・V層	
” 13	毛抜き	4.06	0.58	0.19	5.84	き－4・V層	
” 14	分胴	1.80	1.29	0.94	10.99	か－15・Ⅲ層	
” 15	釣針	8.77	0.60	0.20	2.62	き－15・土坑No.1,地山下20/30	
” 16	釘	3.05	0.46	0.20	1.36	き－18・Ⅲ層	
” 17	”	3.20	0.56	2.05	1.63	き－18・Ⅲ層	
” 18	”	3.40	0.50	1.05	1.37	か－7・Ⅱ層	
第 48 図 19 図版 42 の 19	簪	6.60	0.25	0.20	0.85	く－16・Ⅳ層	
” 20	”	8.10	1.10	0.25	2.76	お－8・V層基壇内	
” 21	”	8.70	0.60	0.08	1.38	お－5・V層	
” 22	”	9.10	0.61	0.13	3.83	－	
” 23	花生け	－	－	－	236.60	え－2・I層	口径7.90cm・残存高7.10cm
” 24	用途不明	5.00	0.45	0.10	3.15	え－9・V層基壇内	
” 25	”	4.76	1.35	0.12	4.28	え－2・土坑内	
” 26	”	4.65	0.97	0.30	6.27	お－9・V層基壇内	
” 27	”	11.37	0.15	0.17	1.48	う－2・I層	
” 28	”	10.52	0.33	0.25	2.26	え－3・Ⅲ層	
” 29	”	7.90	0.20	0.10	1.01	お－5・V層	
” 30	”	3.85	0.24	0.49	3.39	溝状遺構	
” 31	”	－	－	0.07	0.40	か－14・Ⅱ層	直径1.55cm

法量の単位はg・cmである



第47図 (図版41) 青銅製品：八双金具 (1~4)・座 (5・6) 鋏 (7) 留具 (8・9)  
 装飾金具 (10~12)・毛抜き (13)・分銅 (14)・釣針 (15)・釘 (16~18)



第48図 (図版42) 青銅製品：簪 (19~22)・花生け (23)・用途不明金具 (24~31)



#### 14. 鉄製品

第23表に示したとおり、総数344点得られた。種類としては、鉄鍬・釘・刀子などであった。その他の製品は、腐食が著しくその種類を判別するのに困難であった。その中で最も多く確認されたのが、鉄釘である。鉄釘はそのサイズにいくつかの種類が見られた。

鉄鍬は、のみ状の両刃のものと柳葉状の2種が見られた。刀子も小型のものから中型のものが確認された。以下に出土表と計測表を示した。

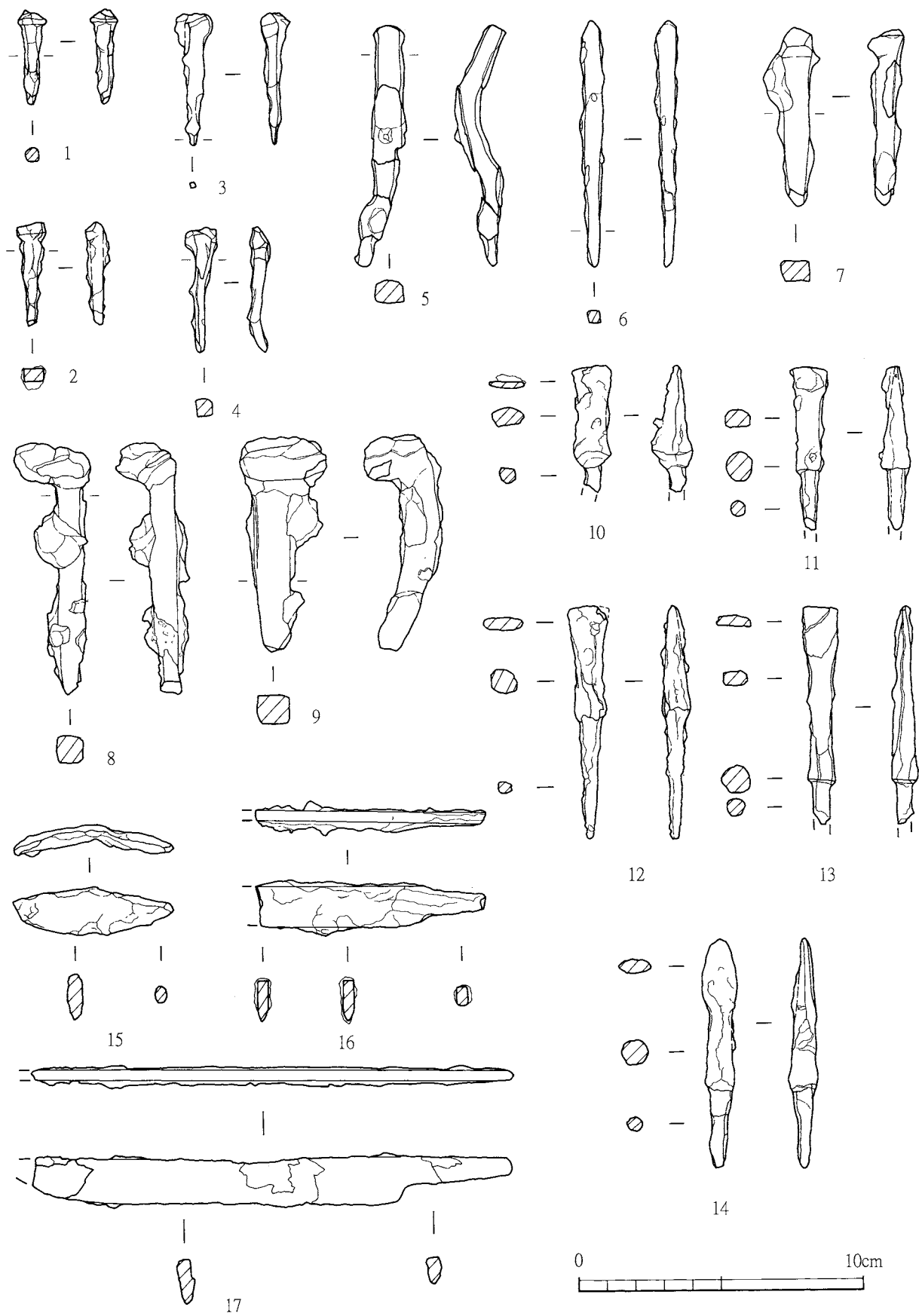
第23表 鉄製品出土一覧

層序	種類	釘	鍬	刀子	工具類 (錐?)	板状	ヘラ状	三日月形?	U字型	不明	合計
第Ⅰ層		30				4		1		14	49
第Ⅱ層		47			1	1				24	73
第Ⅲ層		34	2			5				16	57
第Ⅳ層		23		1		1				10	35
第Ⅴ層		64	4	2		6			1	24	101
基壇内Ⅱ層		1								1	2
基壇内Ⅴ層		4				1					5
溝状遺構			1								1
集石		1									1
瓦溜まり					1					2	3
土坑No.6		1									1
攪乱		5		1		1				2	9
不明		5					1			1	7
合計		215	7	4	2	19	1	1	1	94	344

第24表 鉄製品計測一覧

(cm, g)

計測No.	挿図番号 図版番号	種類	最大長	最大幅	厚さ	重量	グリッド	層序
339	第49図 版43の1	釘	3.30	0.66	0.50	2.70	か-6	V層
340	" 2	釘	3.52	1.00	0.55	3.10	え-3	Ⅳ層
331	" 3	釘	4.60	0.61	0.20	3.76	お-8	V層基壇内
330	" 4	釘	4.45	0.48	0.35	2.75	か-3	Ⅱ層
334	" 5	釘	8.45	0.97	0.80	20.29	え-3	V層
329	" 6	釘	8.65	0.71	0.50	11.31	お-16	V層土坑No.6
328	" 7	釘	6.30	0.95	0.80	15.69	不明	V層清掃中
327	" 8	釘	8.85	0.98	1.00	40.12	お-5	V層
326	" 9	鍬	7.60	1.15	1.00	70.75	お-5	V層
348	" 10	鍬	4.26	1.26	1.35	9.80	お-3	V層10/20
345	" 11	鍬	5.71	1.33	1.04	10.90	か-7	Ⅲ層
349	" 12	鍬	8.10	1.36	0.98	12.00	お-6	V層
344	" 13	鍬	7.29	1.21	0.88	12.20	き-9	Ⅲ層
347	" 14	鍬	8.00	1.22	1.09	12.90	き-6	V層
343	" 15	刀子	5.70	1.17	0.57	10.20	き-4	V層
342	" 16	刀子	8.05	1.90	0.77	18.40	き-4	V層
341	" 17	刀子	16.82	1.72	0.61	34.73	不明	南側石段清掃



第49図 (図版43) 鉄製品：釘 (1~9)・鍬 (10~14)・刀子 (15~17)

## 15. ガラス製玉類

本遺跡から得られたガラス製玉類は、総数33点を数える。ここでは、21点を第50図に示した。なお、個々の資料の特徴は、第25表に譲る。

本資料は、第Ⅳ層以外の全ての層序から得られている。種類としては、勾玉（1点）、管玉（1点）、小玉（31点）の3種が見られた。なお、ここで小玉とした資料は、白玉・丸玉・平玉・棗玉など多種の分類註がなされているものを便宜上、一括して扱うこととした。平面観は、円形を呈するものがほとんどを占める中で六角形を呈するものが1点得られている（第50図3）。同資料の側面観は、六角錐の上端と下端をすぼめた形状（算盤玉に面取りを施した形状）となる。他の小玉の側面観は、縦長および横長に扁平な楕円形を呈するものとほぼ円形になるものが見られる。最大径は、最大1.80cm、最小0.30cm、平均0.648cmである。重量は最も重いものが5.852g、軽いものが0.1gで、平均0.681gである。その中で、最大径0.3cm～0.5cm、重量0.01g～0.15gまでの資料が最も多い。また、重量と最大径の割合から、資料の比重について検討を試みた結果、最大径と比重は正比例する傾向にあった。色調は、透明、乳白色、緑色、青色、紫色など多様な様相を呈する。制作技法が窮えるものとしては、側面に、螺旋状に条線が残る資料の他に、上端部に突起を残すもの（同図19）や切り込みを残す資料（同図20）が得られており、巻き付けによる技法が推察される。

註 藤田富士男「考古学ライブラリー52 玉」ニューサイエンス社 1989年

## 16. 土製小玉

本遺跡から得られた土製の小玉は、総数56点を数える。ここでは、6点を第50図に示した。なお、個々の資料の特徴は第26表に譲る。

資料のほとんどは、お-15グリッド、第Ⅰ層からの出土である。第Ⅱ層からは3点得られている。直径の最大は1.70cm、最小0.85cmで平均1.06cmである。重量の最も重いものは3.661g、軽いものは0.495gで平均0.791gである。その中で、最大径0.9cm～1.05cm、重量0.45g～0.69gまでの小振りの資料が最も多い。色調はほとんどが暗褐色を呈し、焼成は良好で硬質である。市内では、類似資料が幾つか報告されている。註

註『識名シーマ御嶽遺跡』那覇市教育委員会 1997年

## 17. 骨鏃

全長8.50cmを測る有茎の鏃が1点検出されている。先端を若干欠損しているものの、ほぼ完形である。全体に丁寧な面取りと研磨が施されている。刃部は、長さ3.7cm、最大幅1.4cm、断面は、扁平な菱形を呈し、縦方向に稜がみられる。基部は、長さ2.4cm、最大幅0.9cm、断面は、くずれた六角形を呈する。茎部は、長さ2.4cm、最大幅0.5cm、断面は、くずれた五角形を呈する。骨鏃は、勝連城跡三の郭で、鉄鏃67点とともに、27点検出されている。註材質は未同定。か-9グリッド、第Ⅲ層出土。

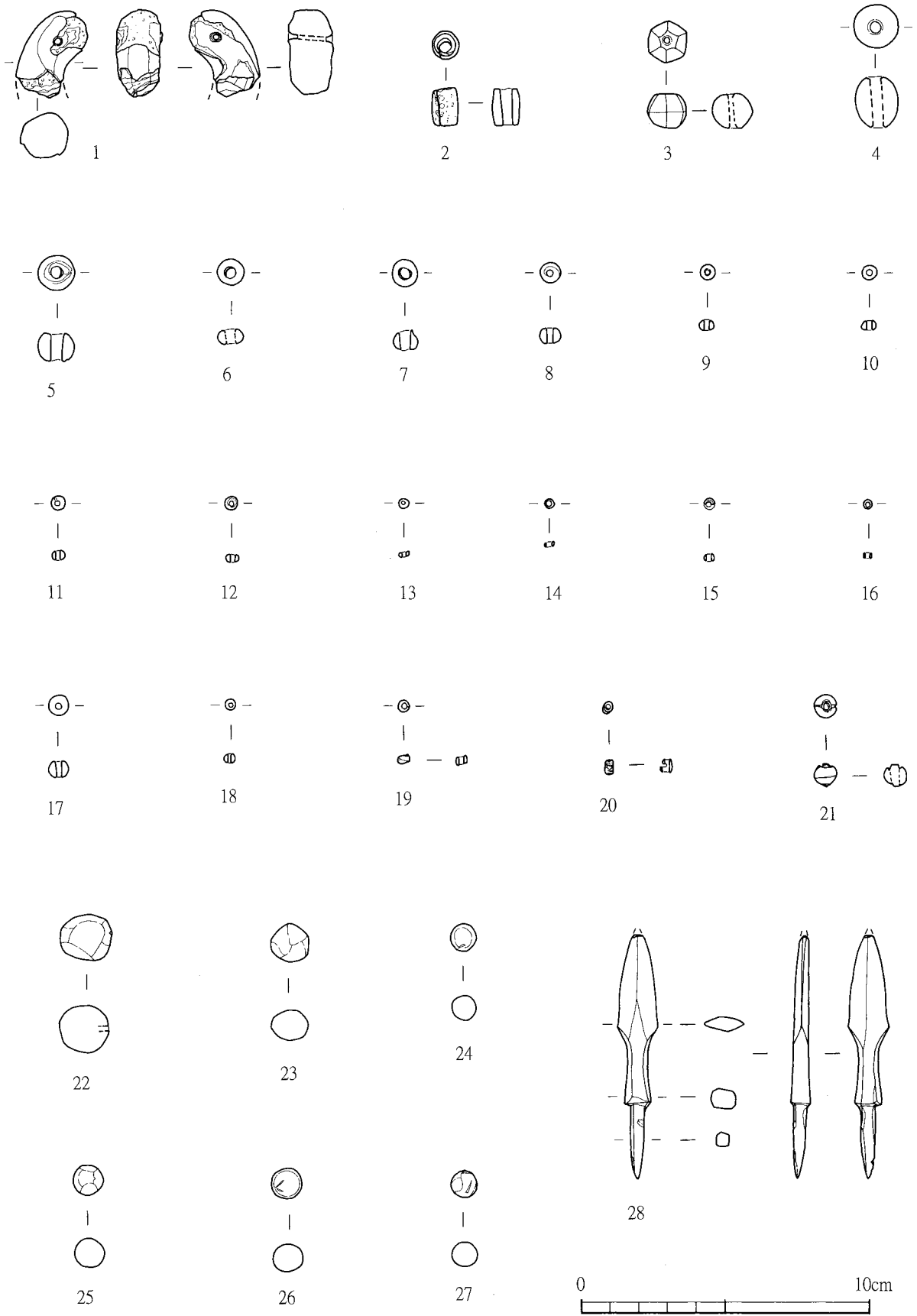
註『勝連城跡一北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査一（1）』沖縄県・勝連町教育委員会 1990年

第25表 ガラス製玉類観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	種類	形状	法量 (cm, g)				色 調	備 考
				最大径	高さ	孔径	重量		
第50図1 図版44の1	きー7 第V層	勾玉		3.00 (長さ)	1.60 (幅)	0.20	11.882	黄白色	尾部を欠損する。風化が進み、剥離が著しい。尾部の破損面の色調は、濃緑色を呈する。
〃 2	きー5 第V層	管玉		1.00	1.30	0.40	1.600	淡青色	表面に気泡状のあばたが多数見られる。光沢なし。
〃 3	きー6 第V層	小玉	六角形	1.45	1.20	0.25	2.178	淡白色	表面は風化が著しい。
〃 4	きー18 第II層	〃	円形 縦楕円	1.50	1.80	0.40	5.628	透 明	丁寧な造りである。上下の孔とも丁寧に研磨が施される。
〃 5	きー16 第I層	〃	円形 横楕円	1.30	1.00	0.40	1.774	濃青色	孔の下端部の調整が雑な資料。表面に光沢がある。側面には、横位に走る条線が残る。
〃 6	かー15 第III層	〃	〃	0.95	0.50	0.45	0.600	透 明	全体に丁寧な造りである。
〃 7	かー15 第III層	〃	〃	1.95	0.75	0.45	0.595	乳白色	孔の下端部の調整が若干雑である。側面には、横位に走る条線が残る。上端部に突起が残る。
〃 8	おー12 第III層	〃	〃	0.70	0.60	0.20	0.307	黄緑色	風化した表面の一部に濃緑色の部分が見える。側面には横位に走る条線が残る。
〃 9	きー12 第III層	〃	〃	0.55	0.35	0.20	0.150	透 明	側面には、横位に走る条線が残る。
〃 10	かー12 第I層	〃	〃	0.55	0.35	0.20	0.158	濃緑色	表面には、気泡が多数見られる。側面には、横位に走る条線が残る。光沢はなし。
〃 11	おー11 第I層	〃	〃	0.55	0.35	0.20	0.121	淡緑色	表面には、気泡が多数見られる。側面には、横位に走る条線が残る。光沢はなし。
〃 12	かー12 第I層	〃	〃	0.50	0.30	0.17	0.086	淡緑色	表面には、気泡が多数見られる。側面には、横位に走る条線が残る。光沢はなし。
〃 13	南側溝内 〃	〃	〃	0.40	0.20	0.15	0.036	淡緑色	側面には、横位に走る条線が残る。表面に光沢はなし。
〃 14	かー12 第I層	〃	〃	0.35	0.20	0.20	0.017	濃緑色	側面には、横位に走る条線が残る。孔の径が本体に比べ大きめである。
〃 15	きー16 第II層	〃	〃	0.40	0.25	0.15	0.029	淡緑色	過半を欠損する。
〃 16	かー19 第I層	〃	〃	0.30	0.20	0.15	0.020	淡青色	丁寧な造りである。表面に光沢があり、光をあてると虹色に光る。最小径の資料。
〃 17	かー12 第I層	〃	円形	0.70	0.60	0.20	0.407	透 明	内部に小さな気泡がみられる。孔の上下端部に剥離が残る。
〃 18	おー15 第I層	〃	〃	0.40	0.30	0.10	0.065	紫 色	側面には、横位に走る条線が残る。表面に光沢がある。
〃 19	おー17 第I層	〃	横楕円	0.40	0.35	0.20	0.051	濃緑色	表面に光沢はなし。上端部に突起が残る。
〃 20	おー6 第II層	〃	〃	0.35	0.50	0.20	0.068	淡緑色	表面は不透明である。2個体がつながった状態での出土。側面には、横位に走る条線が残る。
〃 21	うー2 第V層	〃	〃	0.80	0.70	0.20	0.609	淡緑色	孔の中に棒条の物質が遺存する。表面は風化が進む。側面には、横位に条線が走る。
	えー2・第I層	〃	〃・円形	0.35	0.30	—	0.061	淡青色	表面は光沢なし。上下に突起が残る。 計測No1
	かー6・第II層	〃	〃・横楕円	0.40	0.25	0.10	0.059	淡青色	〃。気泡がみられる。 〃 2
	えー3・第II層	〃	〃・〃	0.35	0.15	0.10	0.021	淡青色	〃。側面に、横位の条線が残る。 〃 3
	えー3・第II層	〃	〃・〃	0.35	0.20	0.15	0.027	淡緑色	〃。 〃 〃 〃 4
	きー12・第I層	〃	〃・〃	0.40	0.20	0.20	0.036	淡青色	〃。孔の径がやや大きめである。 〃 5
	きー11・第III層	〃	〃・〃	0.96	0.65	0.40	0.677	淡青色	表面は透明感があり、気泡がみられる。側面には、横位の条線が残る。 〃 6
	おー16・遺構内	〃	〃・円形	0.70	0.55	0.15	0.396	暗黄褐色	土坑No11から検出。風化が進み、若干剥離する。 〃 7
	かー6・第V層	〃	〃・横楕円	0.30	0.20	0.10	0.010	淡黄褐色	孔の下端部が剥離する。 〃 8
	うー2・第I層	〃	〃・円形	0.65	0.55	0.10	0.233	淡紫色	表面に気泡が見られる。光沢はなし。 〃 9
	うー2・第I層	〃	〃・横楕円	1.80	1.35	0.25	5.852	淡黄色	風化が著しく進む。剥離面の一部は白色になる。 〃 10
	えー3・第II層	〃	〃・円形	0.50	0.40	—	0.134	淡緑色	風化が著しく進む。 〃 11
	おー7・第III層	〃	—	—	—	—	0.696	淡青色	破片。全体に打ち欠かれた剥離面が残る。 〃 12

第26表 土製小玉観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	出土層序	法量 (cm・g)		焼成	色調	備考
			最大径	重量			
第50図22 図版44の22	き-16	第Ⅱ層	1.80	3.661	良好・硬質	淡黄褐色	得られた資料の中で最大。指圧などによって仕上げられているが、完全な球体ではなく、雑である。
” 23	く-16	第Ⅱ層	1.45	1.861	”	橙褐色	雑な仕上げで、やや扁平になる。
” 24	お-15	第Ⅱ層	1.00	0.551	”	暗褐色	ほぼ球体に仕上げられる。
” 25	お-15	第Ⅰ層	1.10	0.601	”	”	”
” 26	お-15	第Ⅰ層	1.50	0.663	”	”	”
” 27	お-15	第Ⅰ層	0.95	0.495	”	”	”
	お-15	”	1.20	1.00	良好・硬質	暗褐色	ほぼ球体に仕上げられる。計測No1
	”	”	1.20	0.90	”	”	” 2
	”	”	1.10	0.90	”	”	” 3
	”	”	1.10	0.80	”	”	” 4
	”	”	1.40	1.60	”	”	完全な球体ではなく、雑である。 ” 5
	”	”	1.20	1.20	”	”	ほぼ球体に仕上げられる。 ” 6
	”	”	1.30	1.40	”	”	” 7
	”	”	1.10	0.90	”	”	” 8
	”	”	1.15	1.10	”	”	” 9
	”	”	1.15	1.00	”	”	” 10
	”	”	1.10	1.90	”	”	” 11
	”	”	1.10	0.70	”	”	” 12
	”	”	1.10	0.80	”	”	” 13
	”	”	1.05	0.80	”	”	” 14
	”	”	1.00	0.70	”	”	” 15
	”	”	1.10	0.90	”	”	” 16
	”	”	0.90	0.50	”	”	” 17
	”	”	1.00	0.60	”	”	” 18
	”	”	1.10	0.70	”	”	” 19
	”	”	1.10	0.90	”	”	表面がザラザラしている。 ” 20
	”	”	1.00	0.60	”	”	ほぼ球体に仕上げられる。 ” 21
	”	”	0.95	0.50	”	”	扁平な楕円形になる。 ” 22
	”	”	0.90	0.60	”	”	ほぼ球体に仕上げられる。 ” 23
	”	”	0.90	0.50	”	”	” 24
	”	”	0.90	0.50	”	”	” 25
	”	”	0.90	0.30	”	”	” 26
	”	”	0.95	0.60	”	”	完全な球体ではなく、雑である。 ” 27
	”	”	1.15	0.80	”	”	扁平な楕円形になる。 ” 28
	”	”	1.00	0.50	”	”	ほぼ球体に仕上げられる。 ” 29
	”	”	1.00	0.60	”	”	” 30
	”	”	0.90	0.50	”	”	” 31
	”	”	0.80	0.30	”	”	” 32
	”	”	0.90	0.50	”	”	” 33
	”	”	1.00	0.60	”	”	” 34
	”	”	1.00	0.60	”	”	” 35
	”	”	0.90	0.40	”	”	” 36
	”	”	0.80	0.30	”	”	” 37
	”	”	1.00	0.70	”	”	” 38
	”	”	0.95	0.60	”	”	” 39
	”	”	0.95	0.60	”	”	” 40
	”	”	0.90	0.60	”	”	” 41
	”	”	0.85	0.40	”	”	得られた資料の中で最小。 ” 42
	”	”	0.85	0.40	”	”	” 43
	お-14	”	1.35	1.60	”	”	表面の一部に亀裂が入る。 ” 44
	”	”	1.30	1.30	”	”	完全な球体ではなく、雑である。 ” 45
	”	”	0.95	0.50	”	”	ほぼ球体に仕上げられる。 ” 46
	か-19	”	1.10	0.90	”	”	” 47
	う-2	”	1.20	1.10	”	”	” 48
	う-2	”	-	0.20	”	”	破損。破損断面の色調は、黒褐色を呈する。 ” 49
	”	”	1.20	1.30	”	”	完全な球体ではなく、雑である。 ” 50



第50図 (図版44) ガラス製玉類：勾玉 (1)・管玉 (2)・小玉 (3~21)、土製小玉 (22~27)、骨鏃 (28)

## 18. 石製品

石製品は基石・硯・砥石や札状の石板・印章が得られている。以下基石より概述する。なお、各資料の詳細は観察一覧としてまとめたので参照されたい（第28～30表）。

### 基石

本遺跡より得られた資料は22点で、白色と黒色は共に11点である（第27表）。この内比較的良好な資料を7点図示した（第51図1～7）。色と形状によって下記のとおりに分けた。

I-W：形状は饅頭型で白色を呈するもの。（第51図1・2） 第27表 基石出土集計一覧

I-B： “ 黒色を呈するもの。（同図3）

II-W：形状は凸レンズ型で白色を呈するもの。

II-B： “ 黒色を呈するもの。（同図4～7）

層序 分類	I層	II層	III層	IV層	V層	小計	合計
B	2		2		1	5	
II	W		2			2	11
	B	8	1			9	
合計	11	4	3		4		22

第28表 基石観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	層序	分類	法量			観察事項
				径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第51図1 図版45の1	お-16	III層	I-W	1.6	0.7	2.27	全体が乳白色で光沢を帯びる。一部表面が剥離。
“ 2	か-17	II層	“	1.7	0.6	2.67	全体が乳白色。表面は細かいアバタ状を呈しザラザラした触感。底面の一部が剥離してガラス質の部分が見られる。
“ 2							
“ 3	お-12	I層	I-B	2.1	0.7	4.78	全体が黒色。上面頂部に気泡痕。上面の周縁部に流水文様の痕跡あり。
“ 3							
“ 4	お-15	“	II-B	2.2	0.6	2.42	全体が黒色。表面は部分的に光沢を帯びる。
“ 4							
“ 5	お-8	“	“	2.1	0.7	4.49	全体が黒色であるが、表面に油膜状の虹色の光沢が見られる。
“ 5							
“ 6	か-12	“	“	2.2	0.5	3.67	全体が黒色で光沢を帯びる。
“ 6							
“ 7	お-12	“	“	2.1	0.6	3.74	“ 表面に細かいアバタ状の穴が見られる。
“ 7							

### 硯

第51図8～11に図示したものである。大小様々で、8は4点の資料中最も小さく携帯用として使用されたものと考えられる。また9は丘の中央がかなり凹んでおり、使用した頻度が多かったかあるいは長時間使用されたものと推察される。

第29表 硯観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	層序	法量			観察事項
			縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	
第51図8 図版45の8	き-15	IV層	—	3.5	0.8	全体が暗褐色で、表面は丁寧に研磨されている。
“ 9	南側溝 (南斜面)	—	—	4.3	1.4	全体が淡緑色で、表面は丁寧に研磨されている。丘中央が著しく摩耗して凹む。
“ 10	か-19	I層	—	—	1.8	全体が暗褐色で、表面は丁寧に研磨されている。底面が浅く抉られている。
“ 10						
“ 11	か-18	—	—	4.7	2.3	全体は黄白色を基本とし、部分的に淡黒色と赤褐色が斑状に見られる。質的に砂質ばい石である。
“ 11						

### 砥石

第52図1～3に図示したものである。3点とも表面が丁寧に研磨されている。3については砥石に含めたが、四隅の一ヶ所に穴を穿ち、さらに片面には線彫で模様或いは文字らしきものがある点で前二者と若干雰囲気異なることから、別の製品として使用されていた可能性も考えられる。

第30表 砥石観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	層序	法 量			観 察 事 項
			縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	
第 52 図 1 図版46の 1	お-16	Ⅲ層	—	1.4	0.5	全体が淡灰色で、表面は丁寧に研磨されている。
” 2	”	—	—	—	0.4	淡褐色を基調とし、一部表面の剥離した部分が淡緑色を呈す。剥離面以外は丁寧に研磨されている。側面に細い沈線状の擦痕が数条見られる。
” 3 ” 3	お-15	Ⅳ層	3.9	2.8	0.7	全体が淡黄緑色で、多数の黒色物が付着。表面は丁寧に研磨され片面に線彫りの文様又は文字らしきものが見られる。側面に細かい沈線状の擦痕が数条見られる。四隅の一角所に径約4mmの穴が穿たれている。

印章

第52図4に図示したものである。色は全体に淡褐色を呈す。頂部に摘み状の突起を設け、肩部に同心円の段を作る。胴部上位は大きく張り腰部で括れながら「ハ」の字状に広がる底部を作る。一見すると小壺を連想させる形状である。頂部の突起には紐を通すためのものらしき径約1.5mmの穴が、上と横に各一ヶ所穿たれている。また、突起の側面に細い沈線が一条廻る。底部の印面に巴文が陰刻されている。高さ3cm、頂部突起の径8mm、胴部最大径2.6cm、括れ部径1.5cm、印面部径1.7cm、重量21.2gを測る。

19. 蓮華・小瓶・人形

陶磁器の製品として蓮華・小瓶・人形が得られている。各資料の詳細は観察一覧としてまとめたので参照されたい。(第31表)

蓮華

第52図5・6に図示したものである。共に柄の部分で、2点とも同じ規格の製品と考えられる。

小瓶

第52図7に図示したものである。類似資料が湧田古窯跡<sup>註1</sup>において得られている。葉瓶或いは嗅ぎたばこ入れの鼻煙壺<sup>註2</sup>の可能性が考えられる。

人形

第52図8・9に図示したものである。8は釉薬を掛けた磁器、9は無釉で本来白色土が塗られていたと考えられる陶質の製品である。

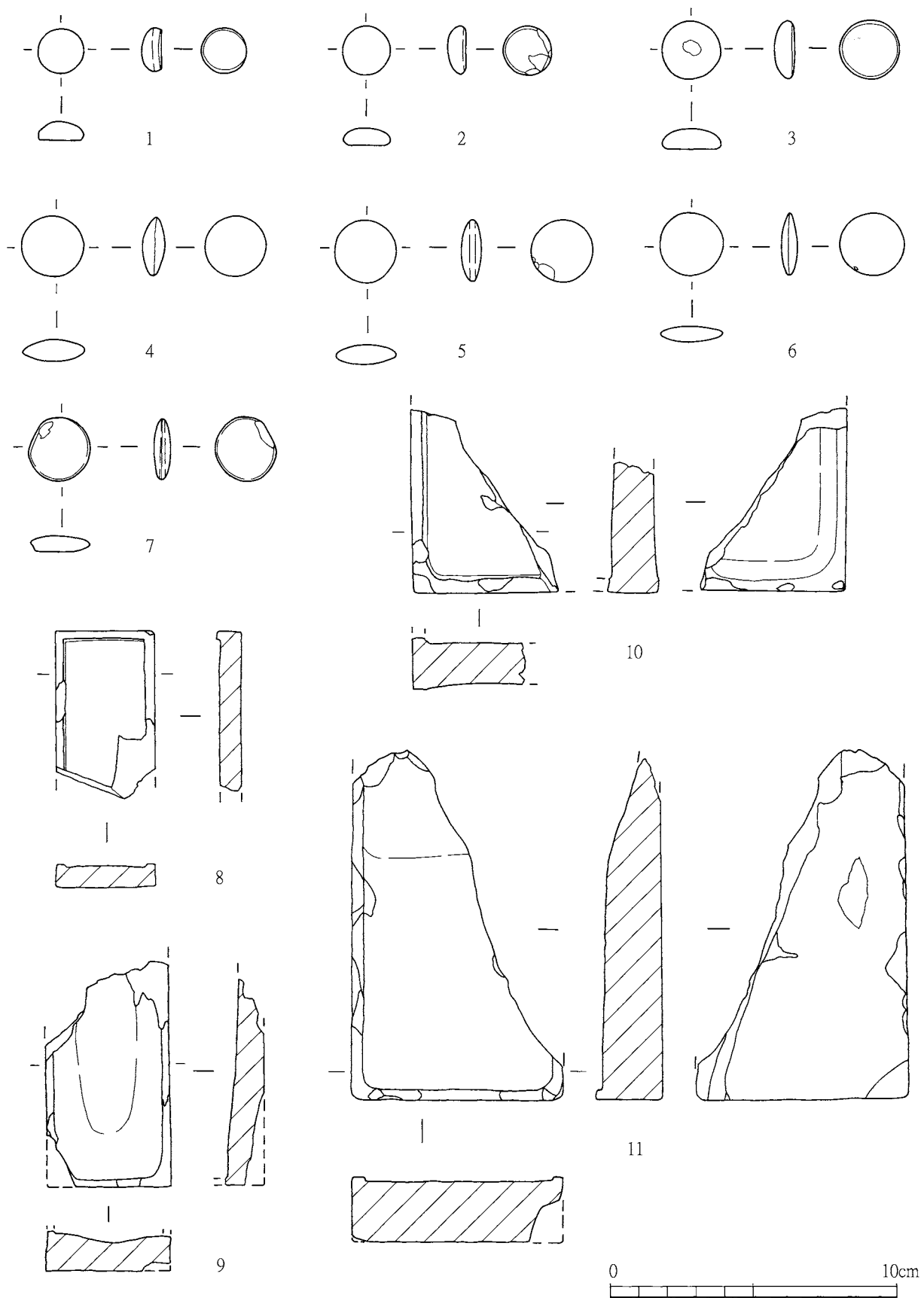
註1 大城慧・島袋洋『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会 1993年

註2 特別展「知られざる美術工芸の世界 嗅ぎたばこ入れ」たばこと塩の博物館 1998年

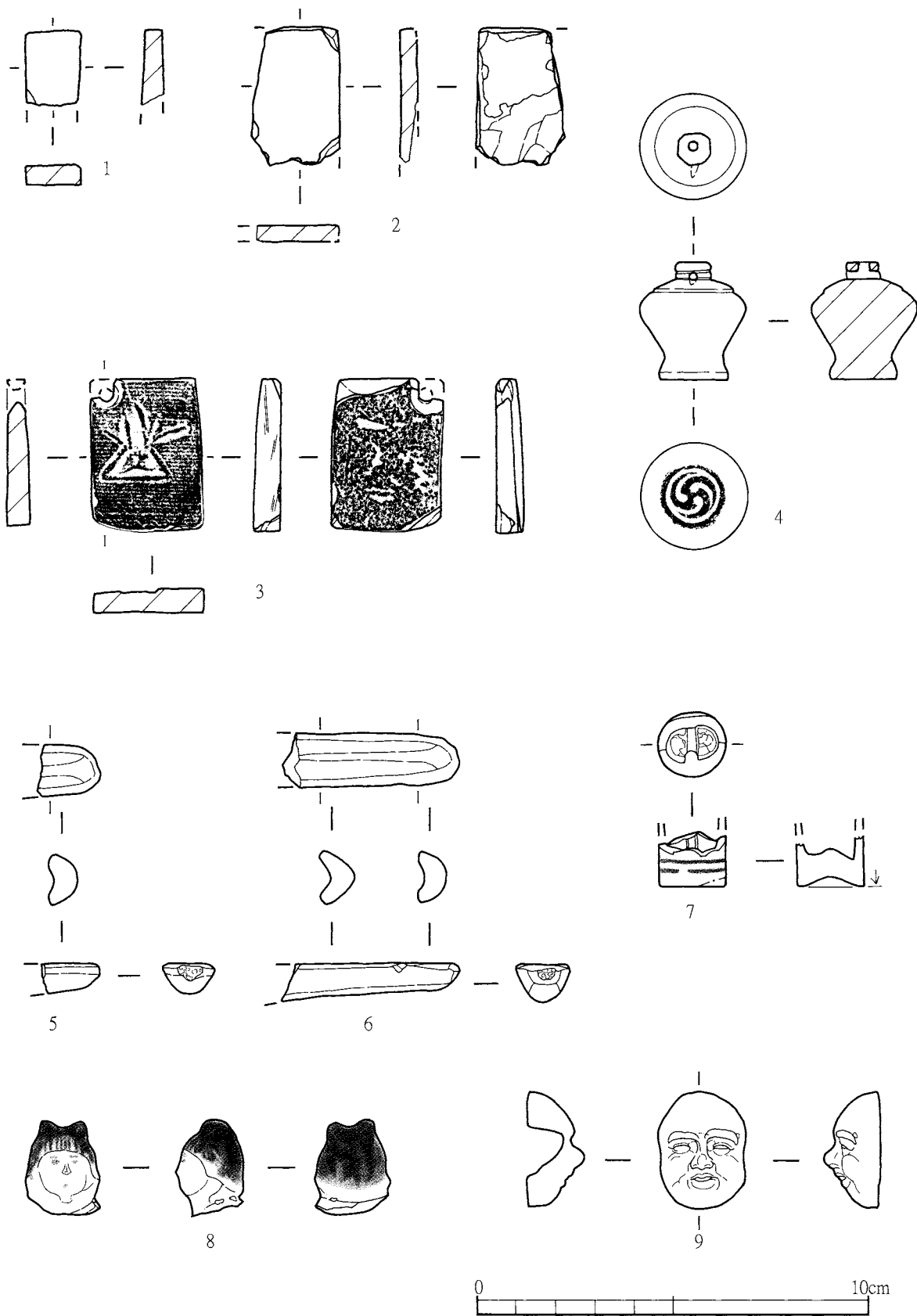
第31表 蓮華・小瓶・人形観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	層序	種 類	法 量				観 察 事 項
				幅 (cm)	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	
第 52 図 5 図版46の 5	お-14	Ⅳ層	蓮華	1.3	0.6	—	—	白色の胎土に透明釉を掛ける。上面中央が溝条に凹む。
” 6 ” 6	お-16	Ⅰ層	”	”	”	—	—	”
” 7 ” 7	表 採	—	小瓶	—	—	1.7	1.6	呉須による二本の圏線が廻る。底面が若干上げ底状。
” 8 ” 8	き-12	Ⅱ層	人形	—	—	—	—	子供或いは女性の人形頭部。白色の胎土に髪と目・口には呉須を掛け、全体に透明釉を掛ける。
” 9 ” 9	か-12	—	”	—	—	2.9	2.1	型押し成形による坊主?の人形顔面部。全体に淡橙色を呈し、部分的に白土が付着している。裏面が凹み内部に布目痕が見られる。





第51図 (図版45) 石製品：基石 (1~7)・硯 (8~11)



第52図 (図版46) 石製品：砥石 (1~3)・印章 (4)

陶磁器：蓮華 (5・6)・小瓶 (7)・人形 (8・9)

## 第Ⅶ章 まとめ

以上、発掘調査の成果について述べた。調査に至る経緯については、第Ⅰ章でも述べたとおり那覇市建設部の首里城線街路工事に伴う緊急発掘調査であった。調査は道路幅10.5mの限られた調査範囲であったが、多大な成果が得られた。また、県内において寺院跡の本格的な調査は初めてで、注目される遺構・遺物等が検出された。ここでは、それらの成果を踏まえて若干の要点に触れまとめとしたい。

層序は地山を含めて6枚確認された。第Ⅰ層は表土層で遺跡全体に見られたが、部分的には地山までおよぶ攪乱土層である。遺物は主に近・現代のものが得られたが、グスク～琉球王府時代の遺物も混在した形で見られた。

第Ⅱ・Ⅲ層は砂利を含む土層で遺跡全体を覆う形で見られた。第Ⅱ層の砂利はやや不安定であったが、第Ⅲ層からは安定的であった。この砂利は本堂跡周辺で顕著に確認され、意図的に播かれ遺跡内に堆積したものと思われた。境内の清めのために播かれたのか、類例資料等を比較してさらに検討をしたい。本層は天界寺の17世紀以降の時期に形成されたものと思われた。本堂跡・溝状遺構・Ⅰ地区の建物跡の根固め石等はこの時期のものと思われた。

第Ⅳ層は赤土の造成土で、僅かに遺物が見られた。特に、北側のⅢ地区において顕著に見られ、平場造成のためにⅠ・Ⅱ地区の赤土（地山）を切土し盛土したものと思われる。本土層も17世紀以降のものである。第Ⅴ層は黒色土層で遺跡の最下部で確認された土層である。基壇内とⅢ地区において顕著に見られた。遺物も最も多く得られた。14世紀後半から15世紀前半の遺物が殆どであった。

第Ⅵ層は赤土の地山土層である。その地山面に多数のピット群が検出された。そのピットも、従来見られるピットよりも一回り大きいもの等が幾つか確認された。さらに、柱を支えるための根固め石がしっかりしたものも見られた。

遺構はピット群・土坑・溝状遺構・本堂跡等の各種の遺構が確認された。その中でも、18世紀代の「首里古地図」に描かれている天界寺の本堂跡と思われる基壇が確認されたことは大きな成果と考える。基壇の築造は地山（赤土）を凸状に切りその回りに石積みを巡らすものである。基壇上には礎石が3基と根固め石が3箇所確認された。礎石の一つには塙をイメージさせる沈線が彫り込まれたものも確認された。

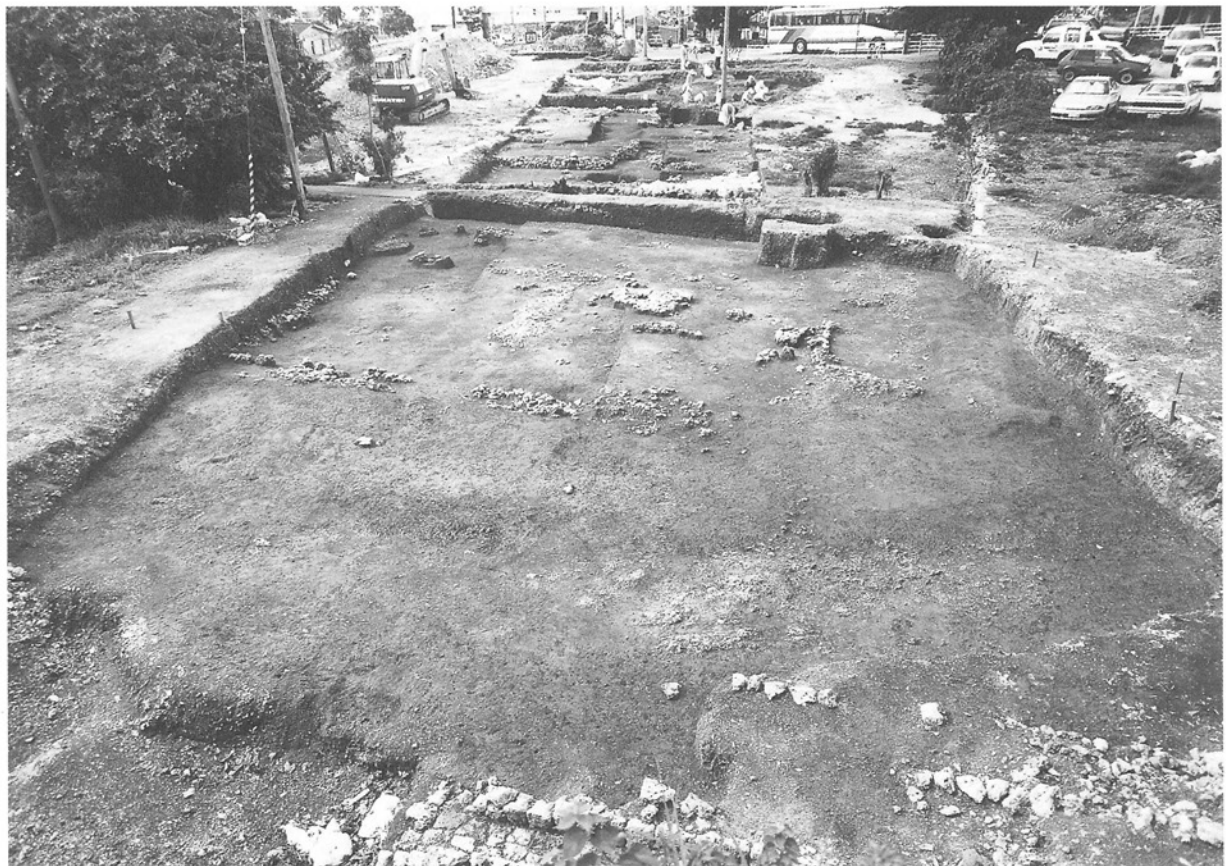
遺物は寺院跡を反映して多種多様の遺物が見られた。寺院の生活用品に用いられたものや直接宗教に関係するもの、さらに、建築物に関わる物などが多量に得られた。特に、白磁の皿や銭貨の出土が目についた。それらの遺物の年代観を見ると14世紀後半～、16世紀後半～のものに大きく分けられる。

以上、今回は膨大な資料の中から注目される遺構・遺物等を中心に報告した。その他にも、沖縄産陶器・タイ産土器・石製品など留意される資料が出土したが、今回は時間の都合上割愛した。今後、改めて報告したい。



# 圖 版





図版1 上：調査地区全景（北側より）  
下： “ ” （南側より）



I 地区 調査風景



II 地区 調査風景



III 地区 ピット調査風景

図版 2 発掘調査風景





図版3 層序 上：5ライン北壁  
下：えー3 西壁



図版4 I地区の遺構 上：溝状遺構  
下：建物跡



I・II地区の調査区



基壇跡（北側より）



基壇跡（西側より）



砂利層の露出状況

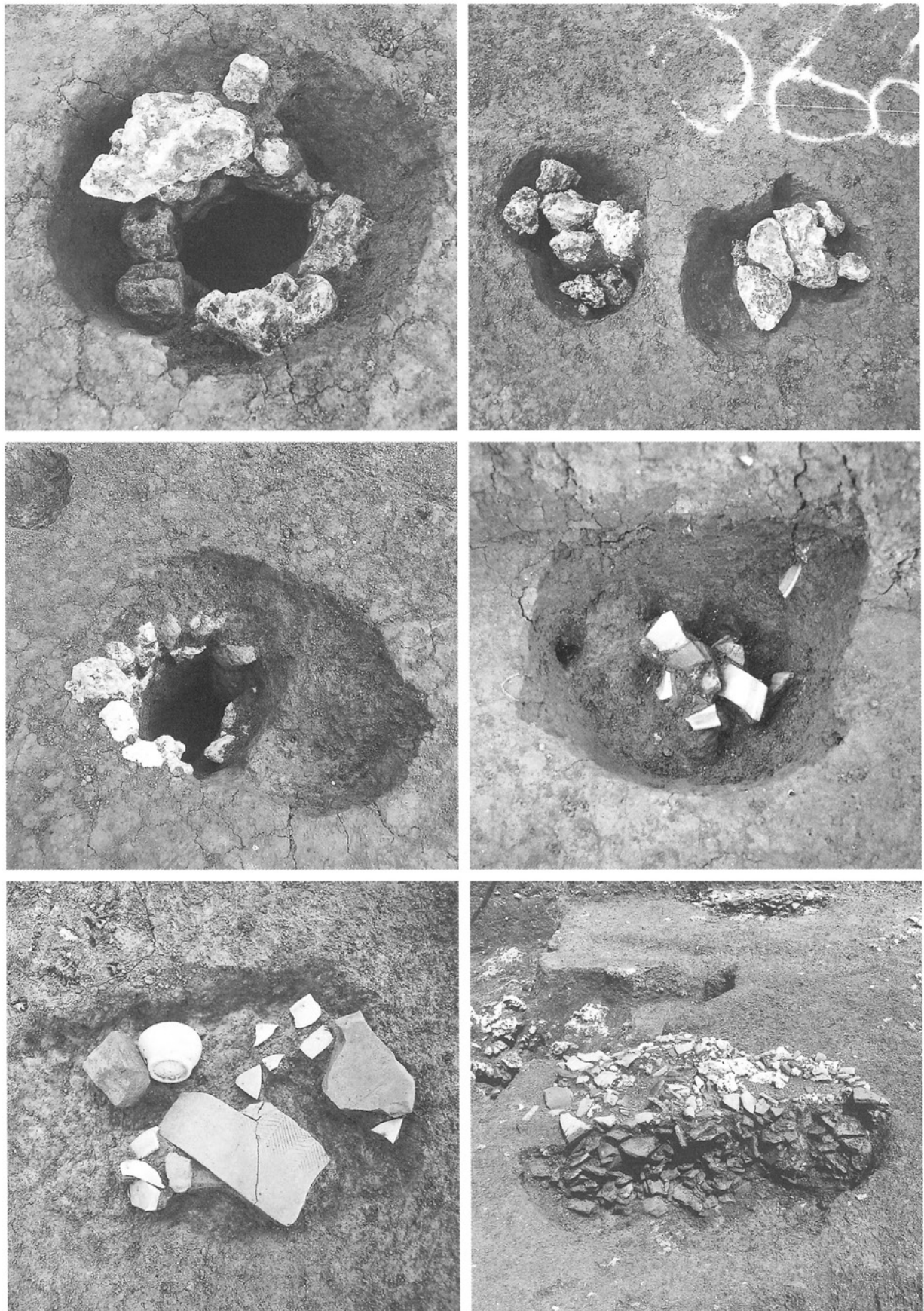


ピット群の露出状況

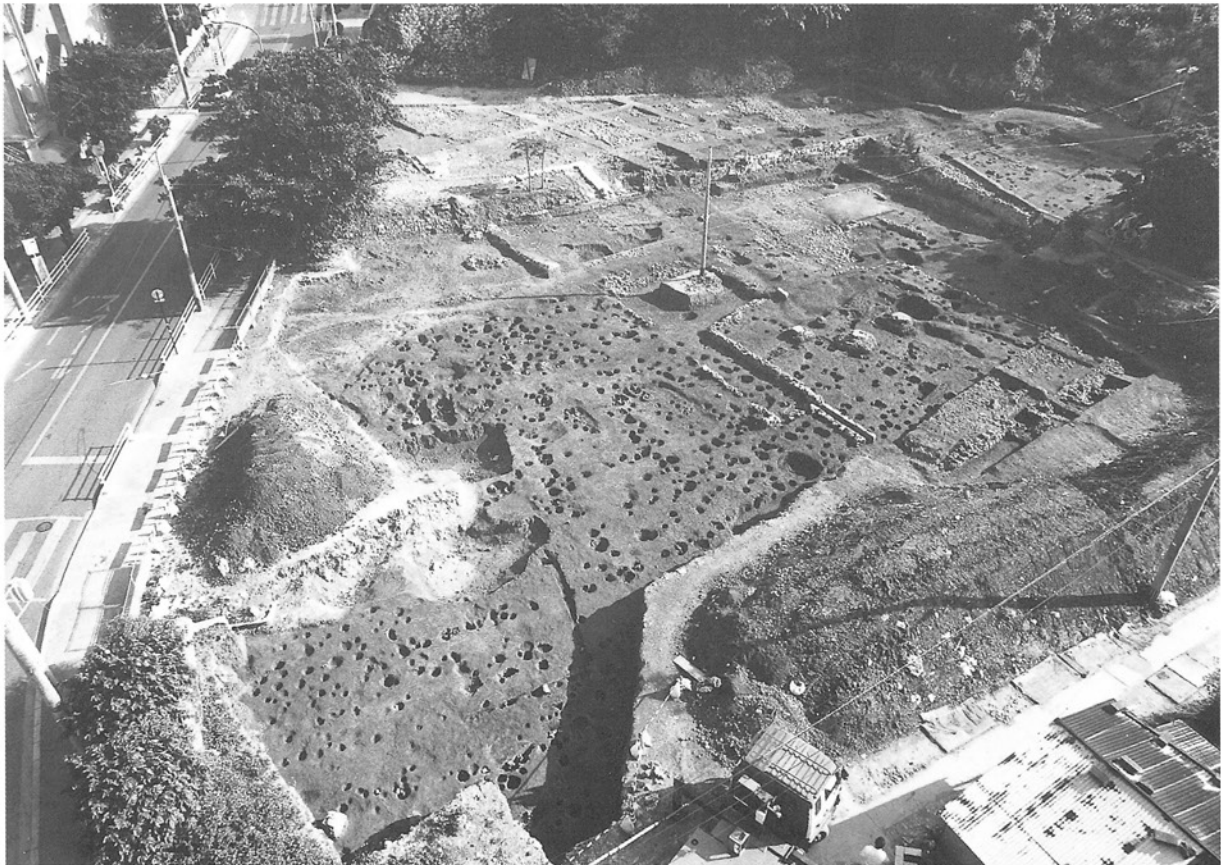


ピット群の完掘状況

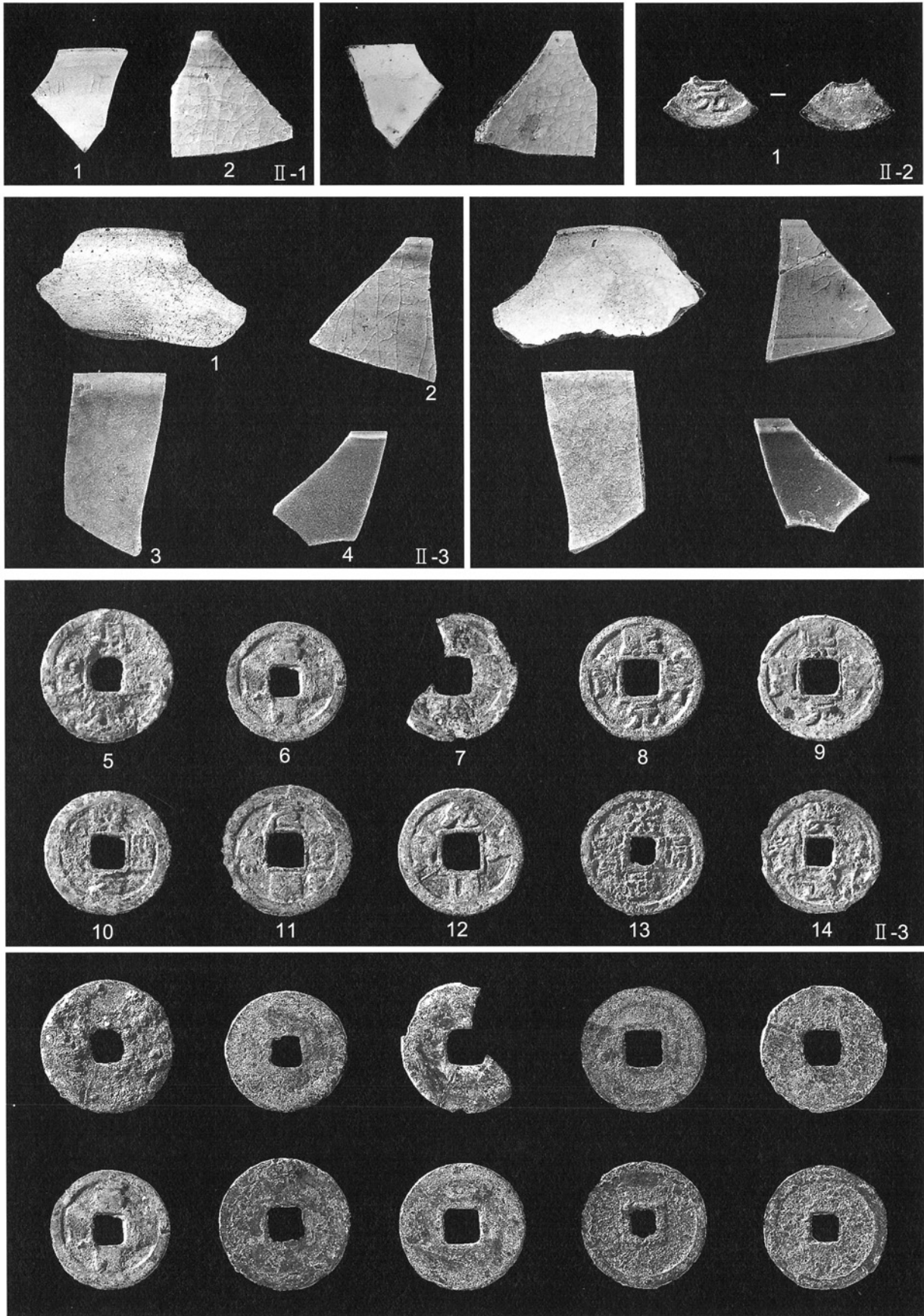
図版6 Ⅲ地区の遺構



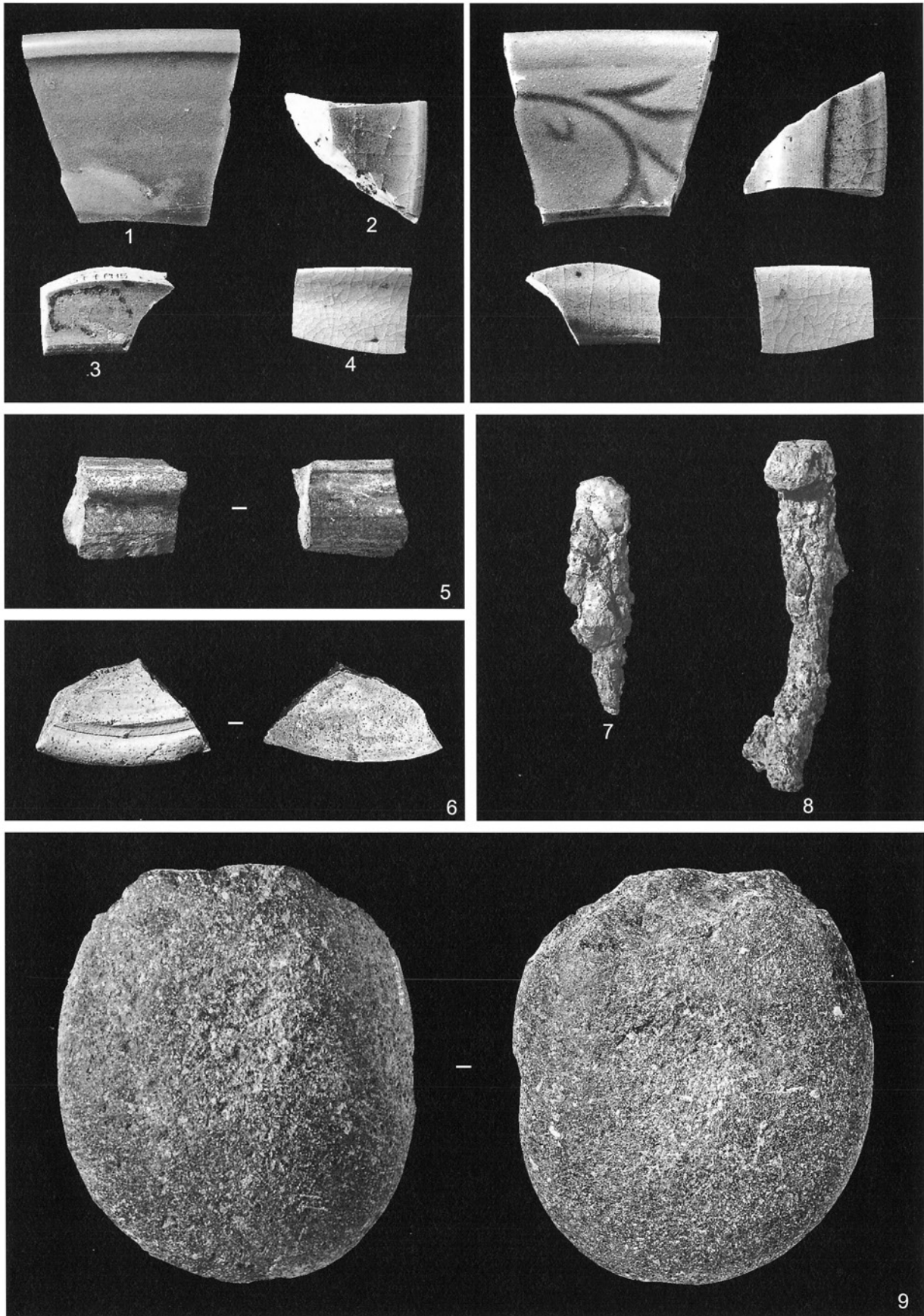
図版7 主なピット 上：左No.223, 右No.114と115  
 中：左No.232, 右No.197  
 下：左No.198, 右瓦溜りNo. 1



図版 8 完掘状況 上：南側より  
下：南西より

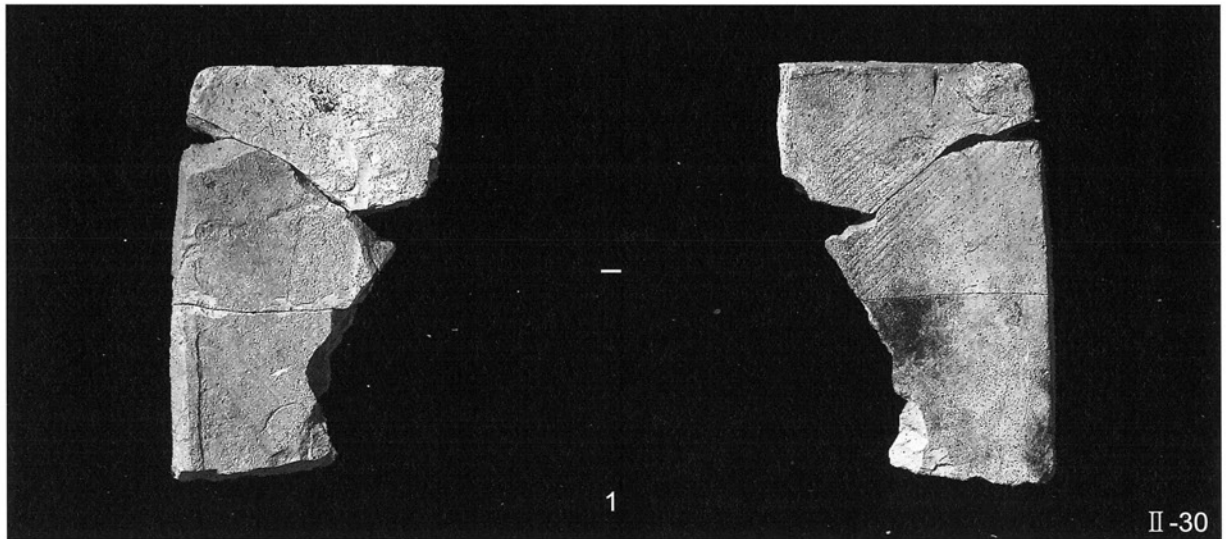
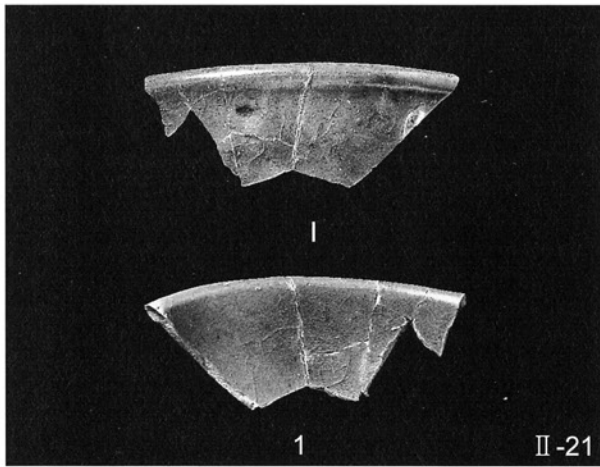
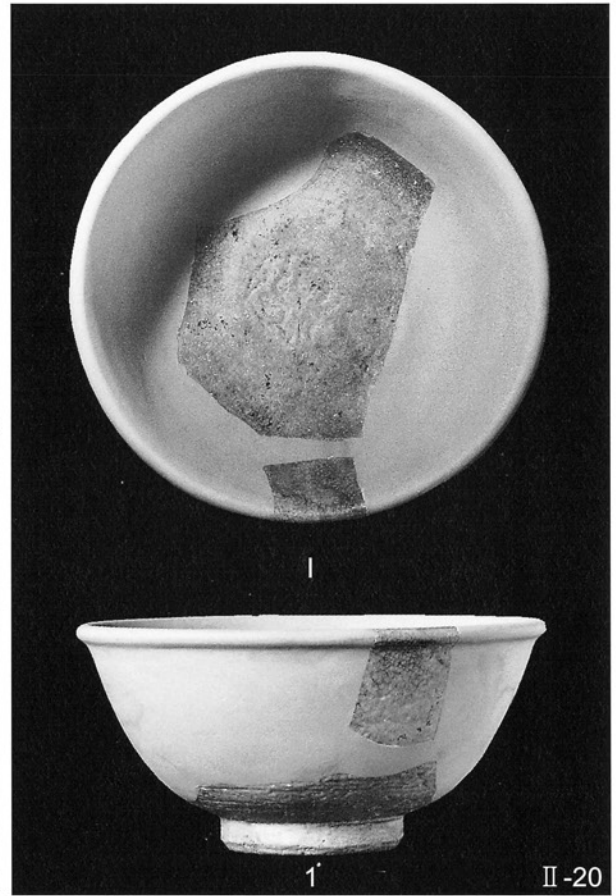
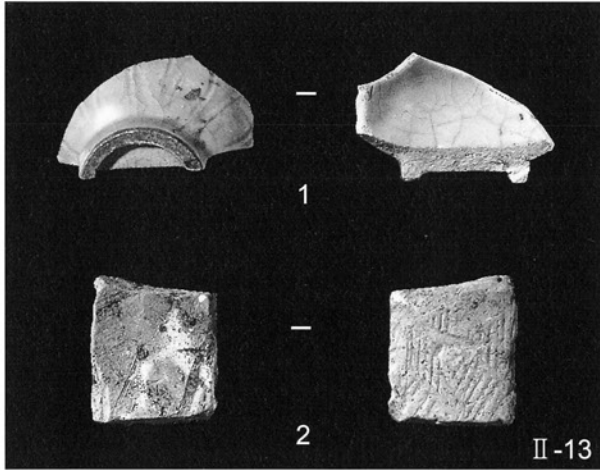
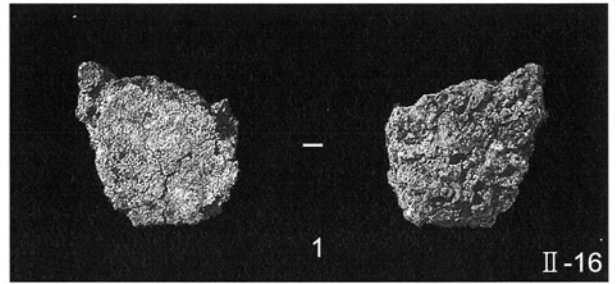
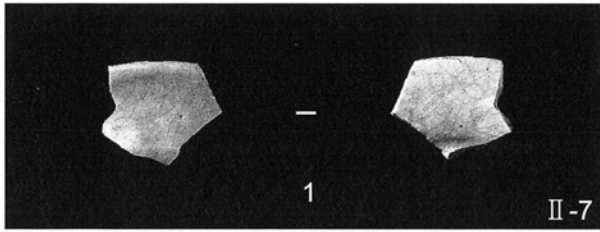


図版9 (第12図) II地区ピット (No.1・2・3) 出土遺物

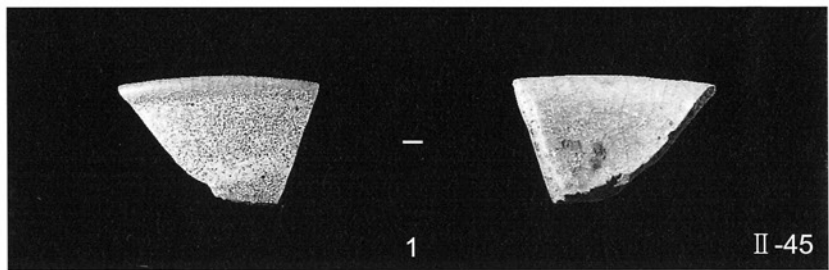
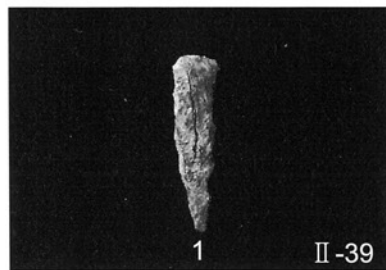
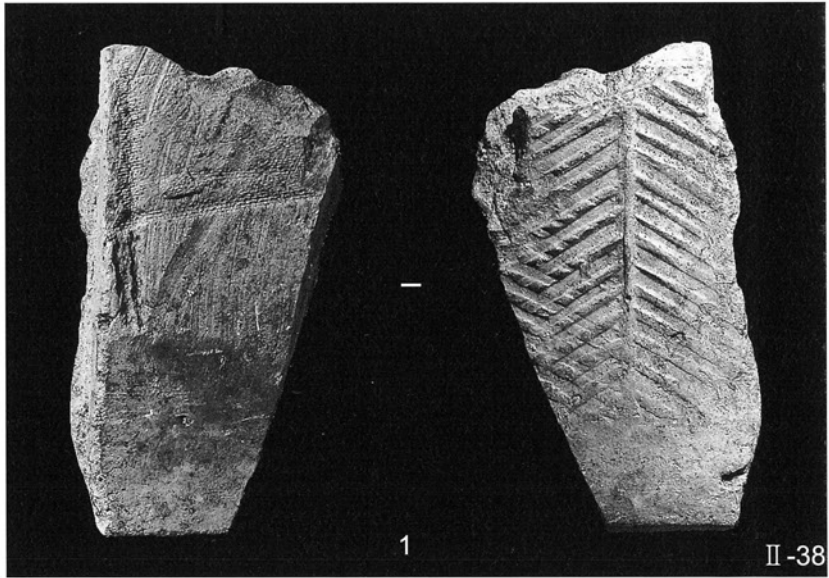
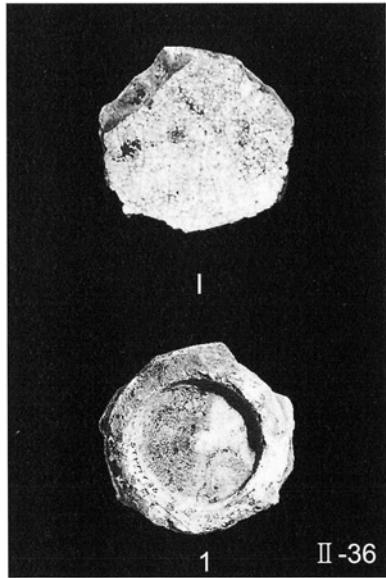
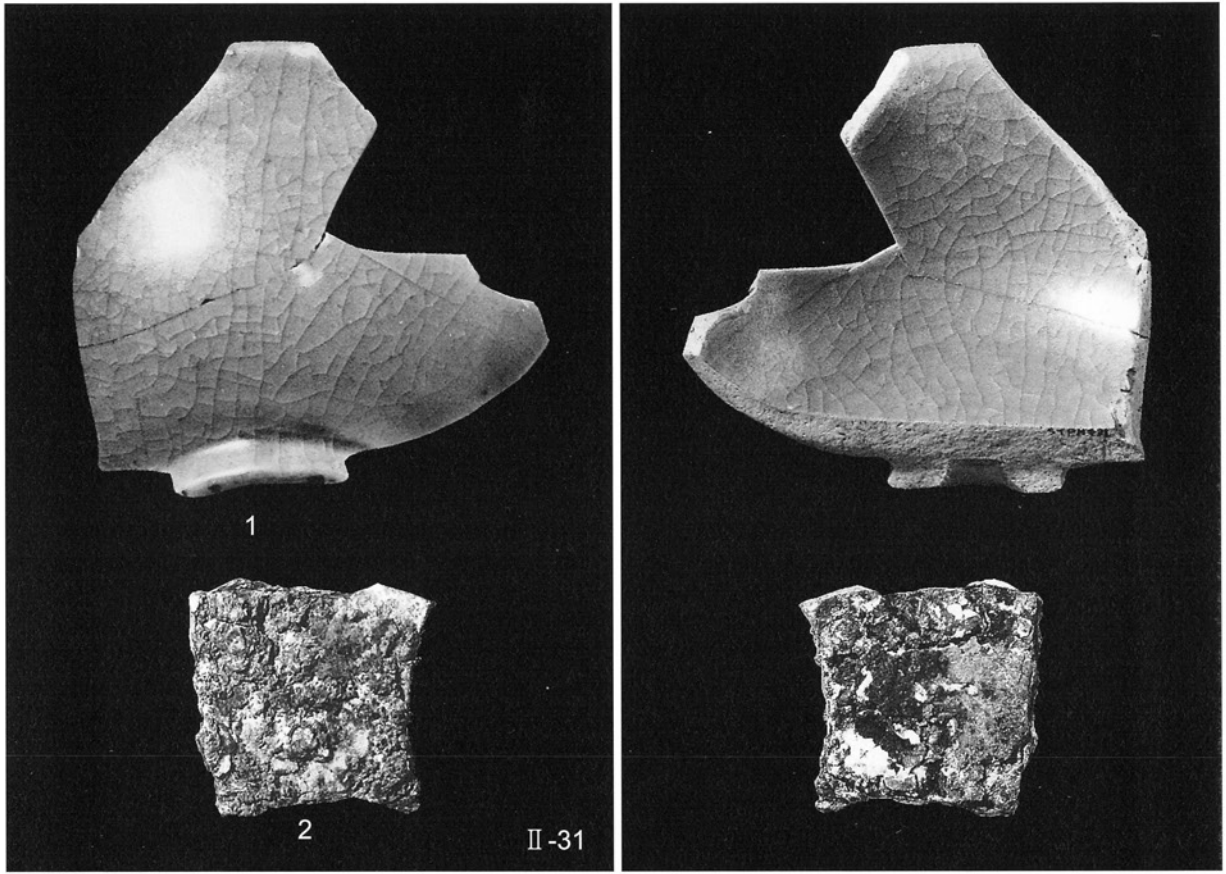


図版10 (第13図) II地区ピット (No.5) 出土遺物

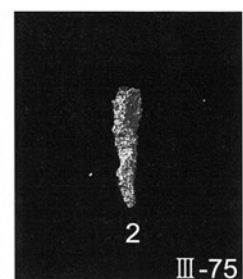
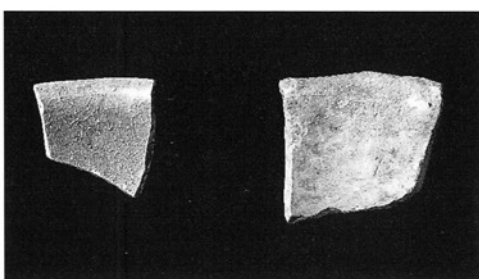
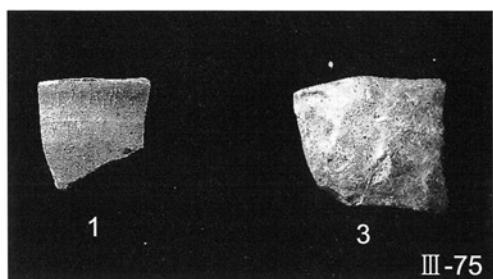
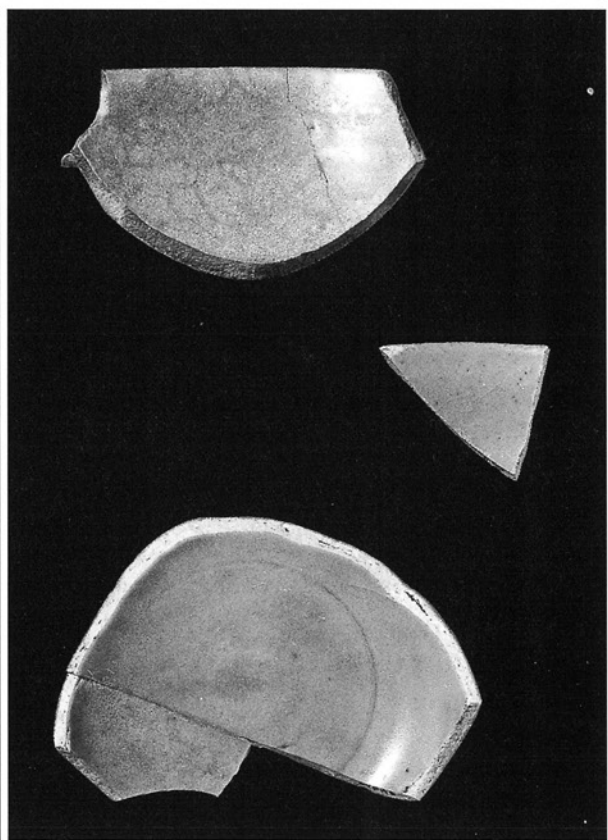
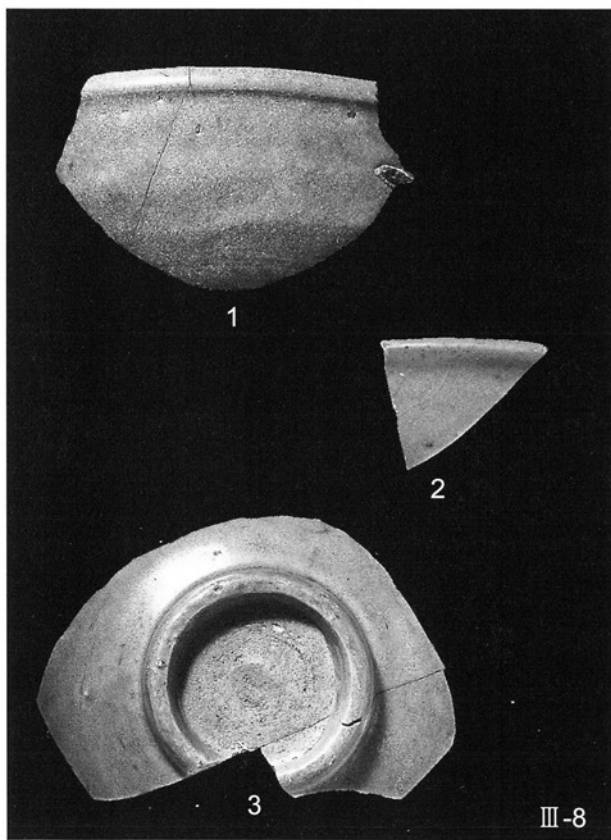
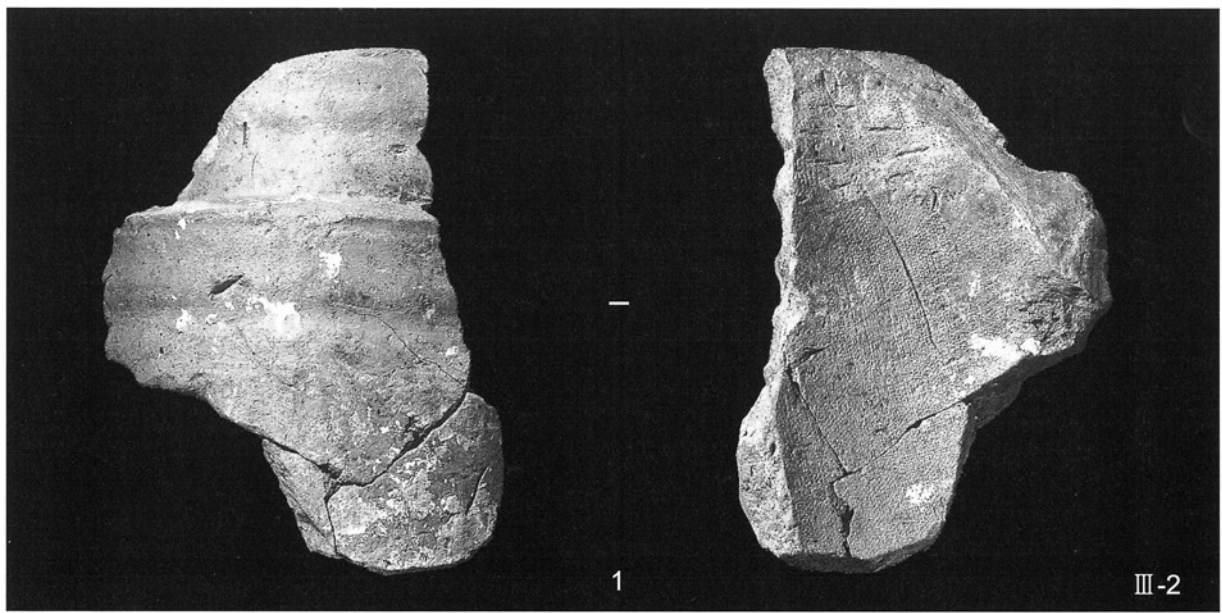




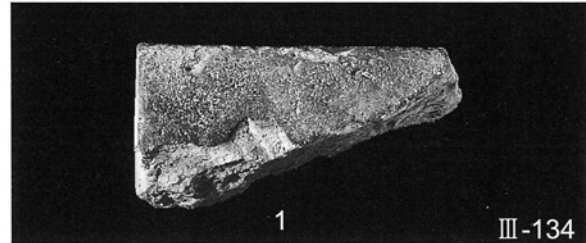
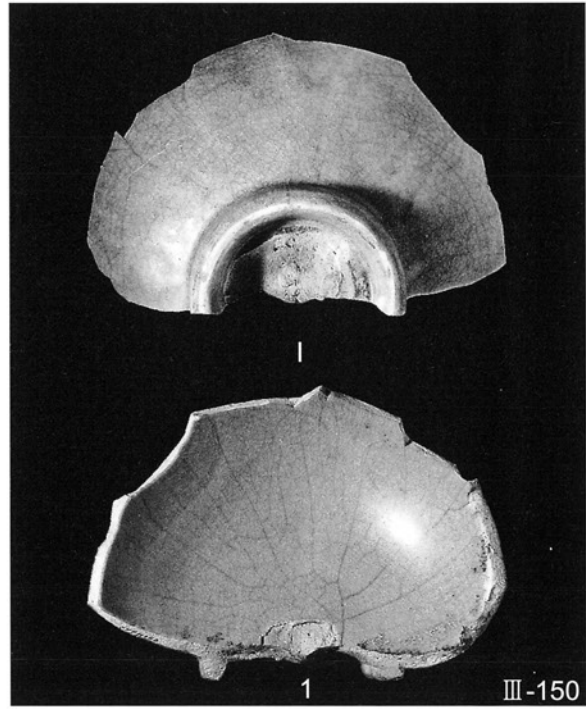
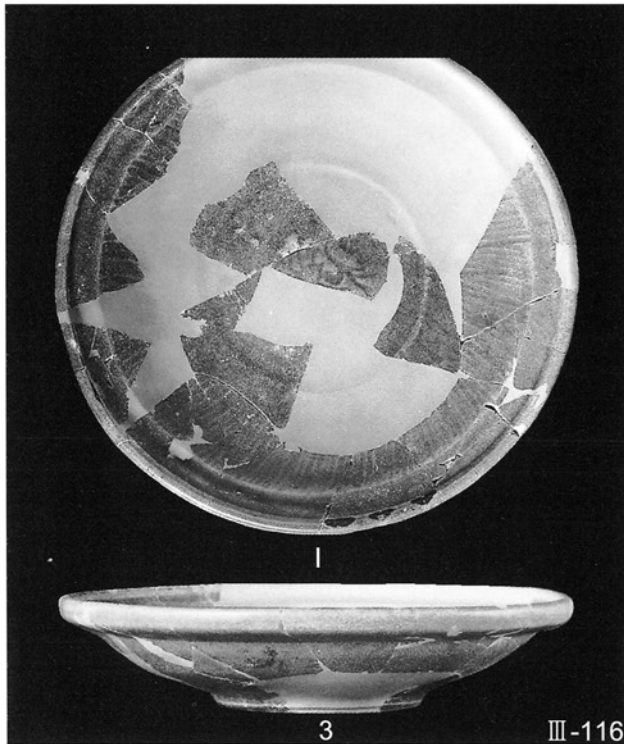
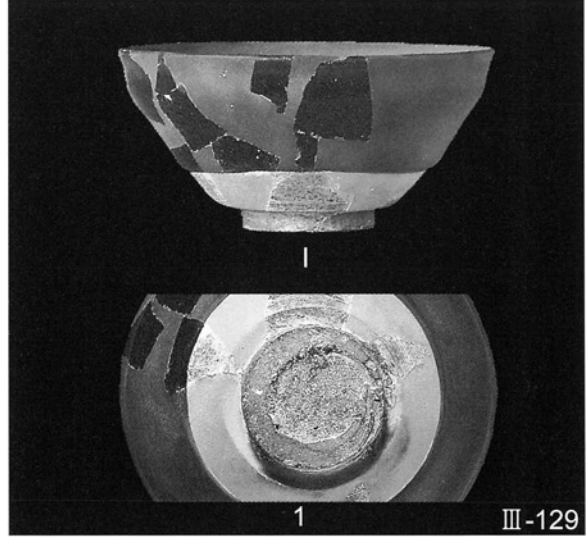
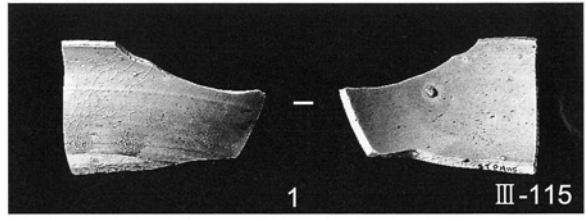
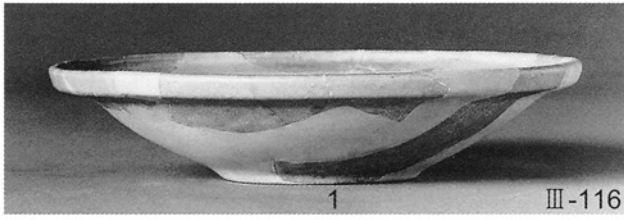
図版11 (第14・15図) II地区ピット (No.7・13・16・20・21・30) 出土遺物



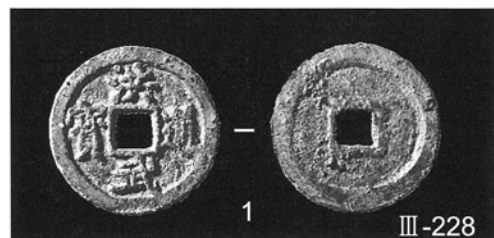
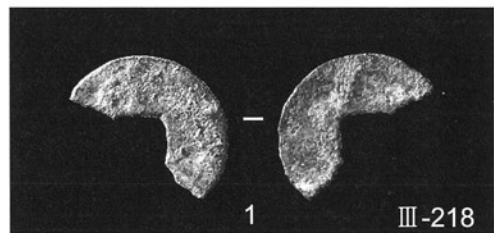
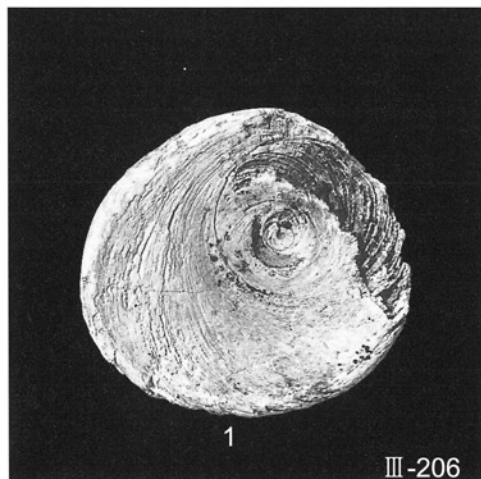
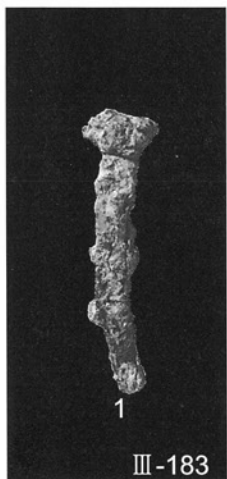
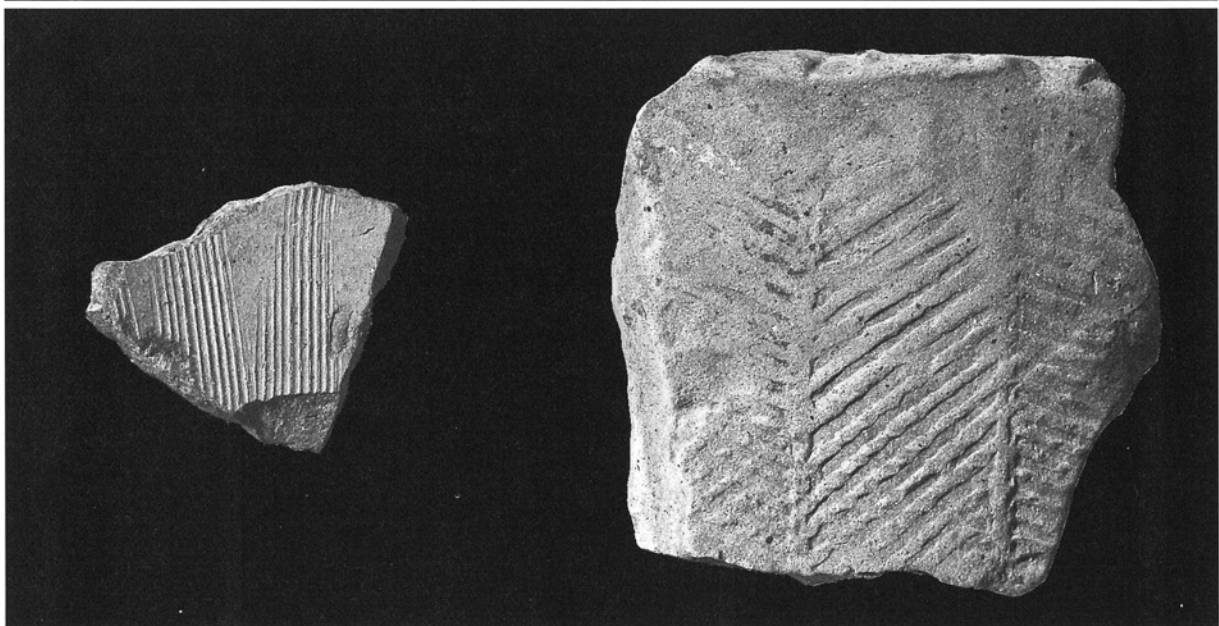
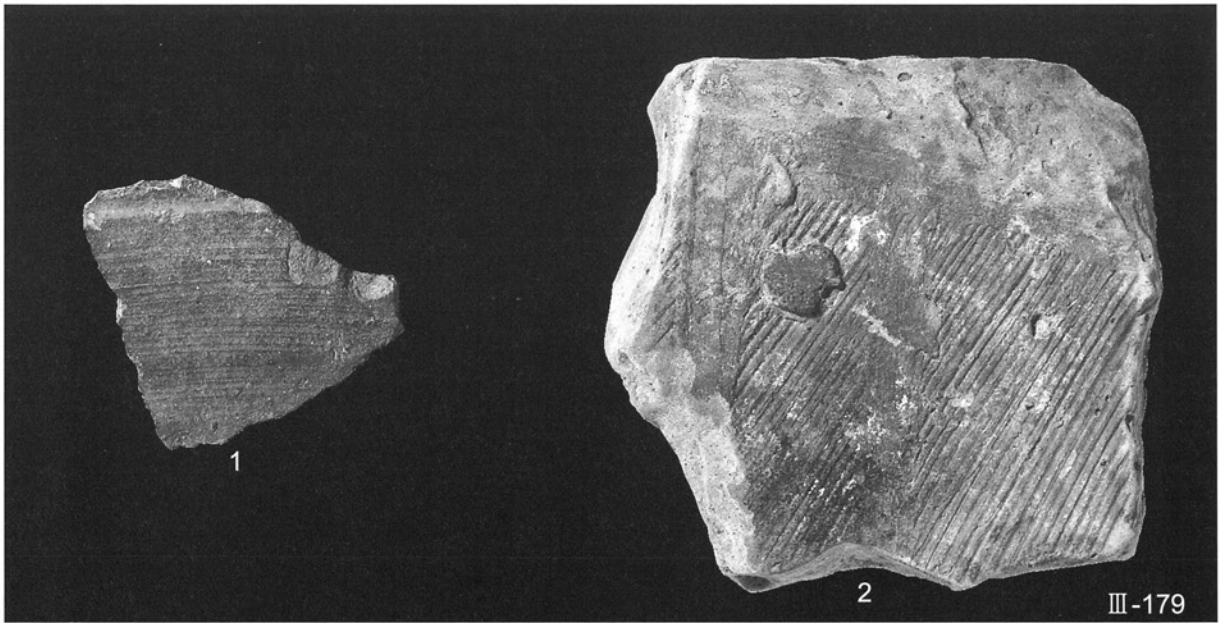
図版12 (第16図) II地区ピット (No.31・36・38・39・45) 出土遺物



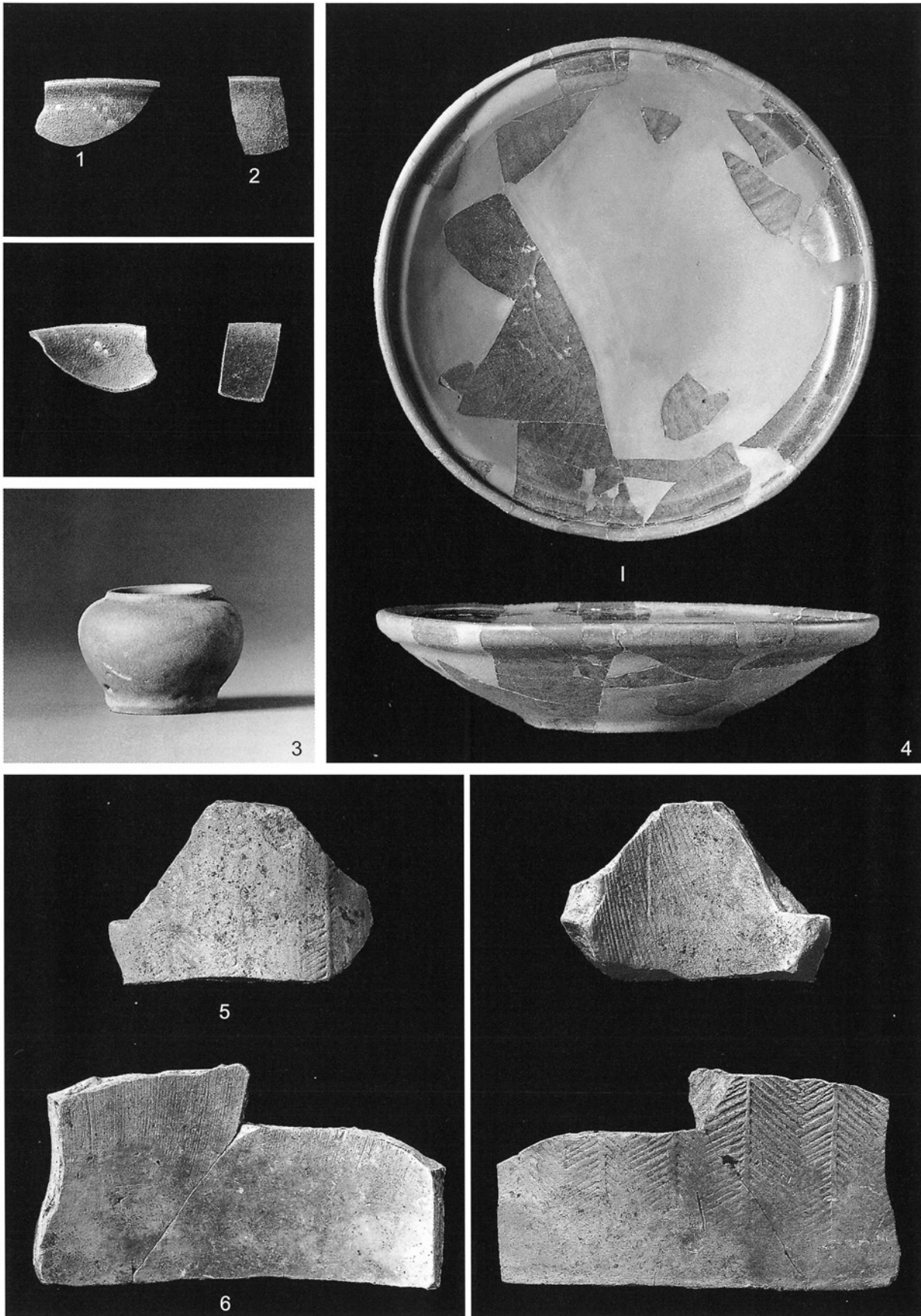
図版13 (第17図) III地区ピット (No.2・8・75) 出土遺物



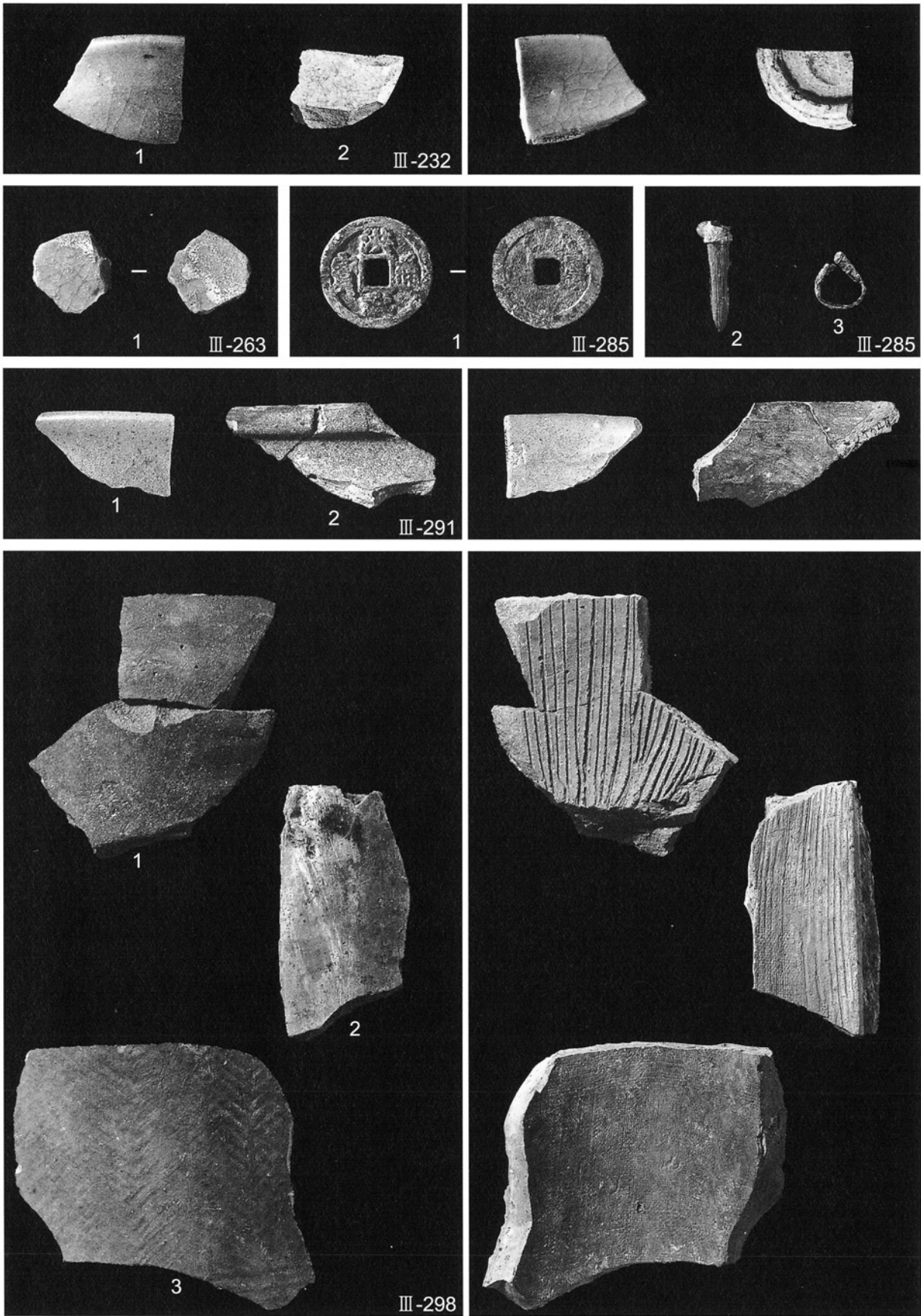
図版14 (第18図) III地区ピット (No.115・116・129・134・150) 出土遺物



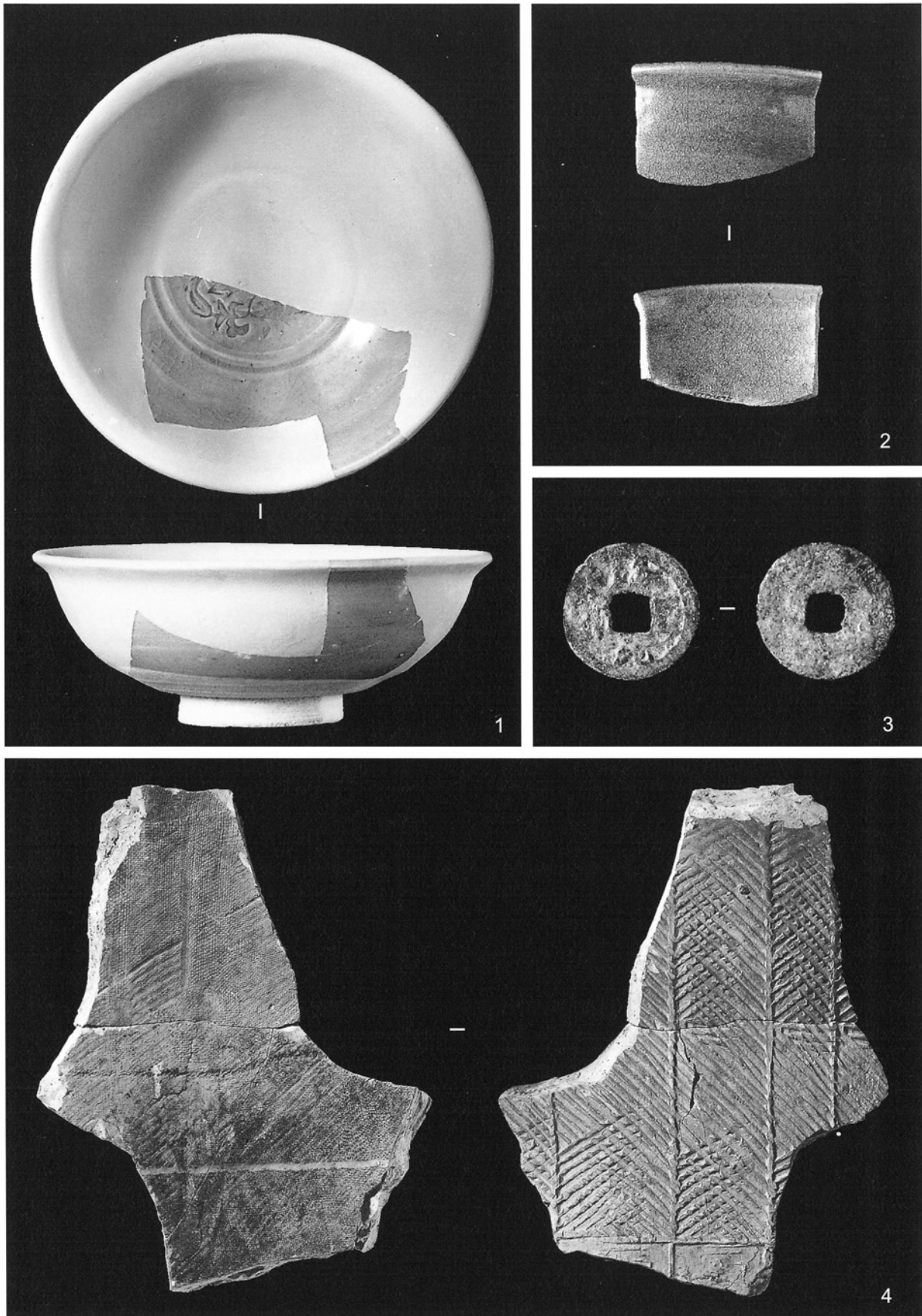
図版15 (第19図) III地区ピット (No.179・183・206・218・228) 出土遺物



図版16 (第20図) Ⅲ地区ピット (No.198) 出土遺物

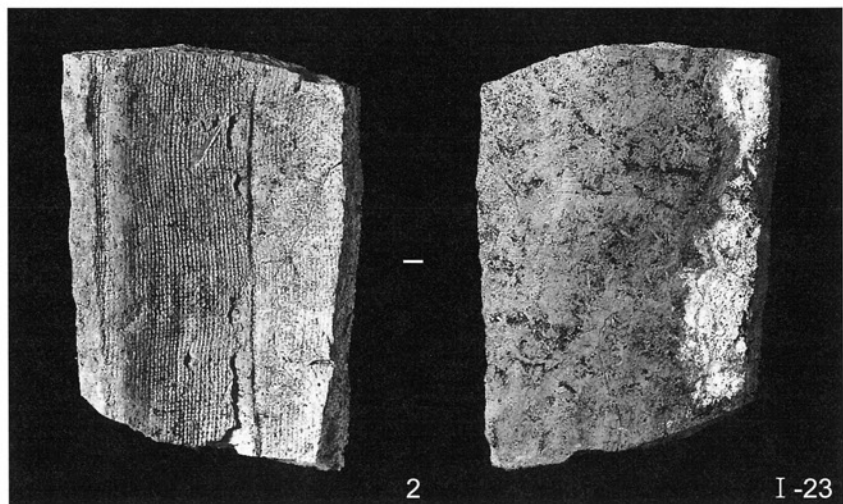
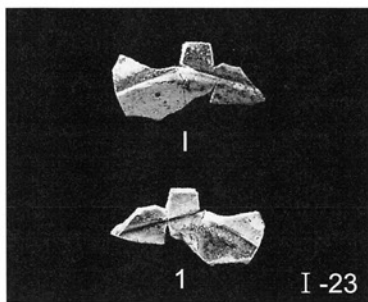
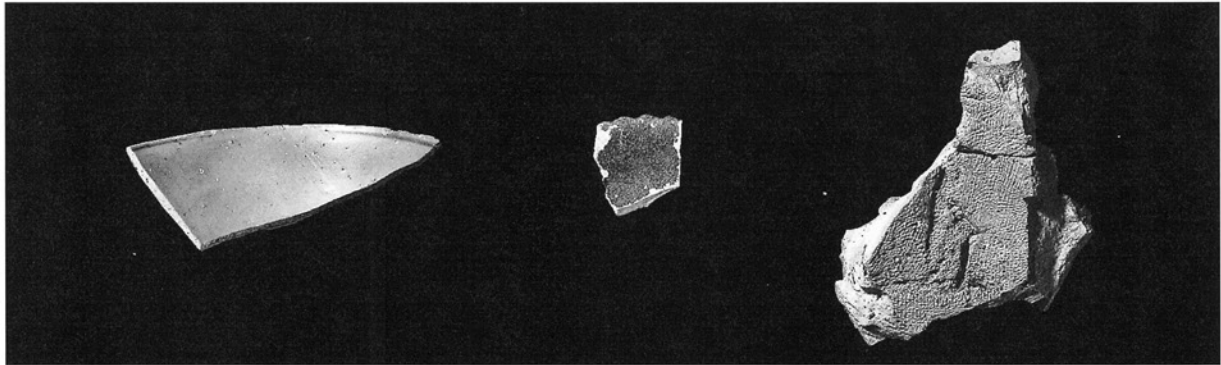
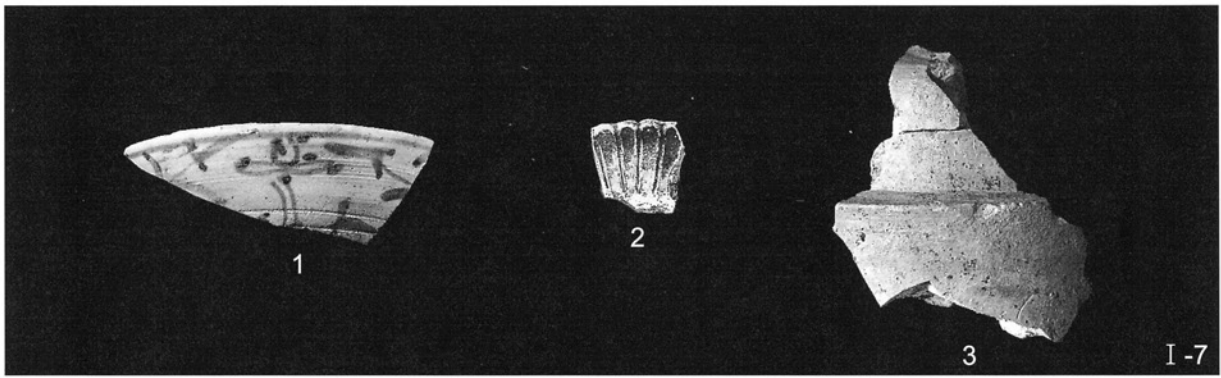
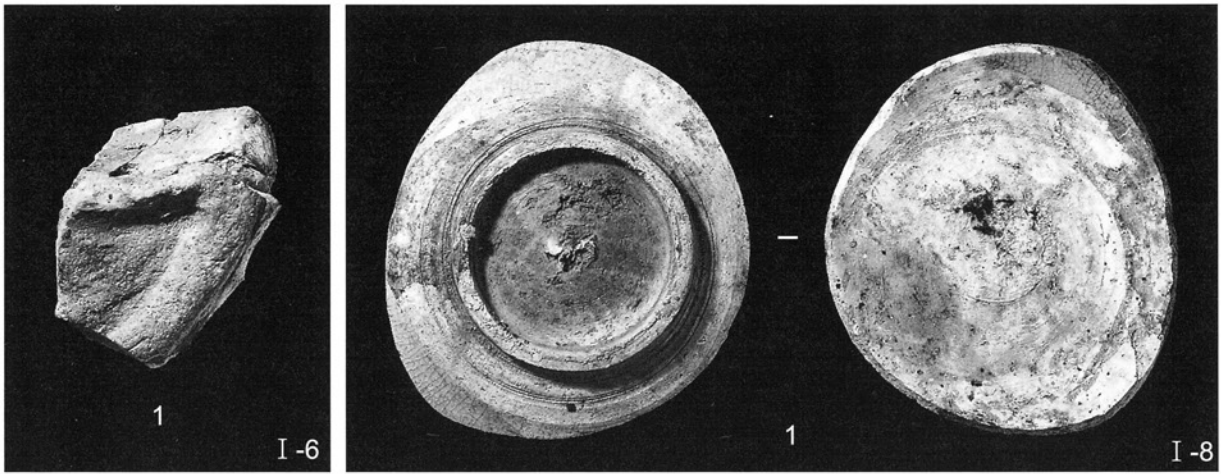


図版17 (第21図) III地区ピット (No.232・263・285・291・298) 出土遺物

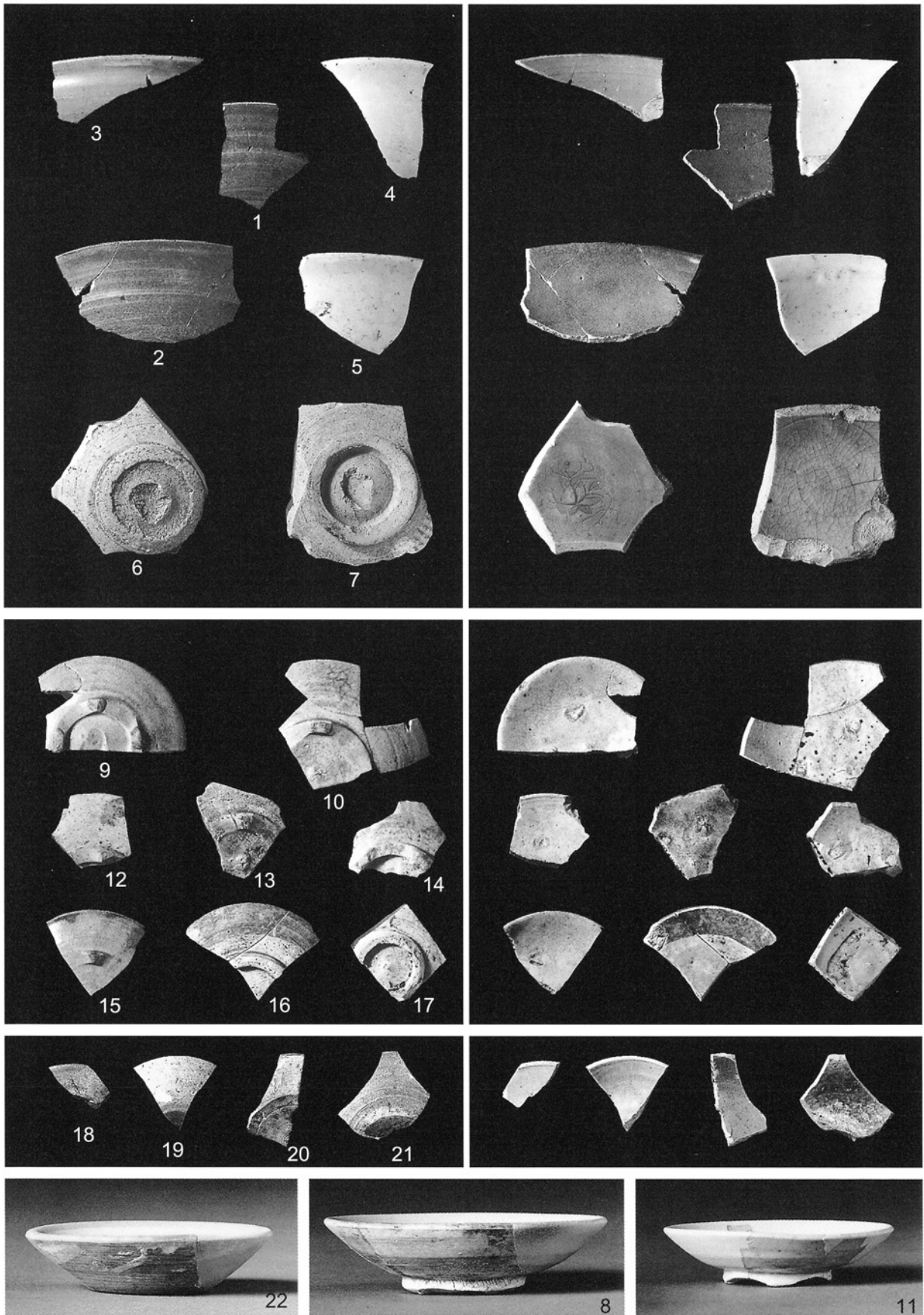


図版18 (第22図) Ⅲ地区ピット (No.292) 出土遺物

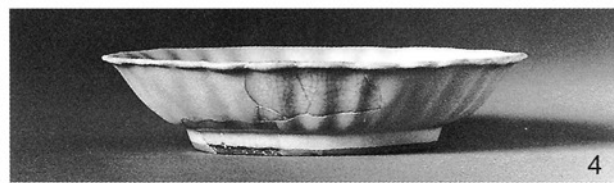
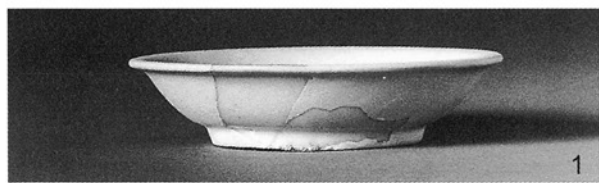
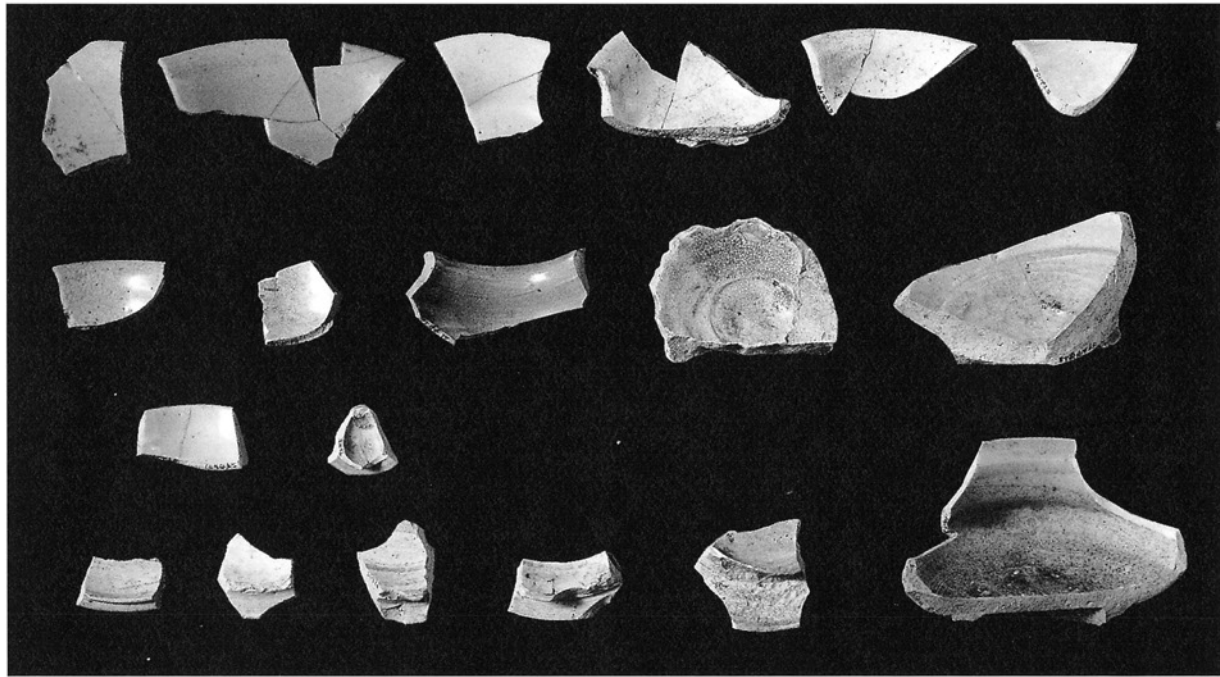
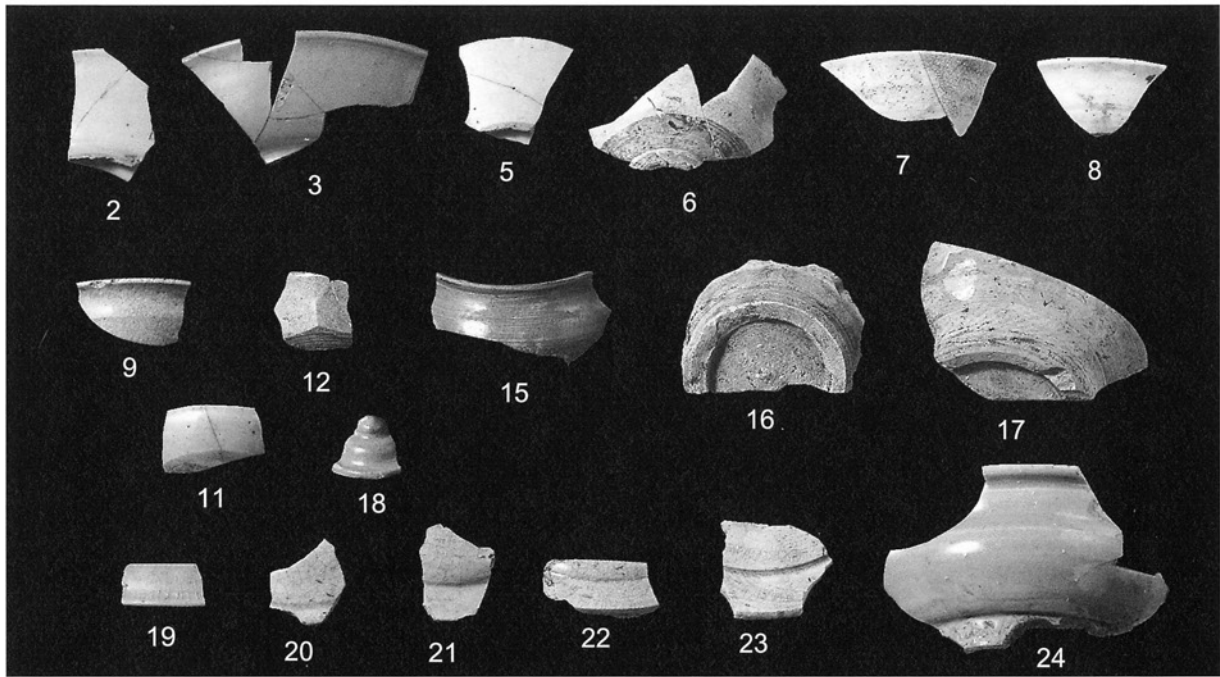




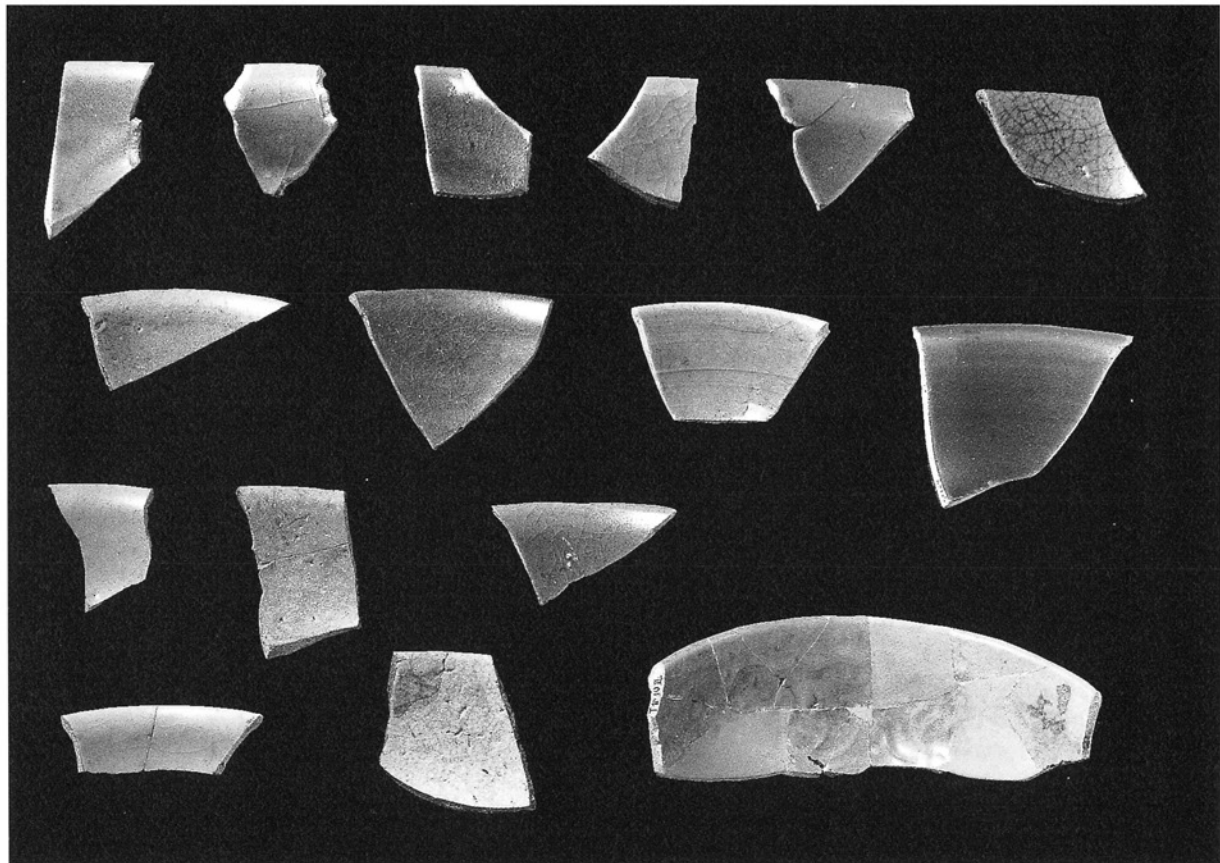
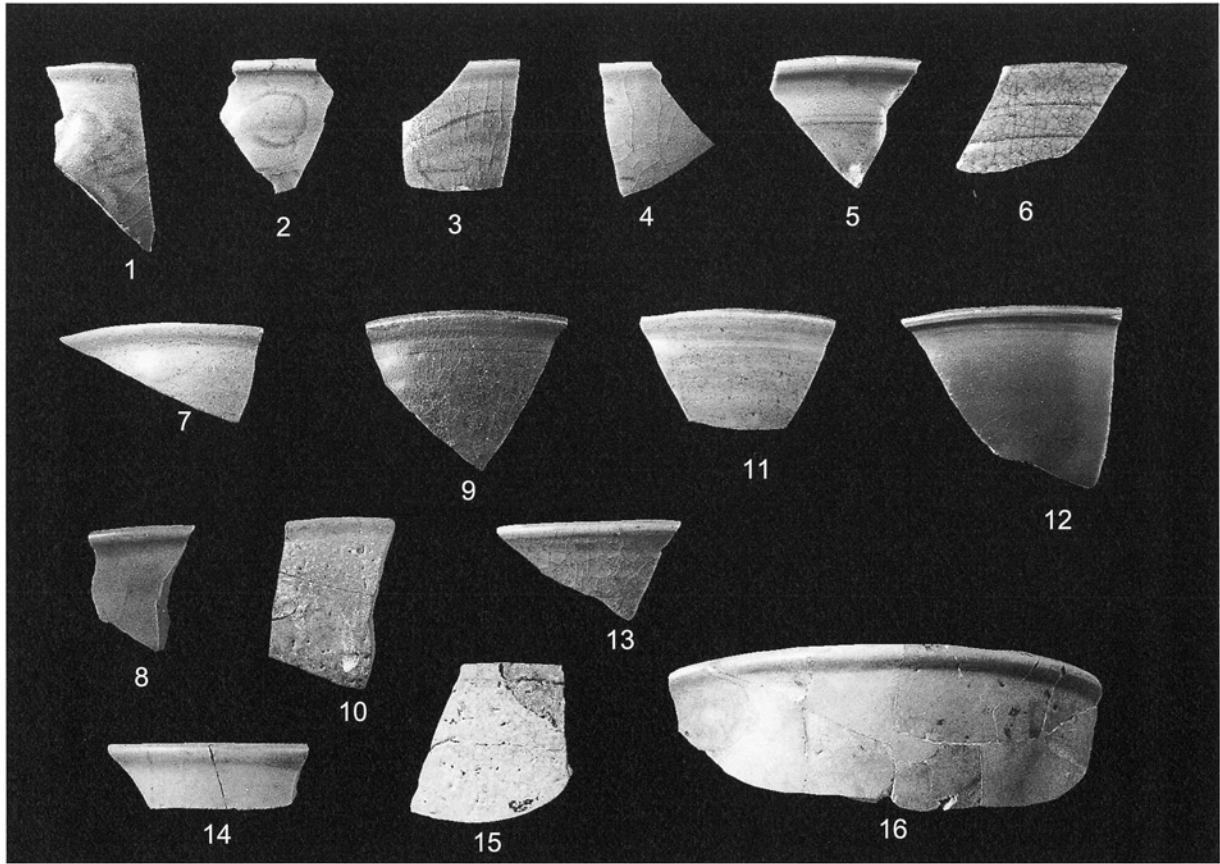
図版19 (第23図) I地区ピット (No.6・7・8・23) 出土遺物



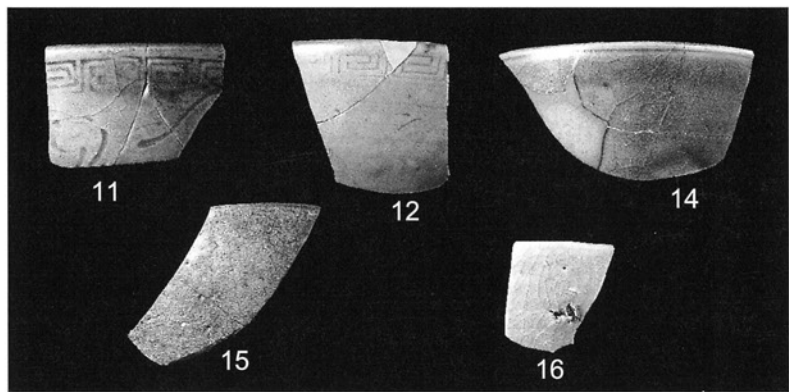
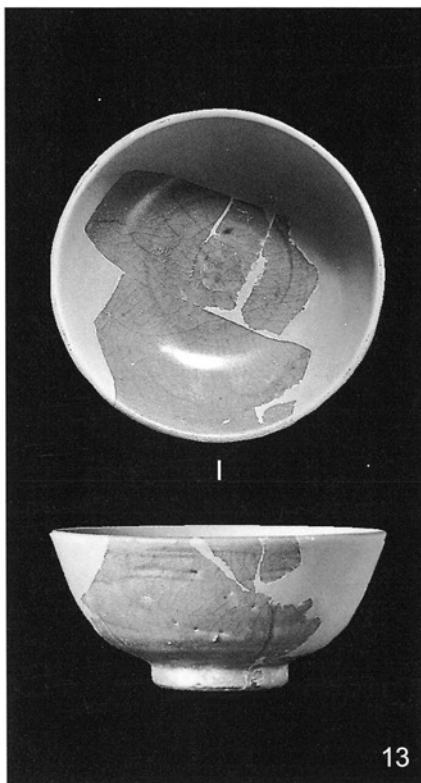
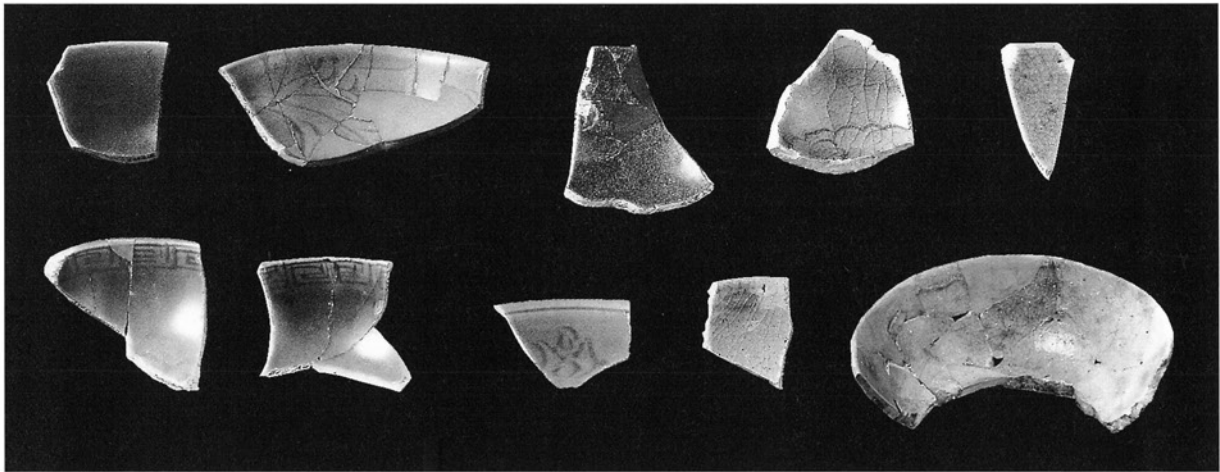
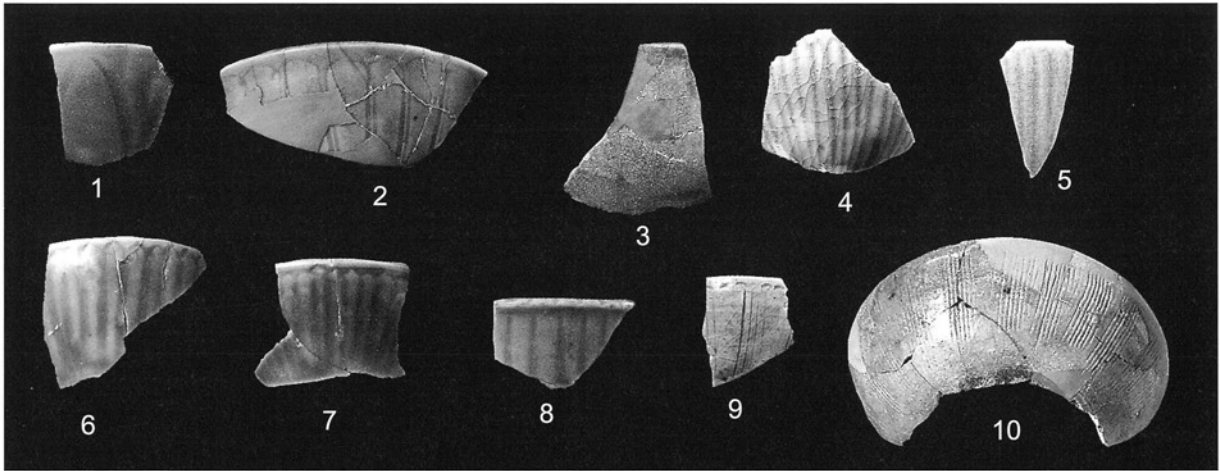
图版20 (第24图) 白磁:碗 (1~7) ·小皿 (8~17) ·灯明皿 (18~22)



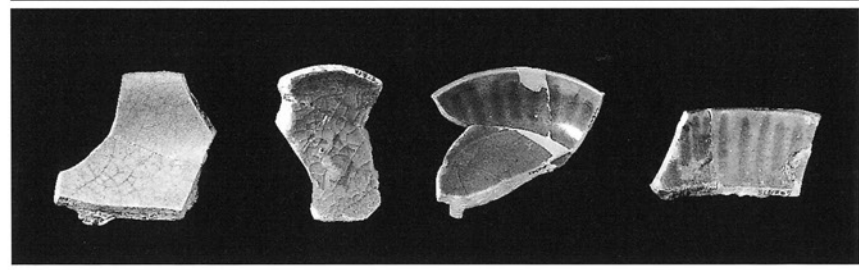
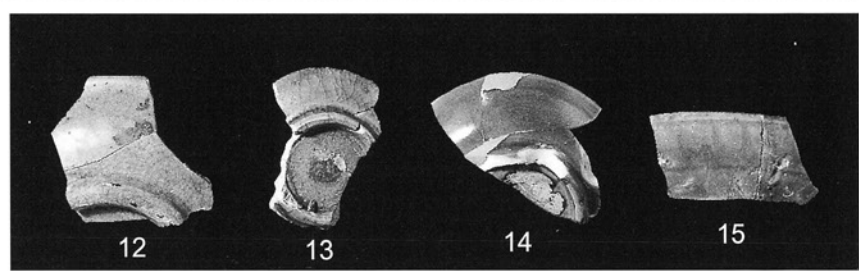
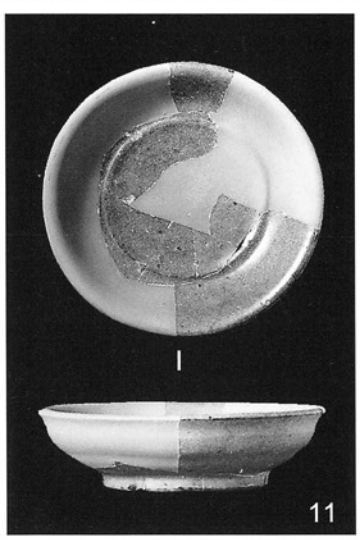
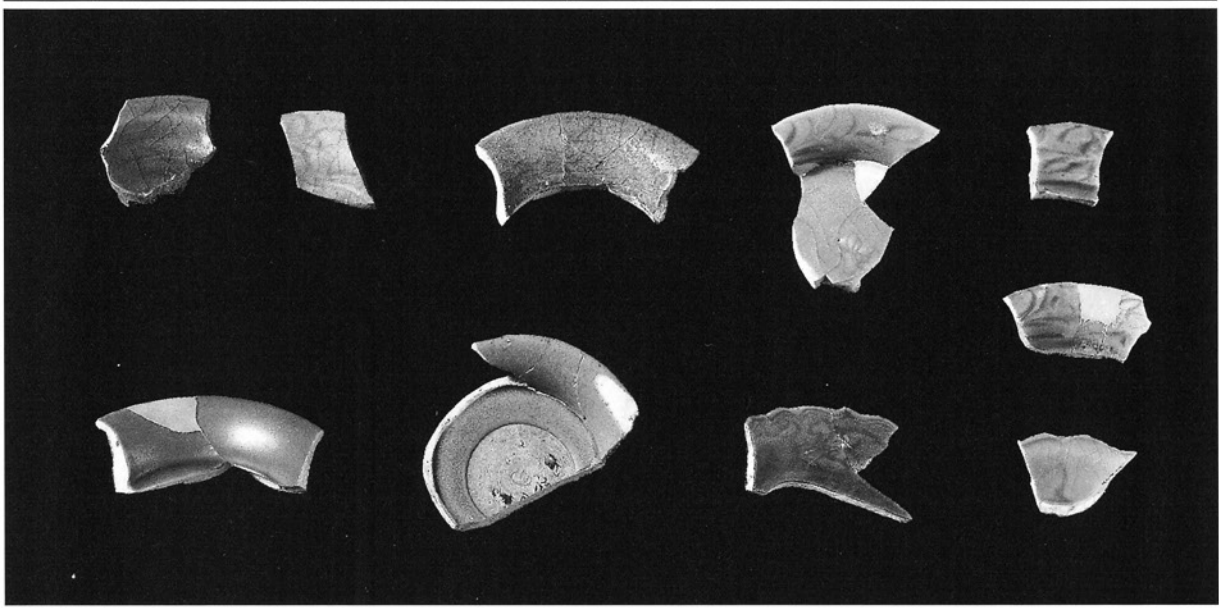
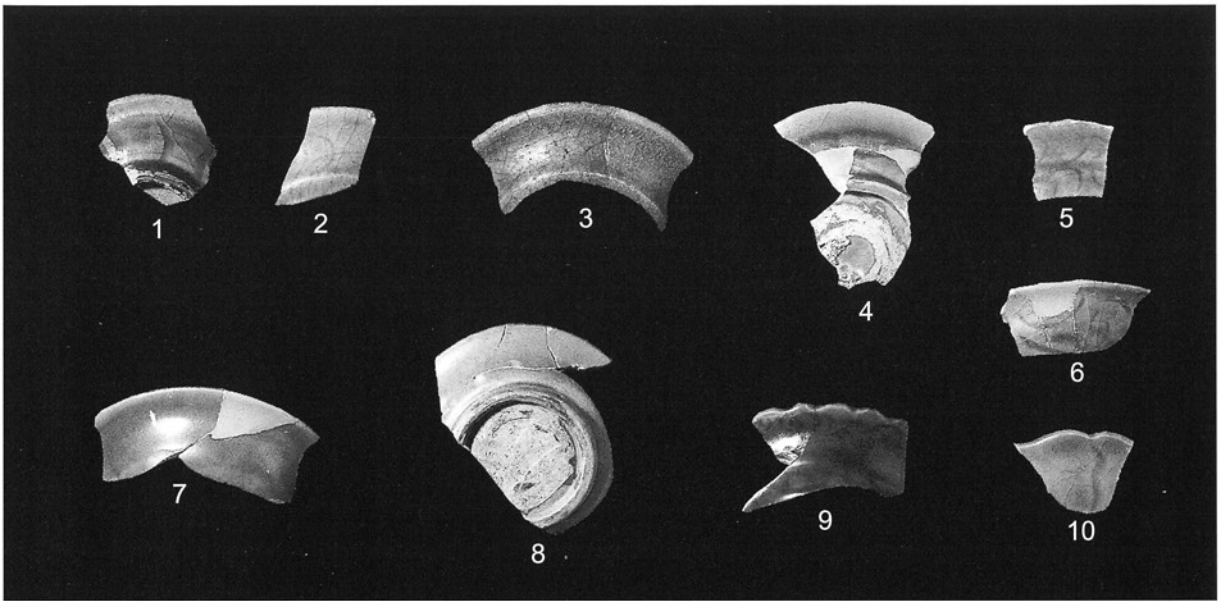
図版21 (第25図) 白磁：皿 (1~5) ・杯 (6~14) ・壺 (15) ・袋物 (16・17) ・蓋 (18~23) ・香炉 (24)



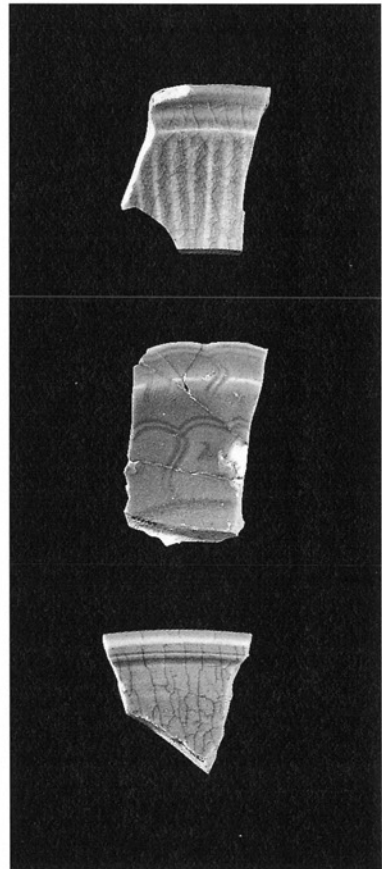
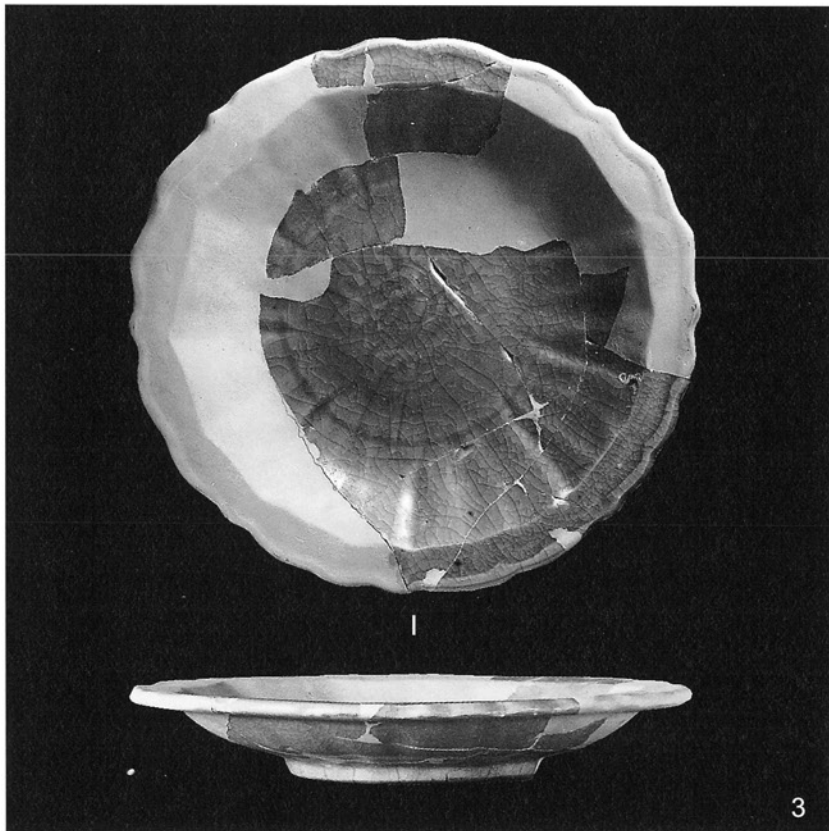
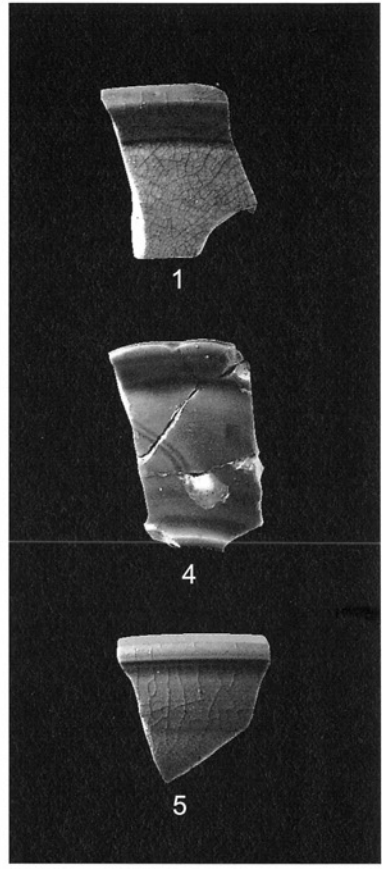
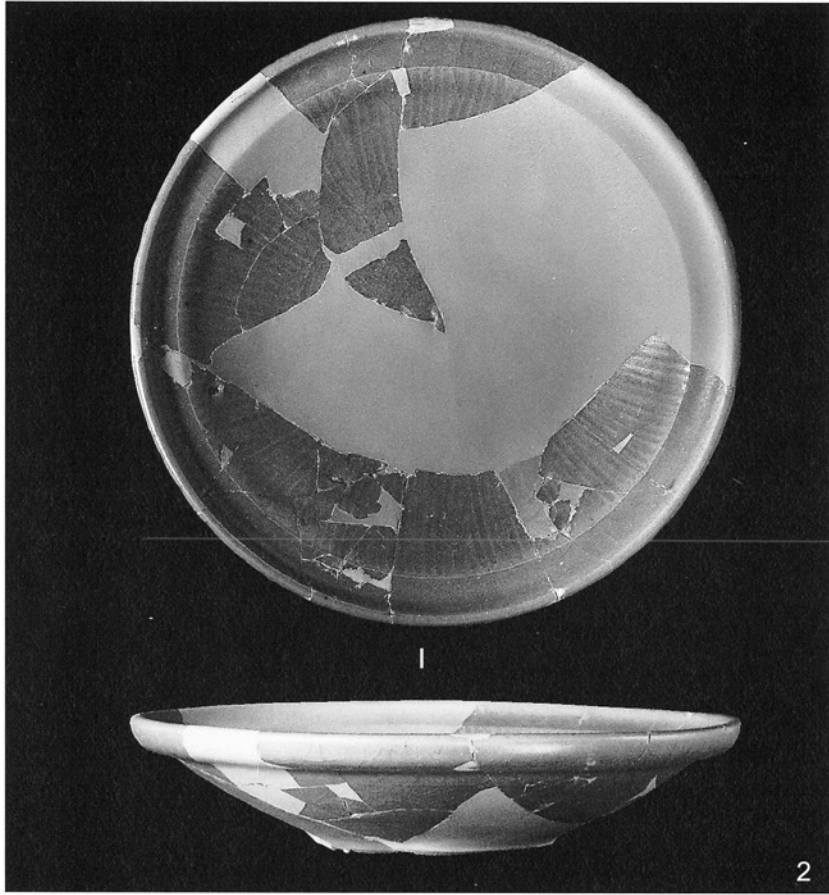
図版22 (第26図) 青磁：碗 (1~16)



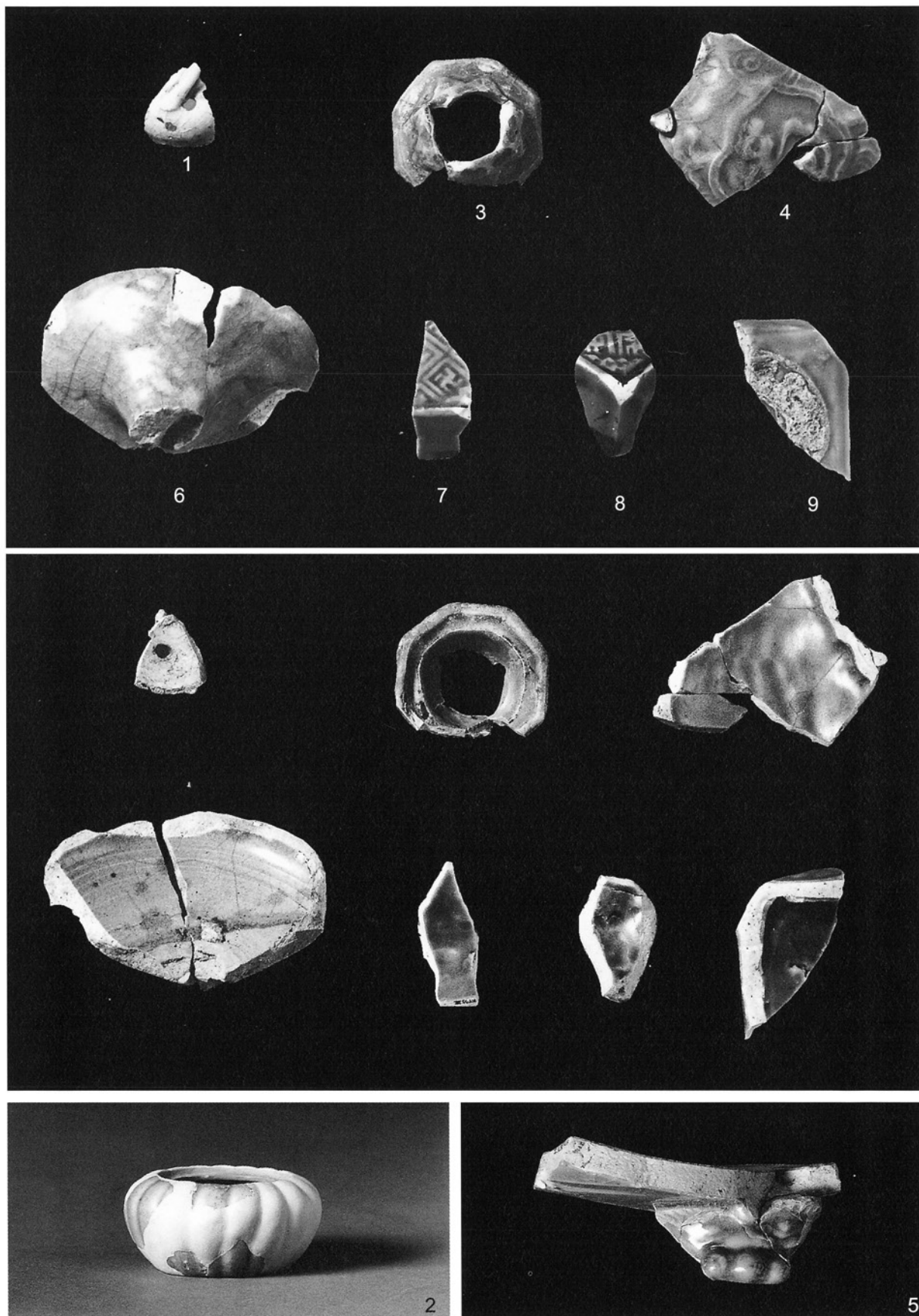
图版23 (第27图) 青磁：碗 (1~16)



图版24 (第28图) 青磁：皿 (1~15)

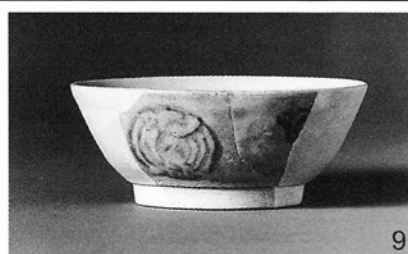
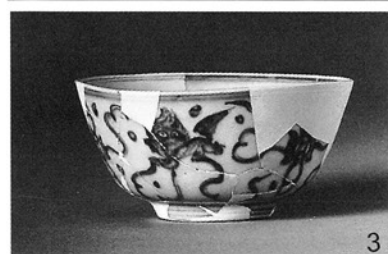
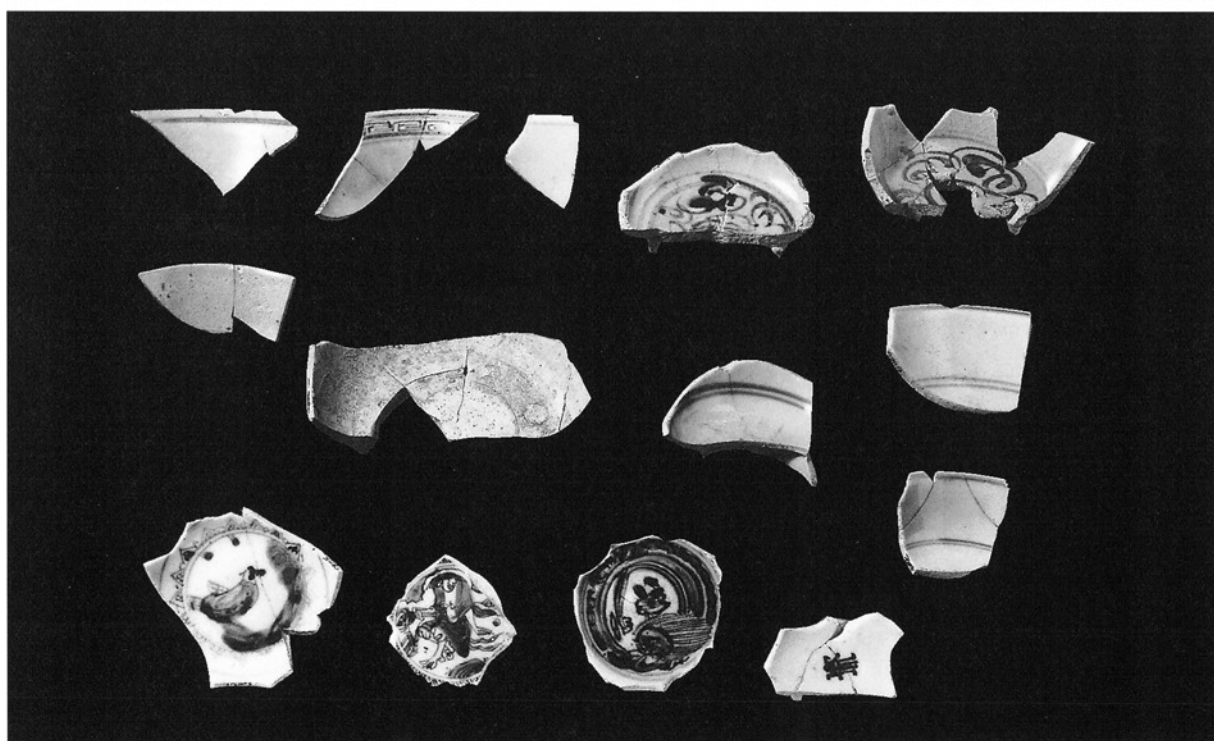
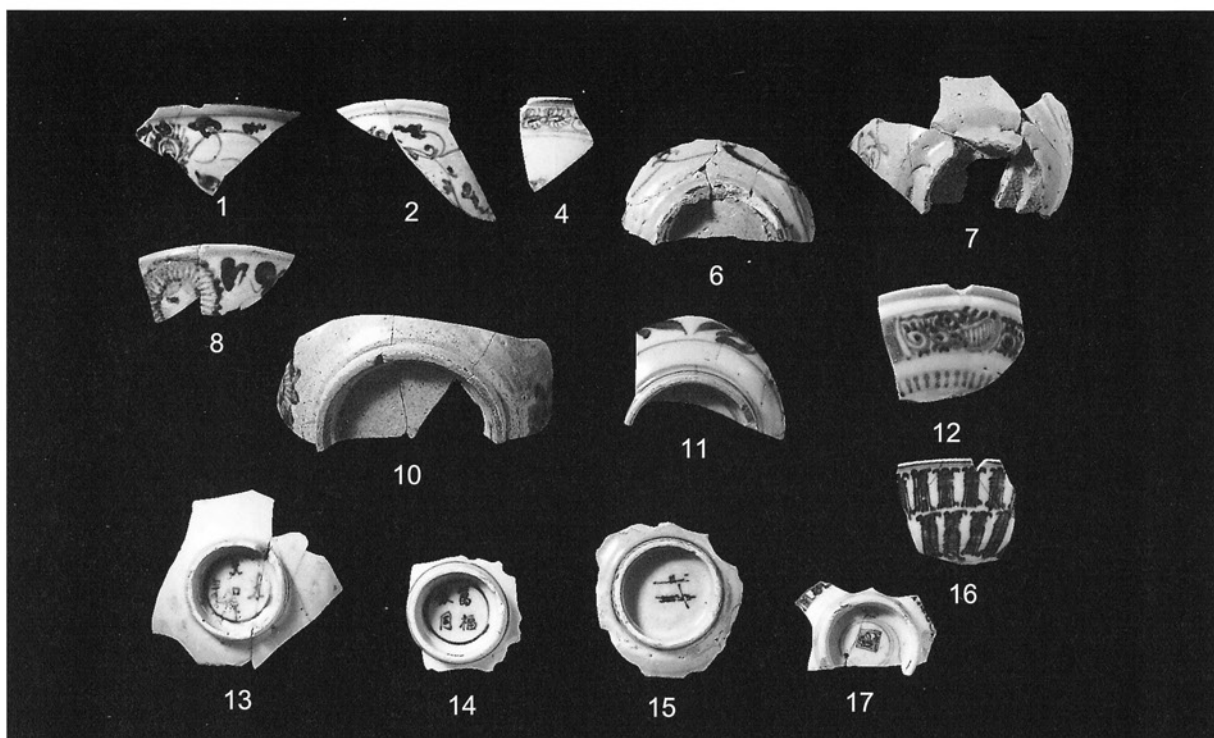


図版25 (第29図) 青磁：盤 (1~5)

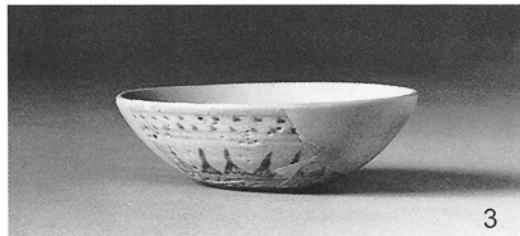
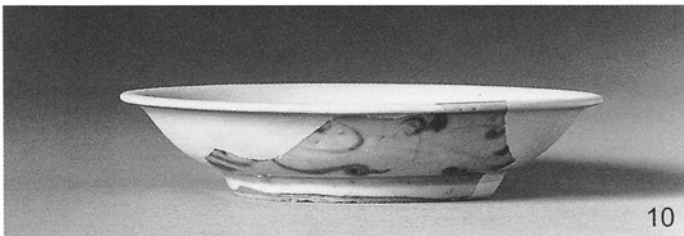
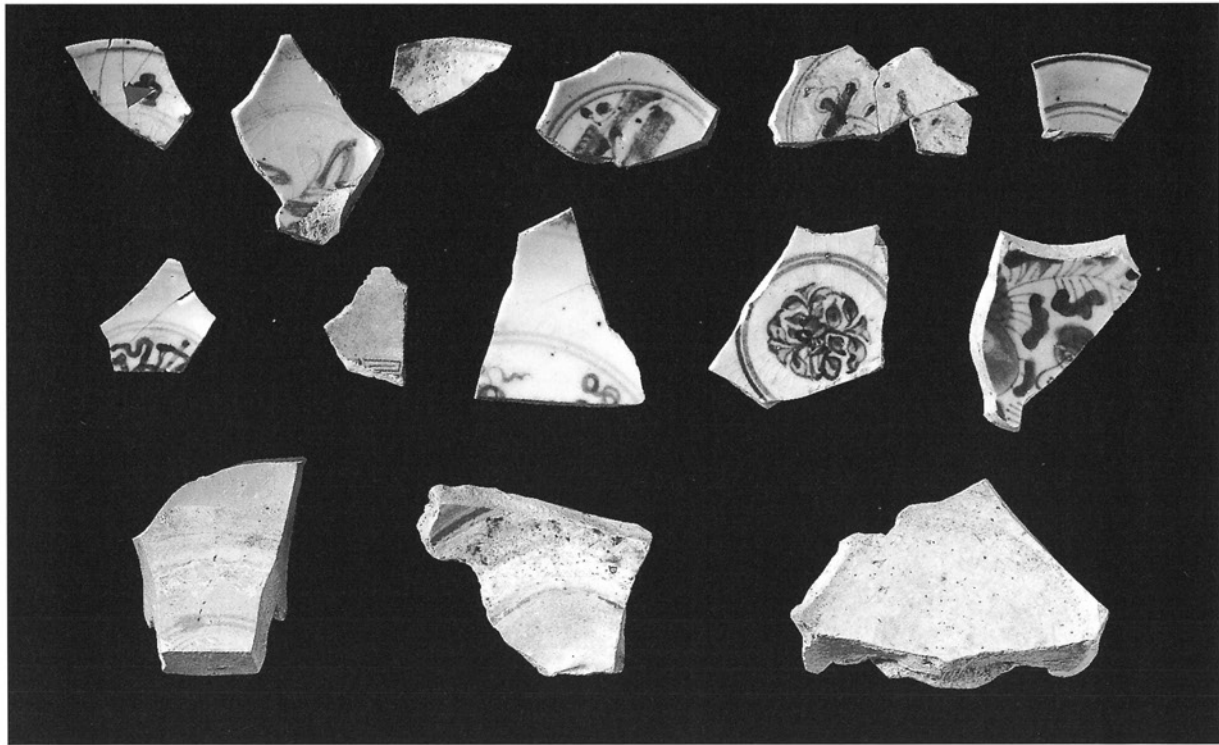
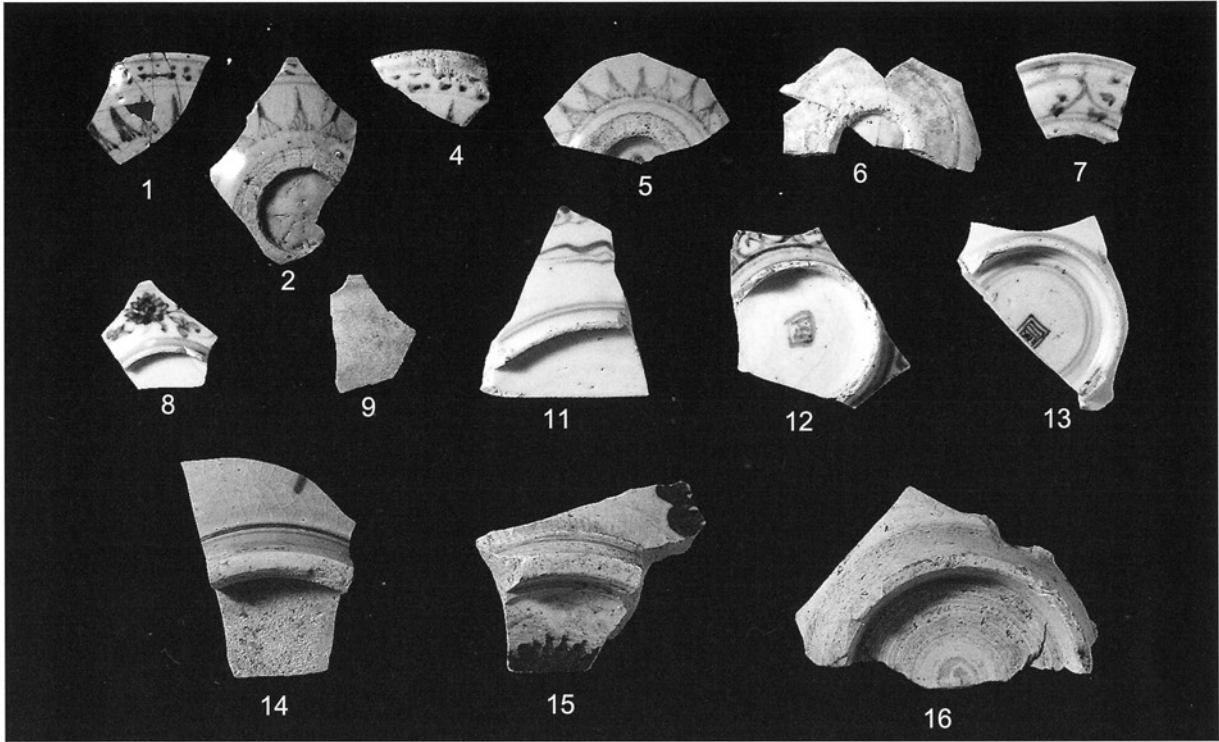


図版26 (第30図) 青磁：水滴 (1) ・合子 (2) ・壺 (3・4) ・香炉 (5・6) ・角形 (7~9)

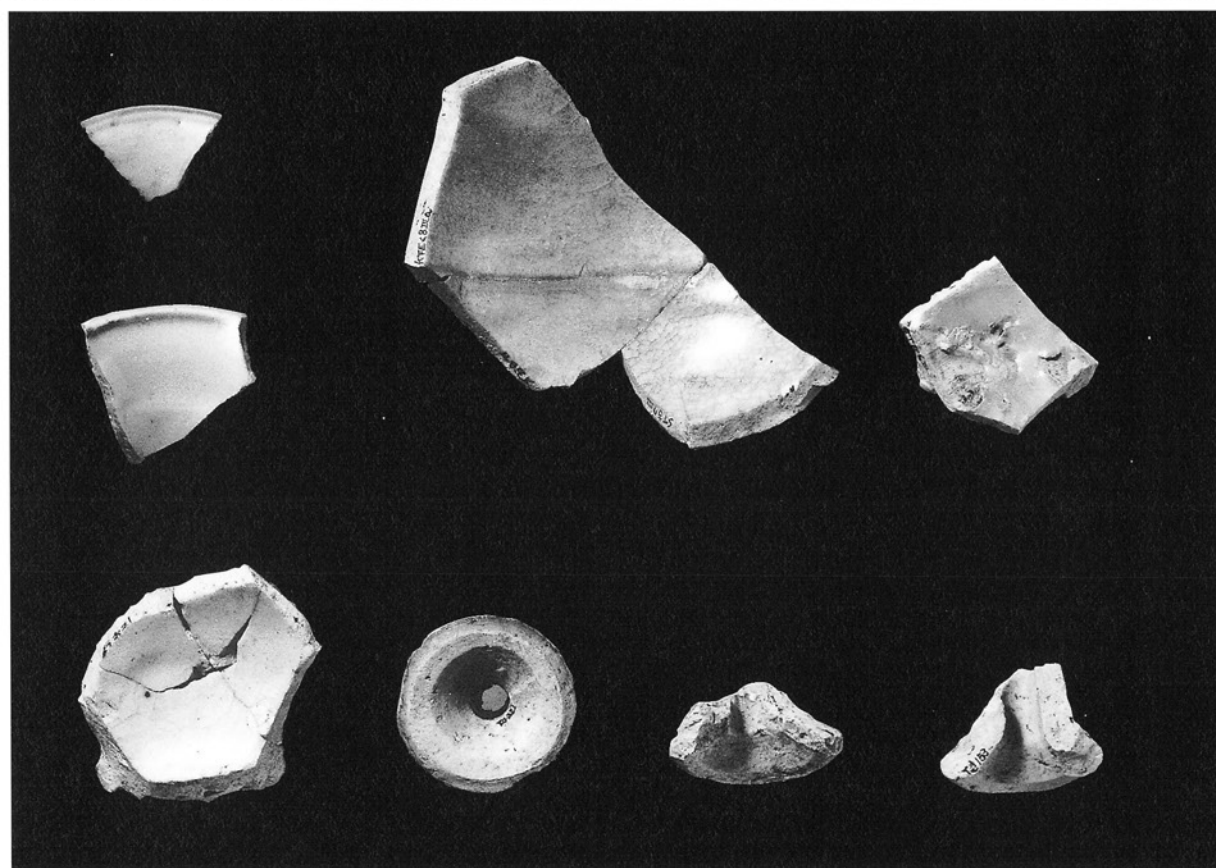
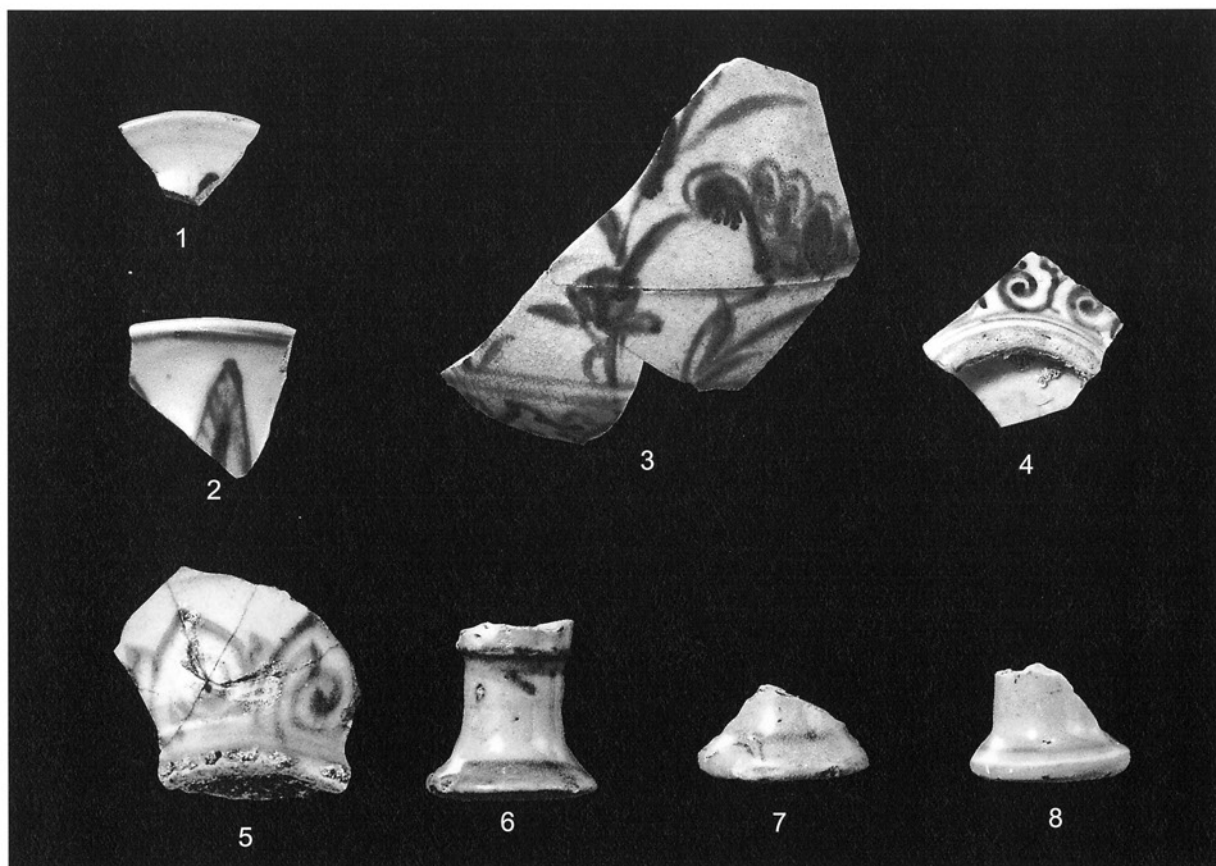




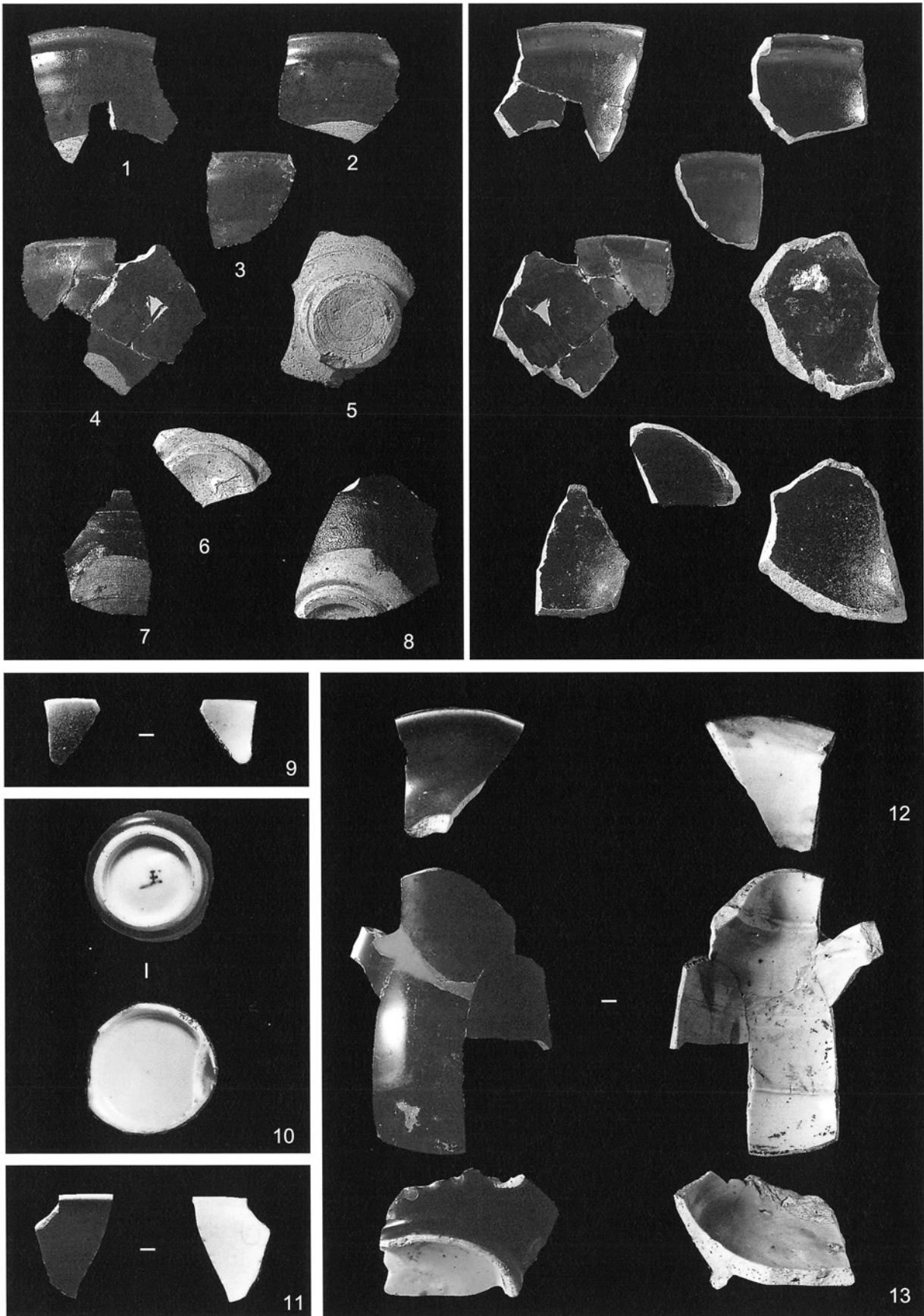
图版27 (第31图) 青花：碗 (1~17)



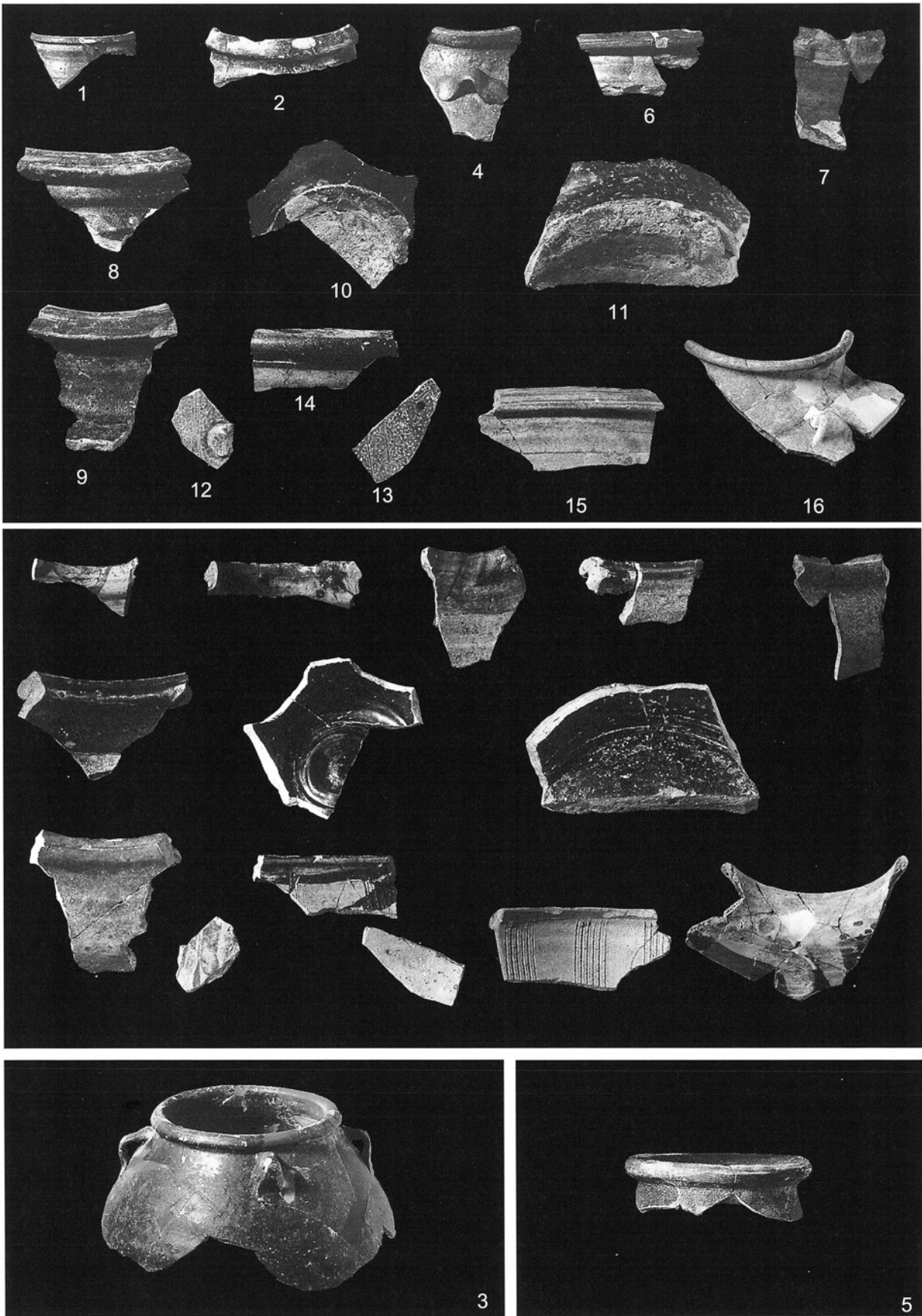
図版28 (第32図) 青花：小皿 (1~8) ・皿 (9~13) ・鉢 (14~16)



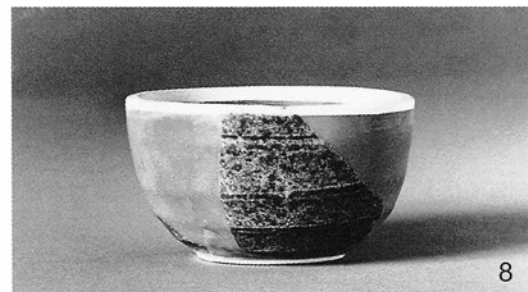
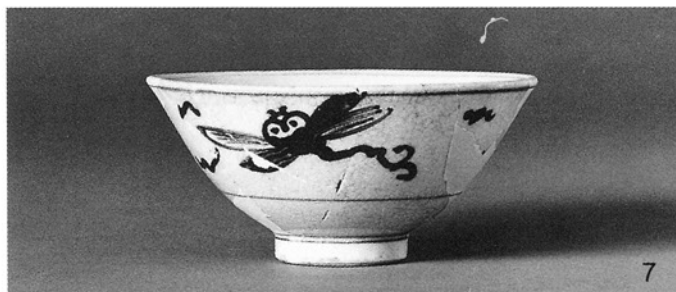
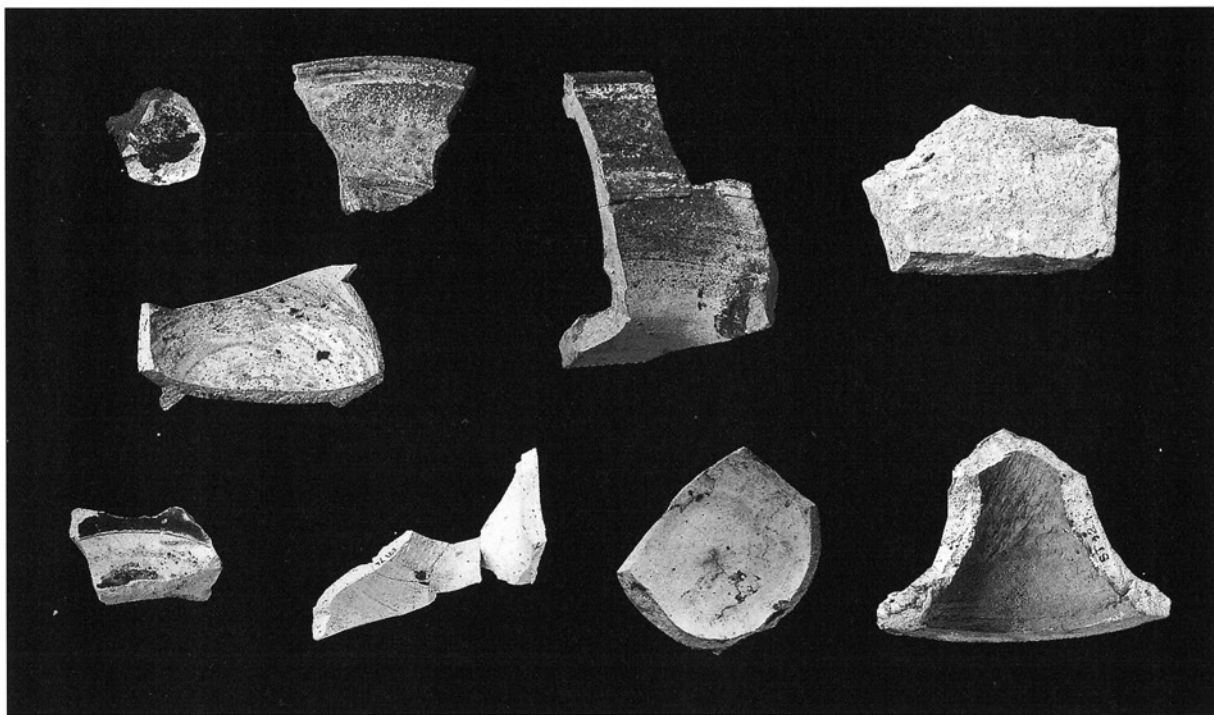
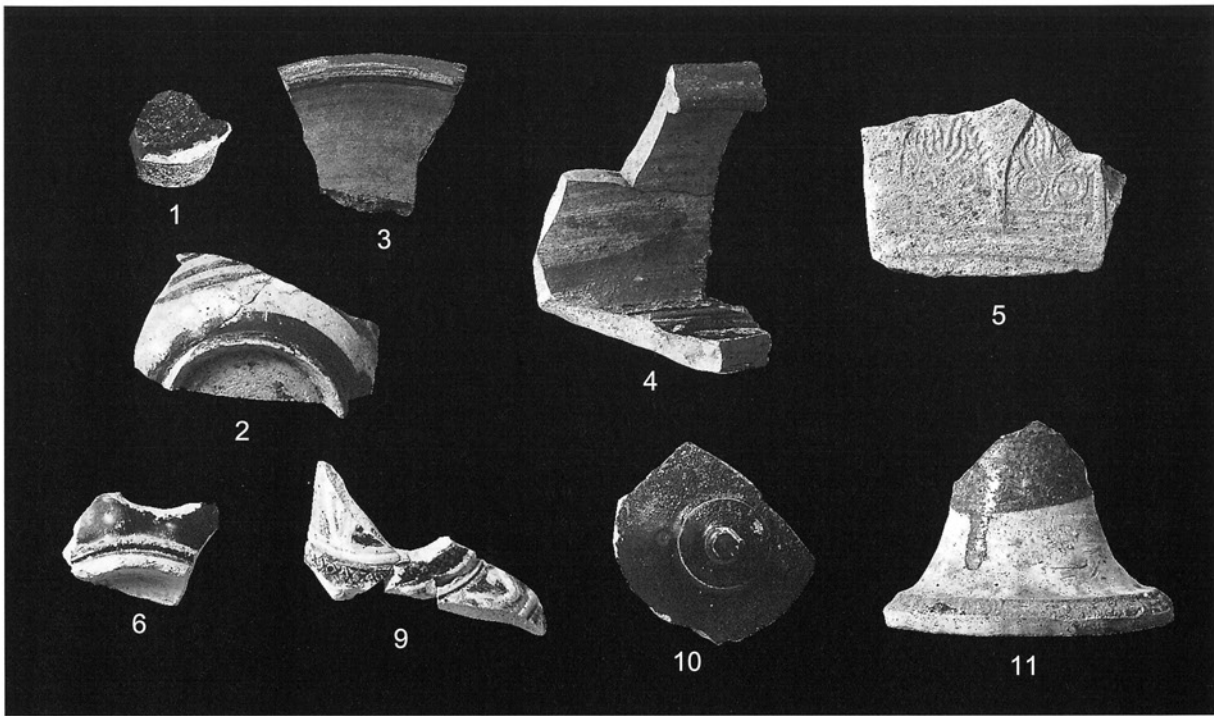
图版29 (第33图) 青花：瓶 (1·2) ·袋物 (3~5) ·高足杯 (6~8)



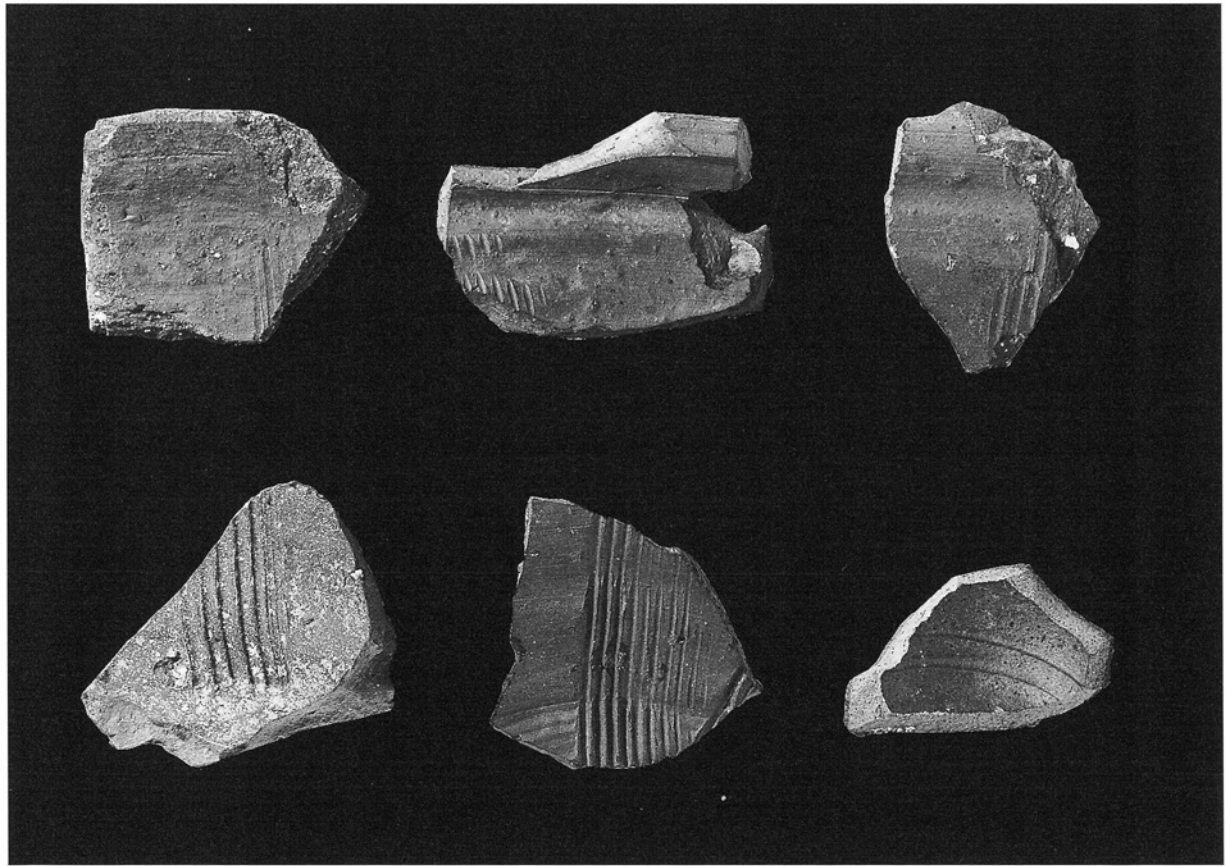
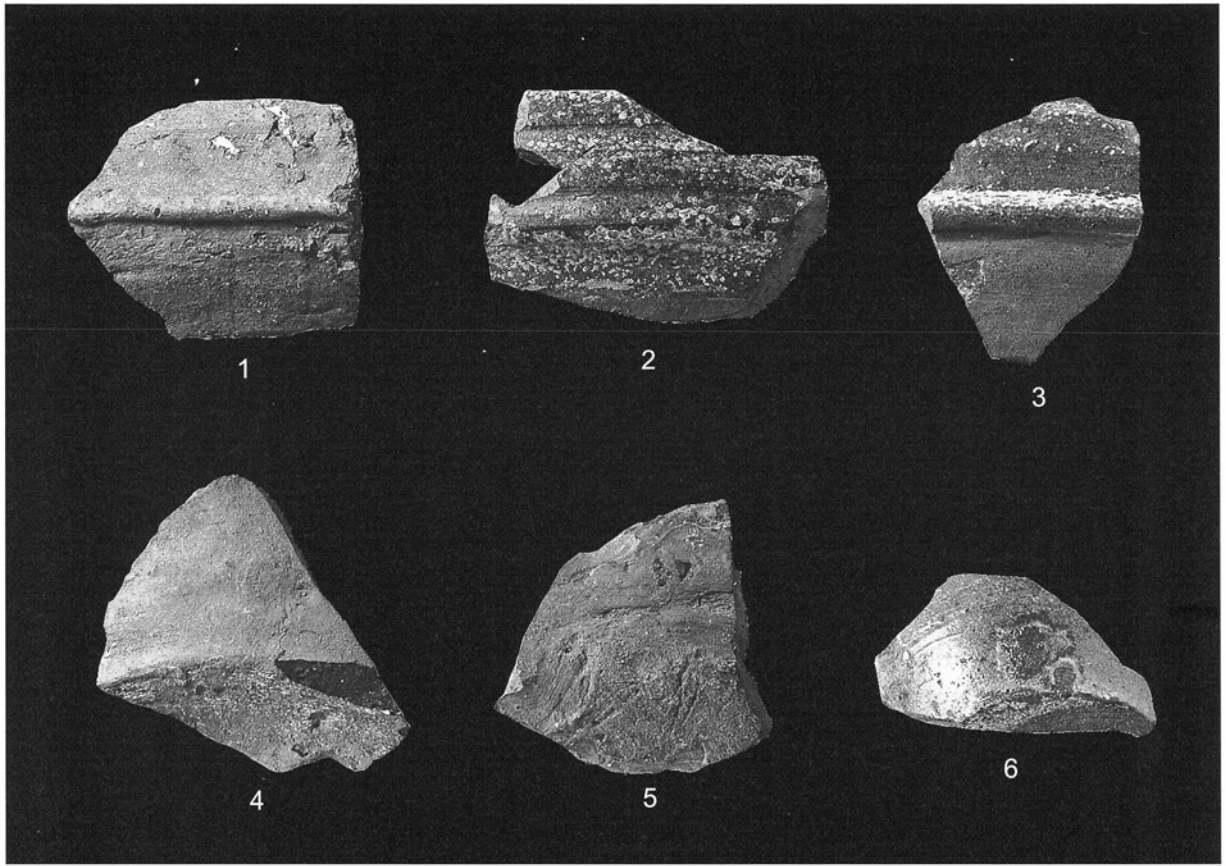
图版30 (第34图) 黑釉陶器：碗 (1~8)、琉璃釉：杯 (9~11) · 瓶 (12·13)



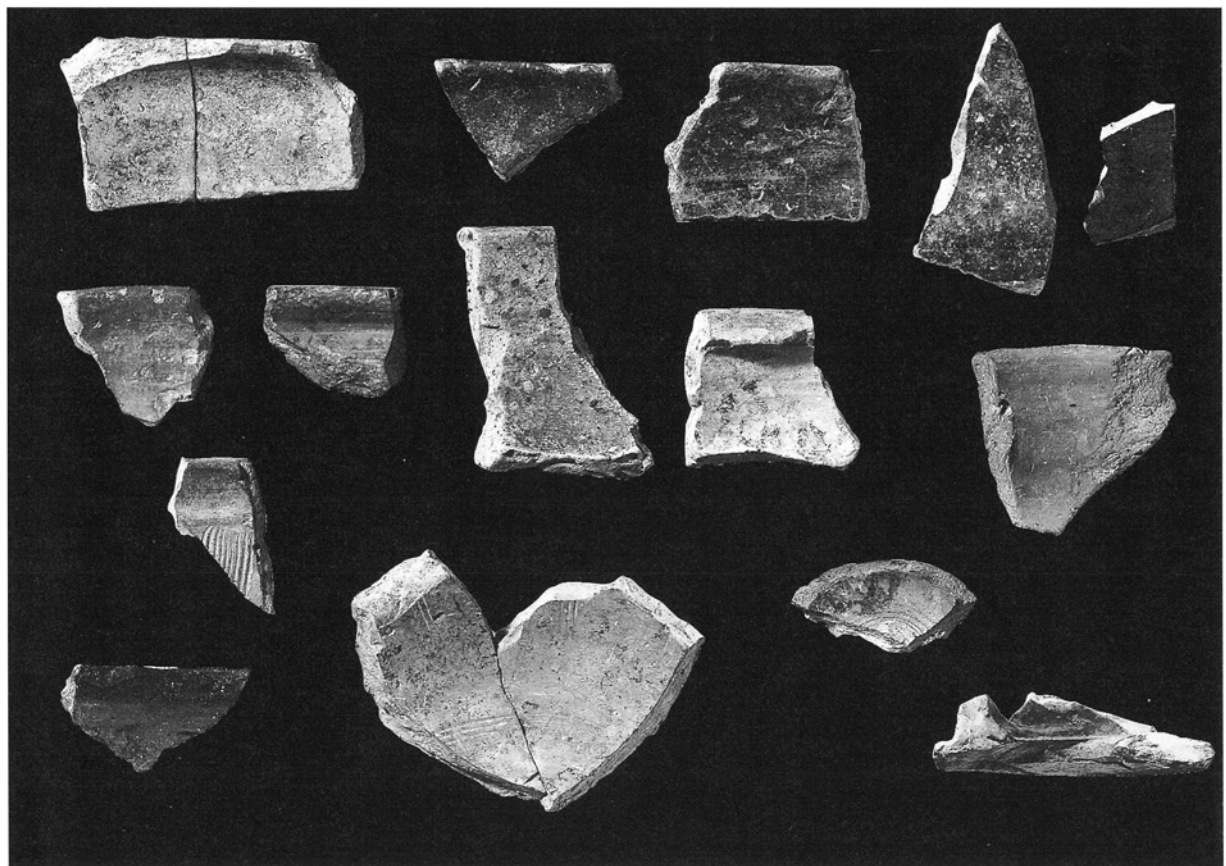
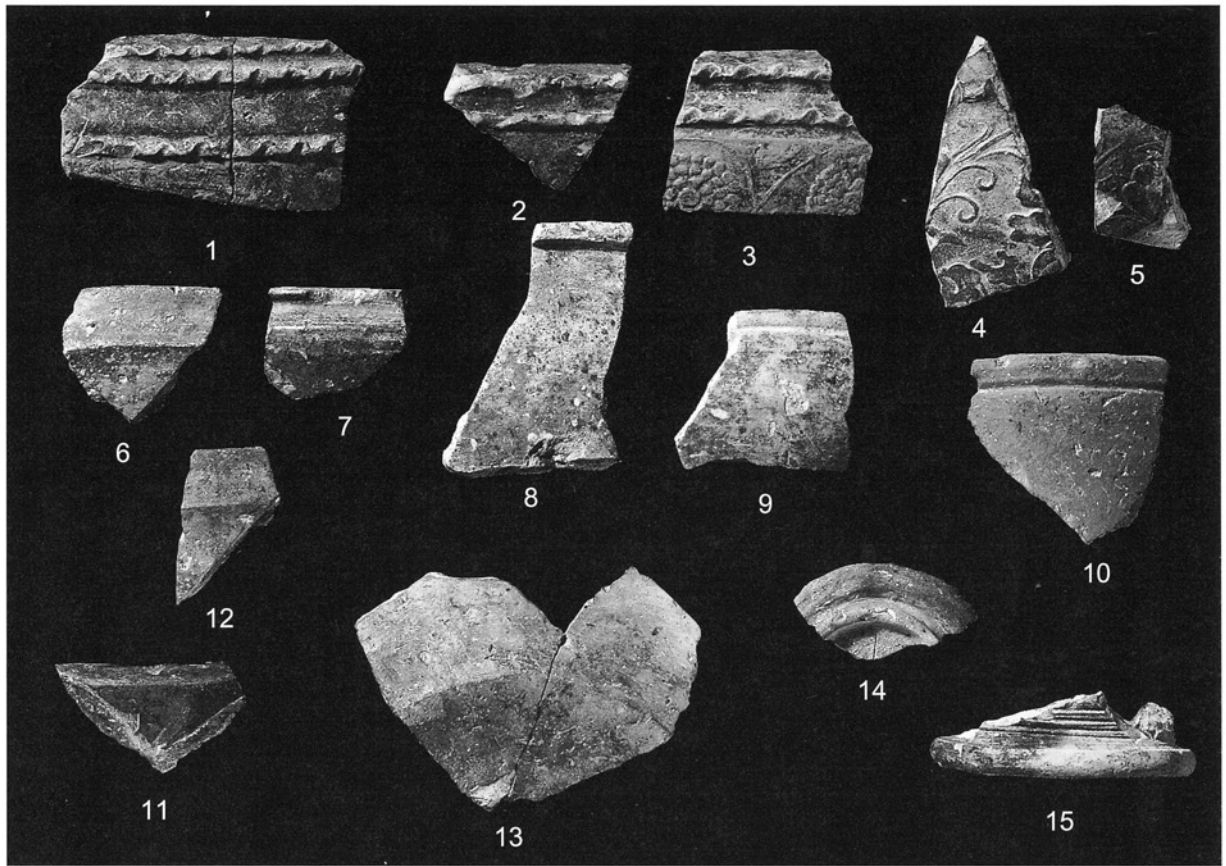
図版31 (第35図) 褐釉陶器：壺 (1~13) ・播鉢 (14・15)、白釉陶器：壺 (16)



図版32 (第36図) タイ産陶磁器 (1~5)、ベトナム産陶磁器 (6~9)、産地不明 (10・11)

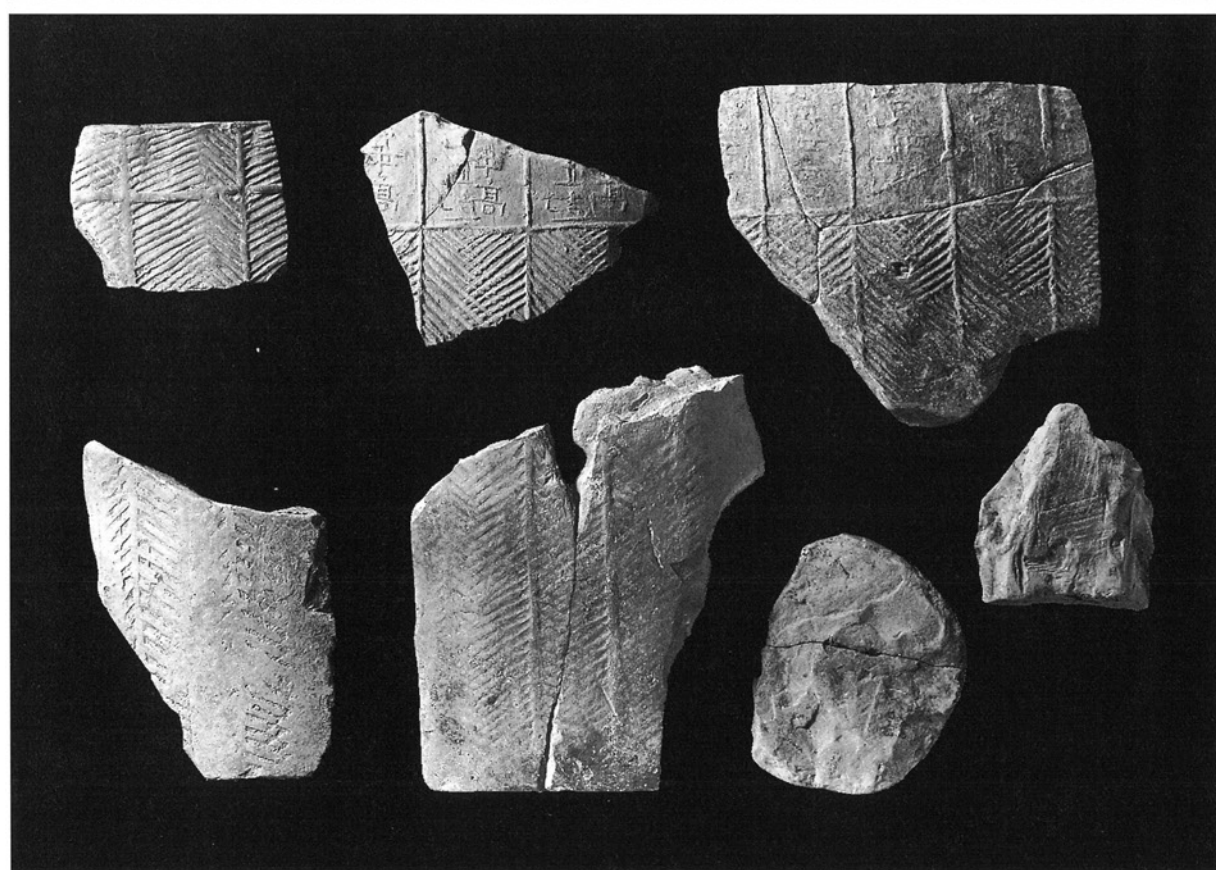
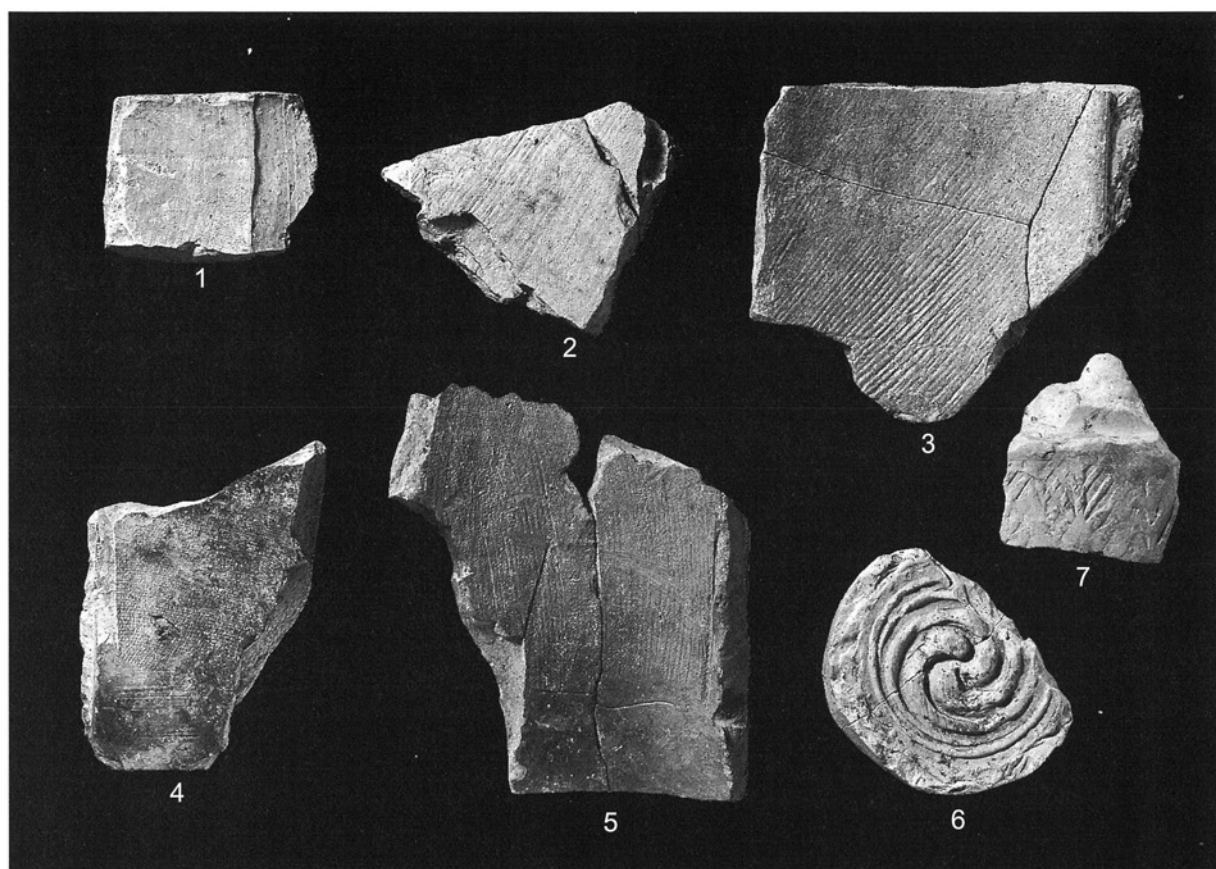


図版33 (第37図) 備前陶器：搗鉢 (1~5) ・德利 (6)

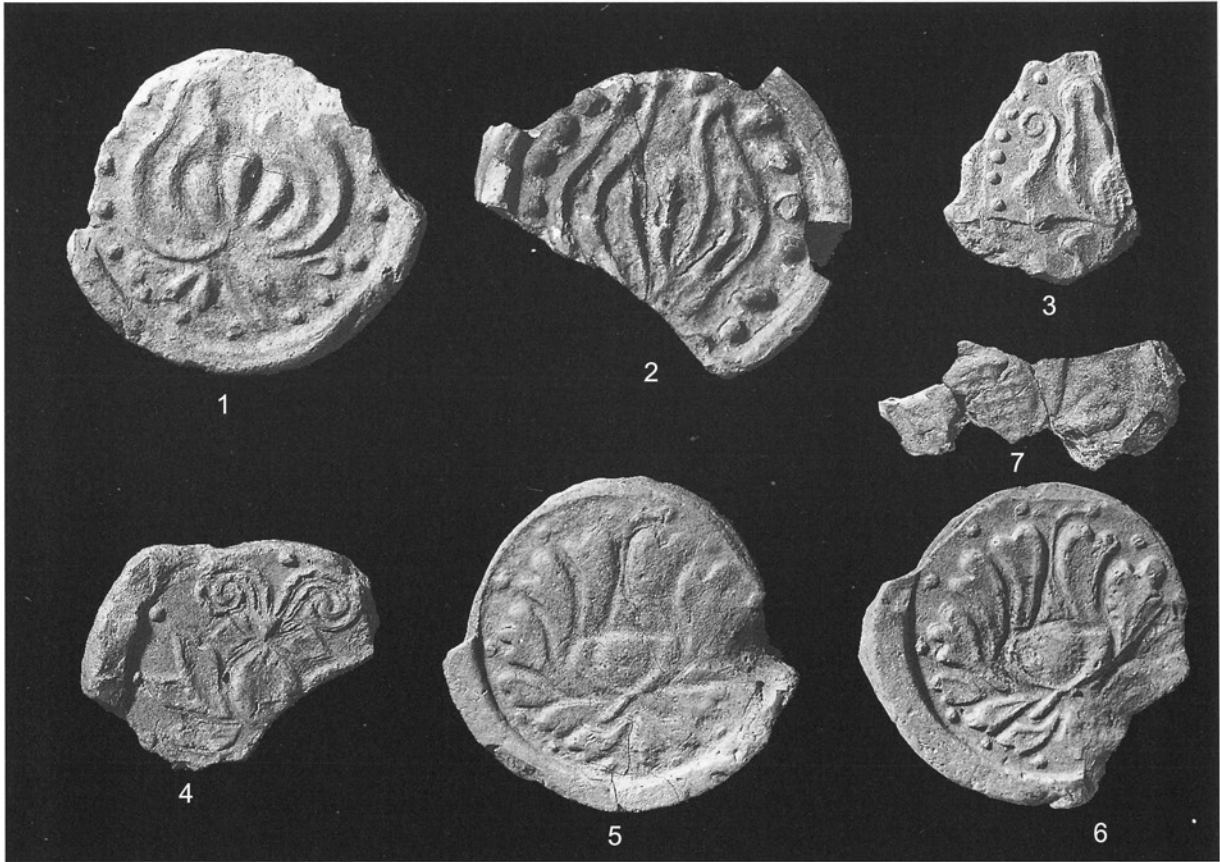


図版34 (第38図) 瓦質土器：植木鉢 (1~5) ・鉢 (6~11) ・搗鉢 (12・13) ・袋物 (14・15)

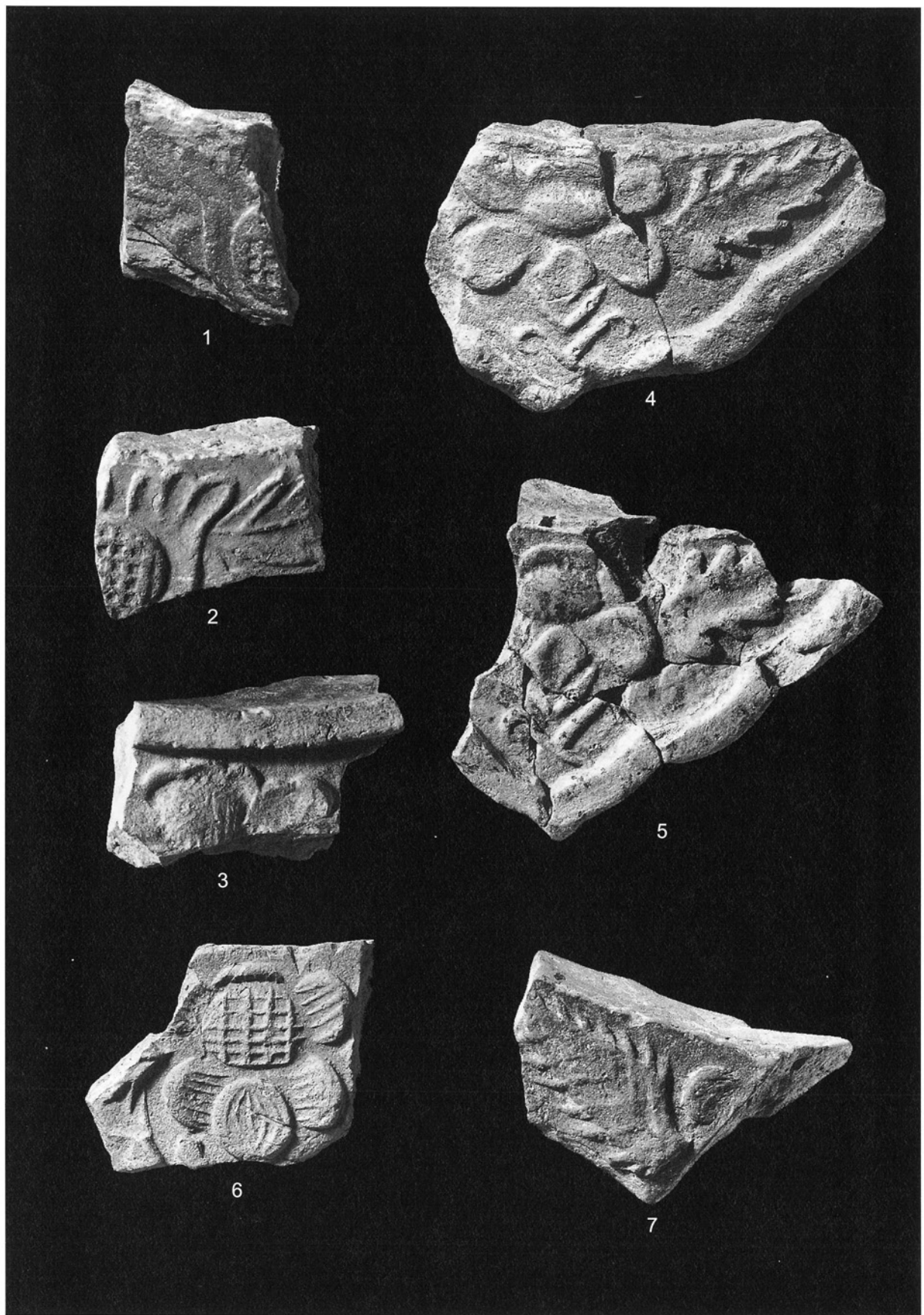




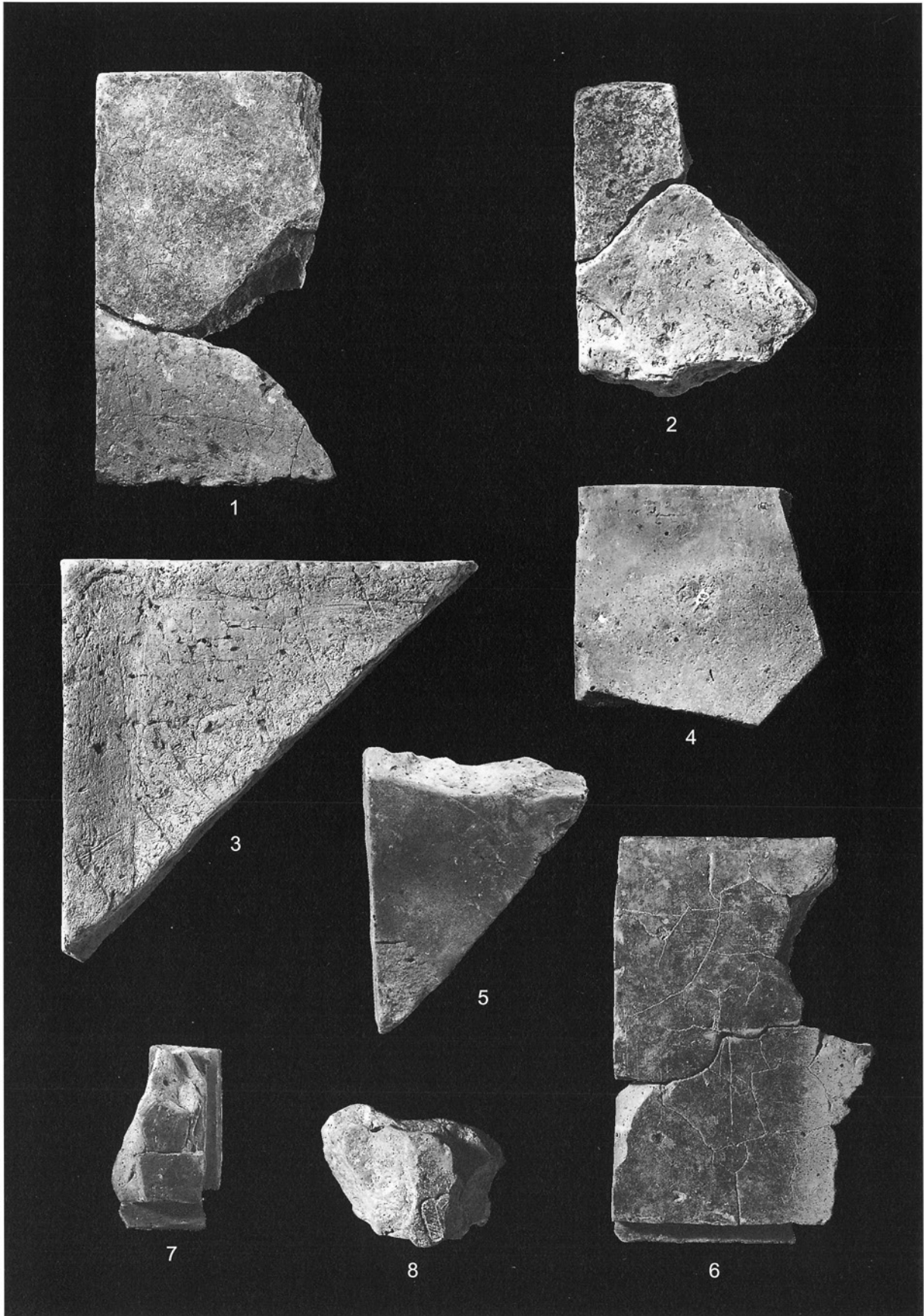
図版35 (第39図) 高麗系瓦：平瓦 (1~5) ・大和系瓦：軒丸瓦 (6) ・丸瓦 (7)



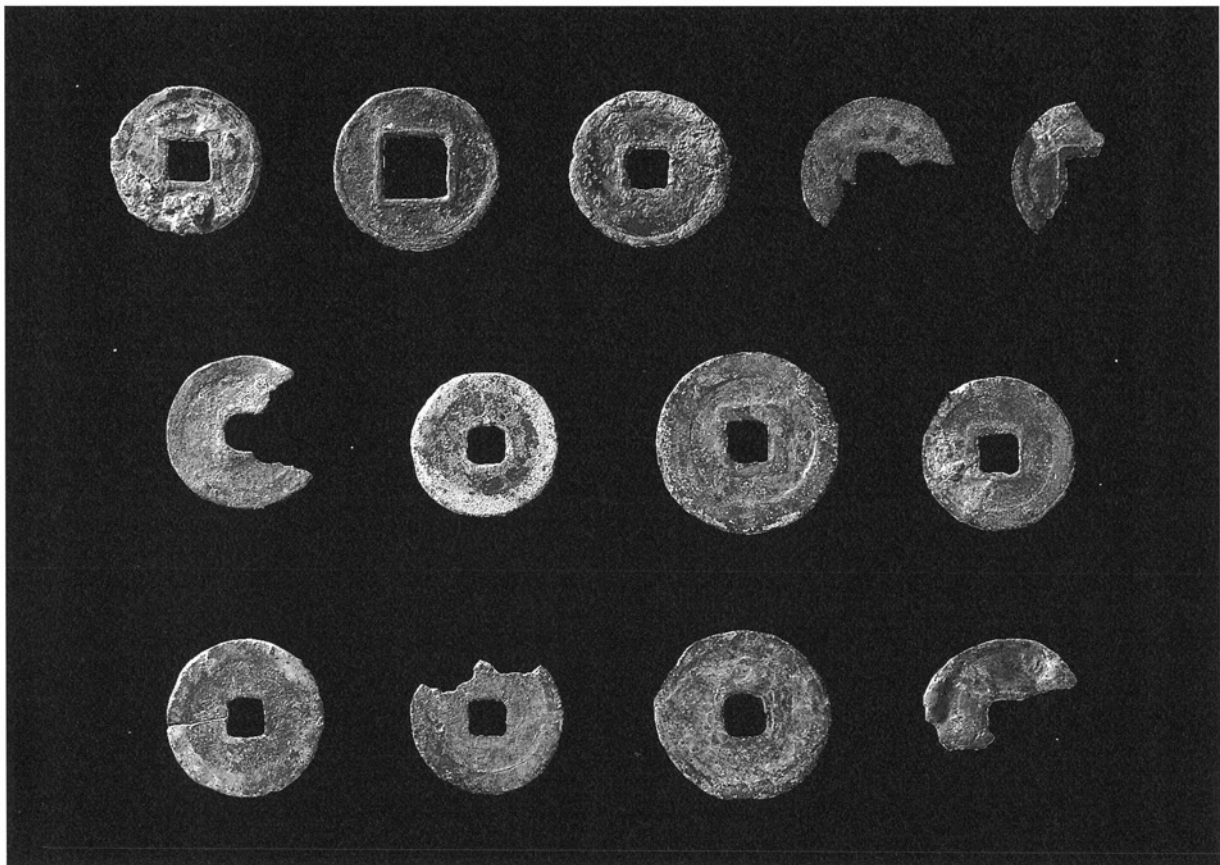
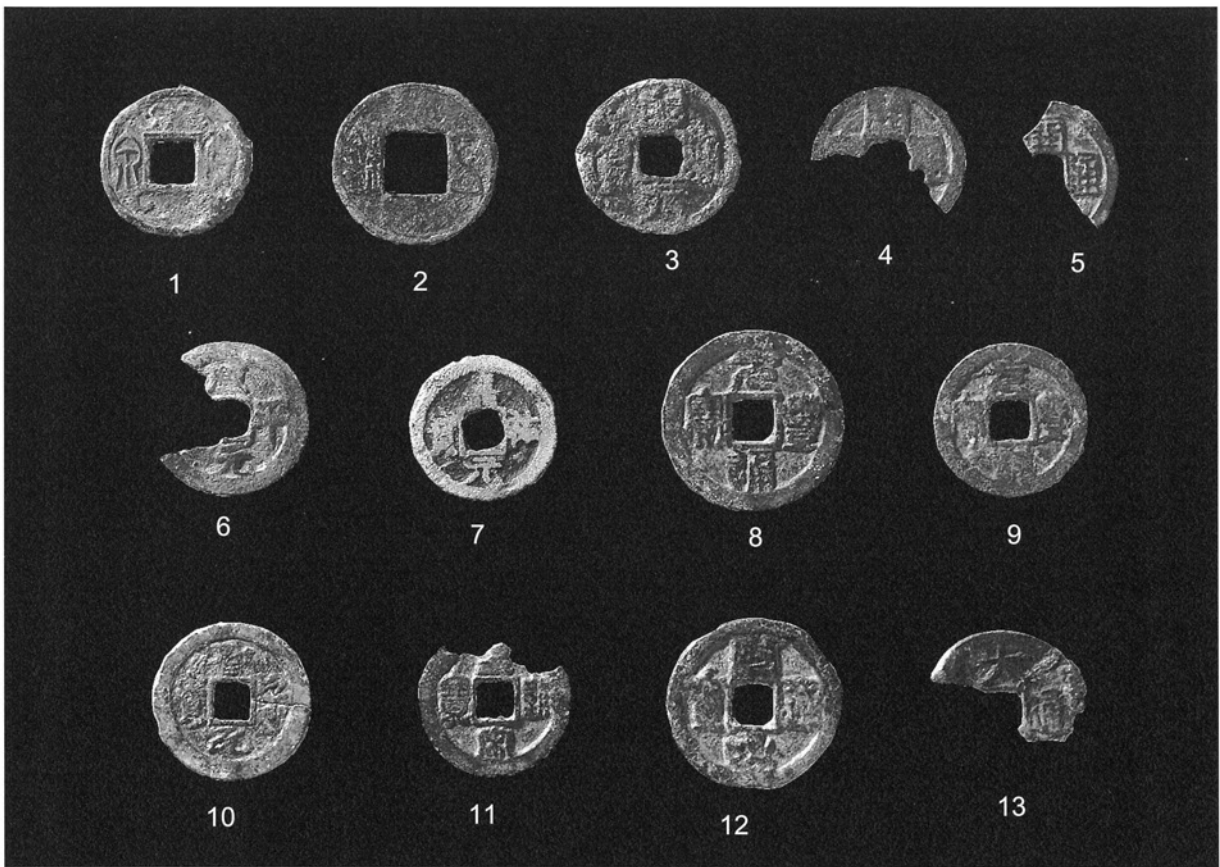
图版36 (第40图) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~11)



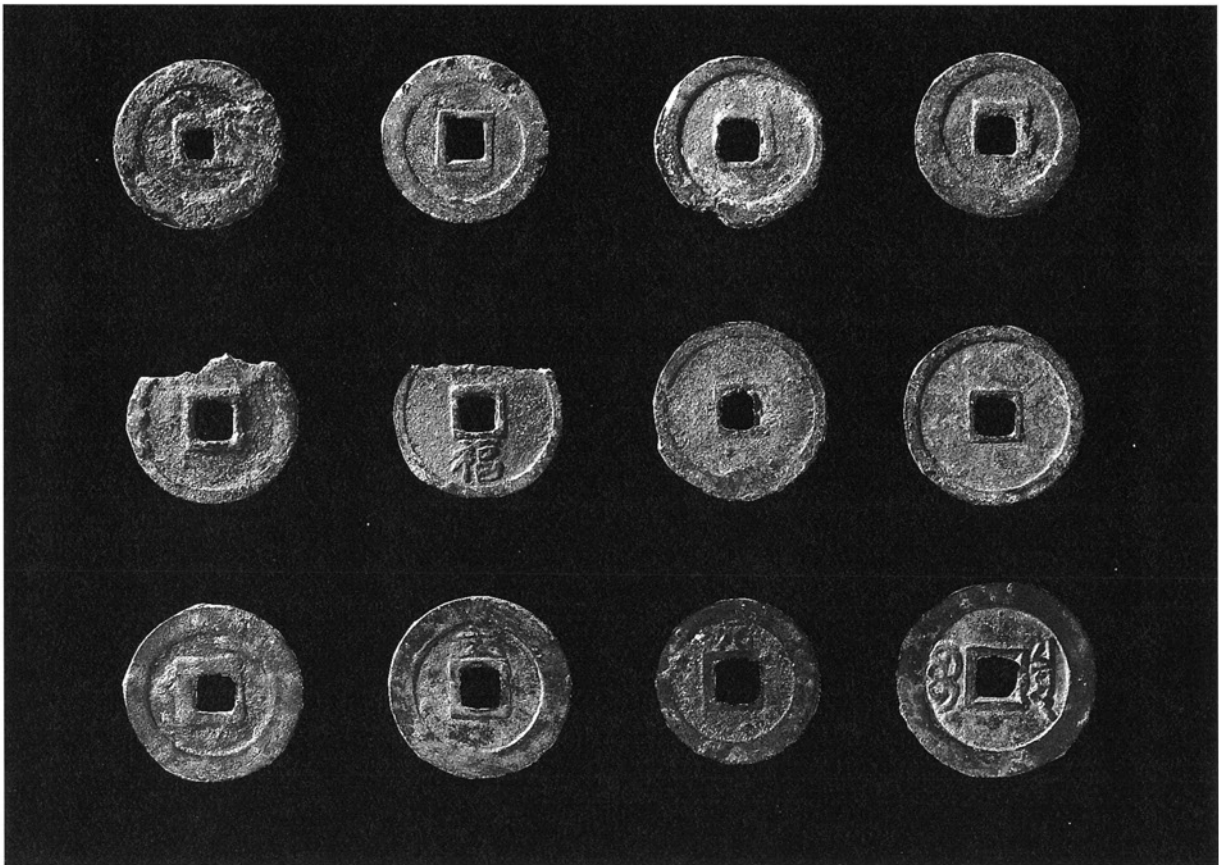
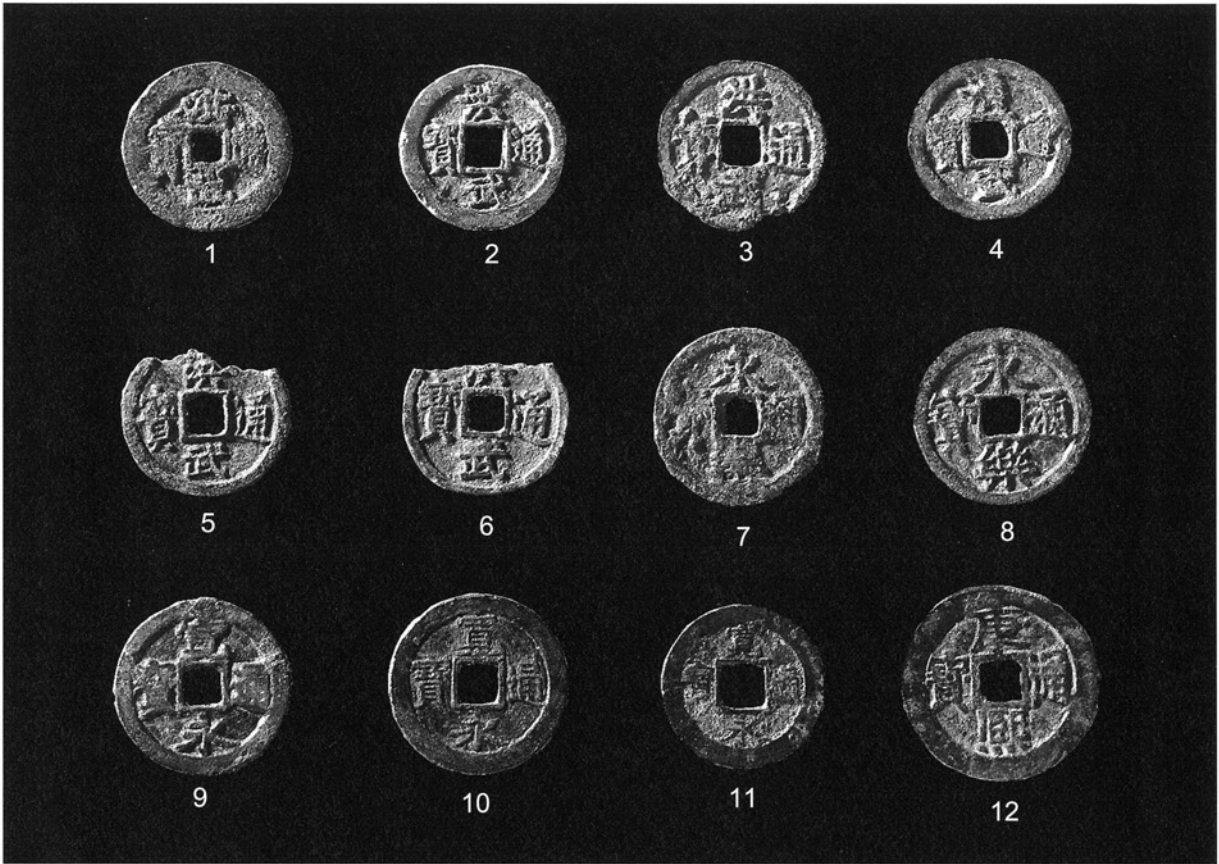
图版37 (第41图) 明朝系瓦：軒丸瓦 (1~7)



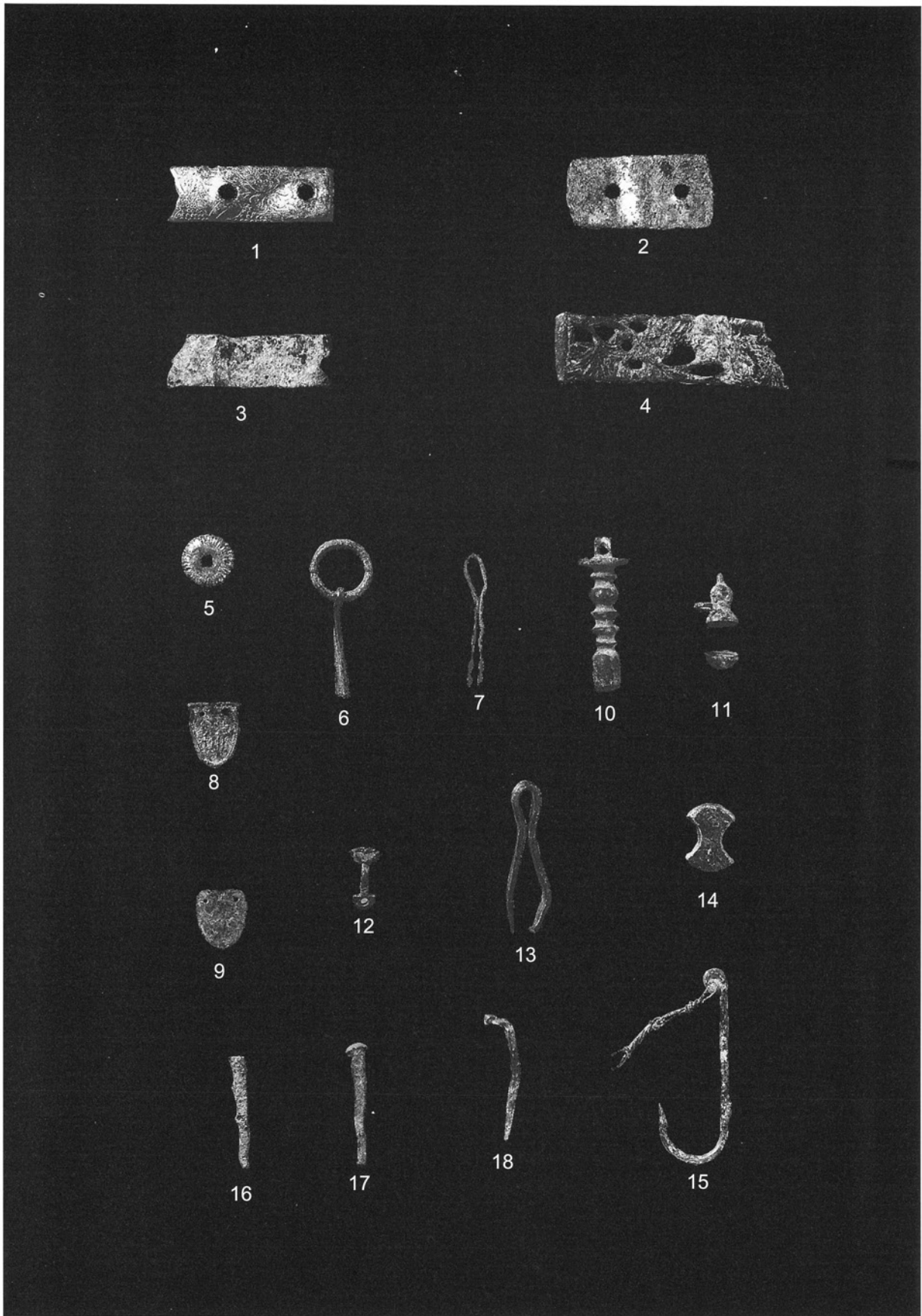
図版38 (第43図) 埴: I類 (1・2) ・II類 (3~5) ・III類 (6・7) ・類不明 (8)



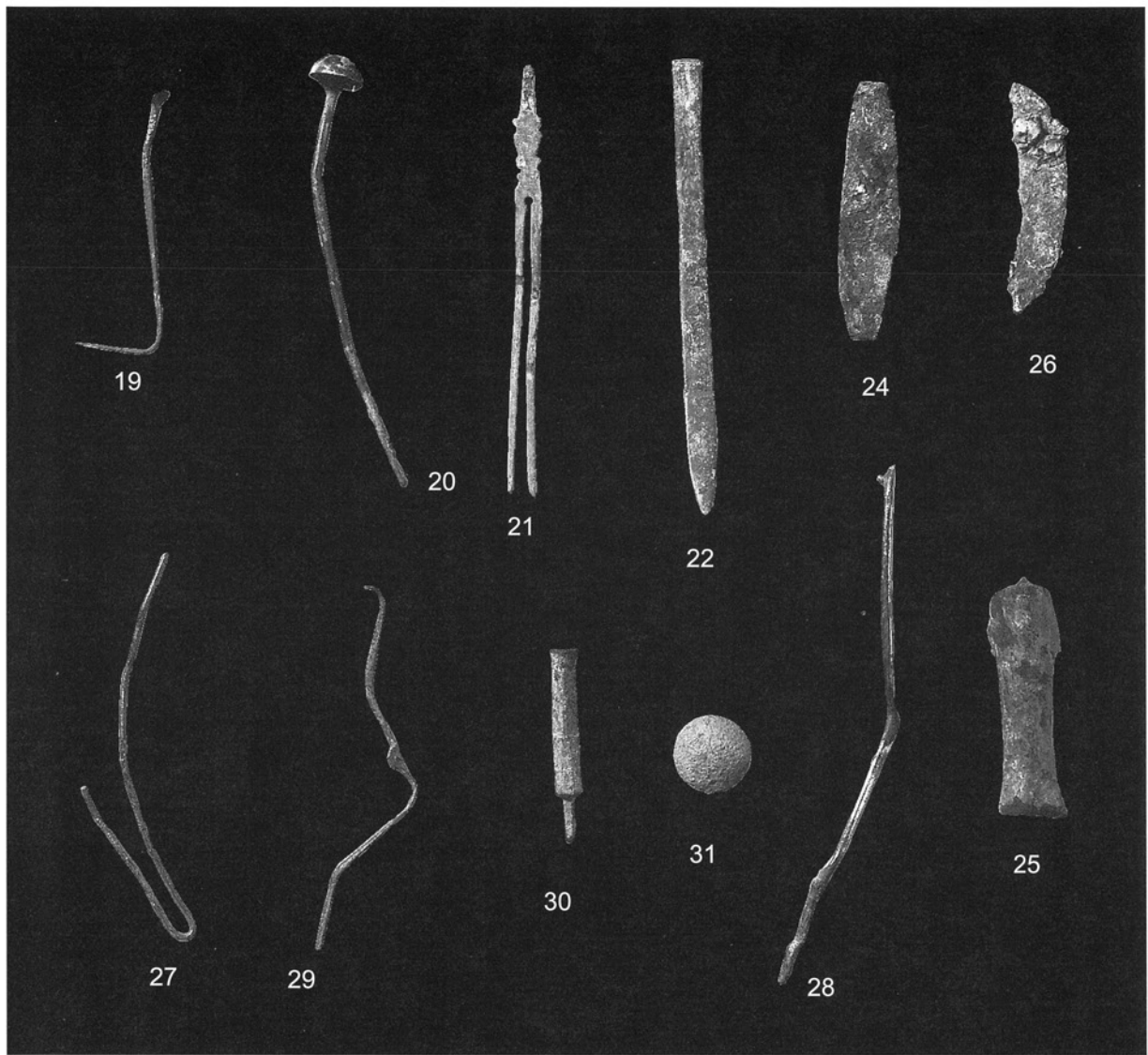
图版39 (第45图) 钱货



图版40 (第46图) 钱货

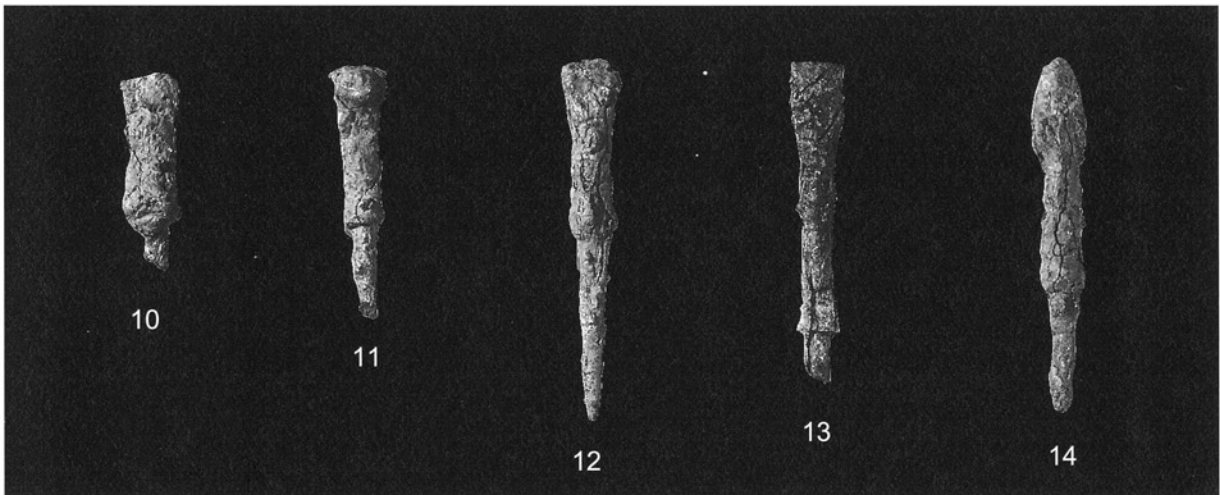
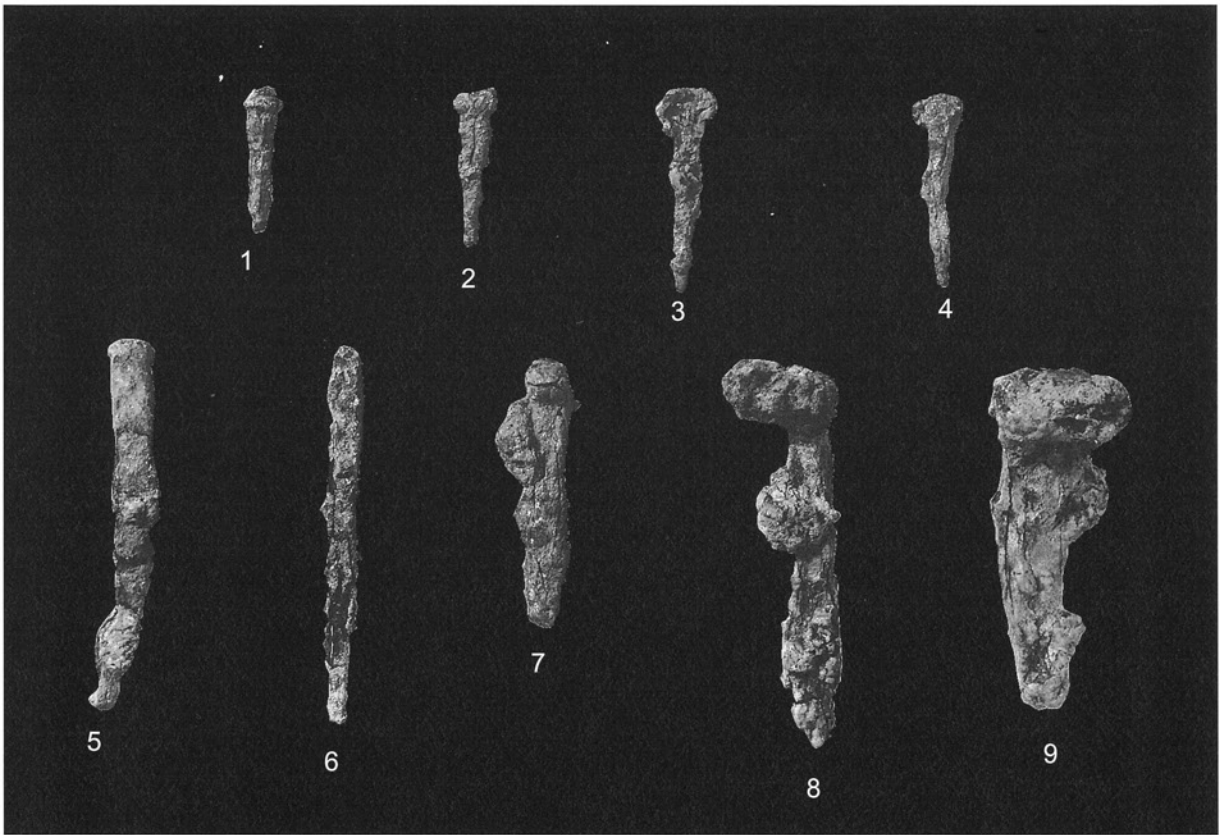


図版41 (第47図) 青銅製品：八双金具 (1~4) ・座 (5・6) ・鋌 (7) ・留具 (8・9)  
 装飾金具 (10~12) ・毛抜き (13) ・分銅 (14) ・釣針 (15) ・釘 (16~18)

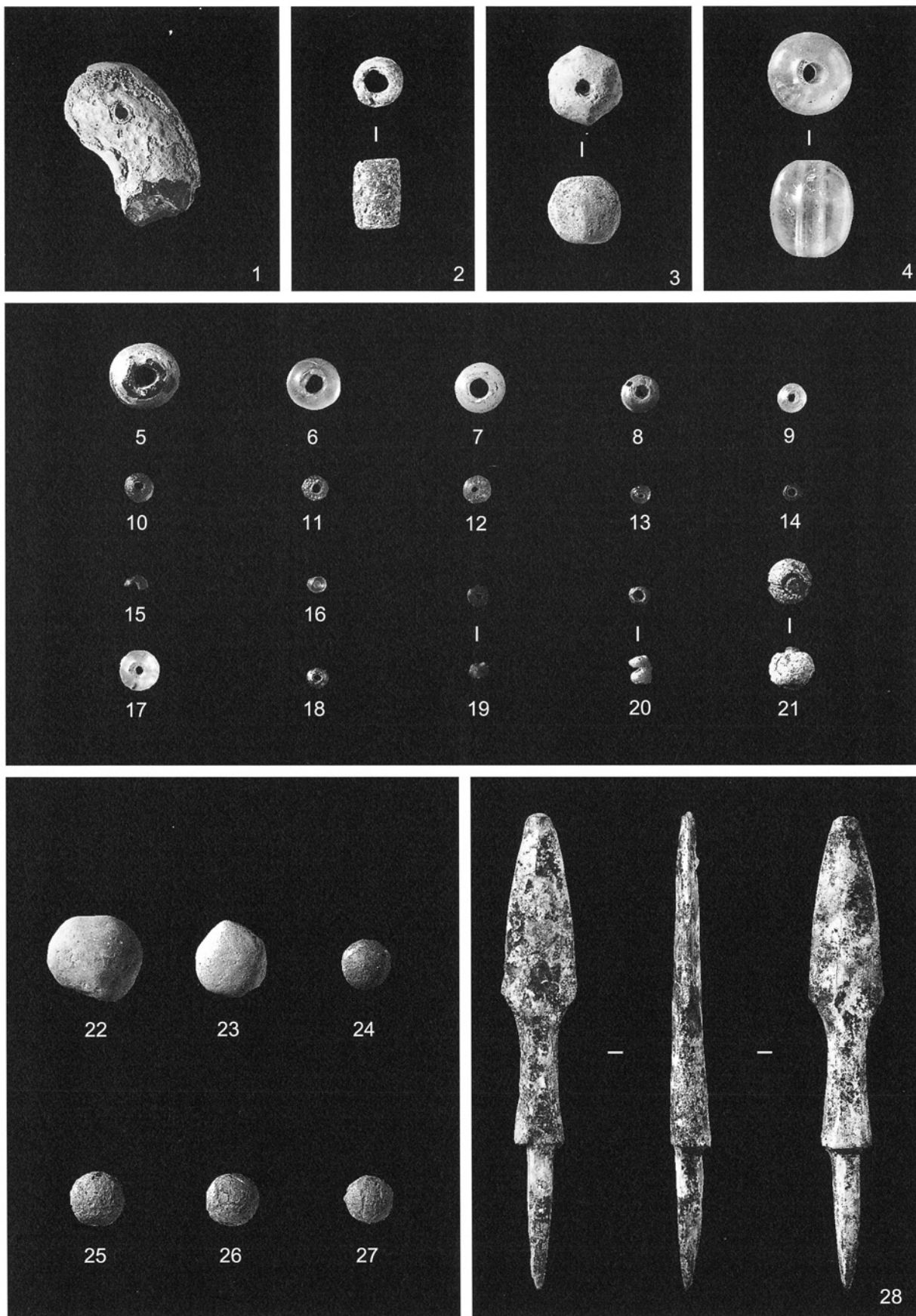


図版42 (第48図) 青銅製品：簪 (19~22) ・花生け (23) ・用途不明金具 (24~31)

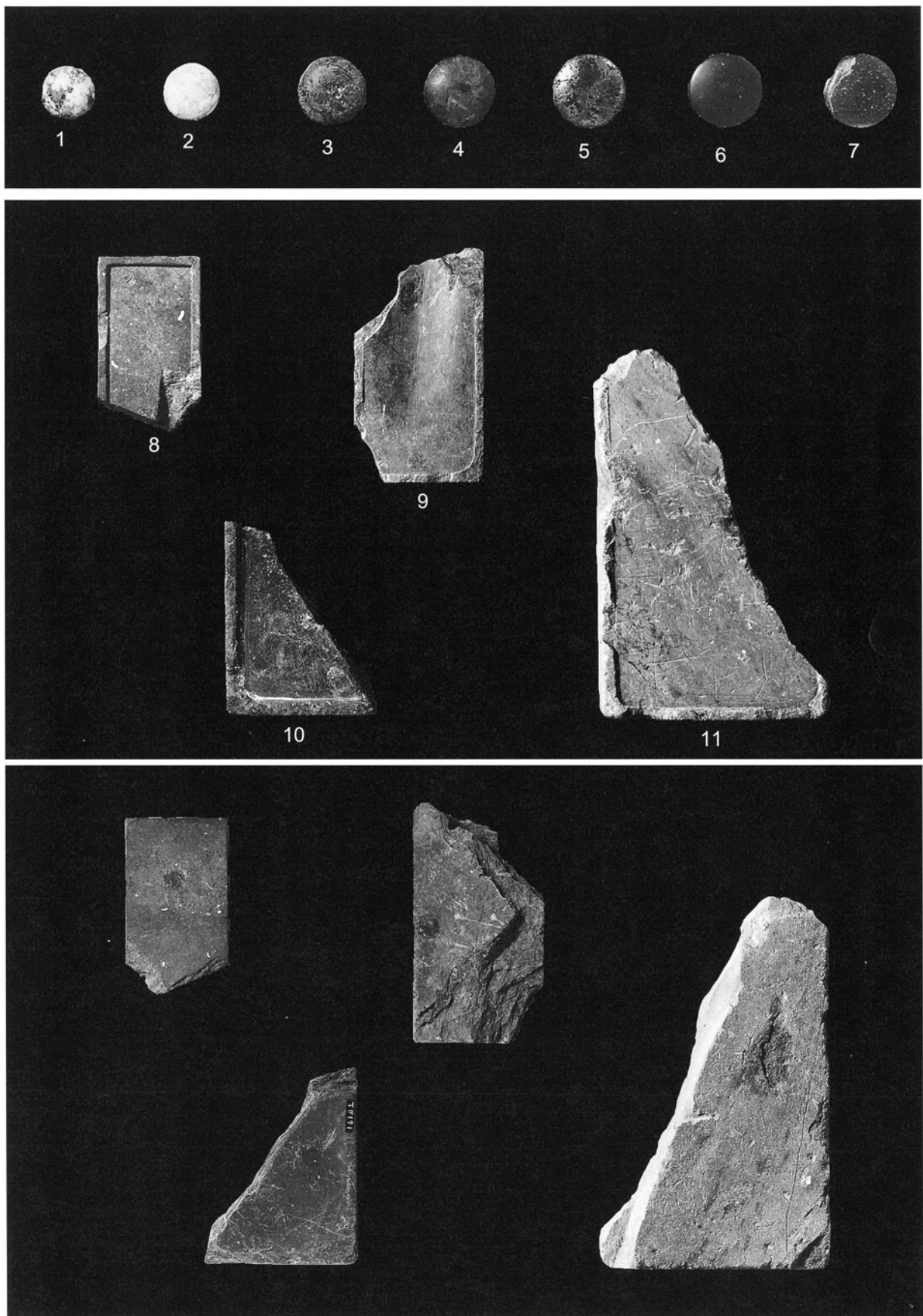




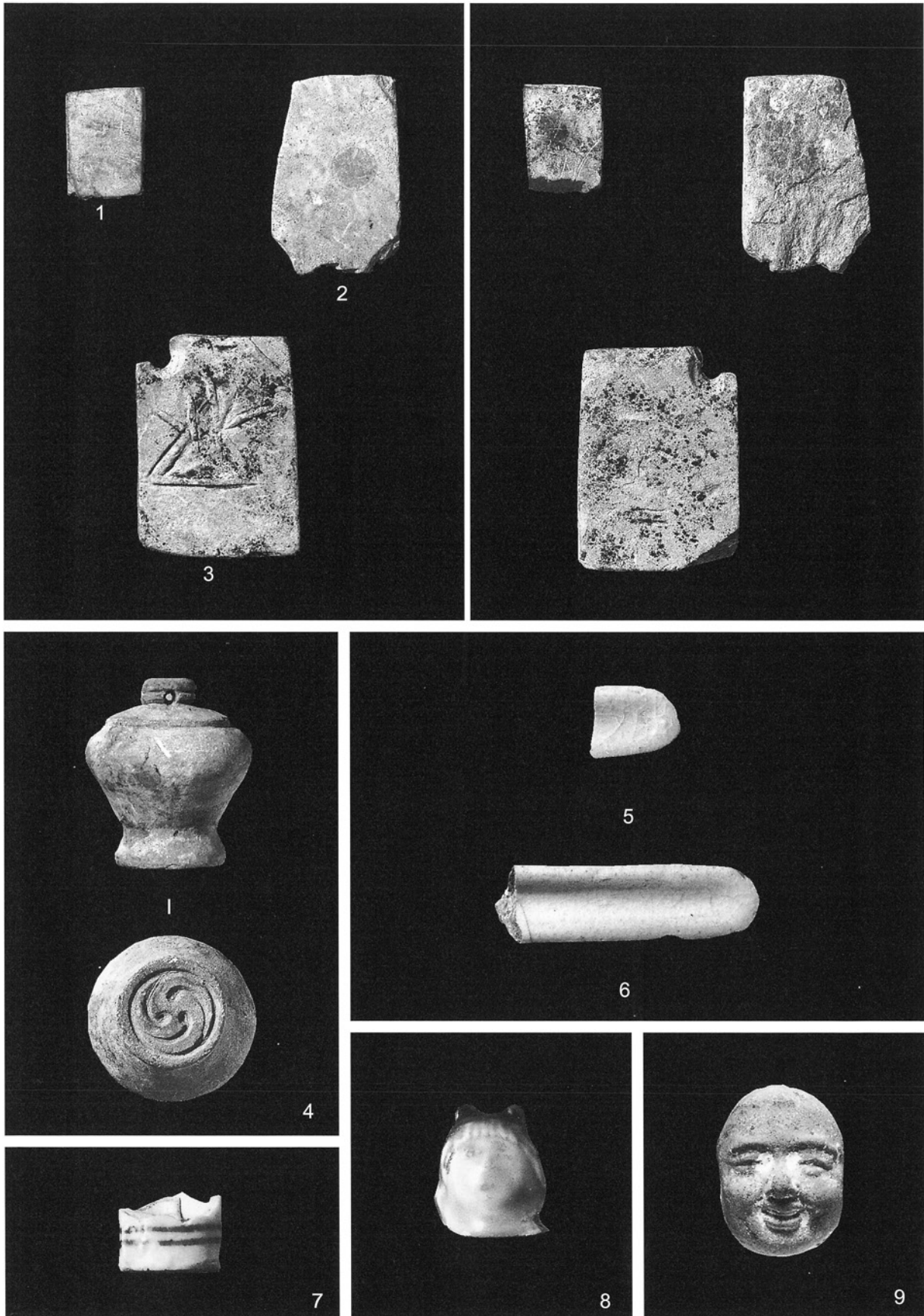
図版43 (第49図) 鉄製品：釘 (1~9) ・鋸 (10~14) ・刀子 (15~17)



図版44 (第50図) ガラス製玉類：勾玉 (1) ・管玉 (2) ・小玉 (3~21) 、  
土製小玉 (22~27) 、骨鏃 (28)



図版45 (第51図) 石製品：碁石 (1~7) ・硯 (8~11)



図版46 (第52図) 石製品：砥石 (1~3) ・印章 (4)  
 陶磁器：蓮華 (5・6) ・小瓶 (7) ・人形 (8・9)

---

那覇市文化財調査報告書第42集

## 天界寺跡

—首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告—

発行 1999年3月

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編集 那覇市教育委員会文化財課

TEL 098-853-5775

印刷 有限会社 若葉印刷

〒900-0024 沖縄県那覇市古波蔵339番地

TEL 098-834-3429

---